



TITLE:

都市空間の変遷に関する歴史的考察
(Dissertation_全文)

AUTHOR(S):

濱崎, 一志

CITATION:

濱崎, 一志. 都市空間の変遷に関する歴史的考察. 京都大学, 1994, 博士
(工学)

ISSUE DATE:

1994-03-23

URL:

<https://doi.org/10.11501/3094410>

RIGHT:

都市空間の変遷に関する歴史的考察

濱崎 一 志

都市空間の変遷に関する都市考古学的考察

序 章	1
0-1 はじめに	1
0-2 研究の目的	2
1. 白河の条坊地割について	
2. 構について	
0-3 研究の方法	5
1. 考古学的方法	
2. 文献史学的方法と歴史地理学的方法	
3. 都市遺跡と都市考古学	
0-4 本論文の構成	9

第I部 白河における都市空間の変遷に関する歴史的考察

第1章 白河の条坊地割の展開	13
1-1 白河の都市的展開	13
1. 大白川と小白川	
2. 天狗ありなどいひし所	
3. 六勝寺の造営	
1-2 白河の条坊地割に関する研究史	18
1. 江戸時代の地誌にみる白河	
2. 歴史地理学と建築史学による白河の研究	
3. 考古学による白河の研究	
1-3 白河の条坊地割の遺構の現状について	24
1. 白河の衰退	
2. 白河の再開発と遺跡破壊	
1-4 小 結	26
第2章 白河の条坊地割の道路遺構	29
2-1 はじめに	29
2-2 今朱雀の位置と方位	31
1. 今朱雀の遺構	
2. 地中レーダー探査と今朱雀	
2-3 尊勝寺東大路について	38
1. 尊勝寺東大路の遺構	
2. 踏襲された道路	

2-4 勘解由小路末と鷹司小路末	39
1. 勘解由小路末の遺構	
2. 鷹司小路末の遺構	
2-5 白河の条坊地割の空間特性	42
1. 文献に見る大路と小路	
2. 白河の条坊地割の空間分析	
2-6 小 結	50
第3章 六勝寺の寺域について	53
3-1 はじめに法勝寺ありき	53
1. 花の名所の白河院	
2. 法勝寺の建立	
3. 法勝寺の遺構	
4. 法勝寺西大路と白河の外京	
3-2 尊勝寺の寺域の設定	62
1. 尊勝寺の造営	
2. 尊勝寺の遺構	
3-3 最勝寺の寺域について	65
1. 最勝寺の造営	
2. 最勝寺の遺構	
3-4 円勝寺の寺域について	67
1. 円勝寺の造営	
2. 円勝寺の遺構	
3-5 成勝寺の寺域について	69
1. 成勝寺の造営	
2. 成勝寺の遺構	
3-6 延勝寺の寺域について	70
3-7 小 結	71
第4章 白河御堂と白河殿	75
4-1 白河泉殿・南殿と蓮華蔵院	75
1. 白河泉殿から蓮華蔵院へ	
2. 白河南殿の遺構	
4-2 白河北殿と保元の乱	77
4-3 宝莊嚴院について	78
4-4 得長寿院について	79
4-5 高陽院泰子と福勝院	80
1. 墓所としての福勝院	
2. 六器の鋳型と福勝院	
4-6 小 結	84

第5章 白河の条坊地割の諸社寺と邸宅	87
5-1 はじめに	87
5-2 白河の条坊地割の諸社寺	87
1. 東光寺と東天王社	
2. 熊野社と聖護院	
3. 粟田宮と人喰い地藏	
4. 吉田社と吉田若宮	
5. 藤原北家勸修寺家流吉田氏の菩提寺浄蓮華院	
5-3 白河に営まれた邸宅と在家	98
1. 文献にみる白河の邸宅と在家	
2. 藤原北家勸修寺家流吉田氏の邸宅	
3. 西園寺公経と吉田泉殿	
5-4 白河における生業の遺構	102
1. 土砂の採取について	
5-5 小 結	106
第6章 白河の都市的衰退	109
6-1 はじめに	109
1. 院政の終焉と白河の衰退	
2. 伽藍宝塔ことごとく灰燼となす	
6-2 天災と人災	110
1. 地震による被害	
2. 火災による被害	
6-3 戦乱と白河の荒廃	115
1. 南北朝の大乱	
2. 応仁の大乱と白河	
6-4 吉田社による浄蓮花院領の押領	118
1. 応仁の乱と吉田の荒廃	
2. 吉田社による浄蓮華院領の押領	
6-5 小 結	123
第7章 白河の条坊地割の復原	129
7-1 はじめに	129
1. 大路・小路の築地と側溝	
7-2 白河の条坊地割の方位について	129
1. 都城の方位について	
2. 白河の条坊地割の方位の算定	

7-3 大路・小路の配置について	130
1. 大路・小路の幅員について	
7-4 白河の条坊地割の造営尺について	131
1. 都城の造営尺	
2. 白河の条坊地割の造営尺の算定	
7-5 白河の条坊地割の範囲について	135
7-6 小 結	136

第8章 地理情報システムを用いた

都市遺跡データベースの構築	139
---------------	-----

8-1 はじめに	139
1. 遺構や遺物のデータベースの開発	
2. 地理情報システムと遺跡データベース	
8-2 図形情報データベースの構築	140
8-3 文字情報データベースの構築	141
8-4 地理情報システムについて	142
8-5 都市遺跡データベースを 用いた条坊地割の復原	147

第II部 自衛的都市空間「構」に関する都市考古学的考察

第9章 構の誕生	151
----------	-----

9-1 はじめに	151
1. 倭国大乱と環濠集落・高地性集落	
2. 戦乱と土一揆	
9-2 構の構成要素について	154
1. 狭間付きの土塀について	
2. 釘貫と木戸門	
9-3 構の濫觴	157
1. 釘貫・木戸門の構築	
2. 木戸門の開閉とその管理	
9-4 構の誕生	161
1. 南北朝の大乱と構	
2. 応仁の乱と構	
3. 天文法華の乱と構	
9-5 小 結	164

第10章 洛中洛外にみる構の展開	167
------------------	-----

10-1 構の類型と諸形態	167
10-2 武家の構	168
10-3 禁裏と公家の構	169
1. 禁裏の要害化	
2. 公家の自邸の構	
10-4 町衆の構	171
1. 一条烏丸の構	
2. 白雲の構と新在家の構	
10-5 惣村の構	174
1. 粟田口の構	
2. 田中の構	
10-6 寺院を取り巻く構	180
1. 建仁寺の構	
2. 聖護院の構	
10-7 発掘調査で検出した構の遺構	188
1. 藪之内構について	
2. 両御霊町の遺構	
10-8 小 結	191

第11章 吉田の構と吉田社	193
---------------	-----

11-1 はじめに	193
11-2 吉田の構の空間構成	193
1. 北之在所と南之在所	
11-3 古図にみる吉田の構	194
1. 洛中洛外図にみる吉田の構	
11-4 『兼見卿記』にみる吉田の景観	196
11-5 吉田の構から近世の吉田村へ	196
1. 吉田社家住宅配図にみる吉田	
11-6 小 結	198

第12章 上賀茂の構と上賀茂社	203
-----------------	-----

12-1 はじめに	203
12-2 賀茂六郷と往来田	204
1. 賀茂別雷神社と賀茂六郷	
2. 氏人惣中と往来田	
12-3 上賀茂の構の遺構	206
1. 上賀茂の構と往来田	

2. 発掘された堀の遺構	
3. 絵図にみる上賀茂村	
12-4 上賀茂の構と惣中置文	212
1. 構の維持管理について	
12-5 小 結	215
第13章 山科寺内町の構と本願寺	219
13-1 はじめに	219
1. 山科寺内町の構	
13-2 山科寺内町の遺構	220
1. 現存する山科寺内町の遺構	
2. 山科寺内町第1次・第2次発掘調査	
3. 御本寺南辺の発掘調査	
13-3 古図にみる山科寺内町	226
1. 野村本願寺古御屋敷之図にみる山科寺内町	
2. 山科古図にみる山科寺内町	
3. 山科村古図にみる山科寺内町	
4. 仮製二万分一地形図に見る山科寺内町	
13-4 山科寺内町の復原	231
1. 山科寺内町の縄張りについて	
13-5 南殿の遺構	234
1. 南殿の堀と庭園	
2. 現存する南殿の遺構	
13-6 古図にみる南殿	236
1. 御在世山水御亭図にみる南殿	
2. 南殿泉水山図にみる近世の南殿	
13-7 南殿の縄張りの復原	238
13-8 本願寺退転後の山科	239
1. 山科寺内町と築城技術	
2. 法華宗徒による寺内町旧地の占有	
3. 寺内町旧地の放棄	
4. 公方御料所と禁裏御料所	
5. 織豊政権の本願寺対策と城わり	
6. 東西両本願寺の確執	
13-9 山科寺内町をとりまく歴史的環境	244
1. 山科寺内町と上人御塚	
13-10 小 結	246
第14章 構の終焉	249
14-1 はじめに	249

14-2 上京の構と下京の構	249
14-3 秀吉のお土居と構の終焉	252
1. 秀吉のお土居	
2. 都市軸の回転	
14-4 近世都市京都の展開	257
1. 秀吉の都市景観形成の試み	
2. 本願寺の帰洛と六条寺内	
14-5 小 結	260

終 章	261
15-1 本論文の成果と課題	261
1. 白河の条坊地割について	
2. 自衛的都市空間「構」について	
15-2 歴史的環境の保存と活用に向けて	265
1. 山科寺内町の保全と活用に向けて	
15-3 海外における都市遺跡の調査と都市考古学的考察	270
1. メソポタミアの円形神殿テル・グッバの都市考古学的考察	
2. ガンダーラの仏教寺院址ラニガト遺跡の都市考古学的考察	
3. シリア砂漠の隊商都市バルミラの都市考古学的考察	
15-4 おわりに	281

参 考 文 献	287
---------	-----

挿図目次および出典

第1章

- 図1-1 平安京と白河〔宇野79〕
- 図1-2 中古京師内外地図（『故実叢書』）
- 図1-3 京都大学吉田キャンパスの地区割と調査地点〔京大埋文研92〕
- 図1-4 白河条坊とおもな調査地点〔岡田79〕
- 図1-5 平安京の外京について〔杉山信三氏案〕

第2章

- 図2-1 白河の条坊地割の概念図
- 図2-2 今朱雀とその近辺〔浜崎91a〕
- 図2-3 今朱雀と尊勝寺西大路に関連する遺構（上・中〔浜崎91a〕，下〔梶川77a〕）
- 図2-4 『増補再板京大繪圖』
- 図2-5 『仮製2万分1地形図』
- 図2-6 地中レーダーによる探査（浜崎撮影）
- 図2-7 地中レーダー探査の原理〔浜崎91b〕
- 図2-8 教養部構内における地中レーダー探査記録〔浜崎91b〕
- 図2-9 調査地点と白河の条坊地割〔浜崎91b〕
- 図2-10 勘解由小路末の遺構〔浜崎・千葉・森下93〕
- 図2-11 『新撰増補京大繪圖』
- 図2-12 洛中洛外絵図
- 図2-13 鷹司小路末の遺構（1）〔泉・吉野79〕
- 図2-14 鷹司小路末の遺構（2）〔岡田・宇野79〕
- 図2-15 白河の条坊地割における御幸の経路

第3章

- 図3-1 法勝寺金堂の遺構〔辻・上村87〕
- 図3-2 法勝寺伽藍復原図〔福山57〕
- 図3-3 法勝寺の寺域の推定図〔浜崎91〕
- 図3-4 字塔ノ壇付近の図（左）と塔ノ壇及び池ノ内町水田低地図（右）〔福山75〕
- 図3-5 A地点の遺構（室町時代～江戸時代）〔京都市埋蔵文化財センター内部資料〕
- 図3-6 B地点の遺構〔六勝寺研究会75〕
- 図3-7 尊勝寺伽藍復原図〔梶川87〕
- 図3-8 尊勝寺の寺域の推定図〔浜崎91〕
- 図3-9 最勝寺比定地の遺構〔杉山92〕
- 図3-10 円勝寺発掘調査実測図〔円勝寺発掘調査団71〕

第4章

- 図4-1 白河北殿と南殿と宝莊嚴院〔浜崎91〕
- 図4-2 宝莊嚴院用水事〔東寺古文零聚〕
- 図4-3 鋳型と取瓶と，その完成品想定図〔浜崎90〕
- 図4-4 福勝院の九軀阿弥陀堂部分図『兵範記』

第5章

- 図5-1 粟田社平面図『鈴鹿家記』
- 図5-2 中世の土の採取跡〔五十川86〕
- 図5-3 近世初頭の土の採取跡〔浜崎90〕
- 図5-4 近世の土の採取跡〔五十川・浜崎ほか89〕
- 図5-5 白河の諸社寺の位置の復原〔浜崎〕

第6章

- 図6-1 ブーゲー異常の図〔西田・横山82〕

第7章

- 図7-1 白河の条坊地割の復原案〔浜崎91〕

第8章

- 図8-1 地理情報システムを用いた遺跡情報データベースの構成〔浜崎93〕
- 図8-2 遺構データベースの背景画像〔浜崎93〕
- 図8-3 本部構内AW28区周辺の遺構〔浜崎93〕
- 図8-4 発掘区の文字情報〔浜崎93〕
- 図8-5 教養部構内AP22区の遺構の文字情報〔浜崎93〕
- 図8-6 検索結果を点線で表示〔浜崎93〕
- 図8-7 溝SD10と推定築地中心線〔浜崎93〕
- 図8-8 街路に関する文献情報の表示〔浜崎93〕
- 図8-9 検索結果のハイライト表示〔浜崎93〕
- 図8-10 白河の条坊地割復原図〔浜崎93〕

第9章

- 図9-1 洛中洛外図にみる狭間つき土塀（『洛中洛外図』）
- 図9-2 西院の城の櫓門『洛中洛外図 上杉家本』

第10章

- 図10-1 粟田口の構（『洛中洛外図 上杉家本』）
- 図10-2 山城国愛宕郡田中村耕地絵図（京都府立総合資料館蔵）
- 図10-3 京都大学北部構内BJ31区の中世の遺構
- 図10-4 田中村とその周辺（『天明6写 洛中洛外図』京都大学附属図書館蔵）
- 図10-5 建仁寺の構（『町田家本洛中洛外図』）
- 図10-6 聖護院の構（『鈴鹿家記』より）

- 図10-7 聖護院村とその周辺（『天明6写 洛中洛外図』京都大学附属図書館蔵）
- 図10-8 京都大学病院構内A H19区の遺構（〔浜崎ほか93〕所収）
- 図10-9 平安京（左京近衛・西洞院辻）の主要遺構変遷図〔伊野91〕
- 図10-10 平安京跡・旧二条城跡北地区第2面（安土桃山時代）遺構平面略図〔森島93〕

第11章

- 図11-1 町田家本洛中洛外絵図（東京国立博物館蔵）
- 図11-2 吉田社家住宅配図（天理大学附属図書館蔵）
- 図11-3 吉田社周辺絵図（天理大学附属天理図書館蔵）
- 図11-4 吉田春日社、新長谷寺の図（『拾遺都名所図会』）
- 図11-5 吉田村の復原図〔浜崎83b〕

第12章

- 図12-1 宝徳3年岡本郷地かかみ帳記載田地復元図（〔須磨72〕所収）
- 図12-2 中世の上賀茂の集落の範囲（浜崎作成）
- 図12-3 溝4断面図（〔高90〕所収）
- 図12-4 調査区配置図（〔高90〕所収）
- 図12-5 上賀茂の構（上杉家本洛中洛外図）
- 図12-6 上賀茂図（京都府立総合資料館所蔵）
- 図12-7 上賀茂惣図（内閣文庫所蔵）
- 図12-8 洛中洛外絵図にみる上賀茂（京都大学付属図書館所蔵）

第13章

- 図13-1 山科寺内町の位置〔岡田・浜崎85〕
- 図13-2 山科寺内町の遺構の現状〔岡田・浜崎85〕
- 図13-3 第1次調査の主要遺構（〔岡田・浜崎85〕）
- 図13-4 第2次調査の主要遺構（〔岡田・浜崎85〕）
- 図13-5 野村本願寺古御屋敷之図（光照寺所蔵）
- 図13-6 山科近傍図（光照寺所蔵）
- 図13-7 山科古図（洛東高等学校所蔵）
- 図13-8 山科村古図（西宗寺所蔵）
- 図13-9 山科寺内町復原図（洛東高校本，西宗寺本による）
- 図13-10 山科寺内町復原図（光照寺本による）
- 図13-11 南殿の遺構〔岡田・浜崎85〕
- 図13-12 御在世山水御亭図（光照寺所蔵）
- 図13-13 南殿泉水山図（大谷大学所蔵）
- 図13-14 南殿復原図〔岡田・浜崎85〕
- 図13-15 上人御塚と道しるべ〔西川・土屋・浜崎ほか83〕

第14章

- 図14-1 戦国期京都都市図（〔高橋83〕所収）
- 図14-2 近世初期の京都市下町（〔足利84〕所収）

終章

- 図15-1 白河の条坊地割の復原概念図（浜崎作成）
- 図15-2 「山科・蓮如の道」構想（浜崎作成）
- 図15-3 B地区の現状と修景計画（浜崎作成）
- 図15-4 C地区の現状と修景計画（浜崎作成）
- 図15-5 テル・グッパ第Ⅶ層の遺構（〔国士舘大学イラク古代文化研究所82a〕所収）
- 図15-6 テル・グッパ第Ⅶ層の建築平面の変遷
- 図15-7 ラニガト寺院址中核部遺構配置図
- 図15-8 西南僧房の出入口
- 図15-9 パルミラ周辺現勢図（〔小玉80〕所収）
- 図15-10 パルミラ市街図（浜崎製図）

序 章

人々の関心を惹きつける。この序章は、本書の目的と意義を明らかにし、研究の背景と動機を説明する。また、研究の範囲と対象を定め、研究方法を概説する。この序章は、本書の骨幹となる。この序章は、本書の骨幹となる。この序章は、本書の骨幹となる。

第一章は、本文の構成と関係する諸問題を概説する。第二章は、本文の構成と関係する諸問題を概説する。第三章は、本文の構成と関係する諸問題を概説する。第四章は、本文の構成と関係する諸問題を概説する。第五章は、本文の構成と関係する諸問題を概説する。第六章は、本文の構成と関係する諸問題を概説する。第七章は、本文の構成と関係する諸問題を概説する。第八章は、本文の構成と関係する諸問題を概説する。第九章は、本文の構成と関係する諸問題を概説する。第十章は、本文の構成と関係する諸問題を概説する。

こうした研究の成果を知る方法には、文献調査や実験などがある。文献調査は、過去の研究や資料を調査する方法である。実験は、特定の条件を設定して、その結果を観測する方法である。また、アンケート調査やインタビューなどもある。

こうした研究の方法に加えて、他の方法や手段も必要である。例えば、数値分析や統計学的方法、言語学的方法などがある。また、コンピュータやインターネットなどの技術も活用される。

本書の目的は、従来の研究が欠けていた点に對し、新しい視点から研究を行うことである。また、過去の研究や資料を調査し、その結果を分析することである。また、特定の条件を設定して、その結果を観測することである。また、アンケート調査やインタビューなどもある。

本書の構成は、第一章から第五章までである。第一章は、本文の構成と関係する諸問題を概説する。第二章は、本文の構成と関係する諸問題を概説する。第三章は、本文の構成と関係する諸問題を概説する。第四章は、本文の構成と関係する諸問題を概説する。第五章は、本文の構成と関係する諸問題を概説する。

- 0-1 はじめに
- 0-2 研究の目的
- 0-3 研究の方法
- 0-4 本論文の構成

序 章

第1節 はじめに

人々が集住を始めた先史以来、その集住の方法や形態は、文明の進化とともに大きく形を変えてきた。こうした集落や都市空間の変化は、構築された時代の社会制度、経済状況、軍事的緊張、技術の進展、精神生活などを、複合的に反映したものである。このため集落や都市空間の形態の変遷を解明し、復原することにより、その背景にある様々な状況を読みとることができる。

例えば、縄文前期に出現する環状集落は中央に墓地を設定し、そのまわりに大型平地式建物、竪穴住居、貯蔵穴を同心円状に配し、周囲には馬蹄形に貝塚を形成していた。この平面形態から、墓に埋葬した祖先を中心とする世界観をもって、集落を営んでいたことがわかる。また、弥生時代には、集落の周囲に防御施設を整えた環濠集落や高地性集落が出現する。その分布や通有性から、広域にわたる軍事的緊張がその背景にあり、「倭国大乱」と記されたこの時期の社会的、軍事的緊張が集落の形態に反映したものと考えられている。

こうした集住空間の変遷を知る方法には、発掘調査で検出した遺構や遺物を綿密に検討する考古学的方法や、古文書をもとにおこなう文献史学的方法、古図や現在の微地形をもとにおこなう歴史地理学的方法などがあり、現在までに多くの成果が上がってきている。

こうした既存の方法に加えて、都市考古学的方法や数理地理学的方法、数理考古学的方法を用いて、都市空間の変遷の解明できないかと考えたのが本研究の発端であった。

都市考古学は、従来の考古学が先史・古代に重きをおくのに対し、中近世にその視野を広げ、都市的事象を研究の対象とし、文献史学、歴史地理学、城郭史などを含めた学際的研究をめざし、さらに、広範囲にわたる都市・集落遺跡について、「掘っていないからわからない」のではなく「掘っていない部分はどう考えられる」のかという視点にたつものである〔前川91〕。

数理地理学は、地理的、空間的広がりをもつ種々の統計データを、数理的に解析しようとするものであった。近年は、CADとデータベースの機能を合わせ持つ地理情報システムの開発により、新たな展開があった。地理情報システムはその名称が示すように、本来

は地理的な現象を数値化して、空間的、地理的に捉えるシステムである。しかし、最近では、都市施設の管理や建築設計など、各種の空間データの解析にも利用されている〔野上・杉浦86、ウェストランド87、碓井91〕。この地理情報システムを用いて、広範囲にわたり、かつ情報量の膨大な都市遺跡のデータを処理し、都市空間の変遷の解明に利用できないかと考えた。

数理考古学は、遺構の分布に応じて、分散次元分析、局所分布密度分析、関連指数による分析をおこない、地理的、空間的分布を把握しようとするものである〔クリーブ・オルトン87〕。自然発生した集落の解析や、広範囲にわたる遺跡の歴史的変遷の解明に利用できないかと考えた。

以上のような手法を既存の学問的方法に加えて、都市空間の変遷の解明を試みたのが本研究の始まりであった。

さらに、都市空間の変遷を探る過程で、こうした過去の空間の痕跡が、建築史学でいう町なみや、考古学でいう遺構のほかに、ごく身近な町割、字境界、微地形などに遺存していることが判明した。平安京の地割が今に踏襲されていることは周知の事実であるが、早い段階で衰退した白河の条坊地割の痕跡や、構の痕跡が現代の都市空間のあちこちに残っていたのである。これらの歴史的要素を再評価し、現在の都市空間の中に生き残る歴史の文脈を保存していく方途を模索することも、必要不可欠なことと考えた。

第2節 研究の目的

本研究の目的は、前節で述べたことを背景として、都市空間の変遷を都市考古学という新たな視点から、都市史、文献史学、歴史地理学の手法を用いて、学際的に解明することにある。研究の対象は、考古学資料や文献資料、古絵図などが比較的よく遺存している古代末から中・近世にかけての洛中洛外に焦点をあて、その都市空間の変遷について考察する。具体的には、古代末から中世初頭にかけての計画都市「白河の条坊地割」と、中世の洛中洛外に多数みられた自衛的空間である「構」を対象とする。

本来、西欧の古典古代の都市と違って、日本の都城制は権力者の専制を実現するための舞台装置であった。「白河の条坊地割」は計画的につくられた都市であるが、揺るぎない律令体制のもとで、平城京、長岡京と頻繁におこなわれた遷都の集大成ともいえる平安京との格差は大きい。中国の影響下にあった都城制から、日本的解釈の加わった都城制へと

変貌し、さらにこうした都城制から意識も目的も異なった状況で約4世紀後に施工されたのが白河の条坊地割である。それ自体が律令体制を象徴するものであり、その実現に多大な努力がかたむけられた^{*1}平安京までの都城と違い、律令体制崩壊の直前にあだ花のように咲いたのが白河の条坊地割である。この白河の条坊地割の建設過程、条坊地割の復原、衰退過程を解明し、古代末の計画都市の復原と、都市空間の変遷について考察する。

そして、古代の律令体制の崩壊とともに解体した計画都市の内外に、「構」は自然発生的に出現した。洛中に発生した構は、やがて融合し、上京・下京の惣構に収斂し、秀吉の「お土居」による近世京都の基盤となる。トップダウン方式で構築された計画都市・平安京の崩壊後に、自衛的な集住形態「構」が出現し、やがて融合し、ボトムアップ方式で都市として纏まりながら、最終的には織豊政権という権力者の手によって近世都市へと変貌を遂げた。洛中・洛外において自然発生した構を相互に比較し、洛中・洛外における中世から近世にかけての京都とその周辺の都市空間の変遷を、学際的に明らかにすることが本研究のもうひとつの目的である。

1. 白河の条坊地割について

平安京の変容が、その造営後、早い段階から進んでいたことは周知の事実である。人々は卑湿な右京を嫌い、活動の中心を徐々に左京に移し、都城の中心となる皇居も、里内裏という形で、その位置を東に移していった。こうした事態と並行して、公的空間である街路を私的空間として占拠する巷所が横行し、計画都市・平安京の形態や、都市空間の性格は時とともに大きく変貌してきた。

さらに、平安時代末期になると、鴨東白河や洛南鳥羽に、御願寺や院の御所と御堂が多数造営され、鳥羽に至っては「宛も遷都のごとし」^{*2}といわれた。白河では六勝寺や院の御所・御堂の造営と並行して、条坊地割が施され、「京・白河」^{*3}と並び称されるほど、都市としての整備が進んだ。平安京の形を変えるという行為を公的におこなった〔宇野79〕のである。

白河の条坊地割は、その施工範囲、方位、造営尺、大路・小路の配置とその幅員など未解明な部分が多い。条坊地割の空間構成などその大半が不明なままである。さらに、法勝寺が条坊地割の2町四方におさまらないこと、区画の大きさ、大路・小路の幅などが部分的に違う可能性があること、延勝寺が白河の条坊地割の中心街路である今朱雀を分断しているなど、不整合な部分が条坊地割のあちこちに見受けられる。また、大治2(1127)年、

法勝寺の西側の大路が神楽岡まで延長されたことは^{*4}、条坊地割の実施が長期にわたって行なわれていたことを裏付ける。本研究の目的のひとつは、平安京とは違った白河の条坊地割の復原とその空間構成の解明にある。

さらに、白河の条坊地割は外京なのか、ただ単に洛中の大路・小路を延長しただけのものなのか、さらに平安京のように条坊地割の中心がないが、白河の条坊地割に何らかの理念型が存在したのかなど、解明すべき問題が山積している。

本論第Ⅰ部では、六勝寺の各々の寺院の伽藍配置の詳細な復原を論ずるのではなく、白河の条坊地割の復原に主眼をおき、より広い視野で考察を進める。なお、文献による研究は諸先学により、ほぼまとめられており、以下では必要事項にのみとどめ、近年多くの成果を上げてきた、白河御堂と御所に関連する遺構と、京都大学構内で検出した溝や道路遺構を中心に復元的考察を進めたい。

また、白河の条坊地割は院政という後ろ盾を喪失すると、衰退に向かう。これに応仁の乱をはじめとする戦乱が追い討ちをかけ、中世の後半には農村に変貌する。整合性のある理想形を実施に移したはずの条坊地割が衰退し、自然発生的な集落「構」があちこちで構築され維持されていく過程に注目し、その変遷過程を明らかにしたい。

2. 構について

鳥羽や白河において新たな町づくりを進み、様々な機能が平安京から流出する一方で、右京の衰退、巷所の横行といった形で平安京の解体も進行した。南北朝期には、頻発する戦乱による軍事的緊張や治安の悪化に対処するため、「構」と呼ばれるものが出現する。「構」は、みずからの集落や居館を戦火から守るため、その周囲を柵、堀、土塁などで囲み、出入口には木戸門を設けた自衛的な空間である。この構は洛中・洛外を問わず構築され、戦乱の有無にかかわらず維持されるようになる。

上賀茂社の氏人が上賀茂社の門前に構築した上賀茂の構や、真宗門徒が仏国を夢みて「構のほり」をめぐらした山科本願寺寺内町などがその好例である。みずからの住空間をすべて囲いこむという点で、城郭や寺社の防禦施設とは違った意味を持っていた。上賀茂の構は、氏人が申し合わせをおこない、堀を構築する分担を決めたり、構の維持管理に関する置文を作成するなど、氏人が自衛のために結束して構築したものである。

こうした自衛的な構の出現に関しては、中世の農村における集村化現象と、惣村や町の発生が、密接に関わり合っていたと考えられる。金田章裕氏は中世の集村化現象について、

畿内の沖積平野に分布する「コンパクトな集村形態」は奈良・平安時代まではさかのぼらず、こうした集村が形成されたのは南北朝の内乱を経た後のことであると指摘している〔金田93〕。

これらのコンパクトな集村が、惣村もしくは惣として発達し、自立的な村落共同体を形成する。15～16世紀には、洛外における惣村の形成と並行して、洛中においては町が成立する。このような自立的な共同体である町と惣村が、構の構築の背景にあると考えられる。これらの町や惣村は自治意識が強く、その自衛行動とともに構の出現をみた可能性がある。

そして、応仁の乱の前後に構はその全盛期を迎え、洛中・洛外に多数の構が簇生し、「京中三分二構」という状態となり、平安京は完全に解体してしまう。しかし、洛中の構は天文法華の乱後の自治意識の高まりを背景に町組となる。自らの武装化はもとより、年貢・地子の免除を求め始める。こうした動きと並行して、洛中の個々の構は融合し、上京・下京の惣構に統合され、構の集合体が都市として再生していった。こうした動きは信長による焼き討ちと、秀吉による巧みな統制の前に「お土居」による総構えの構築をもって、終焉を迎える。そして、短冊型地割りの施行と、二条城を中心とした東西方向に都市軸を回転させたことにより、古代以来の平安京は近世都市京都へと変貌を遂げていった。

こうした平安京の解体から、構の簇生、秀吉のお土居と、そのフレームを大きく変えていった、中世から近世初頭にかけての京都の内外の都市空間の変遷を解明することも本研究の目的のひとつである。

第3節 研究の方法

都市空間の変遷に関する研究は、諸先学により考古学、文献史学、歴史地理学、都市史など様々な研究分野で進められてきた。本研究もこうした諸研究をもとに、都市考古学、数理地理学などに視野を広げ、学際的に進めるものである。以下に、各研究分野による研究方法について詳述する。

1. 考古学的方法

いうまでもなく、発掘調査で検出した遺構をもとに、条坊地割や寺域の復原をおこなう方法である。遺構の正確な測量を実施することにより、文献や古地図とは比較にならないほど正確に復原を進めることができる。また、通常、遺構に遺物をともなうことが多く、

遺物の編年を進めることにより、その遺構の存続期間や廃絶した時期を、実証的に知ることができる。

また、文献史学的手法では中世の好資料はわずかしかな遺存しておらず、さらに、資料は第3者の作成したものであり、資料を典拠として取り上げるには、その資料の信頼性を実証する必要がある。歴史地理学的手法でも現在の微地形に中世を読むには市街化していないところに限られるなどの難点がある。考古学的手法によれば、遺構が遺存し時代の同定の可能な遺物が含まれていれば、その正確な位置を知ることができる。

白河の条坊地割の本格的な発掘調査が実施されたのは、京都会館の建設にともなう事前調査で、1960年に実施された〔杉山・岡田61〕。それ以降、工事にともなう事前調査はあちこちで実施された。白河の条坊地割の北部にあたる京都大学構内でも、1972年から事前調査が実施されるようになり、1991年までに206件、延べ面積約46,000m²におよび、多数の関連遺構を検出している（図1-3）。筆者も1980年に助手に着任後、京都大学埋蔵文化財研究センターの助手を兼任し、その半数以上の発掘調査を担当し、都市空間の変遷に関する考古資料を蓄積してきた。本研究でも、こうした遺構をもとに条坊地割の復原を進める。

なお、条坊地割の遺構は広範囲にわたり、造営尺や方位を算出するためには、正確な基準が不可欠である。このため、遺跡の測量に国土座標を導入した。京都大学埋蔵文化財センターが、遺構の実測に国土座標を導入したのは、昭和51年のことである〔京大埋文研78〕。京都市も昭和52・53年度に京都市内の主要な点71ヶ所に四等三角点を設置し、遺構の測量を国土座標に則っておこなうようになった。国土座標の導入により、離れた調査区の遺構の位置関係や、遺構の性格・方位・重複関係などを検討することが可能になり、また、縮尺1/2500の都市計画図に頼っていた条坊地割の復原作業を正確に進めることが可能になり、条坊地割の研究に大きく寄与することになった。

また、平城宮の造営精度については、宮の周囲をめぐる大垣の延長1kmにつき角度の振れによる誤差が、1m、すなわち、約千分の一の精度で施工されており、数値的な計画性を持った、宮殿・官衙・寺院・条里・条坊等の遺構はすべてこの条件下にあり、都城制の遺構の調査にはこれを上回る精度が要求されている。

しかし、国土座標導入以前の報告については、縮尺1/2500の都市計画図などを用いて、その座標を読みとらなければならない。この都市計画図の精度は図上で1.75m程度の誤差がある〔辻88〕。地図上から国土座標を読みとるときには、この誤差を前提として考察を

進める必要がある。

本論文では遺構の位置を国土座標第Ⅵ座標系のX、Y座標で示す。国土座標系のX、Y軸は通常の幾何学とは逆に、南北方向の軸がX軸、東西方向の軸がY軸であり、注意が必要である。また、原点が福井県沖の海上にあり、京都周辺のX、Y座標はいずれも負の数値で表される。例えば、百万遍交差点の西南隅で、X=-108100m、Y=-19900mを測る。

構を念頭において、発掘調査が進められるようになったのはこの10年のことである。廣橋町遺跡、壬生遺跡、藪之内町遺跡、両御霊町遺跡など京都周辺の遺跡で構に関する遺構の調査が行われてきた。しかしながら、こうした都市・集落遺跡の調査・研究の方法は、個別の遺構・遺跡の中で終結する場合が多く、空間的認識や文献史学的方法がやや不足している。

2. 文献史学的手法と歴史地理学的手法

考古学的調査が随所で実施されるようになるまでは、古文書が都市空間の変遷を知る唯一の手がかりであった。古日記の御幸の記事から道路に関する情報を得たり、寺院や御所の位置関係などを解明したり、惣の定め書きなどから構の構築や維持管理の状況を把握できる所もある。

白河の条坊地割に関して、文献を主体とした研究は、福山敏男氏や杉山信三氏によって大きな成果が得られている〔福山43、杉山62〕。福山敏男氏は陰陽寮のいわゆる「承保勘文」をもとに、法勝寺の金堂の東南隅や、金堂の南庇、阿弥陀堂基壇の南端の位置などを明らかにしている。杉山信三氏は、院政期の法皇の御所や、御堂を院家建築と定義して、その実態を明らかにしている。

しかし、古代末から中世にかけての文献のうち、応仁の乱前の史料は、有職故実の家に伝承された古日記を除くけば、遺存することは希である。古図も中世にさかのぼるものは少なく、近世の都市空間を復原し、それを手がかりに中世の都市空間を考察するといった間接的な手段を用いざるを得ない場合が多い。しかし、近年は屏風絵や絵巻物などの絵画資料の研究が進み、絵画資料からも古図に劣らない知見を得ることができる。構の出入口の具体的な姿を把握できたのも絵画資料の検討の結果である。

3. 都市遺跡と都市考古学

都市考古学は、中近世にその視野を広げ、文献史学、歴史地理学、城郭史などを含めた

学際的研究をめざし、さらに、広範囲にわたる都市・集落遺跡について、「掘ってない部分はどうか考えられる」のかという視点にたつものであることは前述した。個々の遺構を精査しても解明できないことが、都市空間の変遷過程や都市空間の中でのその遺構の位置を解釈することにより、遺跡のもつ意味が判明することがある。こうした発想が、もっとも応用しやすいのが条坊地割の遺構ではないであろうか。

ただし、近年の発掘調査で資料が豊富になったからといって、これらの資料が直ちに条坊地割りの復原に結びつくものではない。遺構の構築時期や廃絶時期、その性格などを検討し、解釈をおこなって、はじめて条坊地割りの復原が可能となる。

京都の内外は都市化が進み、平安京跡はもとより、白河の条坊地割の跡や、構の遺跡も市街化の波に吞み込まれ、微地形などの現地踏査もままならない現状である。発掘調査を実施しても、調査範囲が狭いとか、遺構の攪乱が激しい、遺構の延長部分の調査が現状建物や敷地の制限のため不可能であるなどの市街地における調査通有の悪条件のもとで、大きな困難をとまなう。

こうした状況の中で、規格性のある条坊地割の遺構は、未調査の部分を考える手がかりに富み、都市考古学の視点にのっとって、巨視的な視点で遺跡を概観することにより、条坊地割の復原を試みる。

4. 数理地理学と地理情報システム

人文地理学は統計学的方法を方法論に関わるものとして、地理学の中に取り込んできた。自然地理学が統計学的方法を単なるデータ処理の手段と捉えているのに対して、人文地理学ではいかなるテーマにいかなる方法論で解明するかが大きな論点となってきた〔野上、杉浦86〕。こうした中で地図をコンピュータで描画することから始まった地理情報システムが、地図を作成する単なるコンピュータ・マッピングシステムから、地図で分析する機能を持ちはじめ、地理的空間の分析が可能となってきた。

地理情報システムは、本来は地理的な現象を数値化して、空間的、地理的に捉えるシステムであった。しかし、最近では、地理学だけでなく、各種の空間データの解析にも利用されている〔碓井91〕。この地理情報システムが、広範囲にわたり、かつ情報量の膨大な都市遺跡のデータを処理し、都市空間の変遷の解明を目的とする本研究に利用できないかと考えた。そこで、まず、白河一帯で実施されてきた発掘調査で検出した遺構や、白河の条坊地割の街区や街路などに関する文字情報と図形情報のふたつのデータベースを構築し、

地理情報システムの環境の中で、空間インデックスを介してリンクし、文字・図形情報を双方向に検索できるシステムを構築した。具体的には、溝の時期や方位などの条件の一致する遺構だけコンピュータの画面上に表示したり、画面上の図形を指示すると、即座に文字情報を表示することができる。このシステムを用いて、白河の条坊地割の復原を試みた（第Ⅰ部第8章）。

第4節 本論文の構成

本論文は、都市考古学や数理地理学という新しい学問的手法をもちいて、都市空間の変遷を解明しようとするものである。都市考古学とは、従来の精緻であるが微視的な考古学的手法を離れ、都市や集落全体を視野に入れた視点から、都市遺跡の復原や都市空間の変遷を解明しようとするものであり、数理地理学、歴史地理学、文献史学的手法も併用する。本論文は序章、Ⅱ部16章、および終章からなり、各部各章で扱う内容は以下の通りである。

序章では、本研究の目的、および方法と、各章の概要について述べている。

第Ⅰ部は、平安時代末期に平安京の東、鴨川を渡った東山の麓一帯に、新たに展開した白河の条坊地割に関する研究である。第Ⅰ部は8章からなる。

第1章では、白河に条坊地割が施行された歴史的背景と、白河に関する研究史、および、白河の条坊地割の遺構に悪影響を与えた近代以降の岡崎の再開発と、その現況について述べている。

第2章では、発掘調査で検出した道路遺構を中心に、都市考古学的手法を用いて、遺構相互の関係を巨視的に検討し、また、地中レーダー探査をおこない条坊地割の側溝を探查し、白河の条坊地割のフレームの復原を試みた。また、文献資料から、白河の条坊地割の道路に関する性格や、禁忌についても考察した。

第3章では、白河の条坊地割の核となった六勝寺について、また、第4章では、白河の院の御所と御堂について、遺構や文献、古図、地籍図などをもとに、その寺域や領域の復原を試みた。

第5章では、白河の条坊地割に点在した公家の邸宅や、庶民の住居地などについて考察し、条坊地割の構成要素の復原と、平安末期から中世前半にかけての鴨東の都市的状況の復原を試みた。

第6章では、白河の都市的衰退について、いくつかの要因を指摘した。とくに、吉田に

居を構えていた藤原北家勸修寺家の退転と、その菩提寺浄蓮華院領に対する吉田社の押妨について詳細に検討し、都市空間の衰退過程を明らかにした。

第7章では、前述してきた遺構の位置や文献、地籍図などをもとに、大路・小路の配置や、条坊地割の範囲について考察し、さらに、条坊地割の方位や、造営尺などを算出し、その復原を試みた。

第8章では、地理情報システムを用いた都市遺跡データベースの構築を通して、条坊地割の研究方法に関する考察を試みた。都市遺跡データベースは、遺構や街路の位置や形状をCADに入力した図形情報と、遺構や街路に関する文献などをデータベースに入力した文字情報を、地理情報システムの上でリンクしたものである。コンピュータの画面上で、文字情報と図形情報を相互に検索することができ、都市遺跡の復原に極めて有効な手法であることを明らかにした。

第II部では中世の自衛的空間「構」について考察したものである。

第9章では、構の構成要素の釘貫、木戸門、土塀、堀などについて詳述し、さらに、構の空間構成や、構の発生した歴史的背景、構の発生にいたった過程について考察した。

第10章では、構をその構築主体などをもとに類型ごとに分類し、その形態や性格の違いについて論じ、聖護院を領主とする人々が構築した聖護院の構や、郷民が構築した田中の構について詳述し、構の構築の方法や、人の手配、具体的な濠の深さや幅などについて、考察した。

第11章では、吉田社の神官であった吉田家が主導的役割をはたしていた吉田の構について、神官吉田兼見の日記や古絵図をもとに、構の維持管理のあり方や、構の諸施設について考察し、その復原を試みた。

第12章では、賀茂別雷神社の社家が力を合わせて構築し、維持管理をおこなってきた上賀茂の構について考察し、その復原を試みた。

第13章では、仏国を夢見る門徒達が築き上げた寺内町であり、巨大な構でもある山科寺内町の構や、山科寺内町の出城であった南殿について、その構築から退転までを詳細に考察した。

第14章では、洛中の多数の構が徐々に融合し、上京の構と下京の構に集約され、そして、秀吉が京の廻りに構築したお土居へと、近世の京の町の枠組みが築き上げられていく過程を考察し、都市空間の近世への展開過程を明らかにした。

終章では、古代末から中世にかけての洛中洛外における都市空間の変遷について総括し、

また、海外の都市空間と比較検討し、保存修景にむけての計画を呈示し、将来の課題と展望について述べた。

*1 西川幸治「日本の都城制」『日本都市史研究』

*2 『扶桑略記』応徳3(1086)年10月20日の条

*3 『平家物語』巻七 維盛都落(『日本古典文学大系33』所収)

*4 『鯨珠記』大治2年7月10日条 「法勝寺西門ヨリ神樂岡ニ至ル大路成ル」(『史料綜覧』所収)

第Ⅰ部 白河における都市空間の 変遷に関する歴史的考察

- 第1章 白河の条坊地割の展開
- 第2章 白河の条坊地割の道路遺構
- 第3章 六勝寺の寺域について
- 第4章 白河御堂と白河殿
- 第5章 白河の条坊地割の諸社寺と邸宅
- 第6章 白河の都市的衰退
- 第7章 白河の条坊地割の復原
- 第8章 地理情報システムを用いた
都市遺跡データベースの構築

1-1 白河の都市的展開

1-3 白河の条坊地割の遺構の現状について

1-4 小 結

- 1-1 白河の都市的展開
- 1-2 白河の条坊地割に関する研究史
- 1-3 白河の条坊地割の遺構の現状について
- 1-4 小 結

第1章 白河の条坊地割の展開

第1節 白河の都市的展開

平安京の二条大路を東へとすすみ、東京極大路を過ぎ、賀茂川を渡ると白河の地に至る。東に東山を望み、北は黒谷(もと栗原岡)、南は栗田山に囲まれ、そこを白川が流れる風光明媚な場所である(図1-1)。この白河の地は、古来、別業の地として、また、葬送の地として利用されており、人家の少ない寂寥とした地であった。本節では、白河に六勝寺や院の御所と御堂が造営される以前の状況と、造営に至った背景について考察する。

1. 大白川と小白川

白川は比叡山中にその端を発し、比叡山から運ぶ風化した花崗岩砂は白く、白川の名の由来となる。白河の地名は一帯を流域とするこの白川に由来するが、その流路は度々変遷し、平安時代には大白河、小白河^{*1}と称され、『御堂関白記』にも「大白河、小白河で花見」^{*2}とある。

この大白河・小白河は、各々別の流路であるとする説を、横尾義貫氏が主張された。大白河が吉田山の北を西流し鴨川に入り、小白河は吉田山と東山の間を南流する今の白河とほぼ同じ流路をたどっていたが、中世に「河川の争奪」現象が起き、大白河が衰退し、主流が小白河に移ったと考えていた〔横尾義貫ほか77〕。

岡田保良氏は、後述する文徳天皇皇后明子の白河陵に関する延喜諸陵式の記述から、神楽岡の東方を南流する白川以外に、神楽岡の北方を西流、もしくは西南流する流れの存在を指摘し、大白河・小白河の名称は別として、吉田山の北を西流する白川の流れがあったことは認めている^{*3}。京都大学北部構内で検出した2本の土石流の痕跡や、北部構内から本部構内西半部・教養部構内西半部にかけて1～1.5mの厚さで堆積している白川砂は、こうした白川の流れが西に向かっていたことを裏付ける〔清水芳裕91〕。

いずれにしても、白河が吉田山の北東で河川の争奪があり、白川が吉田山の東を南下していた時期と、北を西流していた時期があるのは間違いないが、北部構内から本部構内西半部・教養部構内西半部にかけて堆積している白川砂の時期は弥生前期末から中期ごろで

あり、「河川の争奪」は弥生時代の前期ごろには、ほぼ決着していた可能性が高い。本稿で対象とする古代末から中世にかけて、白河の流路が大きく変化した証左はなく、中世には白川の流路は安定していたと考えられる。

北白川の名称は、元永元(1118)年の『中右記』の記事に見えているが、近世には鴨東一帯を総称して白河とし、白川以北を北白川、以南を南白川とよんでいる。「中古京師内外地図」(『故実叢書』所収)には、「京外白河」を「賀茂河以東、北從神楽岡北、及白川山南迄、九条辺總謂白川也」と、極めて広い範囲を総称し、さらに、北白川と南白川に分けている。

本稿では、杉山信三氏の言うように〔杉山62 P.108〕、北白河を本来の白河と解し、この範囲について考察する。なお、「白河」は古代から中世にかけての呼称で、流域一帯を意味することもある。「白川」は近世以降の呼称で、おもに流路をさして用いることが多い。本稿では「白川」と「白河」の用語を、引用文は原文に従うが、基本的にはこの地一帯を示す地名を「白河」とし、川の名称を「白川」と区別して用いる。

2. 天狗ありなどいひし所

(1) 別業の地・白河

白砂とともに流れる白川の流域は、間近な山にも囲まれ、風光明媚なところとして詩に詠われ、古くから貴族の別業が営まれてきた。藤原良房が白川沿いの地に別業を営み、白河殿と称されたのは九世紀の後半である。源順が「後二月遊_二白河院_一賦_二花影泛_一春池_一応_レ教」と題する詩序の中で、

都人士女之論_レ花者。多以_二白河院_一為_二第一_一

と、都で第一の花の名所として讃えた白河院などもそのうちのひとつである^{*4}。白河院は藤原家累代の別業として伝領されたが、関白頼通の子師実が朝廷に献上し、後に六勝寺の筆頭・法勝寺の敷地となった^{*5}。康平3(1060)年3月25日に、この別業白河殿に上東門院藤原彰子が御幸したときには、

豫西南渡殿為_二御休息幕_一。所司立_二御屏風大床子等_一。西廊為_二公卿座_一。西北渡殿為_二殿上人座_一。相_二隔同渡殿_一。其東為_二藏人所座_一。北对西妻為_二御厨子所_一。(中略)午剋渡_二御釣殿_一。自_二寝殿東砌_一。並_二池畔_一至_二于釣殿南砌_一。修理職設_二打橋_一。

とあり、渡殿、釣殿、舟を浮かべることのできる池などを備えた寝殿造の別業であった^{*6}。

この白河院との関係は不明であるが、右大臣藤原氏宗が没したため、別業の「東山白河第」に在原行平などが派遣されている^{*7}。このほか左大臣藤原忠平の「白河の家」などもあったとされ〔福山75〕、手近な別業の地として利用されていた。

(2) 葬送の地・白河

別業を営む一方で、白河は葬送の地としても利用されていた。主として北白川に位置する吉田山(神楽岡)周辺が、葬送の地として利用されている。白河の地に別業を営み白河殿と称された藤原良房は、その室潔姫の葬地として「賀楽岡(神楽岡)白川地」^{*8}を選んでいる。良房自身の葬地も「愛宕郡白川辺」^{*9}であり、各々愛宕墓・後愛宕墓と称されている。この両墓は吉田山の東辺に比定されている。

吉田山周辺には墓所もあり、「吉田卒堵婆供養所」^{*10}、「吉田社北三丁内有葬送之處」^{*11}といった記事が散見される。この時期の吉田社は吉田山の西の平地にあり、京都大学教養部あたりに比定されている〔川上・泉77〕。第5章で、後述する京都大学本部構内AT27区(図1-3-75)で検出した土坑墓群は、この「葬送之處」にあたる可能性が指摘されている〔五十川81〕。

このほか、吉田山(神楽岡)周辺には多くの陵墓が比定されているが、貞観8(866)年には賀茂御祖神社に近いとの理由から、神楽岡周辺での葬送が禁じられている^{*12}。この賀茂の神人の訴えは功を奏したらしく、延久5(1073)年5月以降、神楽岡一帯を皇室の葬送の場とすることは、避けられたと考えられている〔福山69〕。

いずれにしても、白河の地は人家の少ない、基本的に閑静な地であり、「天狗ありなどいひし所」、「天狗、え造らせ給はじとねたがりいふ」^{*13}、「我ハ東山ノ大白河ニ罷通フ天狗也」^{*14}などといわれ、天狗の跋扈する鄙びた場所の代名詞であった。上東門院彰子は寛徳2(1045)年白河殿に渡御したが、天狗などが出る恐ろしい所なので、永承2(1047)年には洛中京極殿に移っている^{*15}。

このように閑静であった白河の開発が突然進められたのは、11世紀後葉のことである。六勝寺や、院の御所と御堂の相次ぐ造営と、条坊地割りの施行による市街化により、白河の様相は大きく変化していった。

3. 白河における造寺造仏

(1) 院政期の造寺造仏と白河

平安時代末期の院政期には、非常に多くの寺院が建立された。寺院の造営数は奈良時代をはるかに凌駕していた。造営数だけでなく、九昧阿弥陀堂や千昧阿弥陀堂、法勝寺の八角九重塔を代表とする高塔、大規模な金堂や講堂など、それまでの建築的常識を覆す構築物が、次々と造営された。そして、その多くは鳥羽と白河に集中した。

白河における大規模な造寺造仏は、白河天皇の法勝寺の造営(1077年)に始まる。ついで、堀河天皇の尊勝寺(1102年)が、鳥羽天皇の最勝寺(1118年)が、待賢門院璋子の円勝寺(1128年)が、崇徳天皇の成勝寺(1139年)が、近衛天皇の延勝寺(1149年)が、つぎつぎと造営されていった。こうした状況を、端的に描いたのが『愚管抄』の中の次の一文である^{*16}。

白河ニ法勝寺タテラレテ、国王ノウチデラ（氏寺）ニコレヲモテナサレケルヨリ、代々ミナコノ御願ヲツクラレテ、六勝寺トイフ白河ノ御堂、大伽藍ウチツツキアリケリ。ホリカハノ院ハ尊勝寺、鳥羽院ハ最勝寺、崇徳院ハ成勝寺、近衛院ハ延勝寺、コレマデニテノチハナシ。母后ニテ侍賢門院（璋子）、円勝寺ヲクワエテ六勝寺トイウナルベシ。

とあり、6寺が「六勝寺」と総称され、「国王の氏寺」としてその栄華を誇ったことがわかる。

また、法勝寺の着工（承保2(1075)年）から延勝寺の落慶（久安5(1149)年）まで74年を要しているが、この六勝寺以外にも白河北殿・南殿、白河押小路殿などの院の御所や、公家の邸宅、および得長寿院、蓮華蔵院、金剛勝院、証菩提院、歓喜光院、福勝院、宝莊嚴院などの御堂の建立が、白河、鳥羽、後白河の3上皇の院政時代を通じて続き、この地の様相は一変し、「京・白河」^{*17}と洛中と並び称される白河の街区が出現した。

九昧阿弥陀堂や千昧阿弥陀堂は、造寺造仏の数量によって、その功德の大きさを押し量った平安時代末期の風潮の産物である。このため、九昧阿弥陀堂や千昧阿弥陀堂が造営された時期や、造営された場所は極めて限定されている。福山敏男氏は文献にみられる33例の九昧阿弥陀堂の造立時期が、11世紀から12世紀末に限られ、とくに12世紀前半に集中することや、造立場所が近江・陸奥・阿波・鎌倉の4例を除き、すべて京とその近郊にあることを指摘している【福山78】。京近郊の29例うち、白河に造立されたものが、法勝寺(1077年)、尊勝寺(1105年)、蓮華蔵院(1114年)、円勝寺(1128年)、証菩提院(1129年)、蓮華

蔵院新九昧阿弥陀堂(1130年)、宝莊嚴院(1132年)、福勝院(1151年)、延勝寺(1163年)と9例、約1/3を占め、白河の地に集中していたことがわかる。

(2) 平安京の変形と白河の条坊地割

都市史の上で平安京の右京が衰退し、人々が左京へ移動していた経緯は、諸先学の研究に詳しい。慶滋保胤が天元元(982)年10月に記した『池亭記』の記述は、10世紀後半の平安京の状況を端的に表す資料として有名である。右京は

西京は人家漸く稀にして、ほとんど幽墟に近く、人は去るあつて来るなく、
屋は壊つあつて造るなし

といった有り様で衰退を続け、逆に左京は、

東の京四条以北は、人々貴賤となく群集し、高家門を比べ堂を連ね、小屋
は壁を隔て簷を接す

と四条以北に人家が集中したことがわかる。こうした状況を裏付ける考古学的成果として、右京で検出した建物の大半が10世紀末までのものであり、11世紀以後の建物後はほとんどなることや、右京のほとんどの地域で中世の耕土層が認められ、中世には田畑化していたことが報告されている【永田88】。西大宮大路が10世紀には廃絶し、西堀川小路が11世紀の木棺墓に切られていることなども、右京が都市としての体をなさなくなっていたことを物語る。

右京が萎縮する形で平安京の変形が進む中で、ひとつの画期となったのは法成寺の造営である。法成寺は、藤原道長が寛仁4(1020)年造営したもので、平安京の東端、東京極大路と賀茂の河原の間に築かれた。南は土御門大路、北は近衛大路に面していた。法成寺の正面・南大門から二条大路末に通じる道路も新たに造られてたが、この道路を東朱雀大路と称していた。条坊地割りの中心街路を想定しながら造営を進めており、単に平安京外に建物を造営したのではなく、京外に条坊地割を示唆する道路を造営し、平安京の変形を意識した計画であったと考えられる。

『山槐記』の長寛2(1164)年6月27日の条には、平安京の賑給定に関連して、「京極東有朱雀堤」とあり、東朱雀大路と堤小路が賑給の対象として言及されていることが指摘されている【高橋83】。東京極と賀茂川の間が、かなり繁栄していたことをうかがわせる。

平安京の変形を、さらに組織的に、かつ大規模に、また長期にわたって、推し進めたのが、白河の地における六勝寺や院の御所と御堂の造営であった。白河の地のこうした都市

的發展にともない、洛中と同様に格子状の条坊地割が施されたと考えられている。愛宕郡の条里が東に5~6'振るのに対し、白河一帯では遺構の方位が六勝寺などと同じほぼ真北を示すことや、近衛末、大炊御門末、春日末など洛中の大路小路の名称に、「末」をつけた道路名が文献に現れることをその根拠とする。白河に関連する文献に現れる大路小路の名称は、北から順に、土御門大路末、近衛末、勘解由小路末、中御門大路末、春日末、大炊御門大路末、冷泉小路末、二条大路末、押小路末がある。南北路で名称の明確なものは、中央に位置する今朱雀と、1筋西の仏所小路だけである。これらの道路については第2章で詳述する。こうした記述から、白河に条坊地割が施されていたと考えられてきた。

第2節 白河の条坊地割に関する研究史

白河街区に関する考察は、古くは江戸中期の森幸安の「中古京師内外地図」(1750年)にはじまる。昭和にはいと文献史学や歴史地理学、建築史学の立場から、おもなものだけでも、「京白川の発達と其後」〔藤田30〕、「尊勝寺の伽藍配置」〔足立41〕、「六勝寺の位置について」〔福山43〕、「後鳥羽上皇の白河殿と鳥羽殿について」〔杉山56〕といった考察が発表された。

1960年代には本格的な発掘調査が始まり、1970年代には考古学的な調査の進展を受けて、考古学的成果をもちこんだ論文が発表された。おもなものとしては、「白河御堂」〔杉山62〕、「六勝寺と鳥羽殿」〔村井71〕、「条坊復原案」〔津田78〕、「京都大学構内遺跡と京・白河」〔岡田79〕、「六勝寺の伽藍とその性格」〔清水85〕、「白河・鳥羽を中心とした院政期寺院の構成と性格」〔清水88〕、拙稿「白河の条坊地割」などがあげられる。本節では、こうした白河の条坊地割の研究史を概説し、総括を試みる。

1. 江戸時代の地誌にみる白河

江戸時代の地誌の代表作として、奇しくも同年(正徳元(1711年))に刊行された「山州名跡志」と「山城名勝志」があげられる。前者は、釈白慧(坂内直頼)が山城を実地に踏査し、その当時の寺社や遺跡の状況を描いたものである。後者は、大島武好が膨大な古典籍をもとに客観的に描いたもので、前者と好対照をなしている。前者は歴史的な叙述に富むものの、実際の比定地については記述がない。後者は具体的な場所について、村人らの伝承から具体的に述べている。しかし、いずれも位置関係についてはかなり誤りがあり、厳

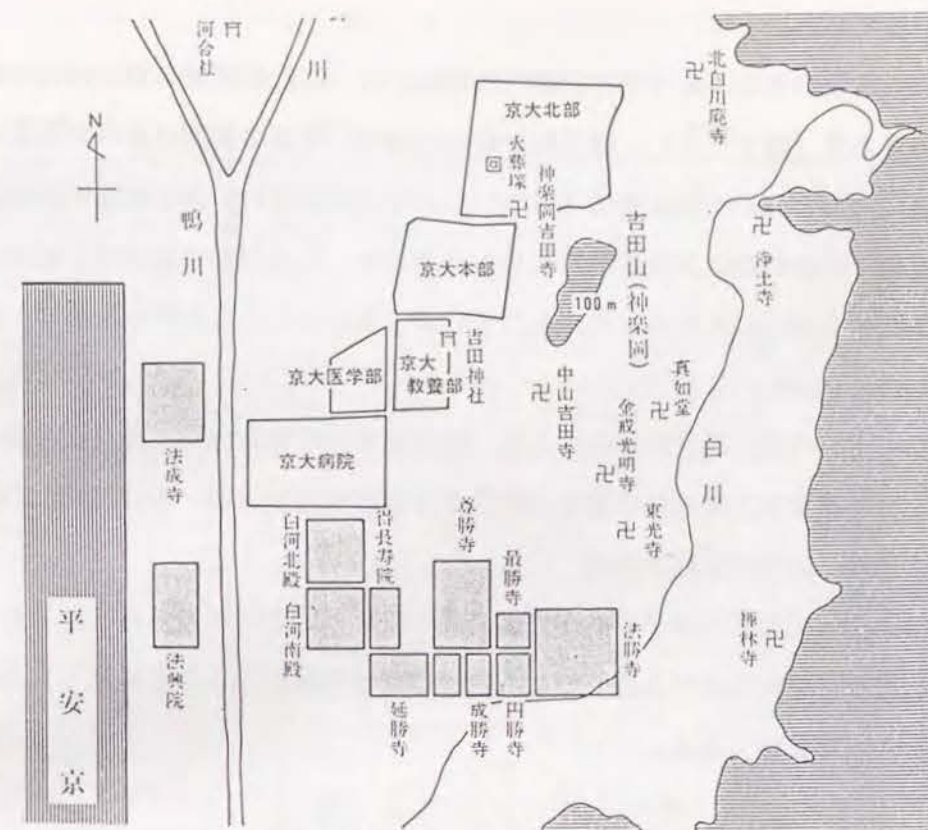


図1-1 平安京と白河 (〔宇野79〕所収)



図1-2 中古京師内外地図 (『故実叢書』所収)

密な検討が必要である。

森謹斎幸安珍重の手による「中古京師内外地図」は、応仁の乱前の京の内外の様子を考証したものである（図1-2）。縮尺約1/8200の図で、考証の範囲は京内にとどまらず、鴨東白河の地にもおよぶ。原図は寛延3（1750）年4月に作製され、妙法院宮が所蔵していたものを、天保7（1836）年に源重慶が写したものである。この図の六勝寺の位置関係は、山城名勝志の記述を参照したものと考えられている〔福山43〕。この図の注記に、白河を外京とし、さらに

嘗延暦年遷都今地以降、京外白川之地、離宮仙宮皇后御所国母御殿三公公卿
殿上人百司諸家等之殿第館亭家宅山庄別業及寺社廟堂院舎等、大以宮構此白
川以北都城、故古記並称京白川

とあり、往時の白河の繁栄の様子を的確に言い表している。この図における諸社寺や邸宅の位置関係の考証に曖昧な点があるものの、白河に条坊地割があったと推定し、その復原を試みた古例として貴重である。

2. 歴史地理学と建築史学による白河の研究

藤田元春の「京白川の発達と其後」は『都市研究 平安京変遷史』の1節で、白河への都市的展開や、六勝寺、白河北殿・南殿の位置について考証したもので、文献と古図を駆使した歴史地理学的研究の先駆となったものである。

福山敏男の「六勝寺の位置について」は、江戸時代の地誌類に誤謬が多いことを指摘し、文献をもとに、白河の条坊地割りや六勝寺の位置関係について、詳細な考証をおこなったものである。とくに、法勝寺については、陰陽寮のいわゆる「承保勘文」をもとに、金堂の東南隅や、金堂の南庇、阿弥陀堂基壇の南端の位置などを明らかにしている。この「承保勘文」は、法勝寺金堂の方角が、六条内裏の悪方にあたるか否かを、承保3（1076）年に陰陽寮が調べたときのもので、六条内裏から法勝寺までの詳細な実測記録が記されている。また、法勝寺の西大門が二条大路末にあたっていたことを指摘している。

さらに、法勝寺の寺域について考察し、北を冷泉小路末、南を押小路末の南辺のあたりの南北90丈あまり、西は広道に面した東西92丈程度と考えている。法勝寺の伽藍配置を、古文書の記述から具体的に割り出した画期的な研究である。

杉山信三の「白河御堂」は『院の御所と御堂 院家建築の研究』の1節である。本書は院政期の法皇の御所や、御堂を院家建築と定義して、その実態を明らかにしたもので

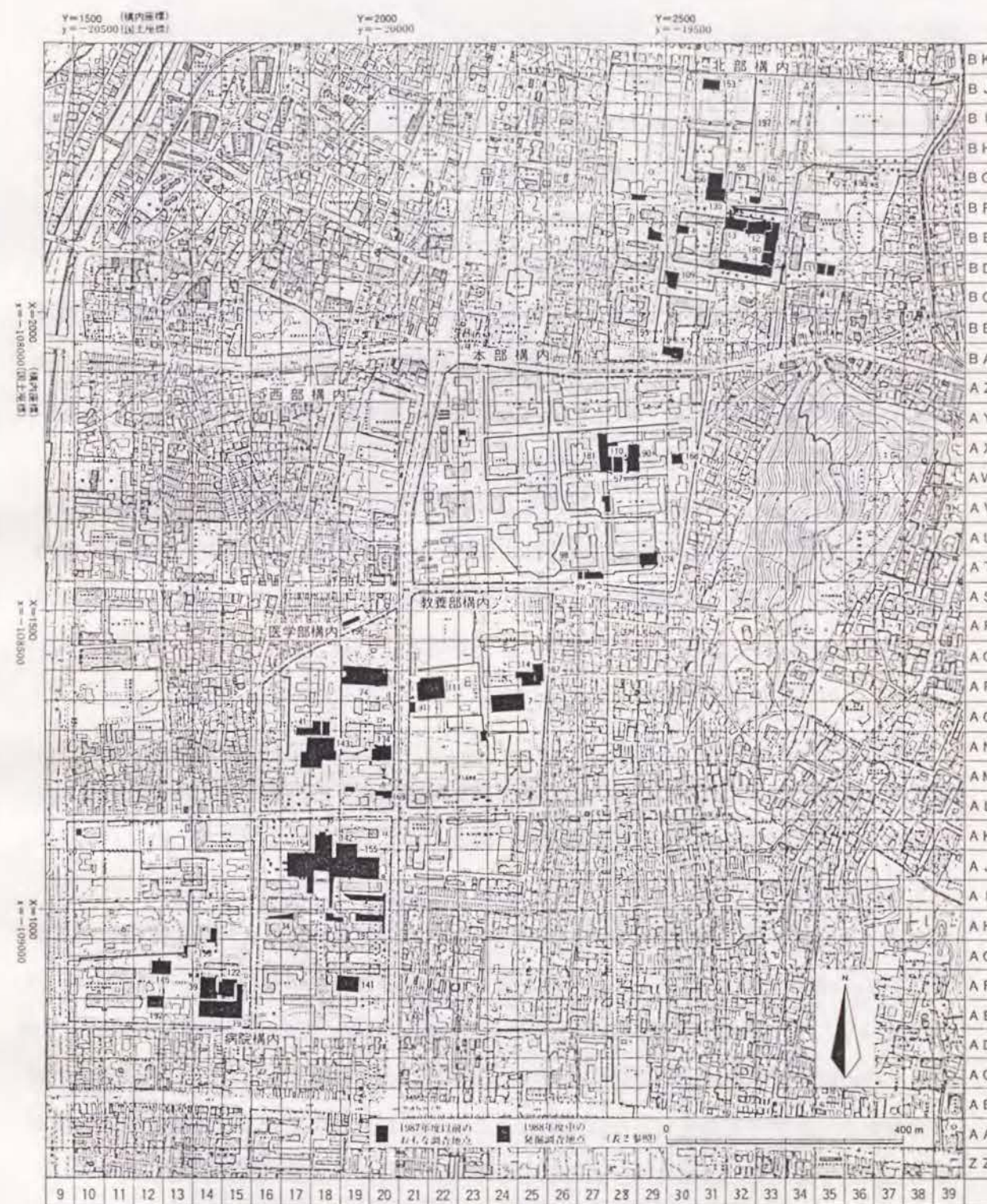


図1-3 京都大学吉田キャンパスの地区割と調査地点

縮尺1/10000（〔京大埋文研92〕所収）

ある。平安京近辺では、御室の仁和寺と四円寺、白河御堂とその御所、鳥羽御堂について詳述し、とくに白河御堂に関しては、白河北殿・南殿、蓮華蔵院、宝莊蔵院、福勝院、聖護院などについて、個々に詳しく言及している。

清水擴の研究は白河の条坊地割り全体を対象としたものではない。六勝寺、および院の御所や御堂について、白河だけでなく、鳥羽で造営されたものも含めて、その伽藍構成や性格を明らかにしようとしたものである。そのうちのひとつ「六勝寺の伽藍とその性格」は、六勝寺が奈良時代の官の大寺に匹敵する大規模な金堂を持ち、金堂には軒廊・回廊がとりつき、伽藍の中で塔が重要な位置を占めていることなどを指摘している。さらに、六勝寺には五大堂、薬師堂をはじめとする密教系諸堂の存在から、新奇性に富む密教を基調とした寺として捉え、鳥羽、白河の他の諸寺院との違いを指摘している。その一方で、金堂、塔などの伽藍中枢部の強い対称性と、塔の復権に復古的な部分を読みとり、新奇性と復古性の両面から、六勝寺の伽藍の性格を捉えなおしている。

さらに、「白河・鳥羽を中心とした院政期寺院の構成と性格」は、白河・鳥羽に造立された六勝寺以外の諸寺院の伽藍構成について考察したものである。とくに、寺院内の御所と御堂の関係について、類型的把握を試み、御堂と御所が一体化した「御堂御所」が「浄土教建築」のひとつであったことを明らかにしている。

3. 考古学による白河の研究

昭和35年の京都会館建設にともなって実施した発掘調査で、尊勝寺の主要部分を検出して以降、白河の随所で発掘調査が実施され、数多くの考古学上の知見を得ることができた。こうした新たな知見をもとに、白河の条坊地割に関する研究が進められた。

白河の条坊地割の北部にあたる京都大学構内でも、1972年から事前調査が実施されるようになり、1991年までに試掘・立会調査を含めた発掘調査件数は206件、延べ面積約45,000m²におよぶ(図1-3)。縄文時代から近世まで、この地一帯の空間の変遷を知る上で貴重な多数の関連遺構を検出している。筆者も1980年に助手に着任後、京都大学埋蔵文化財研究センターの助手を兼任し、その半数以上の発掘調査を担当し、都市空間の変遷に関する考古資料を蓄積し、吉田の構や藤原北家勸修寺家の菩提寺浄蓮華院の盛衰〔浜崎83〕、福勝院の関連遺構〔浜崎90〕、白河の条坊地割〔浜崎91〕などについて考察を進めてきた。

上原真人の「古代末期における瓦生産体制の変革」は、瓦の各地域からの供給を「国司の成功」によるところが大きいと指摘している。



図1-4 白河条坊とおもな調査地点(〔岡田79〕所収)

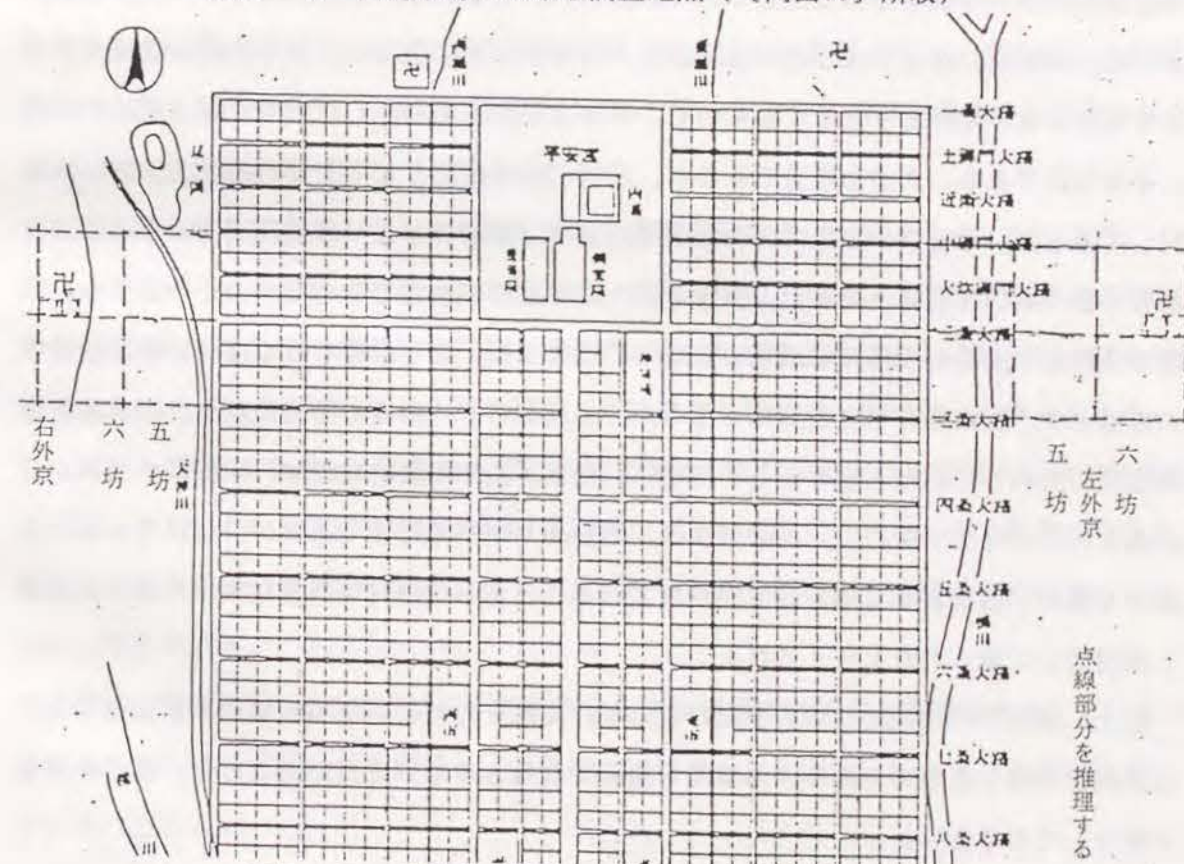


図1-5 平安京の外京について(杉山信三氏案)

岡田保良の「京都大学構内遺跡と京・白河」は、白河一帯、および京都大学周辺で検出した平安時代末期から中世にかけての溝を抽出し、白河の条坊地割の復原を試みたものである。考古学的成果を用いて、白河の条坊地割の復原を試みた最初の例である（図1-4）。しかし、この復原案は京都大学病院構内で総延長56mにわたって検出した溝〔岡田・上原77〕と、尊勝寺跡で検出した建物〔杉山・岡田61〕の、真北より約2'50"西に振る方位を採用し、法勝寺の金堂と二条大路末との位置関係などに齟齬を生じた。

これに対して、拙稿「白河の条坊地割」は近年の発掘調査の成果をふまえて、真北から東に0'30"~0'40"偏った方位と、1尺=0.3034mの造営尺を採用し、白河の条坊地割の復原をおこなった。基本的には、南北の道は4町おきに、東西の道は2町おきに大路がある洛中と同じ型式をとっていたとすると、復原に齟齬をきたす部分が少なかった。ただ、条坊地割に先立って法勝寺、もしくはその前身の藤原家累代の別業があり、そこを中心に条坊地割が施されたとし、その結果、冷泉小路末や今朱雀に変則的な部分が生じたと考えていた。

ところが、杉山信三氏が岡崎グランドの発掘調査の結果や、最近の調査の成果から、白河の条坊地割が外京であると主張した〔杉山92〕。平城京の外京に興福寺や元興寺があるように、平安京には左外京と右外京があり、右外京には広隆寺が、左外京には岡崎グランドで検出した寺院があったとするもので、外京は平安京当初から計画的に考えられていたとするものである。大胆な意見であるが、白河の条坊地割りと平安京の条坊を詳細に再検討してみると、平安京から東に条坊を3単位並べ、最初のひとつは賀茂川で、2番目、3番目を各々六坊と七坊とすると、法勝寺西大路や法勝寺金堂の中心線がよく一致する。法勝寺の計画中心線が偶然条坊地割の計画中心線に一致した可能性もなくはないが、法勝寺の敷地が中心線に関して左右対称でなく、この点からも、白河の条坊地割の計画が法勝寺の造営に先行していたと認めざるを得ない。ただ、白河の条坊地割が、平安京の当初から計画されていたとす説には、疑問がある。平安前・中期の遺構や遺物が少ないことや、文献でも極めて寂寞とした所として描かれていることから、白河の条坊地割は六勝寺の造営と相前後して施されたと考えられる。

以上、諸先学の代表的な研究を紹介したが、文献をもとにした福山敏男、杉山信三の先行研究は卓越したものであり、本論でも随所で引用させていただいたことを、あらかじめお断りしておきたい。

第3節 白河の条坊地割の遺構の現状について

以上のように、多くの先学が白河の条坊地割の復原を試みているが、白河の条坊地割の範囲、方位、造営尺、大路小路の幅員などの詳細は不明である。解明が困難な理由として、核となる六勝寺の存続期間の短さ、文献資料の少なさ、そして、近代の白河一帯の大規模開発などがあげられる。

1. 白河の衰退

六勝寺の存続が短期間であった理由については、第I部第6章で詳述するが、大まかにいえば院政の崩壊と、武家の台頭と公家階級の没落による経済基盤の崩壊や、社会不安に起因する人心の荒廃と治安の悪化や戦乱が、六勝寺などに対する放火を招いたこと、造寺造仏の趨勢に乗った広大な建築物に、建築構造的配慮の欠けたものが多かったことなどがあげられる。

白河の御堂は、「御堂も仏もなべてならずおおきにおわします」と評されていたが^{*18}、禅宗様や大仏様が伝来する以前の建築技術では、高さは80mを越えていたと推定される法勝寺の八角九重塔や^{*19}、九躰阿弥陀堂をはじめとする広大な仏堂群を構造的に保持するには、いささか無理があったものと考えられる。

また、鎌倉時代に入りこうした寺院を支えた貴族階級の権力が衰えたことや、天災、人災などがあげられる。保元の乱（1156年）は、白河の御堂と御所に大きな被害をおよぼし、承久の変（1221年）では壊滅的な打撃を受けた。こうした人災のほか、六勝寺はしばしば天災にあい、元弘3（1333）年に山門の僧徒と六波羅勢は尊勝寺の焼け跡で合戦をおこなっている^{*20}。最後まで残った法勝寺も応仁の乱で壊滅的な打撃を受け、享禄4（1531）年以後は再建されていない。他の六勝寺も室町後期にはすでに廃絶していた。都市開発の中核となった六勝寺が1~2世紀で廃絶したのにもなって、条坊地割も急速に失われていったものと考えられる。

法勝寺の東北約200mの地点において実施した発掘調査では集落の遺構を検出しているが、遺物から14~15世紀にかけて存続し、16世紀には廃絶し、水田化していたことが報告されている〔上村91a〕。

2. 白河の再開発と遺跡破壊

応仁の乱後、耕地化し、遺跡と化した六勝寺を初めとする白河の条坊地割の遺構に大きな影響を及ぼしたのは、疎水の開削(明治23年竣工)と、第四回内国勸業博覧会(明治28年)、平安神宮の創設(明治28年)をはじめとする岡崎一帯の再開発であった。博覧会後も、武徳殿(明治32年)、京都市記念動物園(明治36年)、岡崎公園(明治36年)、京都府立図書館(明治42年)、第一勸業館(明治44年)、第二勸業館(大正2年)、京都市公会堂(昭和6年)、大礼記念京都美術館(現京都市立美術館、昭和8年)、京都会館(昭和35年)の建設が相次いで進んだ。こうした施設の建設にともない、周囲の都市化も急速に進み、のどかな田園に帰っていた景観も一変し、白河の条坊地割の遺構も旧地形の消滅、遺構の破壊といった大きな影響を受けた。なお、京都市立動物園のように、終戦直後に米軍の接收を受け、整地のために法勝寺九重塔の基壇が削平された例もある。

以上のような状況が白河の条坊地割の解明を困難にしていると考えられるが、さらに、解明を困難にする要因として、白河の条坊地割が整合性のある全体計画の無いままに、条坊地割が施された可能性を指摘したい。すなわち、白河の条坊地割は、六勝寺の造営にともなって漸次進められたもので、区画の大きさや、大路・小路の幅などに不整合な部分があった可能性がある。法勝寺が2町四方におさまらないことや、延勝寺が白河の条坊地割の中心街路である今朱雀を分断していることなどはその不整合な面を示し、また、大治2(1127)年、法勝寺の西側の大路が神楽岡まで延長されたことは^{*21}、条坊地割の実施が長期にわたって行なわれていたことを裏付ける。こうした状況が白河の条坊地割の復原を、さらに困難にしていると考えられる。

第4節 小 結

本章では、白河の空間の変遷と、その研究史について概観し、以下のようなことを明らかにした。

①六勝寺や院の御所と御堂が造営される以前の白河は、別業の地であり、葬送の地であった。風光明媚な白河に、公家の別業がいくつか営まれていたが、中でも法勝寺の前身である白河殿は、花の名所の第一と詠われた。また、やや北よりの吉田山近辺は葬送の地として、墓所が営まれ、卒塔婆供養などがおこなわれていた。いずれにしても、六勝寺が造営され、条坊地割りが施行されるまでの白河は、自然に囲まれた風光明媚

なところであるが、寂寥感も漂う寂しい所であった。

- ②右京が萎縮する形で平安京の変形が進む中で、ひとつの画期となったのは法成寺の造営である。法成寺は、平安京の東の外、東宮極大路と賀茂の河原の間に築かれたが、正面・南大門から二条大路末に通じる道路を東朱雀大路と称し、条坊地割の中心街路を想定しながら造営を進めていた。平安京外に建物を造営したのではなく、京外に条坊地割を示唆する道路を造営し、平安京の変形を意識した計画であったと考えられる。
- ③平安京の変形を、さらに組織的に、かつ大規模に、また長期にわたって、推し進めたのが、白河の地における六勝寺や院の御所と御堂の造営と、これにともなう条坊地割の施行であった。これらの開発行為により、①の様な状態であった閑静な白河の地が、都市的発展を遂げるようになった。
- ④白河の条坊地割の衰退原因が、経済基盤であった院政の崩壊や、戦乱や人心の荒廃による放火などや、造寺造仏の波に乗った高塔や、長大な建造物を構築する構造技術が未熟であったことなどを指摘した。
- ⑤白河の地一帯が衰退し、応仁の乱後にはそのほとんどが耕地化し、近代を迎えたことや、近代の白河の再開発とその影響について考察した。

*1 「大白河」(『今昔物語』巻20)、「小白河」『枕草子』とあり、小白河の家を福山敏男氏は白河院と断定している。〔福山75〕

*2 『御堂関白記』寛仁2(1018)年3月条「大白河、小白河で花見」

*3 「平安時代鴨東白河の景観復原」『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和54年度、1980年

*4 「後二月遊=白河院=賦=花影泛=春池=応=教」『本朝文粹』巻10、天禄3年閏2月(『新訂増補 国史大系』第29巻下 所収)

*5 「件所故、宇治大相国累代別業也、左大臣師実伝領献公家」『百練抄』承保2年6月13日条(『新訂増補 国史大系』所収)

*6 『平定家朝臣記』康平3年3月25日の条(『群書類従』巻四百五十 所収)

*7 『三代実録』貞観14(872)年2月7日の条

*8 『文徳実録』斉衡3(856)年6月25日の条

*9 『三代実録』貞観14(872)年9月4日の条

- *10 『小右記』永祚元(989)年9月26日の条
- *11 『権記』長保3(1001)年6月20日の条
- *12 『三代実録』貞観8(866)年9月22日の条
- *13 『栄華物語』巻39 布引の瀧(『日本古典文学大系76』所収)
- *14 『今昔物語集』巻20
- *15 『栄華物語』巻36 根あはせ『日本古典文学大系76』
- *16 『愚管抄』巻四(『日本古典文学大系86』所収)
- *17 『平家物語』巻七 維盛都落 「京白河に四五万間の在家、一度に火をかけて皆焼拂ふ。」(『日本古典文学大系33』所収)
- *18 『栄華物語』巻巻39 布引の瀧(『日本古典文学大系76』所収)
- *19 「法勝寺八角九重塔 高廿七丈」『院家雑々跡文』暦応3年2月付
- *20 「金勝院本太平記」元弘3年3月28日
- *21 『鯨珠記』大治2年7月10日条 「法勝寺西門ヨリ神樂岡ニ至ル大路成ル」(『史料綜覧』所収)

第2章 白河の条坊地割の道路遺構

- 2-1 はじめに
- 2-2 今朱雀の位置と方位
- 2-3 尊勝寺東大路について
- 2-4 勘解由小路末と鷹司小路末
- 2-5 白河の条坊地割の空間特性
- 2-6 小 結

第2章 白河の条坊地割の道路遺構

第1節 はじめに

街区と道路は、いわゆる「図」と「地」の関係にあるが、その境界にあたる側溝や築地跡を、街区に関連づけるべきか、道路に関連づけるべきかは、遺構の位置やその周辺の遺跡の状況から判断すべきである。本章では、白河一帯で実施した発掘調査の結果から、条坊地割の道路の復原に必要な遺構を集成し、条坊地割の骨格の復原を試みる。

白河の条坊地割は、今朱雀を中心に東西に4町ずつとし、法勝寺の周辺が東に突き出した形をし、西は賀茂川まで、北は少なくとも一条大路末までは存在したと考えられている。南限については不明である。法勝寺西大路より東は、法勝寺が押小路末を分断し、東西幅も2町をこえるなど、条坊地割の区画を逸脱している。法勝寺およびその北側と南側の部分が、条坊地割としてどのように認識され、計画されていたかは不明であるが、変則的ながら方格の地割が施されており、白河の条坊地割と一連の地割が連続していたことは間違いない。

南北道路・今朱雀を中心とする、東西に各々4町ずつの坊には、平安京内と同様に4町おきに南北の大路があったと考えられている。西から、賀茂川沿い条坊地割の西を限る大路、中央の今朱雀、そして法勝寺西大路がこれにあたる。南北の大路・小路の名称については、条坊地割りの中央の今朱雀と、今朱雀の西1町の所に仏所小路があった^{*1}と考えられているほかは、寺院の四周の道路を指して、法勝寺西大路とか、尊勝寺東大路、尊勝寺北大路といった、おそらく部分的に用いられた呼称があったことが判明しているくらいである。

東西の大路・小路の名称は、前章で述べたように、平安京内の該当する大路・小路の名称の末尾に「末」をつけて表していた。土御門大路末、近衛末、勘解由小路末、中御門大路末、春日末、大炊御門大路末、冷泉小路末、二条大路末、押小路末などの名称が文献に散見されるが、これらの道路が平安京内との大路・小路の延長線上に位置するのか、同じ幅を持つ大路・小路であったのか、また、大路・小路が規則的に配されていたかどうかは、未だ解明されていない。

さらに、後述するように『明月記』などには、尊勝寺東大路などといった呼称が用いら



図2-1 白河の条坊地割の概念図

れている。尊勝寺東大路は本来は小路にあたる道路であり、尊勝寺の近辺だけ拡幅されていたのか、定家が誇張して記録したか、条坊地割の大路・小路の配置が混乱していたのか、条坊地割の復原の前提として検討を要する。

白河の条坊地割の方位と造営尺については、法勝寺金堂跡の発掘調査や、尊勝寺九躰阿弥陀堂跡の発掘調査から、ほぼ真北に近い方位と、ほぼ現尺に近い1尺=0.3007~0.3014mの造営尺が報告されている。条坊地割の造営尺や方位は距離の離れた遺構のデータを検討した方が精度が高くなる。本章では、これらの条坊地割りに関連する道路の遺構を抽出し、同一の発掘区内で検討するだけでなく、白河の条坊地割全体を巨視的に捉えながら、方位や造営尺について考証し、条坊地割りの骨格の復原を試みる。

第2節 今朱雀の位置と方位

白河の条坊地割は、今朱雀を中心に東西に4町ずつとし、法勝寺が東に突き出ており、北限は少なくとも一条大路末までは存在したと考えられている。今朱雀は延勝寺朱雀とも呼ばれ、この白河の条坊地割りの主軸となる道路であった。しかし、今朱雀の押小路末から二条大路末にかけては、延勝寺の寺域にあたり、北と南に分断されている。延勝寺は六勝寺の中でも最後に造営された寺であり(1149年供養)、この最後の寺が、条坊地割りの中心軸となる今朱雀を分断している理由は不明である。こうした点を念頭に、本節では今朱雀に関連すると考えられる遺構について詳述する。

1. 今朱雀の遺構

今朱雀に関連すると考えられる遺構としては、本調査区周辺では、京都大学構内A P22区の溝SD10(図2-2-A地点、図2-3-上)、吉田近衛町遺跡の溝S2(図2-3-D地点)や、後述する尊勝寺の西側築地跡(図2-2-F, G地点)があげられる。

教養部構内A P22区(図2-2-A地点、図2-3-上)で道にともなう溝SD10、四脚門SB2、塀SA20を検出した。SD10は幅2m、深さ1.2mの溝で、発掘区内での検出長は37mにおよぶ。埋土に13~14世紀の遺物を含む。この溝SD10の東では13~14世紀の土墳墓を、西で



図2-2 今朱雀とその近辺 縮尺1/8000

は四脚門のある塀と、堀で囲まれた邸宅を検出し、この溝を境に土地利用形態がまったく異なることが判明し、溝SD10と四脚門SB2の間に南北の道があると判断した〔五十川・飛野84〕。なお、四脚門SB2と溝SD10の間は約7mであるが、邸宅にともなう遺構は13～14世紀のものであり、巷所として道が狭められたと思われる。道路上に井戸や建物が設けられたほか、溝もこの時期には埋まったと考えられる。

A地点で検出した道の直上で、同じ方位を示す近世の道SF1を検出している。この道は、寛保元(1741)年刊の『増補再板京大繪圖』(図2-4-A地点)や、明治25年製の仮製2万分1地形図(図2-5-A地点)にも記載されており、この道は古代末以来、近代まで連綿と存続していたことがわかる。

この南北の道が尊勝寺の東側を通る道の延長部分、すなわち今朱雀にあたると考えられる。図2-2-F, G地点の築地と側溝跡(X=-109,584, Y=-19,907.5)と、溝SD10の北端中央(X=-108,606, Y=-19,895.3)を結ぶと、方位を真北から東に約0°43'ふった軸線を得ることができる。図2-2-D地点の調査で、南北約15mにわたって検出した溝S2〔南ほか89〕はこの直線上に位置し、この道の存在を裏付ける。溝S2はやや削平を受けたものか、幅1.1m、深さは0.1～0.2mであり、埋没した時期は13世紀後半と考えられている。

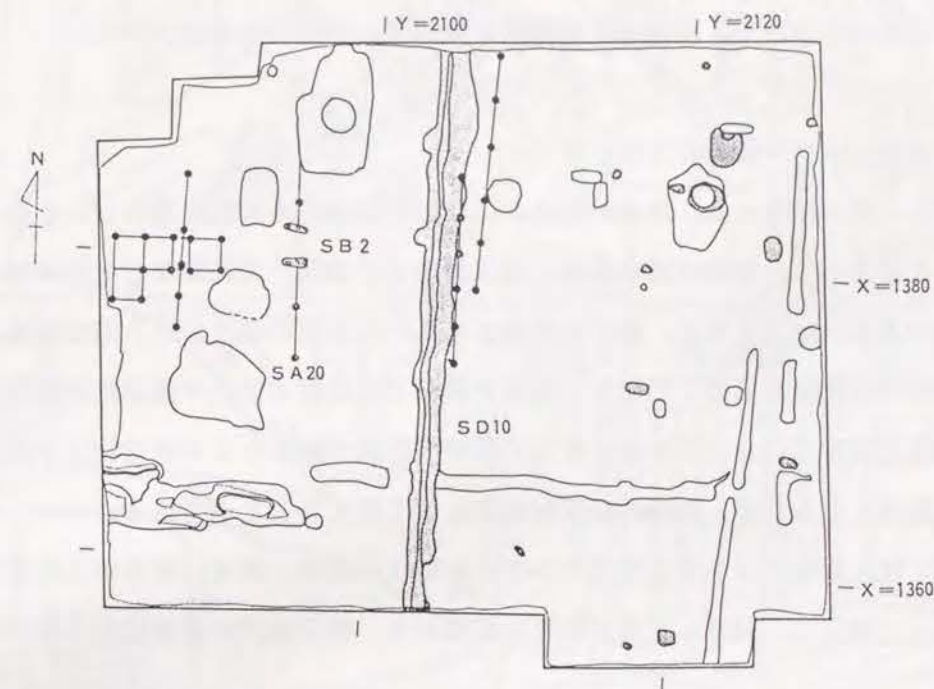
また、図2-2-A地点の南約80mのB地点の所で実施した実験排水管の付け替えにともなう立会調査でも、溝SD10の延長部分を検出し、この溝がかなりの距離にわたって、一直線に続くことを確認した。

2. 地中レーダー探査と今朱雀

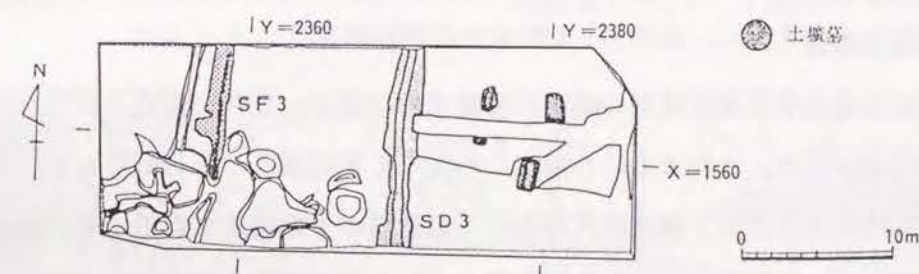
近年、発掘調査により多数の遺構を検出し、数多くの成果をあげてきたが、これらの調査は工事にともなう、いわゆる行政発掘であり、開発圧力に押されて実施した調査であったともいえる。特定の遺跡もしくは特定の地区を対象とした学術調査はほとんど実施されていないのが現状である。発掘調査には経費、時間、人員を必要とし、経済的、人的裏付けのある行政発掘でさえ、満足に実施されていない状況で、経済的裏付けのない学術調査を実施することは不可能に近い。そこで、次善の策としてあまり費用のかからない物理探査による遺構の検出を試みた。

物理探査には磁気探査、電気探査、定常波探査、地中レーダー探査などがあり、各々長所、短所があるが、いずれも非破壊で探査を実施できる。今回は、京都大学教養部構内に

京都大学教養部構内AP22区(図2-2-A地点) 縮尺1/500(〔浜崎91〕所収)



京都大学本部構内AT27区(図2-2-H地点) 縮尺1/500(〔浜崎91〕所収)



岡崎幼稚園構内(図2-2-G地点) 縮尺1/75(〔梶川77a〕所収)

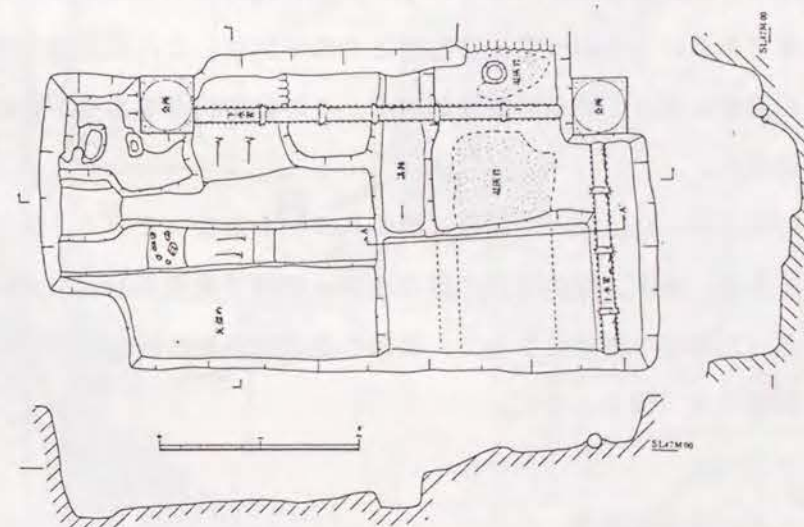


図2-3 今朱雀と尊勝寺西大路に関連する遺構

において、現在、テニスコートとして利用されている地区を地中レーダーを用いて探査し、今朱雀の側溝の存在や、後述する福勝院に関連する遺構の探査を試みた。

(1) 地中レーダー探査の方法

地中レーダー探査とは、地表から地中にむけて電磁パルス波を放射し、その反射波を捉えることによって、地中の浅い部分の地盤構造や、空洞、埋蔵物などを非破壊的に探査する方法である(図2-7)。地下に埋蔵されている遺跡の場合には、旧生活面、旧地表面などが地層境界面を形成しており、土坑や溝などの地層の凹凸や連続性が地中レーダー探査によって把握することができる。また、地中の空洞や礎石などの埋設物はそれ自体が電磁波の反射体となるため、局所的な反射異常として捉えることができる。

実際には、送信アンテナと受信アンテナを櫓状の台車に乗せ、あらかじめ設定した測定線に沿って牽引し、発信した電波の反射状態から、測定線下の堆積状況を調べるものである。

(2) 調査の概要

調査地は京都大学教養部構内の南部に位置する(図2-2-C地点, 9)。京都大学教養部構内においては、これまでも数次にわたって発掘調査が行われており、調査区周辺では、弥生時代から平安・鎌倉時代にかけての遺構が多数検出されている。特に、今回の調査の対象となった地域は、九昧阿弥陀堂のあった平安後期の福勝院が比定されている所でもあり、また、平安後期に白河に施されていた条坊地割の中心街路今朱雀が通っていたと推定される所である。したがって、この地区の地中には、これらの建造物の基礎や、街路の側溝などの遺構が残っている可能性が高く、その分布状況をあらかじめ探査によって把握するよう試みた。

今回調査の対象となった区域は、現在はテニスコートとなっている、東西約110m、南北約40mの範囲である。まず、東西方向の探査を5m間隔で東西100mにわたっておこない、ついで反応のあった部分を東部において、測線の基準線を2.5m北にずらし、東西、南北に5m間隔で精査した(図2-9)。

(3) 地中レーダー探査の結果

地中レーダー探査は応用地質株式会社に委託した。その結果、表層部は平坦に整地され、

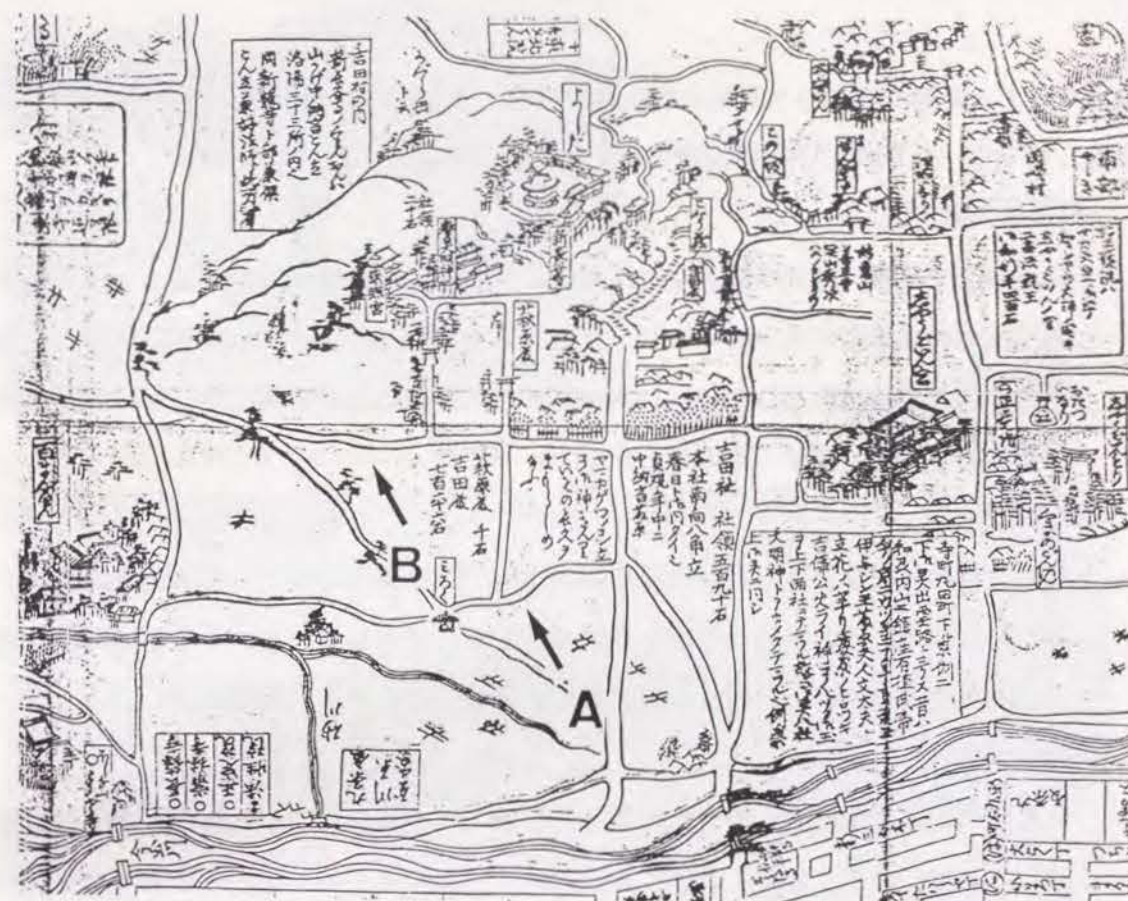


図2-4 『増補再板京大繪圖』(寛保元(1741)年刊)

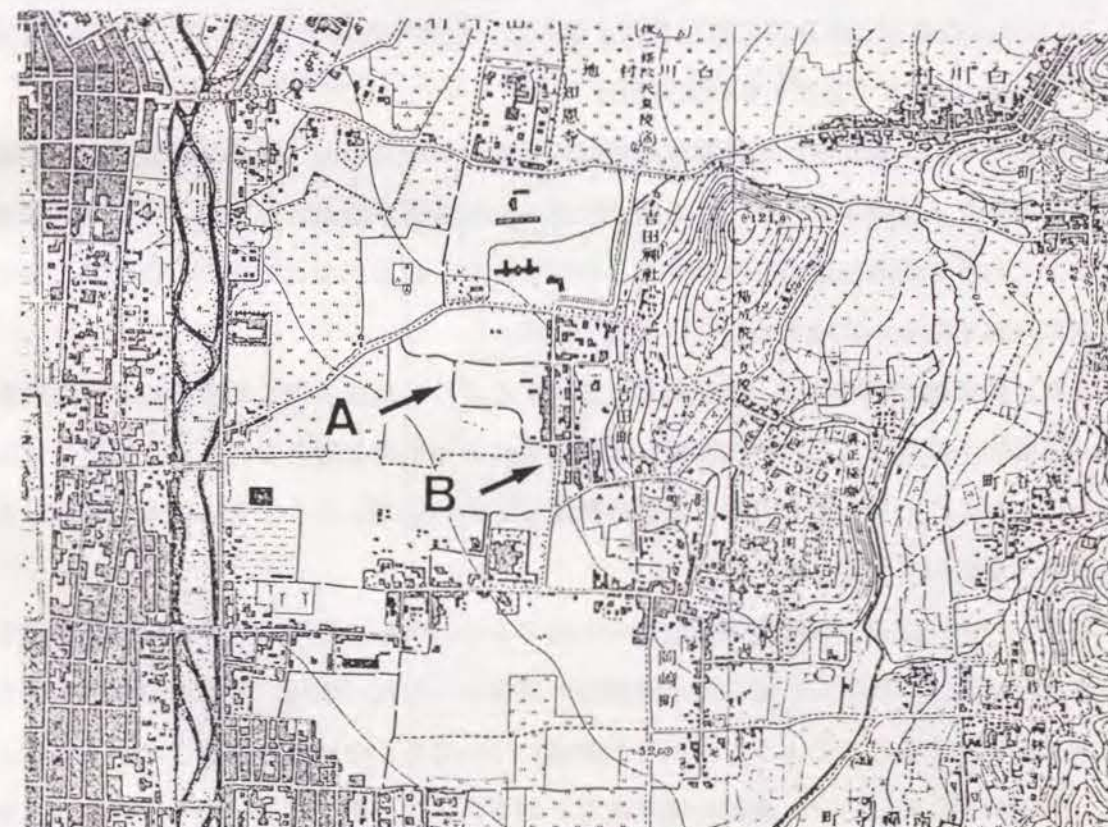


図2-5 『仮製2万分1地形図』(明治25年製)

地中レーダー探査の結果から推定される地盤状況も全般的には単調な様相を呈しているがこうした中で、以下のような特徴的な反射する部分のあることが判明された。

①局所的異常反射

局所的にやや強い反射が認められ、地中に何らかの反射体が存在することを伺わせる。異常反射の表れ型が孤立的であり、平行するほかの地中レーダー測線における探査結果との関連性は認められない。したがって、この反応は局所的な埋蔵物の存在を示す反応と思われる（図2-9の●印）。

②地盤の攪乱

地中レーダー記録では、反射の縞模様が比較的広い範囲にわたって不規則に乱れており、地層内の土質が不均一で攪乱されていることを示している。何らかの人為的造作がなされた痕跡を示しているものと考えられる（図2-9の斜線部分）。

③地盤の落込み

表層直下の地層反射面に船底状に落ち込む反射パターンが認められる。地盤が掘り窪められた跡に表層土が埋土として入り込んでいる可能性がある。このような反射パターンが平行する複数の測線で連続して検出される場合には、堀や溝などの遺構であることになるが、部分的に検出される場合は、土壌や規模のやや大きいピット状の遺構と考えられる（図2-9の梨地部分）。

以上のように、検出された異常反応地点の平面分布を見ると、異常反応地点は調査域の東側に集中する傾向がみられ、この区域に何らかの遺構が埋蔵されている可能性が指適される。これらの地点はその並びがやや不規則であり、礎石列などのような規則的な基礎構造物に対応するものとは考えにくい状況である。

ただ、調査域の西側には、ほぼ南北に連続するように地盤の攪乱がみられる。この反応は、直線的に連続することから溝跡などの遺構によるものと考えられる。この溝に対応するものとして、その位置や方位、遺構の種類などから前述した今朱雀の西側の側溝にあたる可能性が高い（図2-9）。

地中レーダー探査では時期の判別は不可能であり、おもに遺構の有無の確認に利用されてきたが、探査で検出した地中の不連続面の位置や、形状、規模、周囲の遺跡の状況などを詳細に検討することにより、検出した遺構について多くの知見を得ることができる。特に、発掘調査に先立って、遺跡の埋積状況を知ることが、調査の進め方を検討する上で大切なことであり、遺構の不必要な破壊を避けることもできる。遺物の表面採集や、文献や

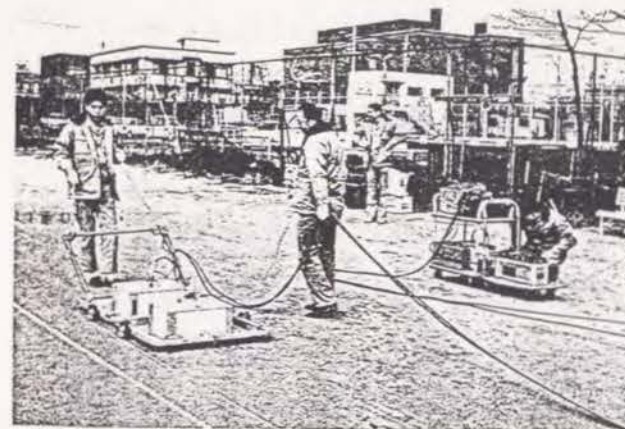


図2-6 地中レーダーによる探査

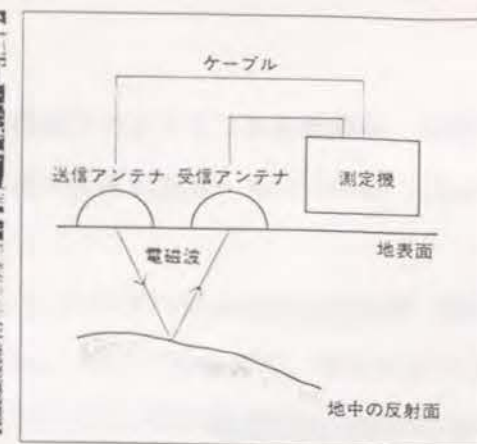


図2-7 地中レーダー探査の原理

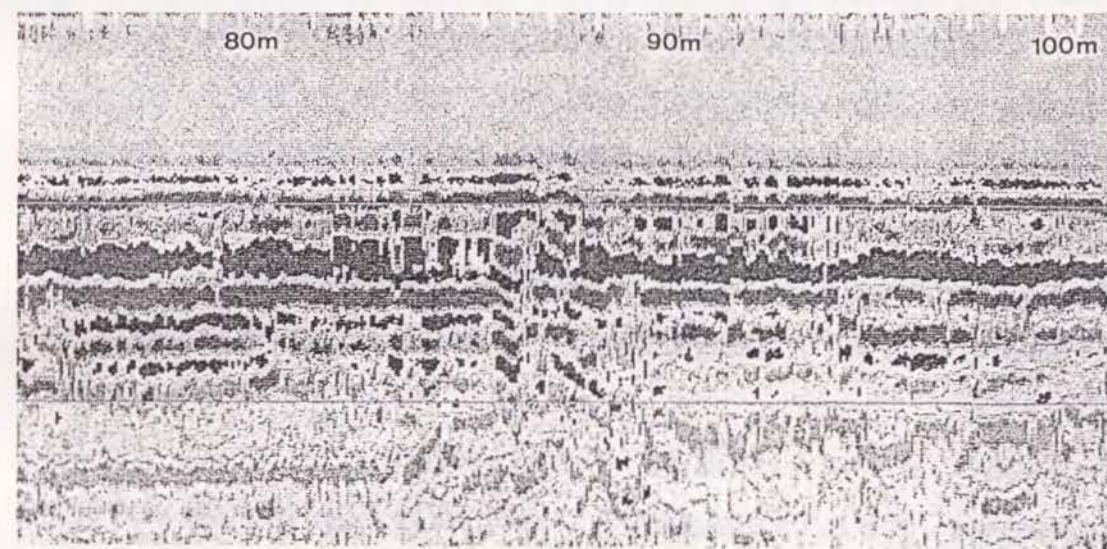


図2-8 教養部構内における地中レーダー探査記録

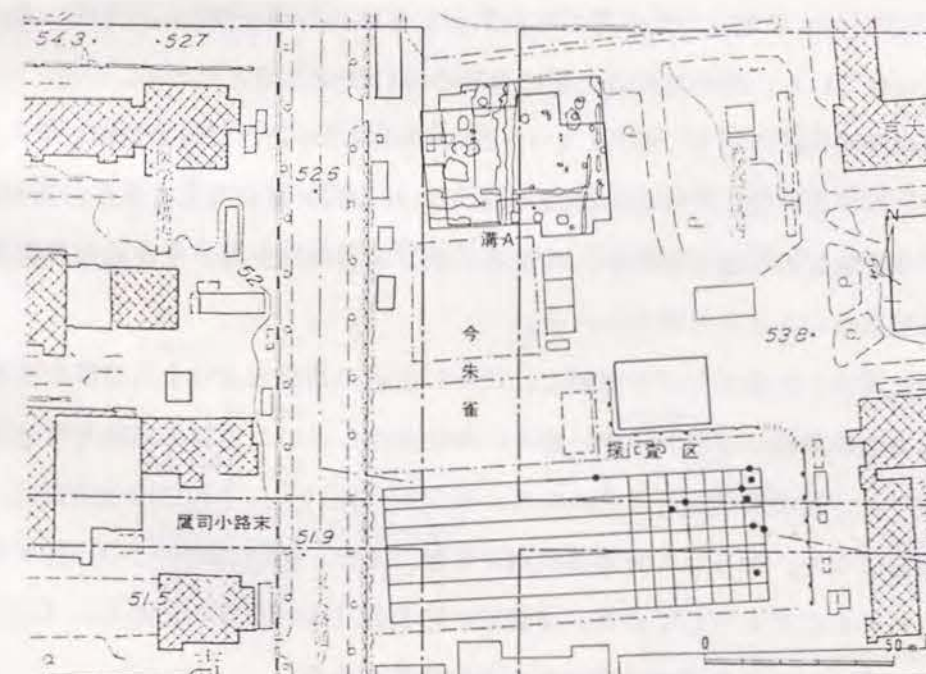


図2-9 調査地点と白河の条坊地割 縮尺1/2000

古図の検討、試掘調査などとともに、遺跡の時期や範囲、種類、埋積している深さなどを
知るために、地中レーダー探査は有効であった。

第3節 尊勝寺東大路について

1. 尊勝寺東大路の遺構

今朱雀より2町東の道路は、尊勝寺の東を限るが、仏所小路のような固有の名称は確認
していない。『中右記』の康和4(1102)年7月20日の条に、「御願寺西、北、東大路」と
あり、『山槐記』の応保元(1161)年7月7日の条には、「尊勝寺東大路南行」とある。こ
うした記述から、本稿では便宜的に、尊勝寺東大路の名称を用いる。ただし、尊勝寺東大
路の道路幅が、北端から南端まで、一貫して大路の幅であったかどうかは疑問である。平
安京内では大路は4町おきであり、また、今朱雀の遺構との距離関係からも、この位置に
大路があったとは考えがたい。尊勝寺の近辺だけ小路を拡張し、大路の幅員を確保してい
た可能性もある。

尊勝寺東大路の一部と考えられる遺構を、京都大学本部構内A T 27区の調査(図2-2-
H地点)で検出した。溝SD3と道路状遺構SF3がこれにあたる(図2-3-中)〔五十
川81〕。SD3は幅2.5m、深さ1.5m、断面V字形の溝で、発掘調査区内では真北からや
や東にふるが、北約110mの地点でこの溝の延長部分と思われる溝を検出しており、ほぼ真
南北の溝と考えられている。溝の廃絶は上層の遺物から13世紀と考えられる。

また、この溝の西約11mの所で、東西1.4~2.2m、南北8.6mにわたって路面と考えられ
る堅い面を検出した。この面上には幅0.2mの轍と思われる細い溝が南北に走る。この南北
の道が、方位、今朱雀との距離などから、今朱雀の東2本目の南北路、すなわち尊勝寺の
東を限る道の延長部分にあたると考えられる。

なお、H地点で検出した溝SD3の東側で、11~13世紀の遺物を含む土坑墓群を検出し
ている。これらの土坑墓はいずれも南北に長く、中に遺存していた木管の痕跡もほぼ同じ
方位を示しており、一連の遺構群と考えられている〔五十川81〕。これらの土坑墓は、溝
SD3より西側にはなく、溝SD3が墓域の西を限り、また、条坊地割のこの一画が墓地
として利用されていたことを示している。『権記』の長保3(1001)年の記事に、「吉田社
北三丁内有葬送之處」*2とある葬送之處にあたる可能性もある。

図2-2-H地点で検出した南北路と尊勝寺の東側の道の計算上の点を結ぶと、今朱雀

と同様に方位を真北から東に約0°30' 違った軸線を得る。

2. 踏襲された道路

ところが本部構内の南では、この線上に現在の道が約1kmにわたって続く。字境界線も
この道にともない、この道が古代末以来、近世から現代に至るまで、地域を区切る道であ
ったことを示している。この道は、元禄4(1692)年刊の『新撰増補京大繪圖』(図2-
11)や、寛保元(1741)年刊の『増補再板京大繪圖』(図2-4-B地点)をはじめ、近世
の古図によく描かれている道である。明治25年製の仮製2万分1地形図(図2-5-B地点)
にも記載されており、この道は古代末以来、現在まで連綿と存続していたことがわかる。
ただし、『増補再板京大繪圖』では聖護院宮を大きく描いたために、聖護院宮の東を、さ
らに南に下がる道が省略されている。

また、H地点でも道路SF3の上層でわずかに位置は異なるものの、近世の道路遺構S
F1を検出しており〔五十川81〕、今朱雀と同様に古代末から現代まで、道路として使用
されてきたと考えられている。

第4節 勘解由小路末と鷹司小路末

1. 勘解由小路末の遺構

京都大学病院構内A H 19区の調査(図2-2-E地点)で、東西に走る7本の溝を検出し
た(図2-3-下)〔浜崎ほか93〕。溝SD1が江戸後期の遺物を含むほかは、14世紀の遺物
を含む。なかでも溝SD9は、検出幅2.3m、検出面からの深さ1.6mを測り、13世紀ごろ

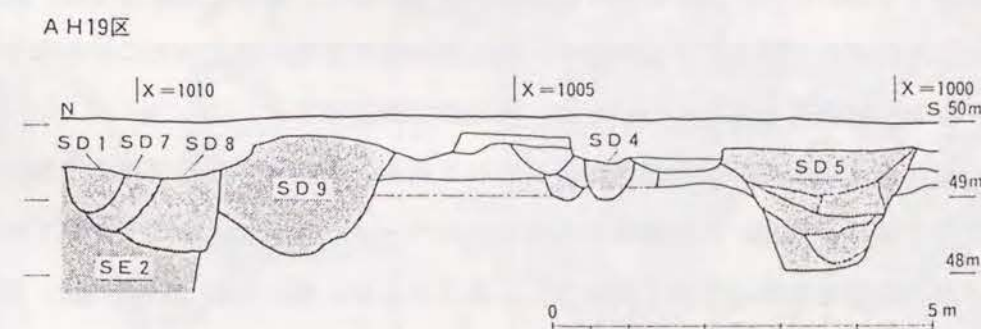


図2-10 勘解由小路末の遺構 縮尺1/100

の遺物を含む。溝SD5は、幅2.7m、検出面からの深さ1.6m、底幅1.1mの断面が逆台形を呈する丁寧なつくりの溝である。溝SD9よりもやや時代が下がる。

いずれにしても、溝が同じ位置に繰り返し、構築されていることや、この位置に旧吉田村と旧聖護院村の字境界が一致すること、この字境界が吉田山西麓から賀茂川までまっすぐに続いていることなどから、これらの溝は条坊地割の道路にもなっていたものと考えている。この道は『元禄京都 洛中洛外大絵図』^{*3}や『洛中洛外図 天明6年写』^{*4}（図2-12-A地点）にも描かれており、前述してきた道と同様に古代末以来の道が踏襲されていたものと考えられる。

2. 鷹司小路末の遺構

京都大学医学部構内で実施した発掘調査で、築地跡と考えられる土塁状遺構と、それと並行する溝を検出した（図1-3-41地点、図2-13）。検出した土塁状遺構SA1は、土塁の基礎部分と考えられている遺構で〔泉・吉野79〕、幅3m、残存高さ0.5m、検出長約40mを測る。方位をほぼ真北にとり、その北側に溝SD1が平行にはしる。溝SD1の幅は3m、検出面からの深さ0.5～0.8m、検出長は40m以上である。これらの遺構が鷹司小路末の南を限っていた可能性が高い。この土塁と溝は室町前期のものと報告されている。

この土塁状遺構と溝は、藤原北家勤修寺流吉田氏の邸宅に関連する遺構である可能性が高い。医学部構内から教養部構内北半の一带の地には、文献から、中世において、藤原北家勤修寺流吉田氏の所領や吉田神社の社領が存在していた。これらは、南北朝の動乱や応仁・文明の大乱を経て変転し、やがて吉田構を中心とする近世の景観の基盤が形成されてゆく〔浜崎83b〕。それらのうち、本調査区一帯に比定しうるものに、勤修寺流吉田氏の邸宅や園池がある。14世紀の中葉から後葉にかけて、遺構や遺物の出土量が減少する。これは、建武4（1337）年、氏の長者吉田定房が南朝に走り、吉野に移ったため、調査区一帯に存在した吉田氏の邸宅や浄蓮華院が、南北朝の動乱を機に衰亡したことを示すものであろう。なお、吉田氏の邸宅については、第5章で詳述する。

さらに、鷹司小路末の北側側溝と推定される溝が、京都大学教養部構内で検出されている（図2-2-I地点）。教養部D号館のエレベーター新営にともなう調査で検出した溝SD1がこれにあたる〔宇野・岡田79〕。溝SD1は、幅1.7m、底幅0.9m、深さ1.2mを測る、断面逆台形の溝である。埋土は上下2層に分かれ、下層からは平安末期、上層からは鎌倉前期の遺物が出土している。

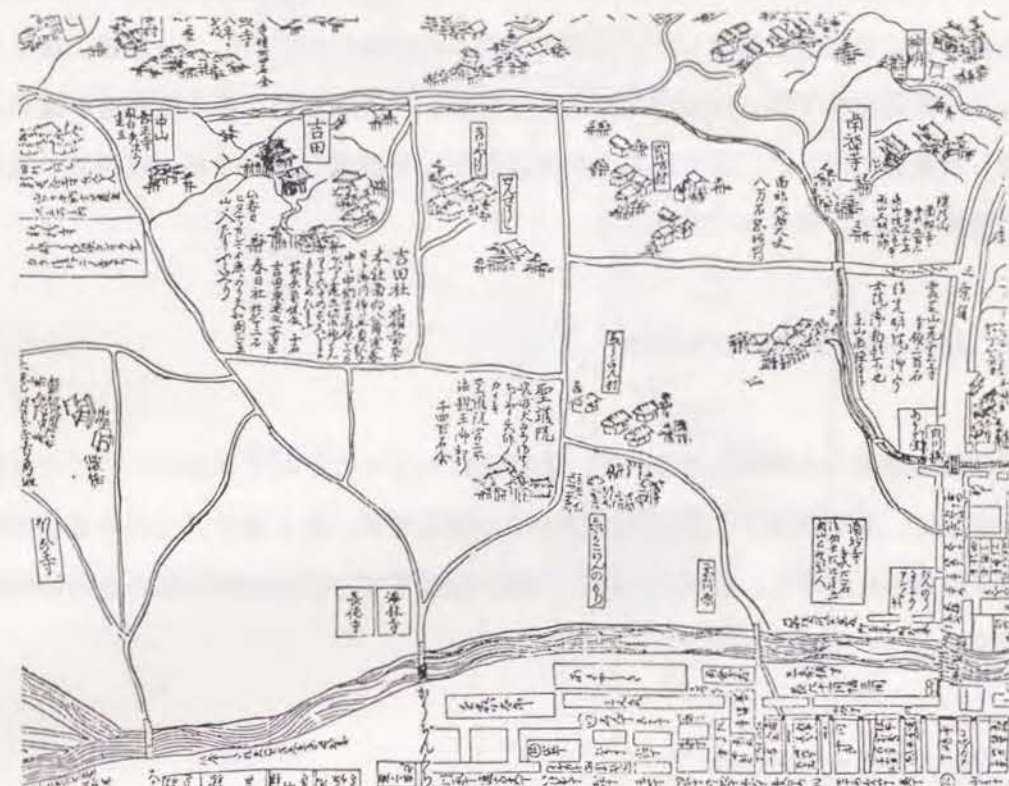


図2-11 『新撰増補京大絵圖』(元禄4(1692)年刊)



図2-12 洛中洛外絵図(京都大学付属図書館所蔵)

図2-2-B地点で実施した実験排水管の付け替えにともなう立会調査でも、東西方向の溝も約20mにわたって検出し、この溝がかなりの距離にわたって、一直線に続くことを確認した。正確な幅や深さは確認できなかったが、一連のものである可能性が高い。

上述した遺構のほか、二条大路末の南側側溝などを検出しているが、成勝寺の北を限る築地の側溝として、第3章で詳述する。

第5節 白河の条坊地割の空間特性

白河の条坊地割りの道路を知る上で、文献資料も欠くことができない。ここでは御幸の記事を中心に、条坊地割りの空間特性について考証する。第1項で、白河の条坊地割の道路に関する資料を列挙し、個別に検討し、第2項以下で白河の条坊地割の空間特性について考察する。

1. 文献に見る大路と小路

白河の条坊地割の東西路は、平安京内と同様に計画したものであれば、北から順に、一条大路末、正親町小路末、土御門大路末、鷹司小路末、近衛大路末、勘解由小路末、中御門大路末、春日小路末、大炊御門大路末、冷泉小路末、二条大路末、押小路末、三条坊門小路末となっていたと考えられる。文献では、土御門大路末、近衛末、勘解由小路末、中御門大路末、春日末、大炊御門大路末、冷泉小路末、二条大路末、押小路末といった名称を確認している。文献で確認できない一条大路末、正親町小路末、鷹司小路末は、いずれも条坊地割の北端に近い部分であり、条坊地割の中心部分であった六勝寺から遠いため、あまり記録にのぼらなかったものと考えられる。また、鴨東の南でも、綾小路末、八条坊門末といった呼称も用いられている。条坊地割の範囲が八条末までおよんでいたのか、ただ平安京内の延長でこのように呼んでいたのかは、検討を要する。

大路・小路の平安京外における延長部分を、大路・小路の名称の末尾に「末」をつけて、用いたのは11世紀ごろであろう。『左経記』の長元9(1036)年5月19日の条に、後一条天皇の葬送の記事があり、その経路として

自神解小路末斜渡河原、自神岡南路東行、自円成寺西路北行

とあり、白河の条坊地割施行以前にも京極あたりをこうよんでいたと考えられる。また、藤原道長の造営した法成寺は、平安京の東京極大路のさらに東、京外に造営したものであ

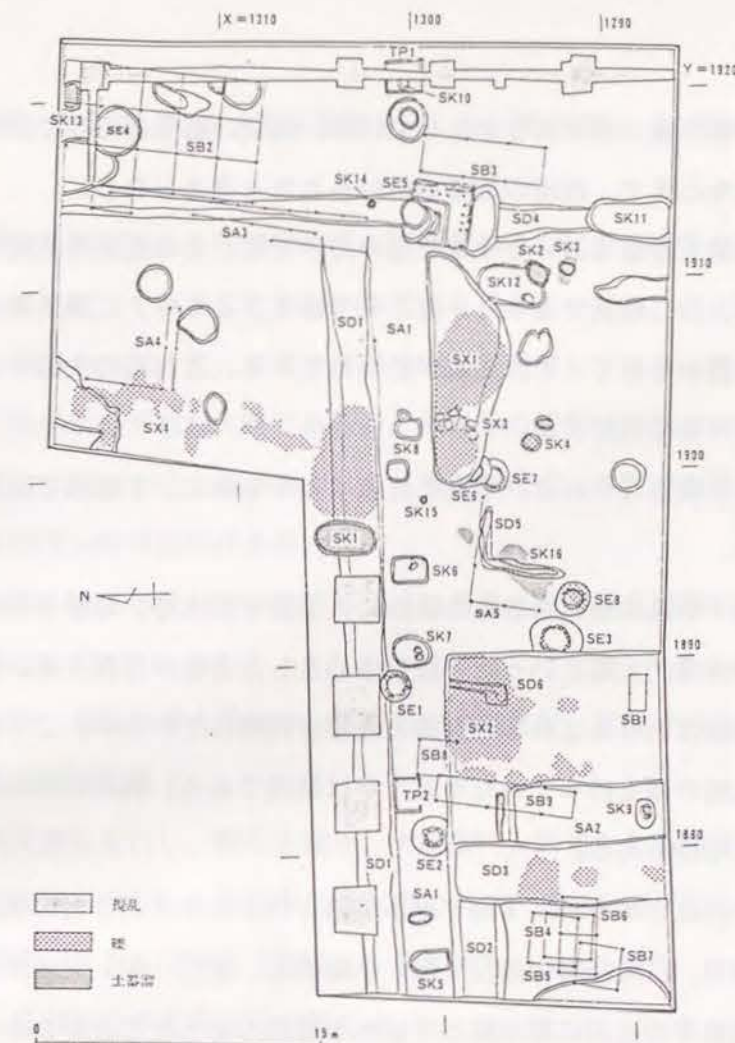


図2-13 鷹司小路末の遺構(1)

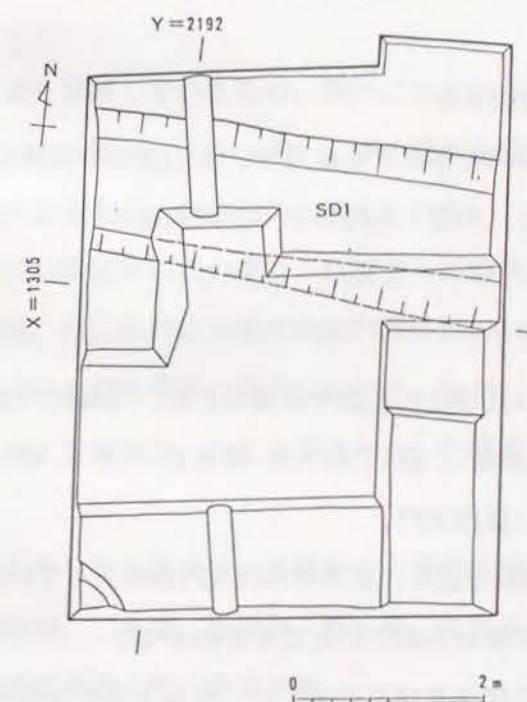


図2-14 鷹司小路末の遺構(2)

るが、その寺域を二条大路末より北としている。当初、京極あたりで用いられていた「末」の呼称が賀茂川をこえて、白河の地でも用いられたと考えられる。

ただし、大路末・小路末という呼称を用いていても、その幅員が大路・小路の幅員であったのか、京内と同じ幅員であったかは不明である。とくに、二条大路末については、京内と同じ17丈か否かをめぐって、意見が分かれている。これらの大路・小路の実際の寸法については、第7章で検討する。

南北路で名称の明確なものは、中央に位置する今朱雀と、1筋西に比定されている仏所小路だけである。

こうした大路・小路の固有の名称のほかに、法勝寺西大路、尊勝寺西・北・東大路、延勝寺朱雀、延勝寺南門大路といった寺院を中心とした名称が存在する。六勝寺の位置の検討から、条坊地割におけるこれらの大路の位置は判明しているが、こうした大路が条坊全域にわたって大路の幅を持っていたかどうかは疑問である。有力寺院の周辺だけ、道路を拡幅していた可能性もある。

なお、やや時代はさがるが、『師守記』貞治3(1364)年3月5日の条には、

今夜亥の刻、白河法勝寺辺口(葛)小路焼亡、在口(家)廿余間焼失とあり、白河法勝寺の近辺に葛小路と呼ばれる道路のあったことがわかる。新たに造営された道路の名称の可能性もあるが、法勝寺近辺の南北小路の名称の可能性もある。

2. 白河の条坊地割の空間分析

つぎに、上皇や天皇が白河を御幸する経路や、本山登山の経路などを年代順に列記し、大路・小路の記事を抽出し、大路・小路のもつ空間的意味について考察する。

(1) 御幸の経路について

まず、承暦元(1077)年12月18日の法勝寺供養のため、高陽院内裏を出発した天皇は、

大炊御門東折至東洞院、自二条大路東折渡河原、毎河瀬構橋、

国々勤之、天皇入御西大門

と、二条大路から鴨川の河原を渡り、法勝寺の西大門から入っている^{*5}(図2-15-①)。二条河原には瀬ごとに橋が架けられていたことがわかる。

『中右記』康和4(1102)年7月20日の条には、堀河天皇が法勝寺常行堂東御所に行幸したときの経路が記されている。

経大炊御門、東洞院、二条大路并御願寺西、北、東大路、從法勝寺西大門入御

とあり、二条大路末に面していた法勝寺の西大門にむかうのに、尊勝寺の西、北、東大路を経由し、わざわざ迂回していたことがわかる(図2-15-②)。

また、ここでは尊勝寺の西、北、東側の道路を大路と表現している。北は大炊御門大路末であり、西は今朱雀でいずれも大路であるが、尊勝寺の東側は小路のはずで、白河の条坊地割りの南北路は2町おきに大路があったとは考えられず、尊勝寺の東側の所だけ部分的に大路に拡張されていた可能性がある。

ついで、『山槐記』の応保元(1161)年7月7日の条に、白河天皇御国忌に際して、法勝寺御八講行幸の道筋を記して、

大炊御門東行、尊勝寺東大路南行、最勝寺北大路東行、法勝寺西大路南行、入御阿弥陀堂西南築垣下

とある。大炊御門大路を東行し、鴨川を渡り、大炊御門大路末から尊勝寺東大路を南行し、1町南の最勝寺北大路を東行し、法勝寺に西大路に出て、これを南下し、西大門よりさらに南の阿弥陀堂西南から入っている(図2-15-③)。

『明月記』建仁2(1202)年正月12日の条には、

三条東、延勝寺朱雀北、南大路東如例、法勝寺西大路(押小路東)北、入自西大門

とあり、延勝寺が今朱雀を分断していたため、例のごとく右折し、押小路末はまっすぐ通り抜け法勝寺に達している(図2-15-④)。押小路末を通過していることから、成勝寺や円勝寺派、南北幅が1町をこえないものと考えられる。

『明月記』元久元(1204)年正月12日の条に、法勝寺への御幸の経路について

京極南二条出川原、自三条白川ヲ更大炊御門末得長寿院西敷入御西大門如例

とあり、三条から北行すると得長寿院の西側にあたる。なお、二条から三条まで南下し、さらに大炊御門末まで北上しており、かなり遠回りをした行幸である(図2-15-⑤)。橋の都合であろうか。

同記建暦2(1212)年正月9日の条には、法勝寺への行幸の道筋を記して、

大炊御門東、洞院南、二条東、自河原入押小路、自得長寿院東、経尊勝最勝寺北、入御法勝寺西大門、毎事如例

とある。二条河原を斜行して押小路末に入り、得長寿院の東を経て、尊勝寺・最小寺の北

を迂回している（図2-15-⑥）。さらに、同記建暦2（1212）年10月4日の条には、岡崎殿への行幸の道筋を記して、

三條東行，延勝寺南門大路北行，件南門前東折，自成勝寺西出二條，尊勝寺南大門前東行，同寺東大路北行，自最勝寺北經法勝寺北とある。延勝寺南門大路を北行して，門前で左折することから，延勝寺の東西幅が2町はあり，南門大路が延勝寺で突き当たることがわかる（図2-15-⑦）。同記建暦3（1213）年4月26日の法勝寺修理供養への経路は

輦路二条，東，洞院，南，三條，東，金剛勝院西，北，押小路東，延勝寺西，北，大炊御門，東，法勝寺西大路，南，入御西大門とあり，法勝寺に行くのに京内では二条大路を西行し，三条まで下がって鴨川をわたり，再び大炊御門末まで北上し，さらに南下して法勝寺西大門に至っている（図2-15-⑧）。

（2）二条大路末東行憚るべし
行幸がなぜこのような複雑な経路をとるのであろうか。前述の『明月記』建暦2（1212）年10月4日の条の行幸経路を評して，藤原定家は

抑此輩路至_二尊勝寺南門前_一，東折之際，猶以似_レ可_レ憚_二歟，定有_レ例歟，未_レ知_二可否_一と二条大路を東行することに批判的である。また，同じ『明月記』の建保元（1213）年4月25日に，七条院が三条殿から法勝寺へ御幸される条に，

予前行騎馬，經三條東洞院大炊御門尊勝寺東，南行之間，殿上人等過冷泉赴二條，乍不審相隨之間，前陣二條東行，予進寄問云，此路所被仰下歟，知家云，本所承冷泉東也，今如此，不得其意，予云，二條東古來被憚路也，今所被仰又冷泉云々，然者何因被用路乎，急可被還御，即馳歸之間，聞兩納言等相問，應答此由，各競歸，尤不甘心，御車未御之間也，即冷泉東西大門大路南行，入阿彌陀堂南門，如御八講御幸とある。この一行は尊勝寺の東側を南行し，法勝寺に向かうが，このとき椿事が起こった。尊勝寺の東側で冷泉小路末を東行し，法勝寺の西側を南行すべき所を，殿上人たちが二条大路末を目指して，冷泉小路末を通り過ぎてしまったのである。あわてた定家は前に進み，「二條東古來被憚路也」と，二条大路末を東に直行して法勝寺に臨御されることは，憚るべきこととされていると説明し，一行は引き返している。『中右記』康和4（1102）年7月

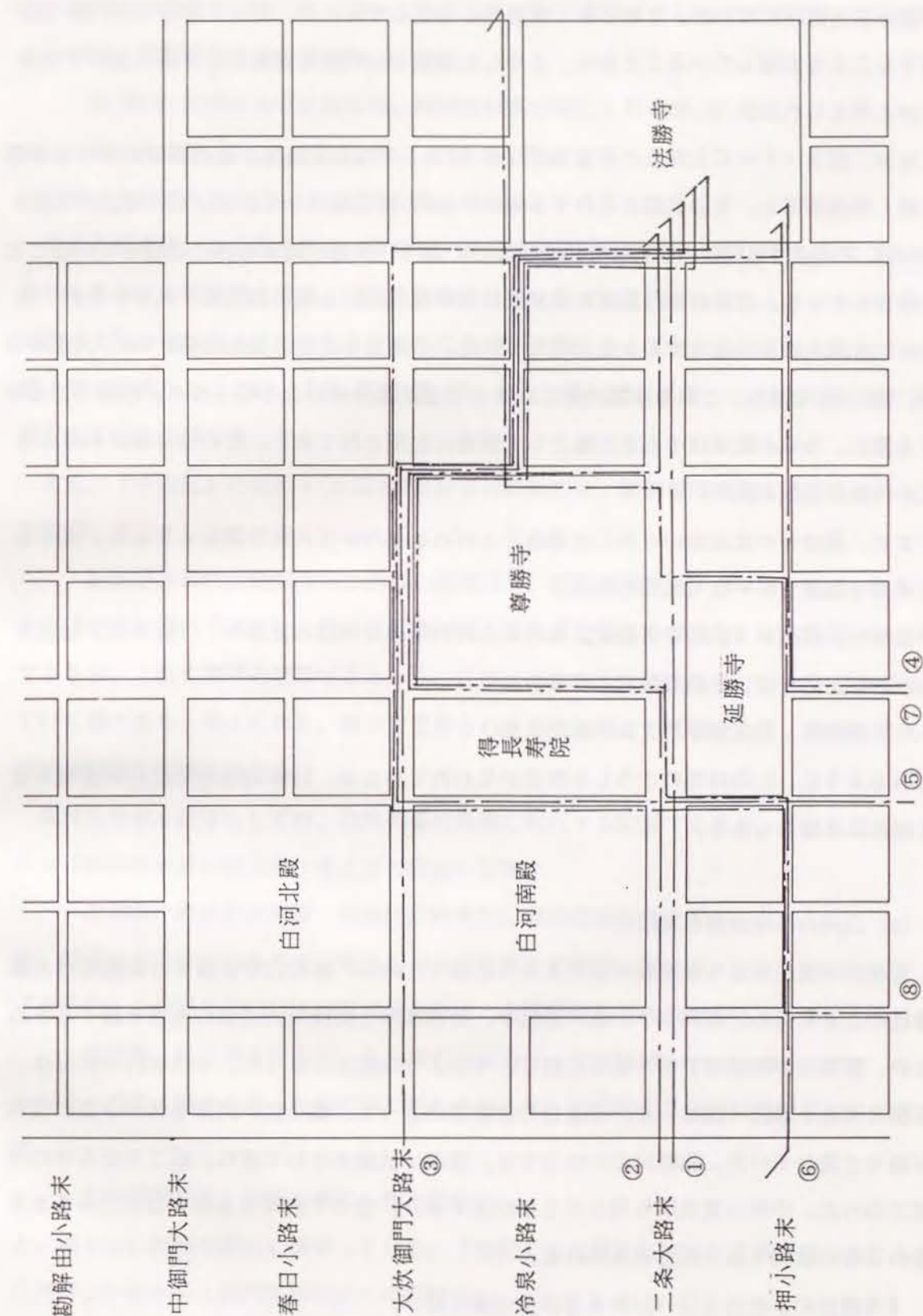


図2-15 白河の条坊地割における御幸の経路

20日に、堀河天皇は法勝寺常行堂東御所に行幸した際の経路は、尊勝寺の西、北、東大路を經由し、東行している。このとき、最勝寺は落成しておらず、また、尊勝寺の門前を東行することを非難していることから、こうした御願寺の門前を通ることを憚ったのではないかと考えられる。

なお、図3-3-C1地点の発掘調査〔梶川77b〕で冷泉小路末の延長部分にあたる東西に続く築地塀跡と、その北側に平行する幅約2.6mの溝を検出している。C1地点の東約30mのC2地点でも同様の築地跡と溝を検出しており、築地と溝が東西に連続していることを確認している。この結果、現在の冷泉通は岡崎通(車道)を境に南北にずれているが、本来は一直線の冷泉小路末であったと考えている。C地点の遺構は築地の幅2.4m、犬走り3m、溝2.6mを測り、これを小路の幅に収めると道路部分がかなり狭くなる。法勝寺に御幸する際に、冷泉小路末はその迂回路として頻繁に使用されており、この道の幅が小路より広がった可能性が高い。

また、最勝寺の比定地の一角には鶴塚とよばれる墓所が近代まで遺存しており、こうした遺構を忌避していた可能性もある。

ただし、前述の『法勝寺供養記』承暦元(1077)年12月18日の記事や、『勘仲記』弘安2(1279)年正月9日、法勝寺修正会御幸の条に、

至河原、於法勝寺自二条末西門入御

とあるように、この時期にこうした禁忌が失われていたか、行幸の経路の記述が説明不足と思われる場合もある。

(3) 白河の条坊地割と賀茂川

賀茂川が現在のような景観を呈するようになったのは、昭和11年に始まった賀茂川大改修後のことである。昭和9年の室戸台風や、昭和10年の賀茂川大洪水の被害を繰り返さぬため、賀茂川の川底を下げ、幅を拡幅し、今のような状況となった。それ以前の状況は、仮製2万分1地図(図2-5)や近世の古絵図のように、幅の広い河原を2~3条の流れが細々と流れていた。高野川にいたっては、普段は伏流水として流れ、石ころだらけの河原であった。中世の賀茂川も同じような状況であり、徒歩で渡河する限りはどこもあまり変わらない状況であったと考えられる。

『本朝世紀』康治元(1142)年8月25日の条には、

近日、依_レ院仰_レ被_レ掘_レ鴨河_一。大炊御門末以南。諸国吏各進_レ役夫_一。

是白河御願寺等為_レ防_レ水害_一也。

と、白河の寺院群を賀茂川の氾濫から守るため、大炊御門末より南の賀茂川の掘削を進めているが、同記9月2日の条には、

從_レ昨日_一大雨。去曉以後大風。河辺民戸多以流亡。日来所_レ被_レ堀_レ之

鴨川淵變為_レ瀬了。徒費_レ役夫_一。已無_レ所_レ成。

と、1ヶ月も立たないうちに、無為に帰している。

牛車や輿を用いる上皇や天皇の御幸は、渡河地点が制約されていたようである。賀茂川をわたるのは大炊御門大路末、二条大路末、三条大路末と大路末を渡ることが多い。渡河施設が大路の末に限られていたと考えられるが、東西の中心道路である二条大路末でさえ、第1節で前述したように、「毎_レ河瀬_一構_レ橋」と、二条河原には瀬ごとに橋が瀬ごとに橋が渡されている状態であった。

また、『中右記』の康和4(1102)年6月3日の条には、新御願所を見て回った白河上皇が還御しようとしたところ、

抑御堂及河原浮橋間俄河水泛溢、浮橋流了、前駟渡西岸了、御車猶在東岸

と、橋が急な増水で流され、御幸の行列が西と東に分かれてしまった。どこの橋かは不明であるが、上皇の御幸の経路であるから、二条大路末か大炊御門末などの大路末と架かっていた橋であると考えられる。御幸に使用される重要な橋でも浮橋であり、当時の賀茂の河原の状況を彷彿とさせる。

賀茂川を渡る記事としては、白河の条坊地割に先行する記録であるが、『左経記』の長元9(1036)年5月19日の後一条天皇の葬送の記事に

自神解小路末斜渡河原、自神岡南路東行、自円成寺西路北行

と、勘解由小路末のあたりで、賀茂川の河原を斜めに横切っている。

『兵範記』の仁平2(1152)年11月15日の条に、金剛勝院御所への御幸路として、

経河原、自二条末更南折、自三条坊門末東行、令参院給金剛勝院御所

とあり、二条大路末を渡った後で南に折れているが、同記保元3(1158)年1月10日の条では

大炊御門東行、河原を巽に、押小路末に

と、明らかに河原を斜めに横切っている。『吉記』の元暦2(1185)年正月1日の条にある白河押小路殿から上西門院御所にへの経路は、

出東門、西行御所北大路、至于河原、自二条西行、至于京極

と、押小路を西行し、いったん河原に出て、賀茂川沿いに北上し、二条大路末を通過して京極大路に達している。

『明月記』の承元2(1207)年7月19日には、

大炊御門東、高倉南、二条東、河原自押小路末、自金剛勝院西、入御西四脚

同記同年11月29日の最勝四天王院への御幸は

路二条高倉、大炊御門河原押小路、自金剛勝院西三条、留御與新御堂西門

同記建暦2(1212)年正月9日には、

二条東、自河原入押小路

と、二条大路や大炊御門大路から南の押小路末にむかっている。賀茂の河原を斜めに横切ったのか、横切った後で賀茂川沿いに南下したのかは不明である。

なお、『兵範記』仁安*年には冷泉小路末において大嘗会御禊地が設けられている。

いずれにしても、賀茂の河原は平安京と白河の間のバッファ・ゾーンとして、大嘗祭の禊ぎをおこなったり、漁労や採集をおこなったり、死体や不要なものを遺棄したりする場所であった。そこを横切る道も、京内や白河の地割のように規則的なものではなく、河原を縦横無尽に走っていたものと考えられる。渡河地点としては、二条大路末や大炊御門末が多いが、押小路末をめがけて斜行する道が明確に存在していたようである。

第6節 小 結

以上、白河の条坊地割の骨格をなす道路について考察し、以下の点が明らかになった。

①発掘調査で検出した条坊地割の側溝と考えられる遺構の位置は、南北道路・今朱雀を中心とし、東西に各々4町ずつの坊があり、平安京内と同様に4町おきに南北の大路があったとする福山敏男氏の説〔福山43〕に大きな齟齬をきたさない。

東西方向の大路・小路は平安京内の道路と対応し、北は一条大路末から、南は少なくとも三条大路末までは方格の条坊地割が施されていた。なお、八条大路末などが文献にみられるが、条坊地割が八条まで施工されていたかどうかは不明である。

②南北の中心道路である今朱雀と、その2町東の尊勝寺東大路の遺構を確認した。東西方向では、勘解由小路と鷹司小路の遺構を確認した。こうした道路遺構が部分的には、近世から現代まで踏襲されていることも明らかになった。

③行幸などの文献記事から、白河の条坊地割を東行するときには、大炊御門大路末、二

条大路末、押小路末が頻繁に利用されていたことや、二条大路末は尊勝寺から最勝寺の門前に禁忌があり、二条大路の東行は憚られていたこと、このため、最勝寺北側の冷泉小路末の使用頻度が高かったことなどを明らかにした。南行、北行はおもに仏所小路、今朱雀、尊勝寺東大路、法勝寺西大路が利用されていた。

④平安京と白河の往来にさいし、鴨川の渡河は主として大炊御門河原、二条河原、三条河原でおこなわれていたが、これらの大路末でも渡河施設は瀬ごとに橋が渡されていた程度で、増水時には往来が不可能となっていた。また、渡河も二条大路から押小路末へと斜行したりしていることから、幅の広い河原に道らしい道もない状態であったと考えられる。

*1 福山敏男氏は暦応5(1342)年の火事の記事より、仏所小路を今朱雀の1町西の小路に比定している〔福山43〕。

*2 『権記』長保3(1001)年6月20日の条

*3 慶應義塾大学図書館蔵(白石克編『元禄京都 洛中洛外大絵図』1987年所収)

*4 京都大学付属図書館所蔵中井家文書。前述の『元禄京都 洛中洛外大絵図』と図柄や縮尺がほぼ同じ。

*5 『法勝寺供養記』

*6 『勘仲記』弘安二年正月九日、法勝寺修正会御幸の条

*7 『保元物語』

第3章 六勝寺の寺域について

- 3-1 はじめに法勝寺ありき
- 3-2 尊勝寺の寺域の設定
- 3-3 最勝寺の寺域について
- 3-4 円勝寺の寺域について
- 3-5 成勝寺の寺域について
- 3-6 延勝寺の寺域について
- 3-7 小 結

第3章 六勝寺の寺域について

文献を中心とした六勝寺の研究は、福山敏男、杉山信三両氏の先駆的な研究により、ほぼ究められたといっても過言ではない。本章では、こうした成果をふまえながら、近年の都市考古学の成果をもとに考察を進めたい。

六勝寺を中心とした白河一帯の発掘調査は、六勝寺研究会、京都市埋蔵文化財センター、奈良国立文化財研究所、(財)京都市埋蔵文化財研究所、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターなどの調査組織により実施され、大きな成果が上がっている。

ここでは、まず、白河の条坊地割復原の基礎となる白河御堂と御所などの遺構と文献について検討し、その伽藍構成よりも、寺域や範囲に重きをおいて考察する。

第1節 はじめに法勝寺ありき

1. 花の名所の白河院

法勝寺の敷地は、もともと藤原家累代の別業であった。この別業は白河院と呼ばれ、白川の流れの近くにあった。源順の詩序「秋日遊_二白河院_一同賦_二秋花逐_レ露開_一」^{*1}には、

南望則有_二関路之長_一。行人征馬。駱_二驛於翠簾之下_一。東顧亦有_二林塘之妙_一。

紫鴛白鷗。迢_二遙於朱檻之前_一。豈直秋草養_二花於故園之露_一。寒松流_二響於

幽洞之風_一而已哉。

とあり、関が近く、人馬の往来が望めるところであったことがわかる。白河院が三条大路末に近く、南に逢坂の関に至る道が目当たりにできるところにあったことになり、法勝寺の比定地、すなわち白河院の比定地と矛盾しない。

同じ源順の天録3(972)年の詩序「後二月遊_二白河院_一同賦_二花影泛_二春池_一応_レ教」^{*2}に

夫年不_二必有_二関_一。関不_二必在_二春_一。今年関在_二二月_一。豈非_二花鳥得_二時之春_一哉。

然猶都人士女之論_二花者_一。多以_二白河院_一為_二第一_一。

とあり、白河院が花の名所の第一として都人士女に親しまれていた。このとき、白河院は藤原済時の邸宅であり、同詩序で

左武衛藤相公。善彈_二箏能_二翫_二筆_一。誠花月之主也。

とあり、済時は「誠に花月の主なり」と高く評されている。

『左経記』の万寿5(1028)年3月20日には、藤原道長から累代の別業・白河院(殿)を譲られた頼道が、

余(藤原経頼)白河院に参る。^(以下、新注)「関白殿(藤原頼通)伝領せしめ給うの後、

今日始めて御覧の為、坐し御う所なり。仍て追て参入するなり。

と、伝領後初めて白河院を訪れている。

康平3(1060)年3月25日、この別業白河殿に上東門院藤原彰子が御幸したときには、第1章第1節で前述したように、寝殿、北の対、渡殿、釣殿、池、遣り水などを備えた寝殿造の別業であった*³。『康平記』の同年11月26日の条には、

林池旁妙。其樹碧巖之勢幽奇。風流之美、冠絶天下-

とあり、この別業の景観がきわめて風流な佇まいであったことがわかる。

2. 法勝寺の建立

延久6(1074)年、関白藤原頼通の死後、その子の左大臣師実がこの別業を白河天皇に献上した。この地に白河天皇が造営したのが法勝寺である。承保2(1075)年に着工し、承保4年には供養がおこなわれている。供養当初の伽藍構成は、金堂、講堂、阿弥陀堂、五大堂、法華堂、鐘楼、経蔵などからなり、後に八角九重塔・薬師堂(永保3(1083)年)、常行堂(応徳2(1085)年)、北斗曼荼羅堂(天仁2(1109)年)などが加わった。建立の経緯を順を追って、見てみたい。

前述のように、花の名所であり、風流の美ならびなき白河院が寄進され、法勝寺の造営が始まったのは、承保2(1075)年のことであった。『百練抄』の承保2(1075)年6月13日の条には、

被_レ始_二白河院御願事_一。件所故宇治前大相国累代之別業也、左大臣伝領

被_レ献_二公家_一

とあり、白河院御願の法勝寺の造営が始められたことや、法勝寺の敷地がもともと故宇治大相国(藤原頼通)累代の別業であったものを、左大臣(藤原師実)が白河天皇に献上したことがわかる。

『水左記』の承保2(1075)年7月11日の条には、法勝寺の木作り始めがおこなわれたことが記されている。同記の承保4(1077)年12月18日の条には、

都に片雲もなし。今日、法勝寺供養なり。辰の刻許に彼寺に行幸あり。

(中略)今日の次第儀式を具に供養式に見る。件の式は皇后宮権大夫(源)経信卿の作なり。額は左大弁(藤原)伊房卿が之を書き、呪額は式部大輔(藤原)実綱朝臣が之を作り、願文は右大弁(藤原)実政朝臣が作ると云々。

此日、行事等の賞あり。(中略)

また、寺司并に供僧等が補さると云々。

検校 仁和寺宮、別当 大僧正、 権別当 山座主当尋、上座 政経、金堂 供僧 広算・隆明・増誉・齐覚・尋源。

講堂 朝範円豪、五大堂 念円頼昭。

阿弥陀堂 貞心公伊、法華堂 三味僧六人、山二人、三井寺二人、東寺二人、事了りて亥の終に主上還宮すと云々。

と、法勝寺の落慶供養の様子を伝える。

また、『栄花物語』にも*⁴、

白河殿とて宇治殿の年頃領ぜさせ給し所に、故女院(上東門院)もおはしまし、が、天狗ありなどいひし所を、御堂建てさせ給。この二年ばかり受領ども当りて、金堂は播磨守(高階)為家ぞ造りける。御堂も仏もなべてならず大きにおはします。(中略)曇なき庭に、紅葉、菊の花、黄なる光も赤き光も添ひたらんと見えて、所がら匂を増し、御堂のけ高うものものしきが、新しう赤く塗り立てられたるに、青やかに見え渡されたる御堂の餅など、極楽にたがふ所なげなり。

と、寂寥たる別業の地に、極楽と見まがうような絢爛たる壮大な規模の寺院が建立されたことや、竣工に2年を要したことや、金堂は藤原高階の成功によるものであったこと、落慶供養の華やかな様子などを伝えている。

供養当初の伽藍構成は、金堂、講堂、阿弥陀堂、五大堂、法華堂、鐘楼、経蔵などがあつた。次いで、『水左記』永保元(1081)年10月27日の条に、

此の日、法勝寺御塔心柱を立てらる。辰時と云々。上春宮大夫(藤原実季)、人々参入すと云々。

と、永保元年には塔の心柱が建てられ、『扶桑略記』の永保3(1083)年10月1日の条には、

法勝寺の九重塔并に薬師堂・八角堂を供養す。請僧百六十口。行幸あり。

と、2年後には薬師堂・八角堂とともに供養がおこなわれている。法勝寺の八角九重塔の

高さは、承元2(1140)年に再建されたものでさえ、27丈^{*5}という異常に高いものであった。

永保3(1083)年の八角九重塔・薬師堂に続いて、応徳2(1085)年には常行堂，天仁2(109)年には北斗曼荼羅堂などが加わり，伽藍はほぼ完成を見る。

3. 法勝寺の遺構

法勝寺は六勝寺の中でも最上格の寺院として位置づけられ，白河天皇が上皇から法皇と生涯を通じて，造寺，造仏を続けた所であった。この法勝寺の伽藍配置の詳細については，諸先学の研究〔福山57，清水擴92〕や，発掘調査により，多くの成果が上げられている。

これらの成果によると，法勝寺の寺域は，西，北，南を築地塀で，東を土塁で囲まれ，西に西大門，南に南大門などの諸門が開かれていた^{*6}。また，法勝寺の西大門は二条大路末の突き当たりに開き，金堂の南底は二条大路の北辺の延長線上に当たり，阿弥陀堂の基壇の南端が押小路末の北辺の延長線上にあたることから，指摘されている〔福山43〕。

本論の目的は，伽藍配置の詳細な復原ではなく，白河の条坊地割の復原にある。このため，寺域の復原に関連する事項に，重きをおいて論究したい。

(1) 法勝寺の発掘調査

法勝寺に関する最初の学術的な報告書は，西田直次郎の「法勝寺遺址」(『京都府史蹟勝地調査会報告第六冊』1925年)である〔西田25〕。文献史料から，法勝寺の沿革を明らかにし，地籍図から八角九重塔の位置を比定し，採集した瓦や土製円塔から考古学的検討

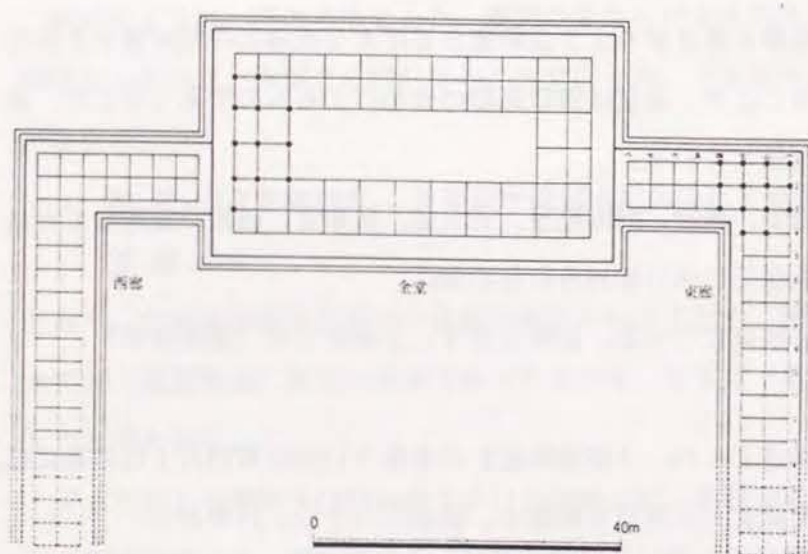


図3-1 法勝寺金堂の遺構(〔辻・上村87〕所収)

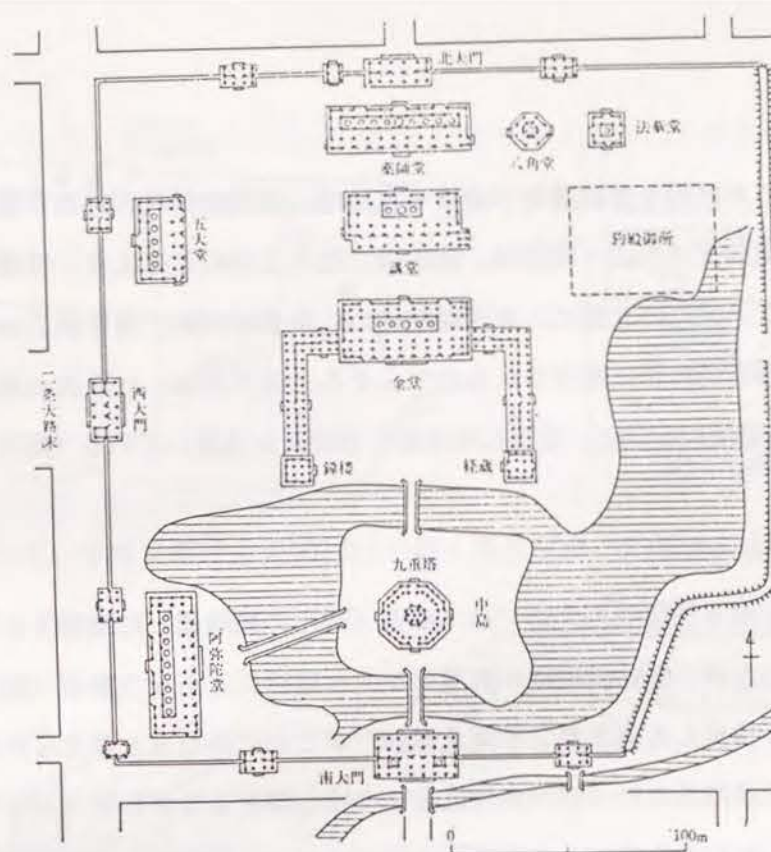


図3-2 法勝寺伽藍復原図
(〔福山57〕所収)

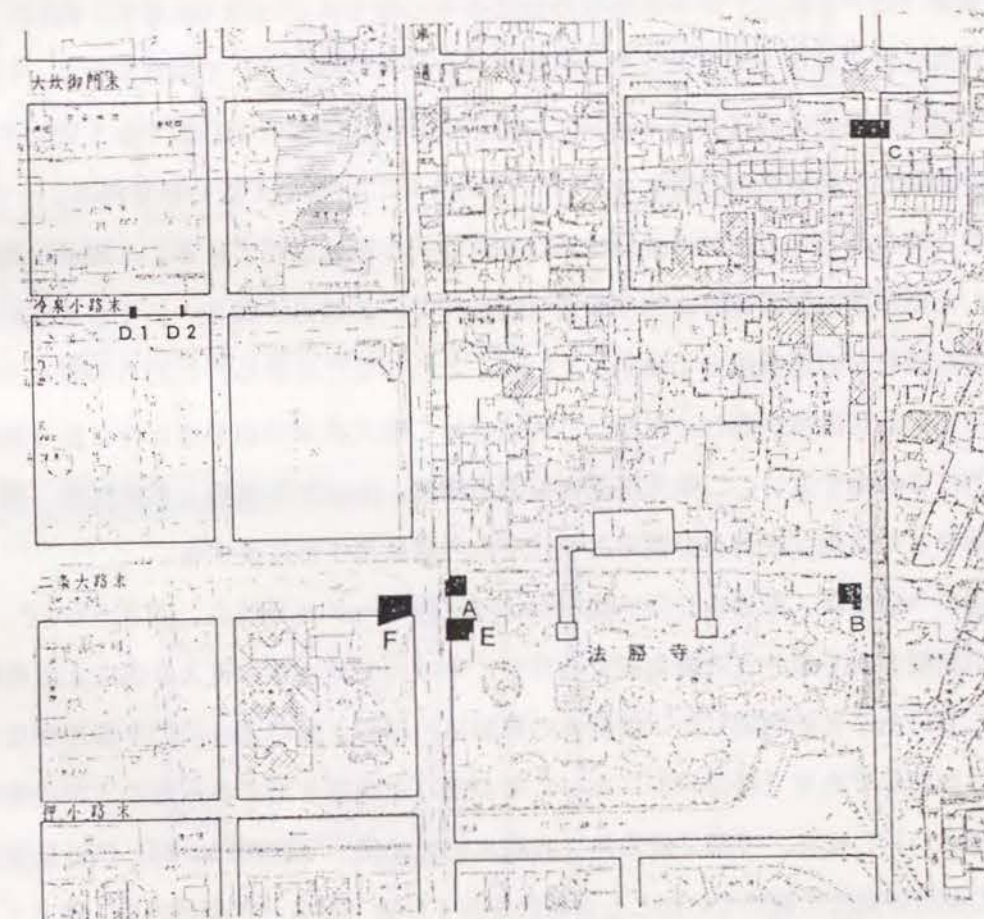


図3-3 法勝寺の寺域の推定図 縮尺1/5000

を加えている。

法勝寺の遺構に関する本格的な発掘調査が始まったのは、昭和40年代の終わり頃である。金堂とその回廊は、発掘調査〔杉山・梶川75、梶川76、辻・上村87〕により、ほぼ明らかにされている。現在の二条通りの北側に、東西幅約60m、南北約24m、高さ約2mの台状の地形がある。金堂の基壇が台状に遺存したもので、その上面で実施した数次の調査により、七間四面瓦葺で重層裳階付金堂と、金堂に取り付く東西廊を復原している(図3-1)。

(2) 法勝寺の四至について

法勝寺の寺域の西辺を限る法勝寺西大路*7は、車道(現在の岡崎通)に踏襲されている可能性が高いとされていたが、動物園医療・救護センター建設にともなう調査(図3-3-A地点、図3-5)で検出した南北溝2や南北溝46*8がこれにあたると考えられる。これらの溝は国土座標第VI座標系のY=-19376m付近をその中心線としながら切りあっており、改修された痕跡を残す。この中心線は、金堂西端の調査〔杉山・梶川75〕と、東回廊屈曲部の調査〔辻・上村87〕から算出した金堂の中心線Y=-19250.6mまで、約125.2mを測る。この距離を第7章第4節で後述する造営尺(1尺=0.3034m)で換算すると、41.27丈となる。法勝寺の西側の道は大路であり*9、溝の中心から築地の中心までを1丈とすると、金堂の中心線から築地の中心線まで、40.27丈と1町にきわめて近い値を得る。

また、南北溝2および46の埋没時期は室町時代と報告されている。A地点の約20m南で実施した動物園図書館建設に伴う調査(図3-3-E地点、図3-)でも、室町時代の遺物を含む溝をこの延長線上で検出している。こうしたことから、これらの溝が法勝寺の西を限っていた可能性が高い。ただし、A地点は二条大路末の突き当たりにあった法勝寺の西大門にきわめて近い。二条大路末の位置や幅員、西大門の規模と存続期間、南北溝の存続期間などの詳細な検討が必要であり、その考察は第7章にゆずる。

東辺については、車道より東へ約270mの所(図3-3-B地点、図3-6)で、池の東の汀線が発掘されており〔六勝寺研究会75〕、寺域の東西幅は2町より広く、この地点までおよんでいたことが判明した。法勝寺の東面は、他の3面のように門や築垣がなく、土手を築いただけであり〔福山43〕、さらにその東は道か空地であったことが指摘されている〔福山75〕。また、「塔ノ段及池ノ内町水田低地図」〔西田25p.28〕には低湿地の中に、帯状の高地が南北に続いていたことが報告されている(図3-3梨地部分、図3-4(右))。この部分が法勝寺の東を限る堤と小路にあたると考えられる。図3-3-C地点における

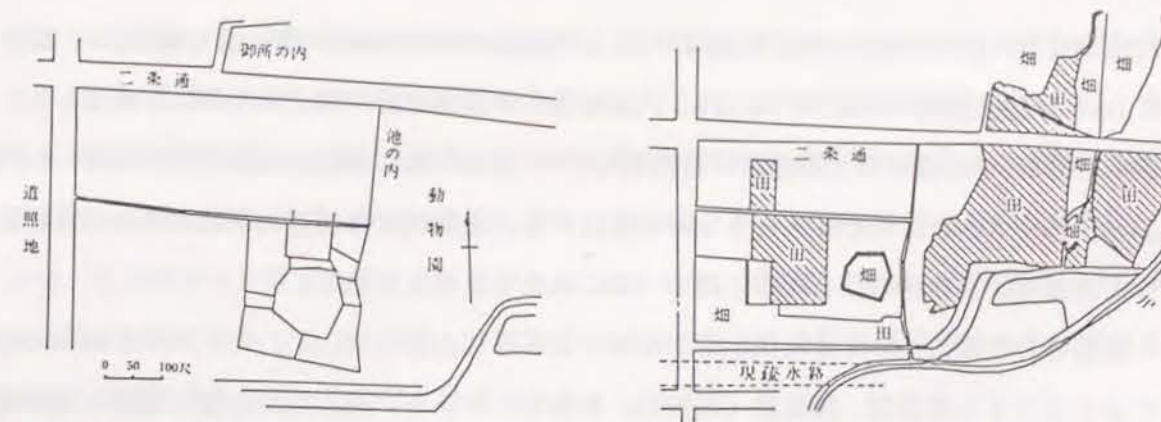


図3-4 字塔ノ壇付近の図(左)と塔ノ壇及び池ノ内町水田低地図(右)(〔福山75〕所収)

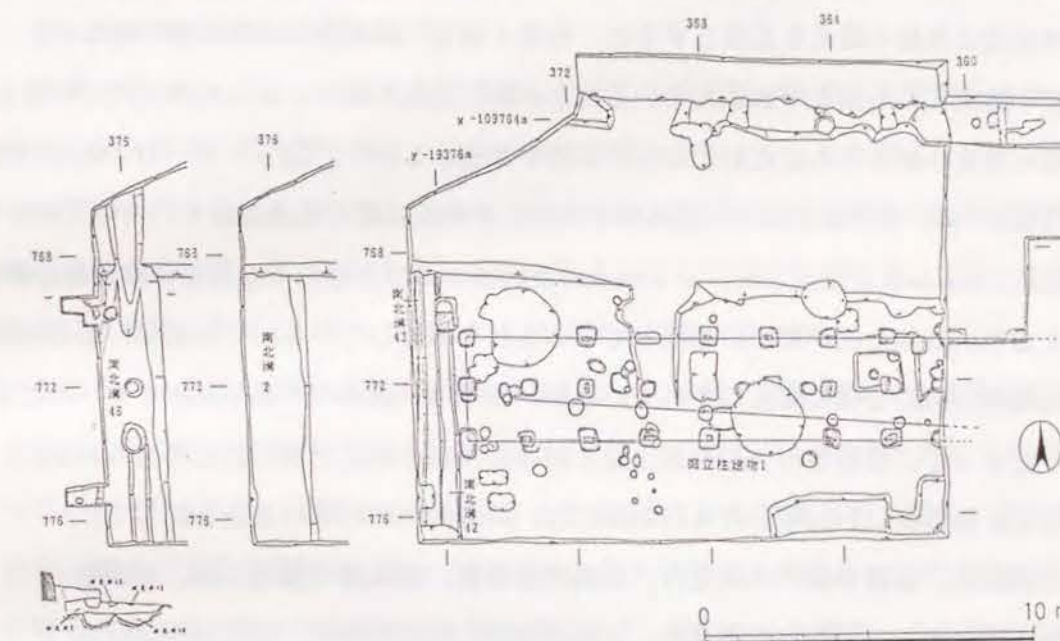


図3-5 A地点の遺構(室町時代~江戸時代)*12

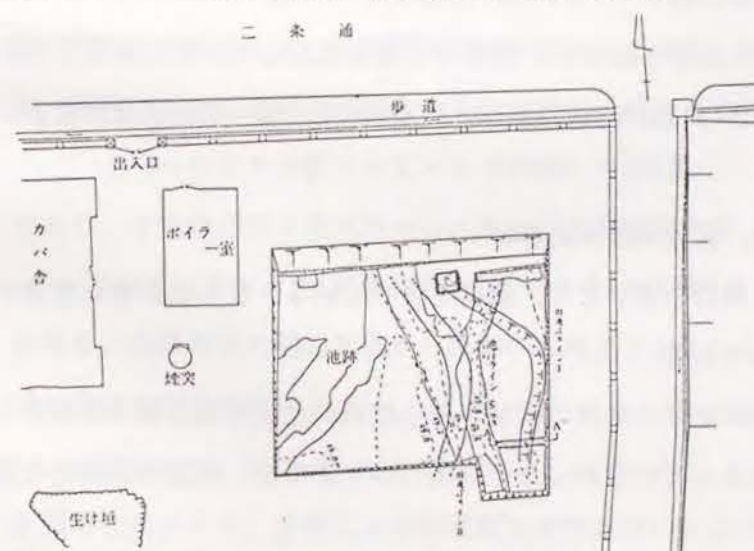


図3-6 B地点の遺構(〔六勝寺研究会75〕所収)

発掘調査^{*11}はこの小路の存在を裏付けた。12世紀後半の遺物を大量に含む幅2.2m、深さ0.7m、断面逆台形の南北溝S D 123と、鎌倉時代の遺物を含む南北溝S D 85を検出した。溝S D 123の中心線は国土座標第Ⅵ座標系のY=-19090.5m、溝S D 85はY=-19081.5mを測り、心々で約9mの距離をとりながら並行する。位置的には前述の帯状の高地の延長部分にあたり、法勝寺の東を限る小路の一部にあたると考えられる。

法勝寺の北限については冷泉小路末を限りとする福山説〔福山43〕と、冷泉小路末の北におよぶとする西田説、林屋説〔西田25、林屋60〕がある。福山説は金堂・講堂・薬師堂を適当な間隔をもって配置すれば冷泉小路末を北限とすることができるとする。これに対して、林屋説は冷泉小路末を北限とすると、金堂・講堂・薬師堂の間隔が狭くなるのと、南限が押小路末よりも南までおよんでいることから、二条大路末に面した西大門を中央とし、北限も冷泉小路よりも北におよぶとする説である。しかし、図3-3-D1地点の発掘調査〔梶川77b〕で冷泉小路末の延長部分にあたる東西に続く築地堀跡と、その北側に平行する幅約2.6mの溝を検出した。D1地点の東約30mのD2地点でも同様の築地跡と溝を検出しており、築地と溝が東西に連続していることを確認している。この結果、現在の冷泉通は岡崎通(車道)を境に南北にずれているが、本来は一直線の冷泉小路末であったと思われる。したがって、法勝寺の北辺も福山説と同様に冷泉小路末であったと考えられる。

『明月記』建暦2(1212)年10月4日の条には、岡崎殿への行幸の道筋を記して、

三條東行、延勝寺南門大路北行、件南門前東折、自成勝寺西出二條、尊勝寺南大門前東行、同寺東大路北行、自最勝寺北、経法勝寺北、自五大堂東辻北折、経卿二品堂北、入竜華口殿

とある。最勝寺の北側、すなわち冷泉小路末が、法勝寺北側に連続していたことをうかがわせる記述である。なお、大治3(1128)年10月22日の「白河法皇八幡一切経供養願文」

^{*12}には、

寺之北、則排五宇之精舎、安大小数体之尊容

とあり、法勝寺の北の堂舎を5棟立ち退かせて、御堂を建てている。立ち退かせた堂舎が、法勝寺の寺域の外か内かは不明である。

法勝寺の南辺については、阿弥陀堂の基壇の南端が押小路末の北辺の延長線上にあたることから、南北方向も2町に納まっていなかったのは明らかであるが、南辺の具体的な位置は不明である。

以上の復原結果をみると、法勝寺の東西幅は約277mと、2町+小路の幅84丈(約255m)

を大きく逸脱している。南辺も押小路末よりも南にはみでており、白河の条坊地割が施行される前に法勝寺の寺域が確定されていたものと考えられる。これは前述したように、藤原家累代の別業白河院の敷地を踏襲したためと考えられる。法勝寺の釣殿は、白河天皇の御座所となったところで、寺域の東部にあり、藤原家の別業から引き継いだ古い建物で、かつ、東の堤から10数丈の所にあった^{*13}。このことは、法勝寺の寺域は藤原家累代の別業の施設や範囲を継承したことを示し、法勝寺の東辺の位置が条坊地割の規格からはずれるのは、条坊地割より先に法勝寺が計画されたことを示す。

4. 法勝寺西大路と白河の外京

前節で述べたように、白河の条坊地割に先行して白河院があり、白河院を改修した法勝寺が二条大路末に西大門を構え、白河の条坊地割の中核となったと考えていた。二条大路末は平安京内から延長されたとしても、法勝寺西大路(車道)や、冷泉小路末が法勝寺の寺域に合わせて設定され、白河の条坊地割の起点になった可能性が高く、大路・小路の末が洛中に比して、ずれていることがこれを裏付けると考えていた。

ところが、近年の調査で精密な測量をおこなった結果、平安京の二条大路北辺と東京極大路外辺の交点の座標が、X=-109728.15m、Y=-20999.98mであったことが明らかになっている〔杉山92〕。法勝寺の西を限ると考えられている南北溝46(図3-3-A地点)の中心線上の1点の座標は、X=-109768m、Y=-19376mであり、この2点の座標から、平安京の東京極大路から法勝寺西大路の東辺まで、約1624mを測る。この数字は条坊地割りのほぼ3坊にあたる。白河の条坊地割は、賀茂川より東を2坊、すなわち8町とし、法勝寺西大路の幅を8丈、各町間の路は小路として4丈、中央である今朱雀を大路として8丈、賀茂川沿いの京極の道路も8丈とすると(図2-1)、

$$1 \text{ 坊} = 40 \text{ 丈} \times 4 \text{ 町} + 4 \text{ 丈} \times 3 \text{ (小路)} = 172 \text{ 丈}$$

であり、平安京の東京極大路から法勝寺西大路東端まで

$172 \text{ 丈} \times 3 + 8 \text{ 丈 (法勝寺西大路)} + 8 \text{ 丈 (今朱雀)} + 8 \text{ 丈 (鴨川沿いの大路)} = 540 \text{ 丈}$ を得る。法勝寺西大路の側溝から築地中心線までを1丈とすると、第7章で後述する造営尺とほとんど差のない

$$1624 \text{ m} \div 5390 \text{ 尺} = 0.3013 \text{ m}$$

を得ることができ、全体に大きな齟齬をきたさない。このことは法勝寺の西大路が、白河の条坊地割の最初の段階から計画的につくられ、平安京の東京極大路からちょうど3坊離

れたところに法勝寺の敷地の東辺が定められたことを示唆している。

しかし、杉山氏のいうようにこの条墓地割が平安京の当初から、外京として造営されていたという説には、平安前・中期の遺構や遺物が希なことなどから、疑問がある。

第2節 尊勝寺の寺域の設定

1. 尊勝寺の造営

尊勝寺は堀河天皇御願の御堂として、法勝寺に次いで建立された。造立供養は康和4(1102)年におこなわれ、金堂、講堂、回廊、中門、経楼、鐘楼、2基の五重塔、薬師堂、観音堂、五大堂、曼荼羅堂、灌頂堂などがあった(図-7)*¹⁴。長治2(1105)年には、阿弥陀堂、准提堂、法華堂が供養されている。以下に順を追ってみる。

尊勝寺の造営は、康和3(1101)年には始められており、8月13日には金堂の上棟式がおこなわれ*¹⁵、10月13日には東西の五重塔の心柱立てらるている*¹⁶。造立供養は翌康和4年に執り行われている。『中右記』の康和4年7月21日の条には、

今日、白河新御願寺尊勝寺と号す。供養会なり。払暁、女房陪膳に依て馳せ向い膳を供御す。(中略) 金堂 但馬作、講堂 同、中門 同、鐘楼 同、経蔵 同、薬師堂 伊予、観音 同、五大堂 同、灌頂 越後、曼陀羅堂 若狭、東西塔・南大門 播万(磨)、已上今日皆以て供養す。

とあり、造立当初の伽藍構成と、諸堂の建立を担った人々がわかる。

諸堂の建立に遅れること3年にして、阿弥陀堂の造立供養がおこなわれた。堀河天皇の御願として、金堂の西に備中高階為家が重任の功に募って建てたものである。長治2(1105)年12月に供養された阿弥陀堂には、丈六阿弥陀像九体、観音・勢至・地藏・竜樹像各一体、四天王像を安置されていた。この阿弥陀堂について、『江都督納言願文集』巻一に「三十三間四面瓦葺堂」とある。福山敏男氏は、九躰阿弥陀堂が三十三間の桁行きをもつのは異例で、後の得長寿院のような千体仏の御堂と間違えて記したものかと、疑問を投げかけている。

ところが、1977~1980年にかけて実施した数次の調査で、南北に長い、梁行6間、桁行15間以上の建物を検出した(図3-7-11)。建物の北端は検出したが、南端は発掘区外に続き、何間あるかは、現在のところ不明である。清水擴氏は、西塔との位置関係から、三十三間堂は納まらないとしている[清水85]。『江都督納言願文集』にあるように、尊

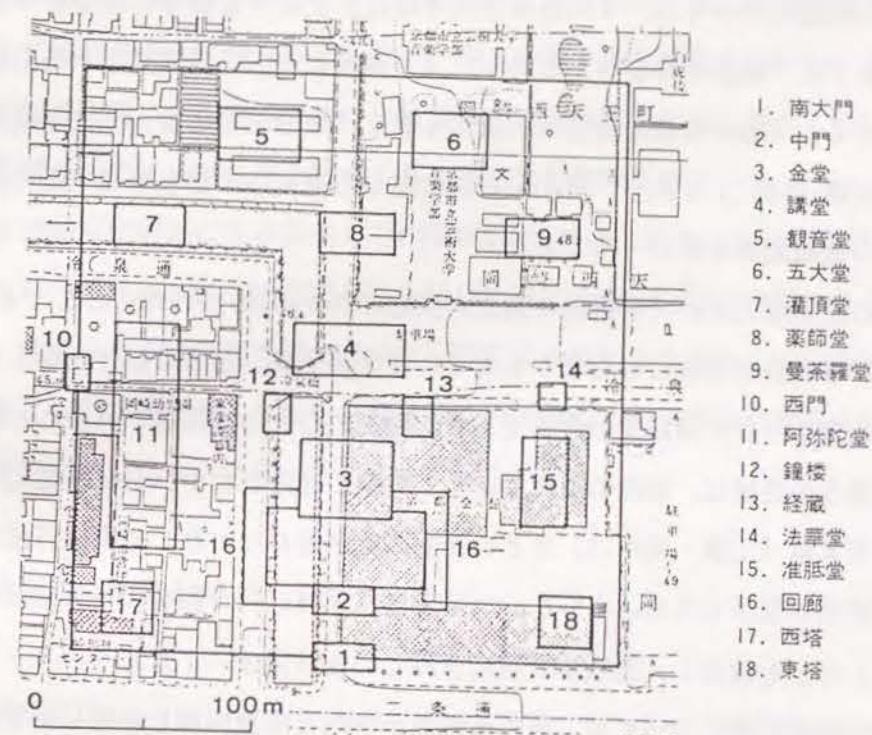


図3-7 尊勝寺伽藍復原図(〔梶川87〕所収)

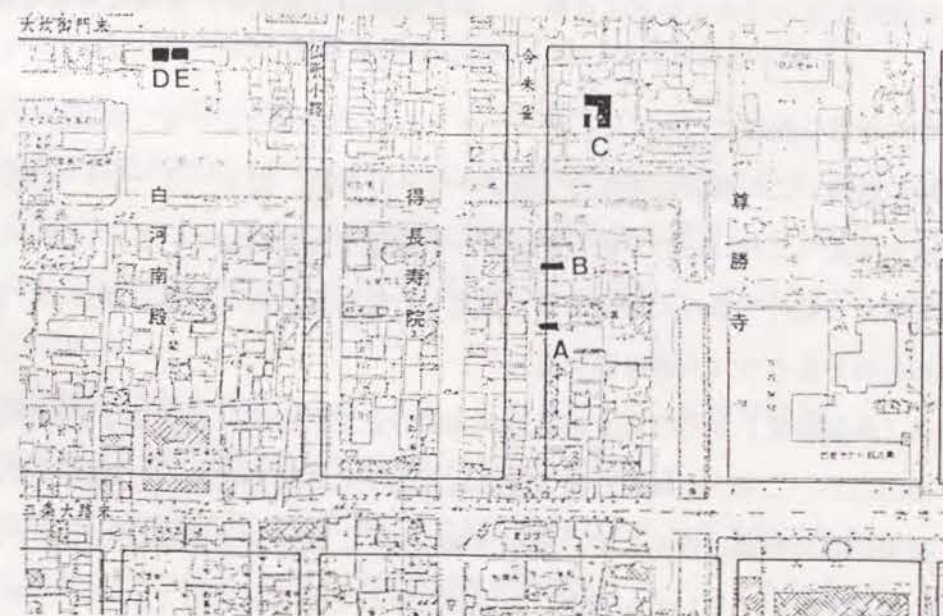


図3-8 尊勝寺の寺域の推定図 縮尺1/4000

勝寺阿弥陀堂が得長寿院や蓮華王院と同じ三十三間堂であったか否かは、今後の調査を待ちたい。

2. 尊勝寺の遺構

尊勝寺の位置については、『阿婆縛抄諸寺略記』上に「最勝寺者在尊勝寺東」とあり、『拾芥抄』下に「最勝寺尊勝寺」とあり、『*囊抄』十二に「最勝寺ハ鳥羽院御願、尊勝寺東」とある。『朝野群載』巻第11の康和4年7月21日の条には、「洛陽城東、法勝寺西、占吉土而建伽藍」とあり、現在の京都会館から東側の市営駐車場一帯に比定されている。現在の岡崎最勝寺町の一帯である。

尊勝寺の比定地において本格的な調査が実施されたのは、1959年のことであった〔杉山・岡田61〕。京都会館建設にともなうもので、建物跡や溝、瓦溜めなどを検出した。後に溝は中門と金堂をつなぐ東回廊の側溝であり、建物のひとつは東塔であることが判明した。当初の尊勝寺の寺域は、現在の復原案より1町東に比定されていたが〔福山43、杉山・岡田61〕、五大堂〔工楽・藤村73〕などの発掘調査が進むにつれ、杉山信三氏から1町西によせた復原案が呈示された。さらに、阿弥陀堂〔上村81〕、観音堂〔竹原ほか87〕、西塔〔梶川87〕などを検出し、復原案が呈示されている（図3-7）。

尊勝寺の伽藍配置については、他の五勝寺が中門と南面回廊を省略した平安朝風の配置であるのに対して、奈良朝寺院の伽藍配置を踏襲していることが指摘されている〔足立41〕。ここでは伽藍配置の詳細な検討は省略し、条坊地割の復原ため、寺域を対象を絞って検討したい。

尊勝寺の寺域の西辺については、図3-8-A地点で検出した溝と築地跡と思われるマウンド状の遺構がこの西辺にあたる（図2-2-G地点、図2-3-下）〔梶川77a〕。この側溝はA地点の北約40mのB地点で実施した調査でも検出している。1975年に、六勝寺研究会が疏水と並行する冷泉通の北側で検出した築地跡と考えられる遺構も、尊勝寺の西辺を限るものであろう〔六勝寺研究会76〕。

南辺は「承保勘文」から二条大路北辺が法勝寺金堂の南底にあたることが指摘されているが〔福山43〕、二条大路末が二条大路の延長線上にあるかどうかは確証がない。また、二条大路末の南の側溝は検出しているが〔梶川92〕、北を限る遺構は検出していない。二条大路の幅員についても17丈か否か、意見の分かれているところであり、二条大路末の北辺すなわち尊勝寺の南辺の位置は不明である。

尊勝寺の北辺については、図3-8-C地点で検出した幅約3.5m、深さ1.3~1.4mの断面逆台形の溝^{*17}が、尊勝寺の北を限る可能性がある。しかし、この溝の南と北に同様の地業を施していることや、この位置に大炊御門大路を想定すると図3-8-D地点^{*18}と図8-E地点〔上村83〕で検出した基壇をもつ平安後期の建物が、大路の中央に建てられていたことになり、北辺と推定するには難がある。D、E2地点では、平安後期の建物跡の下層でほとんど時期差のない東西の溝1条と、南北の溝2条を検出している。この東西の溝が大炊御門末の南限にあたり、南北の2条の溝は南北の小路にともなうもので、白河南殿の造営・拡張のために、廃されたものである可能性も指摘されている。

尊勝寺の西辺から法勝寺の西の築地までの距離が約534mを測り、4町の街区がちょうど納まることから、尊勝寺の東辺は西辺から2町(80丈)と小路(4丈)の位置にあると考えられる。なお、尊勝寺とその落慶法要の16年後に竣工する最勝寺を含めた4町の街区が、ちょうど法勝寺との間に納まることから、尊勝寺の計画段階で条坊地割が意識され、将来の寺院などの造営に備えたものであったと考えられる。

第3節 最勝寺の寺域について

1. 最勝寺の造営

鳥羽天皇の御願である最勝寺の造立供養があったのは、永久6(1118)年のことである。『中右記』永久6(1118)年2月21日の条には、

此次有内新御願木作始、是尊勝寺東辺地也、塔一基先日造立供養了、

上皇從法勝寺還御次御覽

とあり、木作りははじめがあったものの、すでに1基の塔が完成していたことや、最勝寺が尊勝寺の東辺にあったことがわかる。白河上皇が法勝寺より還御のついでに、立ち寄っている。寺全体の供養がおこなわれたのは、元永元(1118)年12月17日のことで、『帝王編年記』には、

御願最勝寺 六勝寺の其の一つ。供養。行幸あり。額は法性寺殿下

(藤原忠通)時に内大臣正二位。阿弥陀堂扉は定信。

とある。なぜ、1基の塔の供養だけが、半年近く先行したのかは不明である。

最勝寺の位置については、前述の『阿婆縛抄諸寺略記』上や、『拾芥抄』下、『*囊抄』十二などから、尊勝寺の東に位置していたことは間違いない。現在の京都会館から東側の

市営駐車場一帯に比定されていた。現在の岡崎最勝寺町の一帯である。第2章で前述したように、『山槐記』の応保元(1161)年7月7日の条に、白河天皇の御国忌に際して、法勝寺御八講行幸の道筋を記して、

大炊御門東行、尊勝寺東大路南行、最勝寺北大路東行、法勝寺西大路南行、
入御阿弥陀堂西南築垣下

とあり、西から尊勝寺、最勝寺、法勝寺と並んでいたことや、最勝寺の北辺の道路は尊勝寺の北辺の道路より南に位置していたことがわかる。さらに、『明月記』建暦2(1212)年10月4日の条には、岡崎殿への行幸の道筋を記して、

三條東行、延勝寺南門大路北行、件南門前東折、自成勝寺西出二條、尊勝寺
南大門前東行、同寺東大路北行、自最勝寺北經法勝寺北

とあり、最勝寺の北辺と法勝寺の北辺が連続していたと考えられる。これらの古記録から、法勝寺の西、尊勝寺の東にあたる一角であったことがわかる。

2. 最勝寺の遺構

平成3年に実施した岡崎グラウンドの発掘調査では、東西方向の築地跡をグラウンドの南辺部で検出している〔杉山92〕。築地の地業跡は、礫をつき固めたものと、瓦片を敷き詰めたものの2列があり、西端の重なり合いから礫を含む築地跡が古いと判断されている。瓦は平安中期以前のものが含まれ、瓦片を敷き詰めた築地跡が最勝寺の南辺の築地と考えられている。

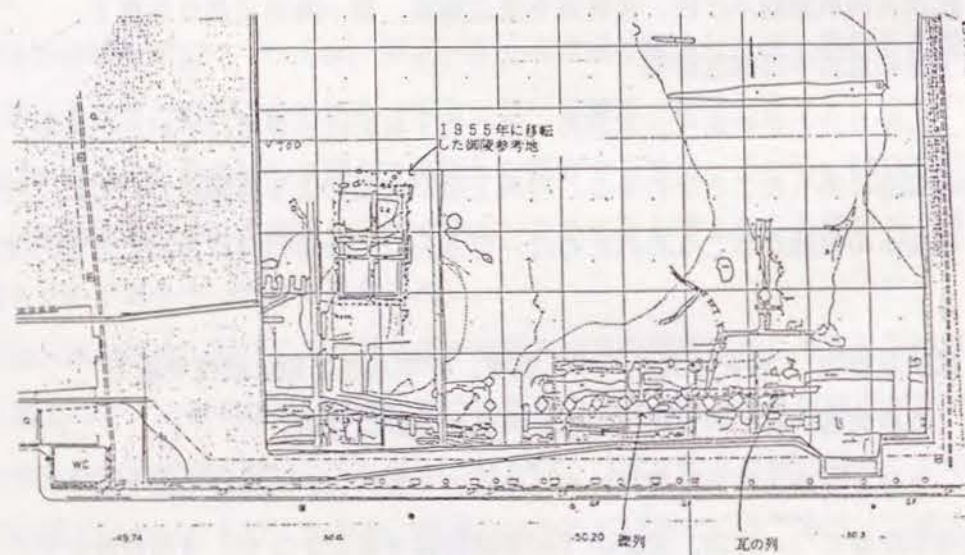


図3-9 最勝寺比定地の遺構 (〔杉山92〕所収)

また、この発掘区の東端で、法勝寺西大路の西側側溝を検出しているが、現地説明会の資料であり、正式な報告書の刊行が待たれる。

第4節 円勝寺の寺域について

1. 円勝寺の造営

円勝寺は鳥羽天皇の中宮、待賢門院(鳥羽天皇中宮藤原璋子)の御願の御堂で、創建は大治元(1126)年のことである。『永昌記』大治元(1126)年3月7日の条には、

今日、白河に御光あるべし。(中略)已の刻出御、新院御同車例の如し。

御後の供養同前、同刻、新御願御塔所に入御す。

とあり、鳥羽上皇が円勝寺の三重塔の供養した様子がわかる。ついで、『中右記』の大治2(1127)年3月19日の条には、

未明從鳥羽歸、辰刻着東帶參白河新造御塔所、今日依有供養也、本三基御塔、

東中御塔供養先畢、西御塔伊予守(藤原)基隆朝臣所作也、今日被供養也

とあり、未明に鳥羽から帰り、辰の刻に東帶を着け白河新造御塔所に参り、供養をおこなっている。円勝寺には、東・中・西の3塔が建立され、軒を接していたことがわかる。

大治3年10月の『白河法皇八幡一切經供養願文』^{*19}に、

白河之傍、建五重塔一基、三重塔二基-

とあるのを、福山敏男氏は円勝寺の東、中、西の3塔にあてている〔福山43〕。

塔の建立が先行した後で、大治3(1128)年に金堂が、白河・鳥羽・待賢門院三院と崇徳天皇の臨幸のもと、供養されている^{*20}。『帝王編年記』大治3(1128)年3月13日の条には、

待賢門院御願円勝寺 六勝寺の其の一つ。供養。

とある。大治3(1128)年3月13日の『円勝寺供養祝願文』^{*21}には、

九間飛甍 数体仏陀 結跏趺坐

とあり、数体の仏像を安置した九間の堂があったことが見えている。九体堂のことであろう。

円勝寺の位置については、前述の供養祝願文に、

法勝最勝 蓮宮ト隣 三層五層 華塔接砌

とあり、円勝寺が法勝寺と最勝寺に隣り合っていたことがわかる。この願文から円勝寺の位置は最勝寺の南、法勝寺の西の方1町と考えられていた〔福山43〕。しかし、最近杉山

信三氏から、東西2町、南北1町とする案が呈示された。金堂、塔3基、五大堂、薬師堂、鐘楼があり、1町四方では狭すぎるという判断である〔杉山ほか91〕。

2. 円勝寺の遺構

昭和45年に実施した発掘調査では、東西方向に走る幅2.5mの溝と建物跡を検出している(図3-3-F地点、図3-)〔円勝寺発掘調査団71〕。調査区周辺に設定した4ヶ所の試掘溝のうち北よりの1ヶ所において、二条大路末の南側の築地の掘形を検出したと報告しているが、掘形は1基であり、試掘溝も狭く、この遺構が築地である根拠は不明確である。むしろ、後述する成勝寺北辺に限ると考えられる溝の位置関係から、この掘形の位置は二条大路末の路上にあたり、直接円勝寺に関わる遺構ではないと考えられる。

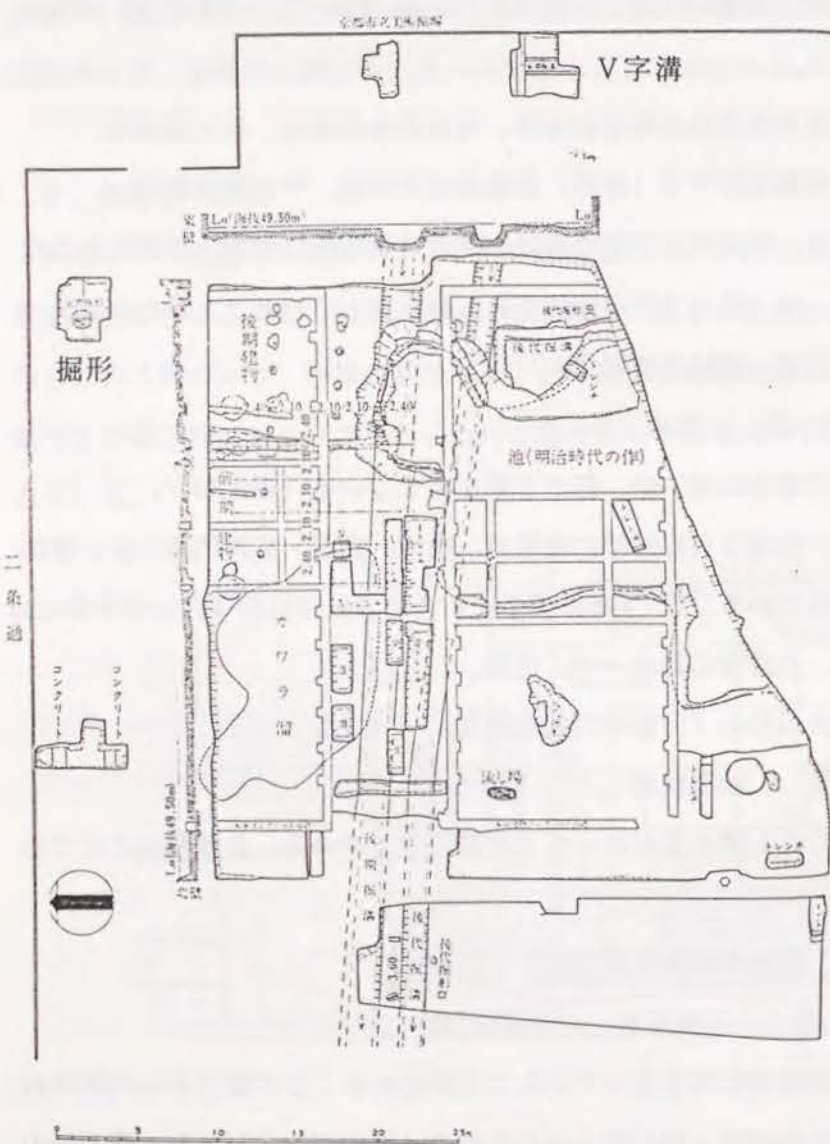


図3-10 円勝寺跡発掘調査実測図(〔円勝寺発掘調査団71〕所収)

東よりの試掘溝では、築地の雨落ち溝と考えられる幅1mのV字溝を検出している。前述の図3-3-A地点の溝まで約23mを測り、法勝寺の西の大路の幅が8丈で、この溝が築地の内側の雨落ち溝であるなら、位置的には非常によく符合する。

第5節 成勝寺の寺域について

1. 成勝寺の造営

成勝寺は崇徳天皇御願の御堂で、その供養は保延5(1139)年のことであった。『帝王編年記』保延5五年10月26日の条には、

天皇(崇徳)御願成勝寺供養 六勝寺の其一つなり。行幸あり。額は法性寺殿下。とある。主要な建物は、金堂、回廊、経蔵、鐘楼、観音堂などからなり、東西南北四方に、南大門、東・西・北門を構えていた。

成勝寺の位置は、『明月記』建暦2(1212)年10月4日の条に、岡崎殿への行幸の道筋を記して、

三條東行、延勝寺南門大路北行、件南門前東折、自成勝寺西出二條、

尊勝寺南大門前東行、同寺東大路北行、自最勝寺北經法勝寺北とあり、成勝寺が二条大路末に面し、西に延勝寺が、北に尊勝寺があったことがわかる。

なお、『明月記』寛喜3(1231)年8月1日の条に、

火光忽興盛焰如雪飛、又如雷動有声、雜人説、尊勝寺所残之塔云々と、尊勝寺の塔が焼亡したことを記し、翌日の条には、

晝火件塔焼了、適非銅盜之所為、二条之南有少々在家、其敵放火之間焰付塔云々とある。尊勝寺の東塔が、二条の南の在家からの飛び火で、焼失しているが、尊勝寺の南円勝寺と成勝寺の近辺に在家があったことになり、成勝寺の位置を比定する上で、注意を要する。

2. 成勝寺の遺構

成勝寺の寺域に関連する遺構としては、勸業館の改築にともない平成3年度に実施した試掘調査で検出した溝がある。試掘調査は、2ヶ所の試掘溝を設定しておこなった。このうち西側に設定した南北方向の試掘溝で、東西方向に平行して走る溝1、溝2を検出している〔梶川92〕。溝の幅は約0.7~1m、深さ0.3~0.5mを測り、平安時代後期の遺物が出

土している。とくに南よりの溝2の南方は、ほぼ垂直に立ち上がり、それに沿って下方に細い溝が走ることから、溝の壁に土留めの当て板が施されていたと考えられている。平安時代後期ごろの整地層の遺存状況が、この溝を境にして北と南で異なり、南の整地層が厚く、高く残存していたことが報告されている。この溝が地区を区画する溝であったと考えられ、位置から考えて、成勝寺の北辺、二条大路末の南側側溝であった可能性を指摘したい。土留めの板をとともう溝2の中心線でX=-109778mを測る。

第6節 延勝寺の寺域について

近衛天皇の御願の延勝寺が、創建されたのは久安2(1146)年のことである。『本朝世紀』久安2年8月7日の条には、

今日新御願寺木作り始めなり。内大臣(藤原頼長)・権大納言藤宗輔卿とあり、さらに、3年後の同記久安5年3月20日の条には、
今日、御願延勝寺供養の事あり。(中略)寅の刻、小音声神分を発す。同刻、御仏開眼大僧行玄之を勤仕。卯の刻、法服を分送。同刻、衆僧集会の鐘を打つ。僧侶三百口、南門の外幅に着す。威儀師之を召計う。辰の刻、太上天皇(鳥羽)御幸。其の後皇后宮(美福門院)行啓。(中略)是に先じ、鶏鳴、皇太后宮(藤原聖子)行啓。摂政室家同じく渡らる。御堂西妻を以て御在所となす。午の刻、行幸。

とあり、鳥羽法皇、近衛天皇、美福門院、皇太后の臨席のもとで、造立供養がおこなわれている。

久寿2(1155)年7月、近衛天皇が近衛殿で崩じた。近衛殿の寝殿は延勝寺に移され、丈六阿弥陀像九体を安置する御堂にされた。『百鍊抄』長寛元(1163)年12月26日の条には、

延勝寺阿弥陀堂供養。以=近衛殿寝殿-被_レ立。延=間数-安=置九躰丈六佛-。
とあり、九躰阿弥陀堂とするために間数を延ばしている。間数を延ばしたというのは、寝殿造のままでは柱間が狭いので、丈六仏を安置するのにふさわしく、柱間を一丈数尺にひろげたと考えられている〔福山〕。

延勝寺の寺域は、現在の北門前町付近の、東西二町、南北一町の地に比定されている。『明月記』建仁2(1202)年正月12日の条に、

三条東、延勝寺朱雀北、南大路東如_レ例、法勝寺西大路(押小路東)北、

入_レ自=西大門-

とあり、延勝寺朱雀、すなわち今朱雀を北上し、延勝寺の南大門にあたり、延勝寺南大路を、例のごとく東に折れている。『門葉記』*22建仁4(1204)年正月29日の条には、

三条西行至=今朱雀-、々々々北行至=延勝寺前-、々々々々西行至=仏所小路-、
々々々々北行至=近衛-、々々西行至=河原-

とある。『明月記』建暦2(1212)年10月4日の条には、岡崎殿への行幸の道筋を記して、

三條東行、延勝寺南門大路北行、件南門前東折、自成勝寺西出二條、尊勝寺南大門前東行、同寺東大路北行、自最勝寺北經法勝寺北

とある。いずれも延勝寺南門大路を北行して、門前で左折することから、延勝寺の東西幅が2町はあり、南門大路が延勝寺で突き当たると考えられている。しかし、延勝寺南門大路は、白河の条坊地割の中心街路にあたる今朱雀であり、なぜ肝心な中心街路をふさぐような寺域を設定したのであろうか。延勝寺の造営は、六勝寺の中でももっとも遅い久安2年のことであり、白河の条坊地割の大半は完成し、今朱雀が中心街路であるという認識していたと考えられるが、こうした寺域を選定した理由は不明である。

第7節 小 結

以上、白河の条坊地割の中核をなす六勝寺の考察を、検出した遺構や、文献をもとにおこない、以下のようなことが明らかになった。

- ①六勝寺の中でも別格であった法勝寺の前身は、藤原家累代の別業であった。この別業を改修して法勝寺としたため、その東西幅は約277mと2町+小路の幅84丈(約255m)を逸脱し、南北長も押小路末より南に張り出している。法勝寺の南辺と東辺が、前身の別業・白河院の南辺と東辺を踏襲したものと考えられる。
- ②法勝寺の釣殿は、白河天皇の御座所となったところで、寺域の東部にあり、藤原家の別業から引き継いだ古い建物で、かつ、東の堤から10数丈の所にあった。このことは、法勝寺の寺域は藤原家累代の別業の施設や範囲を継承したことを示し、法勝寺の東辺の位置が条坊地割の規格からはずれるのは、この東辺が条坊地割に優先して設定されたことを示す。
- ③法勝寺の西辺は、平安京東京極大路からちょうど3坊の位置にあたり、法勝寺の前身の白河院の西辺の位置が、条坊地割のために調整されたと考えられる。金堂の中軸線も法勝寺西大路の東端からちょうど40丈東に位置し、西大門が二条大路末の突き当た

りに位置することなどから、法勝寺は条坊地割の計画確定後に造営されたものと考えられる。

④尊勝寺の寺域は法勝寺との間に、ちょうど2町の街区が納まることから、条坊地割に則って、方2町で寺域が設定されたと考えられる。

⑤最勝寺の寺域は、最近の発掘調査で南辺と東辺の位置が確認されている。北辺は法勝寺北辺の延長線上にあるとするのが妥当であろう。しかし、寺域の西よりには古墳があり、南辺の築地跡も条坊地割と関係なく、途中でとぎれており、西辺については、この古墳と寺域の関係も含めて、今後の検討課題である。

⑥円勝寺の西辺は、昭和45年の発掘調査で検出したV字溝である可能性が高く、この溝の位置から法勝寺西大路の幅は8丈であったと考えられる。北辺は成勝寺の北辺で検出した溝の延長上にあると考えられるが、西辺、南辺は不明である。

⑦成勝寺の北辺で検出した溝の位置と、尊勝寺の南辺の推定線の位置の検討から、二条大路末は幅17丈であったと考えられる。

*1 『本朝文粹』巻第十一（『新訂増補 国史大系』第29巻下 所収）

*2 『本朝文粹』巻第十（『新訂増補 国史大系』第29巻下 所収）

*3 『康平記』康平3（1060）年3月23日の条（『群書類従』巻四百五十）

*4 『栄花物語』巻三十九

*5 暦応3（1340）年2月の奥書をもつ「院家雑々跡文」（『大日本史料』所引）には、「法勝寺八角七重塔 高廿七丈」とある。九重塔の誤りと考えられている。

*6 『水左記』承保四年12月18日条、『東山御文庫記録』暦応5年3月20日条ほか、第*章で詳述するように多数の文献に見られる。

*7 「法勝寺西大路」『明月記』建仁2（1202）年1月12日条

*8 京都市動物園医療・救護センター施設新築工事に伴う発掘調査で検出したもので、京都市埋蔵文化財センターの梶川敏夫氏にご教示頂いた。

*9 前掲注13に同じ『鯨珠記』大治2年7月10日条「法勝寺西門ヨリ神樂岡ニ至ル大路成ル」（『史料綜覧』所収）

*10 京都市動物園医療救護センター施設予定地の発掘調査（内部資料）

*11 RITZ OKAZAKI新築工事に伴う発掘調査で、京都市埋蔵文化財研究所の堀内明博氏にご教示頂いた。

*12 『本朝続文粹』巻第12（『新訂増補 国史大系』第29巻下 所収）

*13 『法勝寺供養記』承暦元（1077）年12月

*14 『尊勝寺供養記』（『群書類従』第24輯）

*15 『中右記目録』康和3（1101）年8月13日の条

*16 『殿暦』康和3（1101）年10月13日の条

*17 昭和62年度に実施された店舗増築工事に伴う調査で検出した溝で、京都市埋蔵文化財センターの梶川敏夫氏と京都市埋蔵文化財研究所の上村和直氏に御教示を頂いた。1991年に概要報告書が出版されている〔上村91b〕。

*18 京都市埋蔵文化財研究所の堀内明博氏に御教示頂いた。

*19 『本朝続文粹』巻十二（『新訂増補 国史大系』第29巻下 所収）

*20 『知信朝臣記』『中右記目録』

*21 『本朝続文粹』巻十二（『新訂増補 国史大系』第29巻下 所収）

*22 『門葉記』山務4

第4章 白河御堂と白河殿

- 4-1 白河泉殿・南殿と蓮華藏院
- 4-2 白河北殿と保元の乱
- 4-3 宝莊厳院について
- 4-4 得長寿院について
- 4-5 高陽院泰子と福勝院
- 4-6 小 結

第4章 白河御堂と白河殿

六勝寺の造営と併行して、白河の地には御所や御堂も次々と造営された。永久2(1114)年11月供養^{*1}の蓮華蔵院をかわきりに、数多くの御堂や御所の造営が続いた。これらの御所は総称して白河殿と呼ばれ、御堂は白河御堂と呼ばれている^{*2}。白河殿には御堂が付設される場合が多く、また、白河殿は六勝寺に対する院家を形成していたとされている〔杉山62〕。本章では、白河の条坊地割りに点在した御所と御堂を、遺構を中心にその領域について考察する。

第1節 白河泉殿・南殿と蓮華蔵院

1. 白河泉殿から蓮華蔵院へ

白河南殿は白河法皇が造営したもので、『中右記』嘉保2(1095)年5月10日の条に、

前大僧正覚円坊也、本為御所、御寺西別处、水石風流地也

とあり、もとは覚円大僧正の房であったのを御所としたことや、法勝寺の西に位置していたこと、「水石風流地」であったことなどがわかる。何度か修造がおこなわれ、「泉殿御所」^{*3}「白河泉殿」^{*4}などとも称されていた。

この泉殿に御堂の建立が計画され、丈尺が打たれたのは、永久2(1114)年2月20日のことである^{*5}。『中右記』永久2(1114)年2月20日の条には、

還御之次御覧泉殿、是依可被立御堂也、大工國員備前守正盛令打丈尺被沙汰、

則ち従大炊御門還御

とあり、泉殿が大炊御門大路末に面していたことも窺わせる。同記同年11月29日の条には、

今日白河御願寺供養也、仍有行幸(中略)御願之地、本是覚円大僧正坊也、

法皇仰備前守正盛令作堂舎、九躰阿弥陀尊像越前守顕盛奉作、法印円勢作之、

又泉殿本御所武蔵守経敏募重任功修理也

とある。この日、白河法皇御願の御堂として、備前守平正盛が重任の功に募って造り、丈六九体阿弥陀像は越前守藤原顕盛が担当し、仏師は円勢であった。この御堂は九躰阿弥陀堂であった。この時点で泉殿は「泉殿本御所」と称され、覚円僧正の坊が御所として機能

するようになったとを示している。

この白河泉殿の中に故白河法皇の菩提をとむらうため、鳥羽上皇の御願として、新たに新九躰丈六阿弥陀堂と三重塔が造られた。これにより、白河泉殿には九躰阿弥陀堂が2棟と、塔3基があったと考えられている〔杉山62〕。十一間四面二階の御堂は播磨守藤原家保（顕季の子）が重任の功に募って造り、九躰仏は備前守平忠盛が担当し、仏師は賢円であった。大治5(1130)年7月に供養された（『中右記』、『長秋記』、『百鍊抄』）。

当初、南殿の中に建立された2棟の九躰阿弥陀堂に対し、院号が確定されないまま「白河新御願」などともよばれていたが、天承元年(1131)8月から2棟まとめて「蓮華蔵院」と称されるようになった。

2. 白河南殿の遺構

この白河南殿の主要伽藍の一部と思われる建物跡が2棟検出されている（図4-1-A地点）〔堀内81〕。1棟は基壇が亀腹状を呈し、雨落ち溝をともしない。もう1棟は掘り込み地業を施した基壇をもち、河原石2列をめぐらし、そこに小礫を敷いた雨落ち溝をもつ。いずれも良好な造りの建物跡であり、共伴する遺物の時期からも、これらの建物跡が白河南殿の遺構と考えられているが、どの建物にあたるかは不明である。

寺域を示す遺構は検出されていない。しかし、図4-1-B地点で平安時代後期の建物基壇を検出し、隣接するC地点でも、一連の建物と考えられる基壇を検出している〔上村

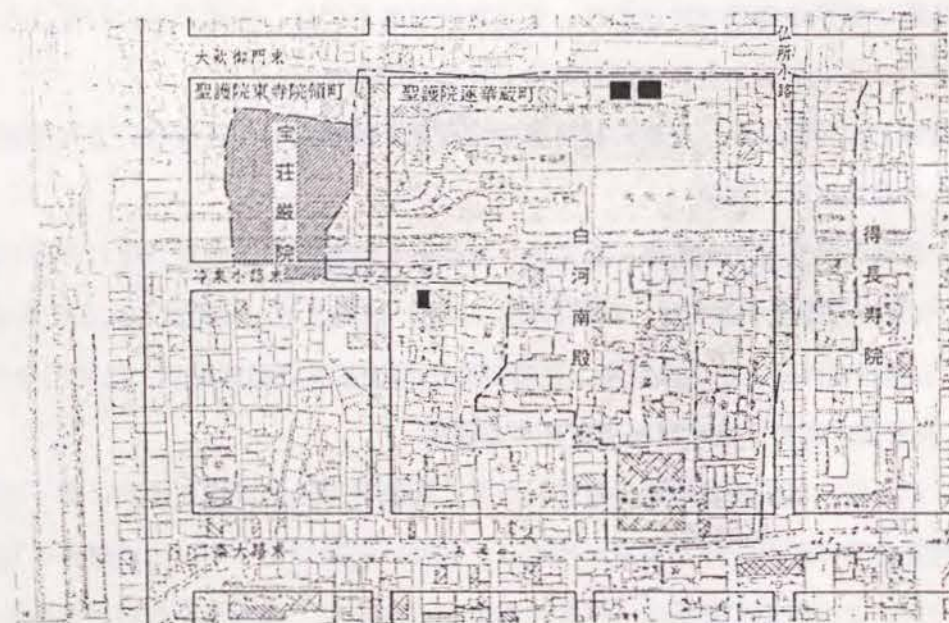


図4-1 白河北殿と南殿と宝莊殿院 縮尺1/4000

83〕。この建物の位置は、推定している大炊御門末の南辺に近く、大炊御門末の具体的な位置を検討する上で貴重な資料である。

なお、現在も東西・南北がほぼ2町の聖護院蓮華蔵町(図4-1 梨地部分)の地名が残り、蓮華蔵院を含む白河南殿の範囲がこれにあたると考えられている〔杉山62〕。また、永久2年に丈尺を打った前述の記事に、「従大炊御門末還御」とあり、この範囲を裏付ける。

第2節 白河北殿と保元の乱

白河北殿が造営されたのは元永元(1118)年のことである。『中右記』元永元(1118)年7月10日の条には

今夕法王可渡御白河北新小御所也。件御所ハ本御所之北大路北辺新被作

(中略)其路経土御門京極大炊御門末河原、引入新御所南御門中とあり、白河北殿を白河北新小御所と称し、その位置が本御所すなわち白河南殿の北大路北辺であったことがわかる。大炊御門末で賀茂川を渡り、南御門から入御していることも、この位置を裏付ける。

天養元(1144)年5月8日に焼亡したときは「白河殿焼亡院御所、大炊御門北」(『本朝世紀』)とある。半井本『保元物語』には「大炊御門ヨリハ北、川原ヨリ東、春日ヲカケテ作タル御所也」*6とあり、また、保元の乱のさいに、崇徳天皇が白河北殿に籠もり、守りを固めたときの記述に「大炊御門にりゃう門あり」、「西かはら面」、「北面は春日のすゑ」とある。これらの史料から、その範囲は南は大炊御門末、北は春日末で南殿の北にあったと考えられているが、大治4(1129)年の改造で中御門末まで拡張された可能性も指摘されている〔川上77〕。

この御所は、保元の乱の主戦場となり、齋院御所とともに焼失する。『兵範記』の保元元(1156)年7月11日の条には、

白河御所等焼失畢齋院御所並、院北殿也

とある。『百鍊抄』平治(1159)元年3月22日の条に、

白河千躰阿弥陀堂供養、大炊御門北、讃岐院御所、保元戦場為灰燼之跡、

仏者鳥羽院令造立給、為彼御追福也

とあり、讃岐に流された崇徳上皇の御所であり、保元の乱で炎上した白河北殿の跡地に、鳥羽上皇追善のため千躰阿弥陀堂が造立された。

白河北殿の比定地とその周辺で実施した調査には、京都大学病院構内A E 15区の発掘調査〔岡田・上原77〕、同構内A F 14区の発掘調査〔岡田・宇野78〕、同構内A F 15区の発掘調査〔浜崎84〕、同構内A F 19区の発掘調査〔浜崎・宮本87〕、京都大学熊野寮構内で実施した試掘調査などがあり、多くの遺構を検出しているが、白河北殿に直接関連すると考えられる遺構は検出していない。

第3節 宝莊嚴院について

宝莊嚴院の建立は長承元(1132)年のことである。九軀阿弥陀堂や寢殿のあったことが知られている。鳥羽上皇の御願として、播磨守藤原家成(家保の子)が造ったもので、仏師長円作の丈六阿弥陀像九体を安置し、長承元(1132)年10月に供養された。堂は東向き、九間四面、南北二面孫庇付きであった^{*7}。承久3(1221)年4月18日には院内の堂舎が焼亡しているが、所領は保持され、東寺に伝領されていく。宝莊嚴院は白河北殿の近くにあり、保元の乱の際には、その門前で合戦があった。源義朝の手勢が崇徳上皇方の源為朝追ったところ、「為朝、宝莊嚴院の西裏にて返合せ」、矢を射たところ、下野守の冑を射削って、勢余った矢が宝莊嚴院の門の方立に突きささっている^{*8}。

宝莊嚴院の位置については、この寺領が東寺に伝領されたことから、白河南殿の比定地のすぐ西にあたる聖護院東寺領町(図4-1斜線部分)が、その旧地に比定されている〔杉山62〕。こうした状況を裏付け

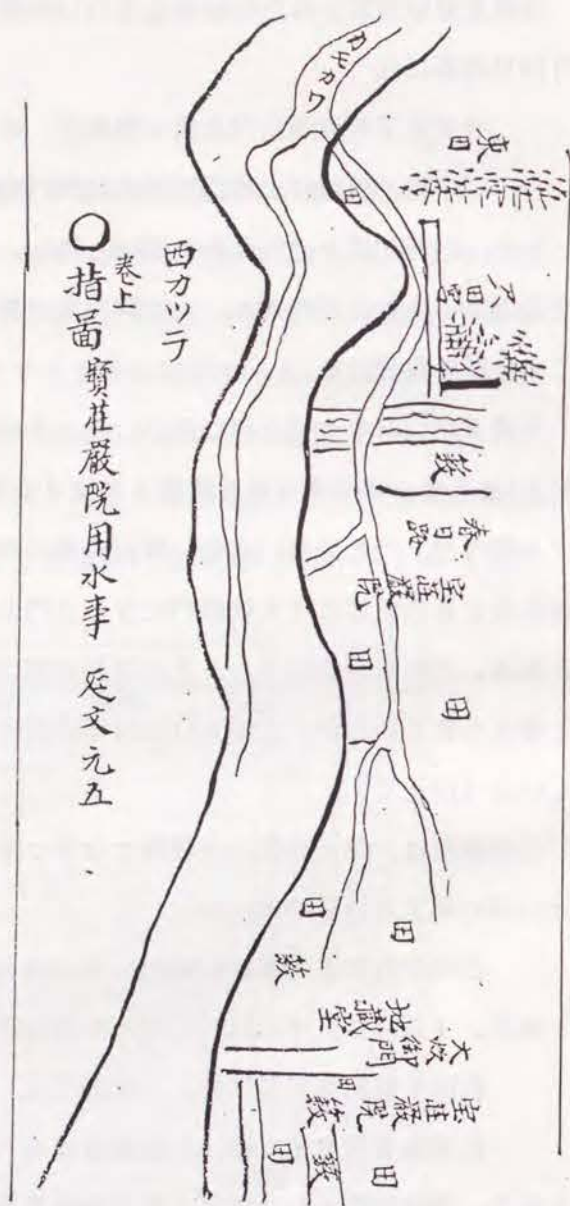


図4-2 宝莊嚴院用水事(東寺古文零聚所収)

るものに、「宝莊嚴院用水事」という延文元(1356)年の絵図^{*9}がある(図4-2)。この図は宝莊嚴院の農民が、鴨川の上流から栗田宮のすぐ西を経由して、農業用水を引き入れていた様子を示す。延文元(1356)年ごろに洪水が続き、栗田宮が洪水被害をこの用水によるものとし、相論となった際のものである〔西岡76, pp233-235〕。この図を見ると、大炊御門末の南と北に宝莊嚴院と記され、この時期の宝莊嚴院の領地は大炊御門末よりも北の春日末までおよんでいたことや、宝莊嚴院が鴨川に面していたことがわかる。

宝莊嚴院に関連すると思われる遺構は、いまだ検出されていない。賀茂川の近辺は、洪水による土砂の流出と堆積が激しく、地形が安定したのは近世になってからであり、近世耕土の下に地山の砂礫が堆積しているところが多い。京都大学病院構内A F 14区の発掘調査〔岡田・宇野78〕で検出した10世紀の護岸跡も、古代には、現在の賀茂川から200m以上西の地点でも、氾濫原に近い状態であったことを裏付ける。

第4節 得長寿院について

平忠盛が造進した得長寿院が鳥羽上皇の御願寺として完成したのは、天承2(1132)年3月13日のことで、その様子は『得長寿院供養次第』に詳しく、また、『中右記』の同日の条にも「今日、千体観音堂供養行わるべきなり」とあり、千体の観音が安置されていたことがわかる。『平家物語』には「しかるを忠盛備前守たりし時、鳥羽院の御願得長寿院を造進して、三十三間の御堂をたて、一千一体の御仏をすへ奉る。供養は天承元年三月十三日なり。」^{*10}とあり、蓮華王院と同様の三十三間堂であったことがわかる。

その位置については、『明月記』元久元(1204)年正月12日の条に、法勝寺への御幸の経路について

京極南二条出川原、自三条白川ヲ更大炊御門末得長寿院西敷入御西大門如例とあり、建暦2(1212)年正月9日の条には、法勝寺への行幸の道筋を記して、

大炊御門東、洞院南、二条東、自河原入押小路、自得長寿院東、経尊勝最勝寺北、入御法勝寺西大門、毎事如例

とある。建暦2年の記事から、得長寿院、尊勝寺、最勝寺、法勝寺の順に西から並んでいたことがわかる。尊勝寺の位置は発掘調査の結果から第3章第2節で述べたとおりであり、得長寿院はその西に当たることになる。尊勝寺の1町西には本章第2節で述べた白河南殿が比定されており、得長寿院は尊勝寺と白河南殿との間に比定できる。得長寿院の寺域に

については、千駄観音堂があることから東西1町、南北2町と推定されている〔杉山62〕。

元久元年正月の法勝寺への御幸は、三条から北行し、得長寿院の西側、すなわち延勝寺が分断する今朱雀をさけて、仏所小路を北上したと考えられる。白川は当時四条の方へ南下せず、三条あたりで賀茂川と合流していたとも言われ、白川が仏所小路のあたりで三条と交差していた可能性もある。

第5節 高陽院泰子と福勝院について

1. 墓所としての福勝院

鳥羽法皇の皇后で、藤原忠実の娘である高陽院藤原泰子の御願として、白河の地に造られた御堂が福勝院である。供養は仁平元年に催され^{*11}、九駄阿弥陀堂、三重塔、寢殿、護摩堂などがあったことは知られている。御堂は東面し、九間四面、南北二面孫庇付きで、南と北に廊が取付いていた。

福勝院の位置については、『兵範記』久寿2(1155)年12月17日の条には、高陽院泰子の葬送の経路が、

自高倉北行，自正親町東行，自法成寺北面，出堤南行，自近衛末東行，
入御々堂南西門

とあることから、御堂敷地の南辺が近衛末に面していると考えられている〔杉山62〕。同じ葬送の記事には、

白河御堂，今熊野領已四至内也，随又被奉祝其新宮了，其中被奉殯，
頗有怖畏歟，如之，彼護摩堂兼無比支度，當時有議，俄掘壇底，不調也，
不法也，旁無便宜歟，就中上皇御所近隣，上下往反路頭也，存日没後，
不渡御宇治，親疎誹謗，已無所謝歟，偏是入道殿御迷惑之至歟

とあり、福勝院が熊野社の四至の内に造営され、その中で殯がおこなわれ、護摩堂の下に遺体が埋葬されたことに対して、熊野社が迷惑していることや、崇徳上皇の御所や、人通りの多い道に面し、差し障りがあったことがわかる。

福勝院の寺域の位置や規模について、杉山信三氏は、京都大学教養部構内南部の吉田寮一帯の字名「一町が辻」を福勝院に比定する『京都坊目誌』の説を無理がないものとする〔杉山62〕。

『勘仲記』弘安10(1287)年4月15日の条に、近衛殿若君御祈始の仁王講などのため

仏具等所借渡福勝院也，余下知之

と福勝院から仏具を借りているが、これ以降福勝院の名は文献から消えている。

川上貢氏は永徳4(1384)年2月24日の足利義満寄進状にある吉田社の社領の記述から、その四至を「東は神楽岡山の西，南は近衛末，西は河原，北は土御門末」とし、熊野社境内管領を聖護院に命じた『東寺文書』^{*12}から、熊野社の社領を「近衛以南大炊御門以北，今辻子以西至于河原（除崇徳院大吉祥院敷地）」とあるが、近衛末を吉田と聖護院の境とするのは室町初期のこととし、平安末から鎌倉にかけては違う状況下にあったと考えている〔川上・泉77〕。しかし、九駄阿弥陀堂の規模や、近衛末の位置について確証のないことから、断定を避けている。

2. 六器の鋳型と福勝院

前述したように、福勝院の比定地は不確かなままであるが、こうした状況の中で、福勝院にごく近いと考えられる近衛大路末の北、今朱雀の西にあたる169地点（図1-3）で発掘調査を実施した〔浜崎90〕。中世の遺構は土取り穴に攪乱され、検出できなかったものの、密教法具の鋳型や輸入陶磁器をはじめ、12～14世紀の遺物が多量に出土した。密教法具は寺院に関わるものであり、遺物の時期も福勝院の存在時期と一致することから、福勝院となんらかの関わりをもつ遺跡があったと考えており、若干の考察を試みる。

この調査区は吉田山の西麓、京都大学医学部構内の東南端に位置する。ここに放射性同位元素総合センター有機廃液処理設備室の新営が計画されたため、新営予定地全域の発掘調査を実施することになった。

出土した中世の遺物は、近世の土の採取のため攪乱を受けていたが、比較的良好な状態で固まって出土していた。考古学的な編年の資料とはなり得ないが、密教法具の鋳型という特殊な性格と福勝院との位置関係を勘案し、資料として取り上げた。

発掘調査では、密教法具の鋳型と取瓶の破片が、炭、灰、大量の土器とともに、土取り穴の埋土からまとまって出土した^{*13}。Ⅱ48～Ⅱ51は、密教法具のひとつ六器とその台皿の鋳型である。Ⅱ48～Ⅱ50は六器の外型で、いずれもすさを混ぜた粘土で碗型の粗型（斜線部分）をつくり、焼き締めたあとで、内側を粒子の細かな真土（梨地部分）で仕上げる。鋳型の口縁部内側には、内型をはめ込んで固定するための幅木受けが彫りくぼめてある。これらの鋳型から鋳造した製品を復原してみると、六器はいずれも口径約11cm、器高約4.5cmを測る。口縁部の外側を垂直に面を取ったもので、仁平3(1153)年の紀年銘をもつ経

筒に共伴した花背別所経塚出土の六器（福田寺蔵）のように、鑄造後口縁部を面を取るように削り、「しのぎ」をたてたものと考えられる。全体として器高、高台がともに低い低平な形であり、平安後期の特徴をもつ〔奈良博77〕。土取り穴からは図示したほかにも六器の鑄型の小片が多数出土したが、蓮弁飾りを施した、いわゆる慈覚大師請来形のものはなく、素文系の法具のみが作られたと考えられる。

Ⅱ51は六器の台皿の外型で、皿形の粗型をつくり、焼き締めた上に真土を塗って仕上げる。六器の鑄型と同様に、口縁部内側に幅木受けを彫る。鑄造された台皿は口径約11cm、器高約1cmを測る偏平な皿である。皿はわずかに内傾する。六器の高台の滑り止めとなる「かえし」の痕跡は不明である。一般に素文の六器と台皿の口径はほぼ同じであるものが多い。Ⅱ51の口径もⅡ48～Ⅱ50とほぼ同じであり、Ⅱ51はⅡ48～Ⅱ50と組みになる台皿の鑄型である可能性が高い。Ⅱ52は3段に段をなす蓋の内側で、火舎香炉の蓋に似るがやや小さい。Ⅱ53は鳥目の痕跡を残す鑄型である。鳥目を中心に引型を回転させ、真土を塗りつけながら回転体状の器形を仕上げたものと思われる。Ⅱ54は半球形を取瓶。表面は平滑で、堅く焼き締められている。以上のような結果から、これらの密教法具の鑄造に関連する遺物は、いずれも平安後期のものと考えられる。

次に、密教法具の鑄型がこの地点から出土した経緯について考察してみたい。まず、六器の鑄型が、鑄造に用いる取瓶や灰、炭化物とともに出土したことは、調査区もしくはその近辺で、密教法具の鑄造がおこなわれたことは間違いない。こうした鑄造が工人の定着した工房でおこなわれたのか、施主の注文に応じて特定の寺院のために出張して鑄造をおこなう「出吹き」であったのかは意見の分かれるところである。

前説を支持する材料としては、周辺の111地点（図*-*）で検出した平安中期^{*14}や、142地点で検出した鎌倉時代^{*15}の鑄造に関連する遺構や遺物があげられる。また、155地点でも時期は不明ながら、鑄型、埴塼、輪の羽口が出土しており、京都大学の教養部、医学部、医学部附属病院の位置する吉田山西麓一帯は、古代・中世の鑄造にかかわる工人集団の本拠地のひとつであったと考えられている〔五十川88〕。

また、黒谷、岡崎の土は陶土として有名であったが、諸国の特産物にまで言及した17世紀の俳論書『毛吹草』には、黒谷の名産として、陶土と梵鐘の鑄造の型土をあげている。黒谷は本調査区の東南東約800mの地点にあたる。本調査区一帯で採取した土が鑄型の型土に適しているとすれば、工人集団が吉田山西麓一帯を本拠地にした理由もうなずける。

その一方、後説としては、出土した鑄型が平安後期のものであること、鑄造したものが

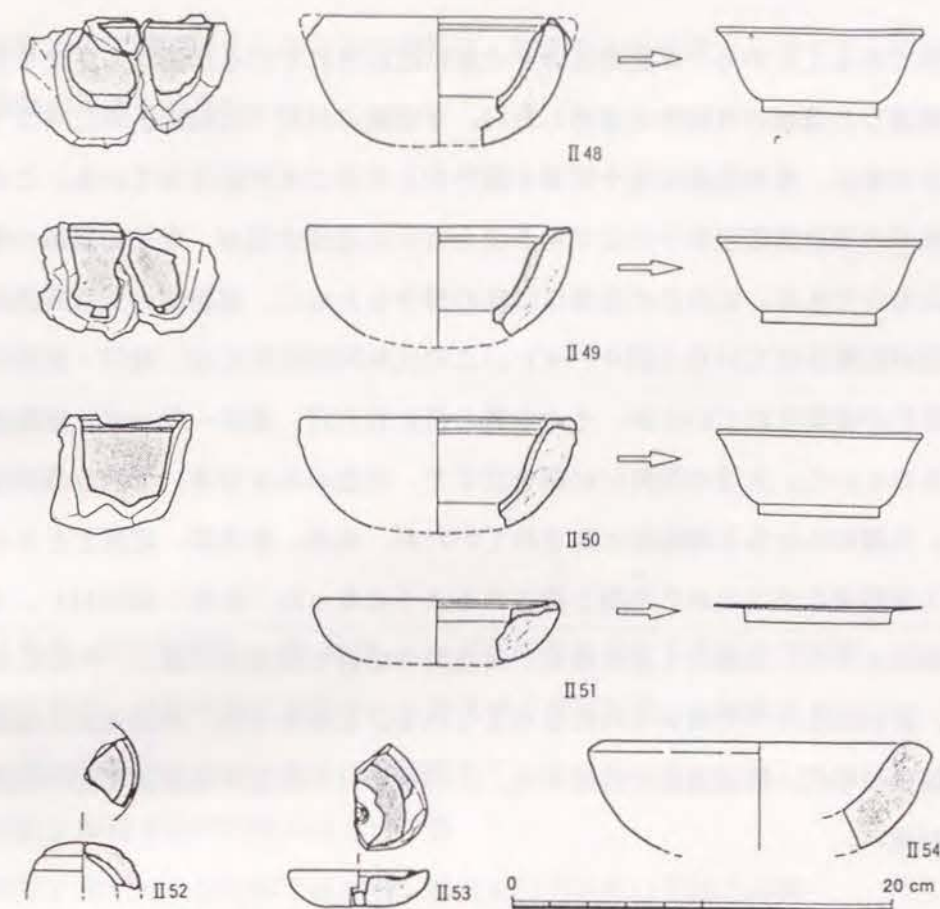


図4-3 鑄型と取瓶と、その完成品想定図

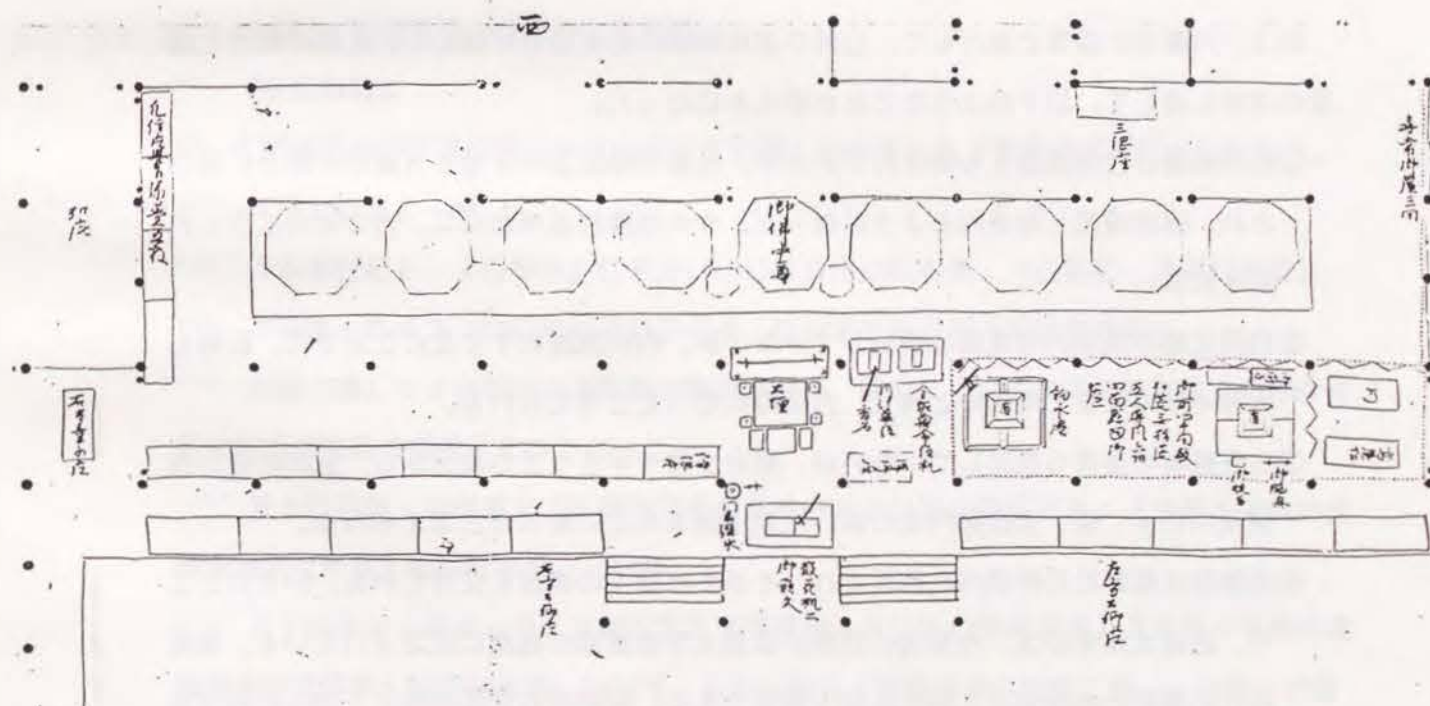


図4-4 福勝院の九輪阿弥陀堂部分図（『兵範記』京都大学付属図書館所蔵より）

密教法具であることから、本調査区のすぐ東に比定されている福勝院の注文を受け、その周辺で铸造した遺物の可能性を指摘したい。平信範の日記『兵範記』の仁平2(1152)年8月28日の条に、鳥羽法皇の五十賀算を設けたときのことが記されている。この五十賀算は鳥羽法皇の皇后高陽院泰子の父である前太政大臣藤原忠実が、泰子の御願の御堂福勝院で設けたものである。この日の記事には宴の様子とともに、福勝院の九躰阿弥陀堂の詳細な平面図が記載されている(図4-4)。この九躰阿弥陀堂には、賢円・康助の作になる丈六九体仏が供養されていたが、その中尊の前に方六尺、高さ一尺一寸、螺鈿地蒔の大壇が据えられていた。大壇の四角には厥を立てて、五色の糸をひき、「四面備闕伽器盛造花」とある。六器はもともと闕伽器と称されていたが、火舎、飲食器、花瓶とともに、6口が1組で1面器をなすことから六器と称されるようになった〔佐和・濱田84〕。4組の一面器を四面具として、大壇の4面を飾る。福勝院の場合も四面具を備え、六器には各面に6口ずつ、計24口ならべて用いられたと考えられる。このような、本調査区と福勝院の位置関係、鑄型の年代、鑄造製品の性格から、Ⅱ48～Ⅱ51の鑄型が福勝院で用いられた六器の可能性が高い。

第6節 小 結

以上、六勝寺の造営と並行して、白河の条坊地割のあちこちに構えられた院の御所と御堂の考察を通じて、以下のようなことが明らかになった。

- ①白河南殿は白河泉殿とも称されていたが、九躰阿弥陀堂が2棟と3重塔が新たに建立され、蓮華蔵院と称されるようになった。今の聖護院蓮華蔵町に、方2町の広さに比定される。
- ②白河北殿の具体的な遺構は検出していないが、白河南殿のすぐ北に比定され、範囲も大治4年の拡張で南殿のと同じ、方2町になったと考えられる。
- ③宝莊嚴院の遺構も検出していないが、東寺文書や字名などの検討から、白河南殿の西、賀茂川のすぐ東、大炊御門末の南、冷泉小路末の北にあったと考えられる。
- ④福勝院は熊野社の所領内に造営され、そのため種々の誹謗を受けている。いまのところ、近衛大路末の北、今朱雀の西側の京都大学教養部の南部に比定されている。室町時代の熊野社の所領の北限は近衛大路末である。熊野社の北限が南に下がったのであれば、福勝院は近衛大路より南に比定しなければならない。今後の課題である。

- ⑤医学部構内東南端で出土した六器の鑄型は、型式や出土位置から考えて、福勝院に関わる遺物の可能性が高い。

*1 「太上皇供養蓮華蔵院。有行幸。」『百鍊抄』永久2年11月29日条

*2 杉山信三氏は、白河の地に造営された御堂が「白河御堂」と総称されていたことを指摘し、この用語をそのまま用いることを提唱している〔杉山62, p. 54〕。

*3 『中右記』康和4(1102)年6月2日の条

*4 『中右記』康和4(1102)年7月22日、長治元(1104)年11月25日の条

*5 『中右記』永久2(1114)年2月20日の条

*6 半井本『保元物語』「左大臣殿上洛の事」

*7 中右記・僧綱補任・百鍊抄・兵範記

*8 『保元物語』

*9 江戸時代の国学者伴信友が『東寺百合文書』から写した『東寺古文零聚』に収める。

*10 『平家物語』一卷

*11 『本朝世紀』、『百鍊抄』仁平元(1151)年6月13日の条、(兵範記・兵範記裏書)

*12 『後鑑』応永3(1396)年12月18日の条「前將軍被附近衛以南於聖護院」

*13 六器に関しては京都国立博物館の難波洋三氏、鑄型については京都市埋蔵文化財研究所の梅川光隆氏の御教示をいただいた。

*14 五十川伸矢・飛野博文「京都大学教養部構内A P22区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和57年度、1984年

*15 五十川伸矢・宮本一夫「京都大学医学部構内A N18区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和60年度、1988年、五十川伸矢「鴨東白河の鑄物工房ー京都大学構内の鑄造に関する遺跡ー」『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和60年度、1988年

第5章 白河の条坊地割の諸社寺と邸宅

第5章 白河の条坊地割の諸社寺と邸宅

5-2 白河の条坊地割の諸社寺

5-3 白河に営まれた邸宅と在家

5-4 白河における牛業の遺構

5-5 小 結

5-5 小 結

第5章 白河の条坊地割の諸社寺と邸宅

第1節 はじめに

白河の条坊地割は、六勝寺と、院の御所と御堂だけで構成されていたわけではない。白河の条坊地割が施される前から、白河の地にあった諸社寺や、六勝寺や御所・御堂に新営にともない移り住んできた院の近臣や、日常を支える官人の邸宅のほか、一般の民家などが有機的に存在していた〔井上89〕。院の近臣としては、民部卿藤原顕頼の宿所や、御所預東市正正経宅などがあり、公家としては藤原北家勸修寺家流吉田氏の邸宅があった。庶民の邸宅や民家の存在は、火事や立ち退きの古記録や、発掘調査の遺構から推し量ることができる。

また、民家のほかにも条坊地割の施行前から、白河の地にあった東光寺、聖護院、熊野社、吉田社、東天王社などがどのような位置を占めたのか、そして、粟田宮や浄蓮華院のように条坊地割の中にまつられた社寺がどのような位置を占めていたのかは、条坊地割を知るうえで欠かすことができない要素である。

さらに、白河の条坊地割のすべての条坊が、寺社や人家で占められていたわけではなく、そこでは様々な生業が営まれていた。本章では、白河の条坊の中で営まれた日常的な空間について、考察したい。

第2節 白河の条坊地割の諸社寺

白河の条坊地割に点在する諸社寺には、前述のように、条坊地割の施行前から、白河の地にあった社寺と、条坊地割の中に新たに祠られた社寺がある。条坊地割と既存の社寺の関係や、新たな社寺の造営と条坊地割の区画をふまえながら、考察を進めたい。

1. 東光寺と東天王社

(1) 東光寺について

東光寺は、陽成天皇の母藤原高子の御願の寺として、元慶年間(877-885)に建立された寺である。『扶桑略記』延喜五(905)年3月9日の条には

以東光寺為定額。件寺，元慶年中太后御願建所也。

とあり、円覚寺、円成寺にやや遅れて、東光寺も定額寺となっている。当時は禁じられていた私寺が、官寺に準ずる扱いを受けるようになっていった。『扶桑略記』承平3(933)年5月15日の条には、

其他為_レ体誠足_二幽閑_一，清泉遶階，觀念之月自泛，綠苔滿_レ地，坐禪之茵遍鋪者也
と、東光寺の寺境が当時の景勝地のひとつであったことが知られる。

『日本紀略』天曆2(948)年1月17日の条には、その焼亡記事がある。応仁元(1467)年8月には、応仁の乱の兵火で焼亡し、ついに廃寺となった。

東光寺の位置は、黒谷の東南辺、現京都市左京区岡崎東天王町一帯に比定されている。『保元物語』には、「法勝寺の北東光寺の辺」とあり^{*1}、『仁部記(資宣卿記)』弘長元(1261)年には、法勝寺阿弥陀堂への御幸の経路を記して、

七月阿弥陀堂御幸 大炊御門東行，至_二東光寺_一南行

とある。大炊御門末を東行し、東光寺に至った後、南行して法勝寺に阿弥陀堂に向かっていく。東光寺の西面が、法勝寺の西面と同じ道、すなわち法勝寺西大路に面していた可能性が高い。

図3-3-C地点で実施した発掘調査で、幅2.2m、深さ0.7mの南北溝を検出している。この溝が法勝寺の東辺を限る小路にあたることは前述したが、この溝から12世紀後半の多量の遺物とともに、炭化物が出土することから、調査担当者は前述の『山槐記』の白河東光寺焼亡の記事に符合すると考えている^{*2}。

しかし、C地点は大炊御門末の南に位置し、後述する東光寺の鎮守社である東天王社が遷座していないとすると、東光寺とその鎮守社の領域が大炊御門末をまたぐか、大炊御門末を挟んで対峙していたことになり、不自然である。大炊御門末の北側に東天王社と並んでいた可能性が高いと考えられる。

(2) 東天王社と西天王社

東天王社は、西天王社と一対をなすもので、東天王社は東光寺の鎮守社であり、西天王社は歓喜光院の鎮守社として始められたと伝えられている。北白川から現在地に遷座したのは、貞観11(869)年のこととされているが、東光寺の開基と時期的に若干前後する。中世には、東光寺と一体となり、鎮守社となる。応仁の乱の兵火で、東光寺が焼亡し、廃絶したが、東天王社は無事で、慶応年間(1865-68)に岡崎神社と改名し、現在に至る。

西天王社は美福門院が創立した歓喜光院の鎮守社であったと伝える。元弘2(1332)年の兵火による焼亡の後、吉田神楽岡に遷座していたが、大正13年に御旅所であった現在地に遷座し、須賀神社と改名している。

歓喜光院は保延7(1141)年2月21日に供養されている。歓喜光院の位置を、『今鏡』「鳥羽の御賀」の

白川のおほひの御門どののむかひにみだうつくらせ給て供養せさせ給に
とある記事と、『門葉記』巻173「山務1」の宝治元(1247)年7月16日の条の、新座主が三条白河坊から拝堂登山する経路の記事、

自_二三条_一至_二今朱雀_一，自_二今朱雀_一至_二仏所小路_一，自_二仏所小路_一至_二二条_一，

尊勝寺東西(面か)，自_二尊勝寺東_一至_二歓喜光院前_一袋辻

から、尊勝寺の北側、旧武徳殿のあたりに比定している〔杉山62〕。しかし、その後の発掘調査の成果から、尊勝寺の寺域も1町西であったことが判明し、多少の修正を加えなければならないが、基本的にこの近辺と考えられる。ただし、熊野神社が古来その位置を変えていなければ、「大炊御門殿のむかい」という前提を満たすためには、1町北で、今朱雀と尊勝寺東大路の間に寺域を比定する必要がある。西天王社の旧御旅所である須賀神社も、その中にあり、こうした推定を裏付ける。

ただし、『明月記』寛喜2(1230)年11月28日の条には、

大相府近日又歓喜光院北実保狂女宅之近辺東西南北二町，俄被追立在家，

可被立堂之由，居住等哭泣云々

とあり、歓喜光院の北側において、東西・南北2町の地に、堂を建てようとしている。歓喜光院の北あたりには、聖護院が比定されており、その位置関係の検討を必要とする。

2. 熊野社と聖護院

熊野社も聖護院も法成寺座主増誉の創始によるものと考えられている。聖護院の創設は、寛治4(1090)年、白河上皇熊野詣での先達としての恩賞に、熊野三山検校職に任じられた増誉がおこした白川院に始まる。その位置については、『兵範記』仁安2(1167)年4月26日の条に、

參白河法務御房，中御門末聖護院也

とあり、現在地とはほぼ同じ位置にあったと考えられている。

熊野社については、『中右記』康和5(1103)年3月11日の条に、

今日僧正増譽於白川邊、祭熊野新宮御靈云々

とあり、増譽が熊野新宮を白川のあたりに勧請したことがわかるが、崇徳院勧請の東山若皇子の熊野権現や後白河院勧請の新熊野社と混同があり、具体的な位置は不明である。

永徳4(1384)年2月24日の足利義満寄進状は吉田社の社領の四至を

東は神楽岡山の西、南は近衛末、西は河原、北は土御門末

とし、熊野社境内管領を聖護院に命じた『東寺文書』*³は、熊野社の社領を、

近衛以南大炊御門以北、今辻子以西至于河原(除崇徳院大吉祥院敷地)

とする。室町初期には、近衛末を吉田と聖護院の境としていたことがわかる。この聖護院の周囲には集落が存在し、応仁の乱前には構を構築していた(第Ⅱ部第10章)。

応仁2(1468)年には、熊野社も聖護院も応仁の乱に巻き込まれ、焼亡する。『碧山日録』
応仁2年8月5日の条には、

東西兵破=聖護院及諸教寺=

とあり、この後、聖護院は岩倉長谷の地へ退転していった。その後も、京の内外を転々と
し、延宝4(1676)年に再び現在地に帰還し、現在に至る。

応仁の乱後の熊野社の状況は不明であり、現在の境内は寛文6(1666)年に聖護院宮道寛
法親王の再興によるといわれている。

黒川道祐が『雍州府志』の執筆に先立ち各地を探訪したときの紀行文『近畿歴覧記』の
1編「東北歴覧記」には、

聖護院ノ門前ヲ過、(中略)森ノ内ニ両社アリ、一社ハ熊野権現ナリ、聖

護院ノ境内ナレハ理リ也、今一社ハ崇徳院ノ廟ト云ヘリ

とあり、延宝9(1681)年には、聖護院の森の中に熊野社と崇徳院廟のあつ

たことがわかる。この崇徳院廟は、次項で考察する粟田宮と密接に関わるものである。

3. 粟田宮と人喰い地藏

(1) 粟田宮について

粟田宮は、保元の乱に敗れ、讃岐で流刑死した崇徳院の霊を鎮めるため、後白河法皇が
寿永3(1184)年に創建したものである。この宮は嘉禎3(1237)年に一度遷座したうえ、応
仁の乱後に荒廃し、その後やや離れた所に再び祀られたため、その旧地の比定に混乱が生
じている。竹村俊則氏は近世の地誌をもとに、その創建当初の位置を京都大学附属病院付
近に比定し*⁴、福山敏男氏は近世の地誌に疑義をいただき、嘉禎の遷座後の位置を丸太町通

り新道南側付近に、創建当初の位置をそこから西1~2町ほどの所とした【福山77】。本
節では、各時期ごとの史料を整理し、粟田宮の旧地について考察する。

(2) 粟田宮の創建

粟田の宮の造営は寿永2(1183)年に始まり、翌年に竣工した。当初の社地は『平家物語』
には、寿永3年4月3日に*⁵、

崇徳院を神とあかめ奉らるへしとて。昔御合戦ありし大炊の御門か末に。

社をたてて宮うつし有

とあり、『吉記』*⁶寿永3(1184)年4月15日条の条には

崇徳院、宇治左大臣、爲崇霊神、建仁祠、有遷宮、以春日河原 爲其所、

保元合戦之時、彼御所跡也

とあり、『源平盛衰記』*⁷寿永3年4月15日の条には、

崇徳院遷宮あり。春日が末北河原の東也。此所は大炊殿の跡、先年の戦場也。

とある。いずれも、保元の乱のさいに合戦の場となった春日河原の白河北殿の跡とし、春
日末の北か大炊御門の末で、河原の東とする。崇徳院の祟りを恐れ、古戦場に慰霊の社を
建立しようとしたのである。『帝王編年記』寿永3年4月15日条の条には

白川中ノ御門末北 河原ノ東造=神殿=被=奉=崇號=崇徳院=保元戦場是也。

とあるが、中ノ御門末「南」か、大炊御門末北の誤りであろう。

この崇徳院廟の造営については、『平家物語』は、

院の沙汰にて、内裏にはしろしめされず

とあり、『百鍊抄』寿永3年4月15日の条には、

件事、公家不知食。院中沙汰也。仍不被憚神事日也。

とあり、後白河法皇が天皇にはからず、神事の日もはばからない遷宮の経緯に批判が集ま
っている。

いずれにしても、白河北殿の位置から、粟田宮の社地は春日末の北か南で、河原に近い
所といえる。しかし、白河北殿の跡地には鳥羽法皇追善のための千駄阿弥陀堂が、粟田宮
よりさきに造営されている。『百鍊抄』の平治元(1159)年3月22日の条には、

白河千駄阿弥陀堂供養。大炊御門北。讃岐院御所。保元戦場爲灰燼之跡。

佛者鳥羽院令造立給。爲彼御追福也。

とあり、崇徳院の祟りを恐れ、保元の乱の廃虚に千駄阿弥陀堂を供養した様子がわかる。

また、白河北殿より河原よりに比定されている宝莊嚴院も、少なくとも承久3(1221)年の火災までは堂舎が残っていたことから、粟田宮の初期の社地は春日末の北で、河原に近い所と考えられる。

(3) 粟田宮の嘉禎の遷座

創建当初の粟田宮は鴨川に近く、洪水の被害を受けやすかった。『仁部記』弘長元(1261)年2月には、

去十日洪水流=水粟田宮-。之間。築垣大略壊損

とある。このため、やや東へ遷座した。『百鍊抄』嘉禎3年4月27日の条には

今日。粟田宮遷=坐東方地-。本所近=河邊-。依=有=洪水恐-所=奉=遷也

とある。「宝莊嚴院用水事」の図(図4-2)は遷座後の粟田宮の様子を示している。この図は宝莊嚴院領の農民が、鴨川の上流から粟田宮のすぐ西を經由して、農業用水を引き入れていた様子を示すものである。延文元(1356)年ごろに洪水が続き、粟田宮が洪水被害をこの用水によるものとし、相論になった際のものである。この図を見ると、粟田宮は春日末の北にあり、東へ遷座したというものの、その位置は鴨川に近く、距離的にはあまり動いていないことがわかる。粟田宮の南には宝莊嚴院の領地が広がる。後に東寺領となる宝莊嚴院は、現在の聖護院東寺領町に比定できることは、第4章で述べた。

また、この訴訟に関連するものとして宝莊嚴院の所司らが、以前のように用水路の設置を認めるように訴えたときの文書がある^{*)}。このなかで粟田宮の洪水被害が用水路によるものではないことを

去今兩年之洪水者、越河原大堤、浸東西高岸畢、必不限彼一所

と主張し、洪水被害が必ずしも用水によるものではないことを訴えている。この文書からも粟田宮は河原の大堤より東であったものの、一段高くなっていた高岸より西にあったことがわかる。このほか、天理図書館吉田文庫の『粟田宮文書』に、寿永3(1184)年の「粟田宮御敷地境内事」、応永33(1426)年の「粟田宮神領所領目録」、嘉吉元(1441)年の「粟田宮々地四至目録」がある。これらの文書は粟田宮の北を中御門大路、南を大炊御門、東を女院高岸、西を河原とし、南限以外は図4-2とよく一致している。北限を中御門末、西限を河原とすることに異論はない。東限の女院高岸は、前述の洪水で浸水した高岸と同じものと思われる。

なお、『吉記』寿永3年4月15日の条には、白河北殿をさして「保元合戦之時彼御所跡

也。當時為=上西門院御領-」とあり、粟田宮の社地の東は上西門院御領であった。女院高岸の名もこれに由来するも可能性がある。また、京都大学構内で医療短期大学部校舎新営にともない実施した発掘調査で、平安中期の高野川系流路の護岸を検出している〔岡田・宇野78〕。女院高岸は少なくともこの発掘調査地点より西と考えられる。

以上の結果から、嘉禎の遷座は粟田宮の敷地内を移動した程度にとどまるものと考えられる。そして、粟田宮は創建当初も嘉禎の遷座後も、春日末の北、中御門末の南で、鴨川の堤防と、本来の河岸であった高岸のあいだの後背低地にあったと考えられる。度重なる洪水被害もこうした状況を裏付ける。

承元元(1207)年、建武元(1334)年に焼亡しているが、文和3(1354)年の再興後荒廃する。社務は吉田社の神官ト部氏がつとめ、僧官は青蓮院がつとめた。

この吉田社の瀬宜鈴鹿家に、『鈴鹿家記』とよばれる年代記が伝わっている。延元元(1

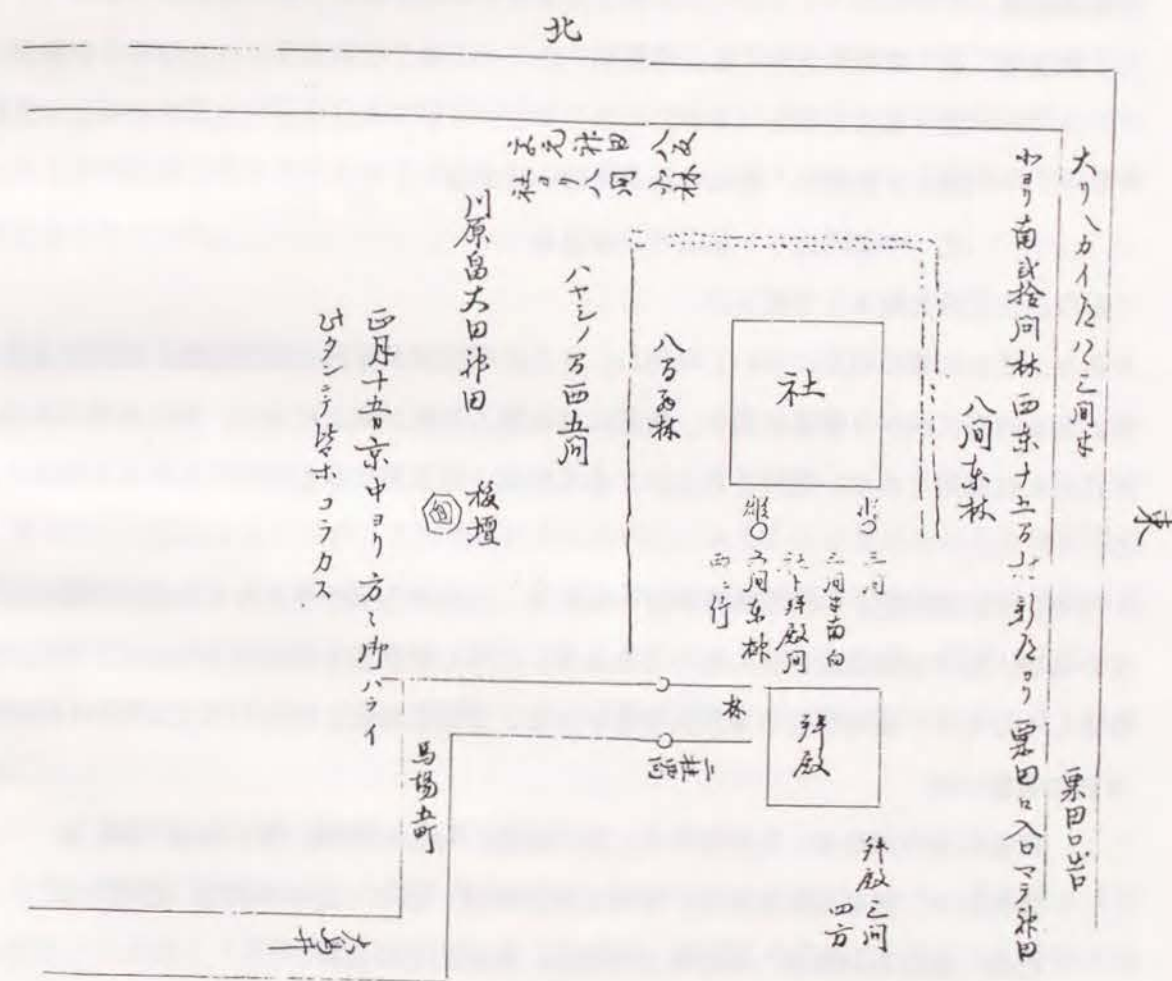


図5-1 粟田社平面図(『鈴鹿家記』所収)

336)年から慶長四年(1599)までの断簡を集めたものである。文献史の常識として、日記には偽書が極めて少ないと考えられているが、この鈴鹿家記は人物名が日記の時期と対応せず、信頼性に欠ける部分があるが、記述は詳細で年代を改竄したのではないかと考えられる。『鈴鹿家記』の永享2(1430)年8月朔日の条には、

御本所大田大明神ノ御講尺少被遊大田神社何間ニナン間御座候哉隆則三間ニ
三間半ニテ賀御座候拜殿三間四方祓タント拜殿ヨリ百拾間御座候間ハ松杉諸
木森ノ東三間半粟田口ヨリ大リヘノ海道ニテ御座候(中略)

とあり、吉田社の神官ト部氏が大田神社の社殿の規模を尋ねている。大田神社は粟田が大田と転訛したもので、粟田社の社殿は3間×3間半であり、拝殿や祓壇のあったことがわかる。『鈴鹿家記』の同年8月16日の条には、後世の付箋が貼られ、粟田社について、
粟田社 崇徳天皇 宇治ノ悪左符 六條ノ判官爲義

右御勸請

四至境 東 御所ノ芝所 私云不分明

西 加茂川根リ(本マ)

南 大炊通り 私云今森ノ南西へ行道也

北 中御門通り 私云今ノ車道也

右白川三位雅光殿ヨリ考被下之

とあり、その社領の四至について考証し、さらに平面図が添付されている。それによると、東と北を内裏に向かう車道が通り、境内には本殿と拝殿が南北に並び、西に祓壇がある。年代的には信用できない資料であるが、ある時期の粟田宮の状況を示していると考えられる。

なお、『鈴鹿家記』の同年8月28日の条には、大田神主畠中重光などの名があげられているが、畠中は聖護院在住のものであろう。こうした状況を裏付けるものに、年代的には新しくなるが、室町幕府の奉行人奉書がある。『兼右卿記』所収の天文3(1534)年10月4日の奉書には

粟田宮境内田地事、為神供料所、異干他処、号山村之儀、度々背御下知、及
違乱云々、言語道断次第也、早停止非分競望、去年・去々年貢等、厳密可致
社納、猶以為同篇者、可有異沙汰之由、所仰出之状如件、

天文三十月四日

(飯尾)貞広判

(飯尾)為完判

畠中次郎兵衛殿

とある。粟田宮の境内の田地をめぐる、聖護院の実力者畠中氏に室町幕府から奉書が発給されており、『鈴鹿家記』の記事を裏付ける。

(4) 人喰い地蔵と崇徳院

応仁2(1468)年、粟田宮は兵火にかかり、一時廃絶したが、近世にはその古跡と称するものが祀られる。その位置について、『雍州府志』は聖護院の西北で「崇徳」の地名のある所とし、『山域名勝志』は粟田宮と崇徳院御影堂を聖護院の森の西北で車道の南で、崇徳院のなまった「ヒトクイ」とよばれている所とする。『花洛名勝図絵』も同じ位置を示すが、そこに人喰地蔵が祀られているとある。これらの崇徳院の古跡の位置を具体的に示すものとして、「聖護院村畧図」がある。この図は富岡鉄斎が幕末のこの地一帯の様子を描いたもので、車道と崇徳院宮陵と人喰地蔵などが書きこまれている。この図の車道に相当する道の遺構を2次にわたる発掘調査で検出しており〔岡田・上原77, 岡田・宇野78〕、近世の崇徳院古跡は京都大学附属病院の精神科病棟の東あたりに比定でき、当初の粟田宮とはまったく別の位置に祀られたものである。なお、現在この人喰い地蔵は、聖護院の中の積善院に祭られている。

4. 吉田社と吉田若宮

(1) 応仁の乱と吉田社

神楽岡は吉田山ともよばれ、その西側斜面に吉田社がある。吉田社はもともと神楽岡の西側の麓にあった。その旧地については、京都大学教養部構内南半部から、その東側の吉田中大路町あたりに比定されている〔川上77〕。応仁の乱で焼亡した後、文明16年ごろ、現在地の吉田山(神楽岡)中腹に遷座される。『親長卿記』の文明17(1485)年4月2日の条に、

件斎場所自御台近日再興、造営神楽岡上

とあり、日野富子の助力により神楽岡に斎場所が再興されたことがわかる。斎場所は「日本国中三千余座」「天神地祇八百万神」などを祀り、藤原氏の氏神である吉田の本社とは性格を異にするものである。

(2) 吉田社斎場所について

大治2(1127)年7月に、法勝寺西門より神楽岡に至る大路が完成したことは前述した。この法勝寺の西側の道を、北に延長すると吉田社の斎場所の正面にあたる。斎場所が現在地に造営されたのは、応仁の乱後の文明16年ごろのことであるが、斎場所の造営に際し、この南北路を正面に平面計画の軸線を設定した可能性がある。吉田の本社などが真北からやや東に方位をふるのに対し、斎場所はその軸線をほぼ真北に取る。斎場所を造営したときに、法勝寺西大路がどの程度依存していたのか、斎場所の造営に関わった吉田兼俱が、白河の条坊地割をどの程度意識していたかは不明である。

(3) 吉田若宮について

南北朝期に南朝に従い、藤原北家勧修寺流吉田氏は吉田の地を退転していく。吉田氏の退転については次節で考察するが、これと前後して、教養部西半から医学部にかけて、春日若宮が遷座されてくる。春日若宮は、藤原氏の崇敬のあつかった春日四神のうちの比売神と母子神をなす天忍根命を祭神とする。吉田春日でも当初は四神とともに祀られていたが、延元元(1336)年に、吉田(卜部)兼熙が別院を建て若宮だけを遷座した。この春日若宮の遷座地を、『京都坊目誌』は字堀の内の北部とする。

京都大学医学部構内で実施した発掘調査(図1-3-134地点)で、春日若宮に関連する可能性の高い遺物を検出した。134地点は字堀の内の北端にあたり、遷座地に比定しうる。若宮の神殿などの遺構は検出していないが、井戸SE2からは、口径が24cmにもおよぶ大型の土師器皿や須恵器すり鉢、瓦器鍋のほか、整理箱15箱におよぶ土師器皿・椀が出土した。いずれも14世紀中葉のものである。口径が20~24cmの皿は、京都市上京区の賀茂別雷神社で用いられる神饌の容器の大ヤツカサ土器に酷似し、盛器として特異な用途を推定できる。

井戸SE1からは、15世紀中葉ごろの遺物とともに、木枠内から銅製の片口付き鍋が出土した。神饌の容器にふさわしい大型の特異な土師器皿や、大量の土師器皿・椀など、14世紀中葉の遺物が出土した井戸SE2は、春日若宮にかかわる遺構の可能性が高い。春日若宮は応仁の乱の兵火により炎上し、応仁2(1468)年には、本宮とともに神楽岡に移された。SE1も15世紀中葉ごろの井戸であり、応仁の乱前後の年代を示す。銅製の片口付き鍋も神事でよく用いられるものであり、神楽岡遷座直前の吉田若宮にかかわる遺構の可

能性がある。

5. 藤原北家勧修寺家流吉田氏の菩提寺浄蓮華院

浄蓮華院は正治元(1199)年に、藤原北家勧修寺流の吉田経房が建立した寺で、経房の死後は彼の菩提所となった寺である。この浄蓮華院や勧修寺家の吉田の別業については、中村直勝の研究がある[中村直勝41]。その中で中村は、経房がさして広くもない吉田の所領を、細分して子孫に譲ることにより、浄蓮華院がすたれることのないように配慮していたことを明らかにしている。しかし、こうした配慮もむなしく、建武4(1337)年に氏の長者吉田定房が南朝に従い吉野に移ったことにより、浄蓮華院は、その有力な支持基盤を失い、寺勢が衰えたようである。『建内記』嘉吉元(1441)年9月7日の条には、浄蓮華院の僧尊悟房に土一揆が押し寄せている。

修造のための勧進興行も、何度かおこなわれており、『康富記』の嘉吉3(1443)年5月には、

六日、……明日より近衛河原において、浄蓮院勧進のため猿楽あるべきなり。

諸奉行寄合いの栈敷五間あり。……

七日、……鷹司河原において、勧進猿楽今日よりこれを始む。観世太夫舞うなり。吉田浄蓮華院修造の勧進なり。かの寺の坊主、飯尾肥前弟の律僧なり。

……言語道断の壮観なり。……

と、近衛末や鷹司末の河原で、猿楽の勧進興行が大々的におこなわれている。

しかし、応仁の乱によって炎上してからは荒廃をきわめ、その所領も、吉田(卜部)兼俱の率いる吉田社に蚕食され、ついには吉田社領に組み込まれてしまう。浄蓮華院の寺域が、吉田社に押領されていく過程は、第6章で詳述する。

この浄蓮華院の位置については、『山城名勝志』に

吉田村北口三町許西也、今田字號浄蓮華院

とある。吉田村の北口から3町ばかり西といえば、医学部構内の北半部にあたる。近世には浄蓮華院という字名も残っていたようである。『京都坊目誌』は、浄蓮華院の位置を

字腰前。字窪の南に當る。

とする。字腰前は医学部の北側の字であるが距離的には近い。字窪は医学部の南半部にあたり、「字窪の南に當る」の記述は誤りである。いずれにしても、医学部北半一帯のほぼ同じ場所、すなわち、土御門大路末の北、仏所小路の西のあたりに比定できる。この比定

地付近で実施した発掘調査には、京都大学医学部構内A018区の調査〔泉・吉野79〕，A
P19区の調査〔清水・吉野81〕，A021区の調査〔泉83〕などがある。これらの調査区に
共通して言えることは、14世紀の中葉から後葉を境に遺構や遺物の出土量が減少する事
である。吉田定房が吉野に移った1337年以降、浄蓮華院の勢力が衰えたためと考えられる。
また、室町後期以降に耕地化することも指摘されているが、こうした状況は浄蓮華院が吉
田社領に組みこまれ、耕地化していった状況とよく対応する。

第3節 白河に営まれた邸宅と在家

1. 文献に見る白河の邸宅と在家

六勝寺や、院の御所と御堂の造営にともない、別業の地であった白河にも貴賤を問わず
多くの邸宅や住居が営まれた。本節では、数多くの焼亡に関する古記録をもとに、邸宅や
在家の分布や、住み分けについて考察する。

(1) 焼亡記事に見る邸宅

『本朝世紀』久安4(1148)年3月10日の条には、白河北殿の北側にあった御所預東市正
正経宅と、故民部卿顯頼宿所并小屋が焼失したとある。民部卿藤原顯頼は、白河法皇の近
臣で「天下之政此人一言也」と称された顯隆の子であり、父親同様に鳥羽法皇の近臣とし
て権勢を振るった人である。白河北殿北辺、すなわち一等地に邸宅を構えていたことがわ
かる。なお、『本朝世紀』久安5(1149)年6月19日の条にも、

白川焼亡有、白川殿御所預東市正正経宅云々

とあり、白河殿御所預東市正正経宅は翌年も焼亡している。また、『本朝世紀』久安5(1
149)年6月9日の条には、

白川延勝寺辺有失火事、一院令臨幸御、侍臣纔兩三人*從、余焰雖付

延勝寺大垣、雜人打消了、件火自駿河守雅教宿所出来也

とあり、延勝寺のすぐ傍らにも邸宅の営まれていたことがわかる。

近衛末の南には、源頼政の邸宅があった。源頼政は以仁王を奉じて、平氏追討をはかり、
敗れて宇治平等院で自刃した武将である。『山槐記』治承4(1180)年5月22日の条には、

東北方有火、頼政入道家近衛南河原東云々、暁逃去、不令為見其跡、

自令指火云々

とあり、近衛末南で河原に近いあたりに邸宅を構えていたことがわかる。『吾妻鏡』治承
4年5月19日の条には、

源三位入道、近衛河原亭自放火

とあり、近衛河原亭と呼ばれていた。

一方、『平家物語』には、

故近衛院后太皇太后宮と申せしは大炊御門右大臣公能公の御女なり、先帝に

おくれ奉らせたまひて後は近衛河原御所にぞ移らせたまひける

とあり、近衛河原御所も近衛河原にあった。

(2) 焼亡記事に見る在家

『山槐記』元暦元(1184)年8月14日の条には、藤原実定の近衛末北の白川家が焼亡した
ことが見える。『明月記』寛喜2(1230)年11月28日の条には、

大相府近日又歎喜光院北実保狂女宅之近辺東西南北二町、俄被追立在家、

可被立堂之由、居住等哭泣云々

とあり、歎喜光院の北側に民家がせまっていたことがわかる。

『中院一位記』康永元(1342)年3月20日の条には、法勝寺が飛び火で焼亡したときの経緯
が書き残されている。そこには、

勘解由小路仏所小路咄法印宿所火出来云々

とあり、同日の『光明院宸記』には、

件火起自当寺北七八町外人屋失火

とある。このふたつの記事は法勝寺の位置から、仏所小路が今朱雀の一筋西に当たると考
えられているが〔福山43〕、これに従うと出元の勘解由小路仏所小路は京都大学附属病院
東構内の東北部にあたる。

寛喜3(1231)年8月1日に、尊勝寺の東塔が焼け落ちている。『百練抄』同日の条には、

法勝寺西方在家火事。餘炎及尊勝寺五重塔。拂地焼失。

とあり、尊勝寺の塔が焼亡したことを記し、『明月記』の翌日の条には、

暁火件塔焼了、適非銅盜之所為、二条之南有少々在家、其敵放火之間焰付塔云々

とある。尊勝寺の東塔が、二条の南の在家からの飛び火で、焼失しており、尊勝寺の南、
法勝寺の西、円勝寺と成勝寺の近辺に在家があったことになる。

『師守記』貞治3(1364)年3月5日の条には、

今夜亥の刻、白河法勝寺辺□(葛)小路焼亡、在□(家)廿余間焼失とあり、在家廿余戸が焼失している。

以上のような例から、六勝寺と、院の御所と御堂の周辺、および近衛大路末の近辺に、生活の営まれていたことがわかる。

2. 藤原北家勸修寺家流吉田氏の邸宅

医学部構内から教養部構内北半の一帯の地には、文献から、中世において、藤原北家勸修寺流吉田氏の所領や吉田神社の社領が存在したことがわかる。これらは、南北朝の動乱や応仁・文明の大乱を経て変転し、やがて吉田構を中心とする近世の景観の基盤が形成されてゆく〔浜崎83b〕。

勸修寺流吉田氏は、正治2(1200)年に薨った吉田経房以来、吉田を号しており、このころには吉田に定住していたと考えられる。この吉田経房以降の累代の所領処分状により、吉田南亭、吉田園領、吉田角家地などが存在したことがわかる〔中村直41〕。後に一族の菩提寺となる浄蓮華院は、『山城名勝志』、『京都坊目誌』によれば、医学部構内の北側の字腰前あたりに比定される。医学部構内A O 18区(図2-13)やA P 19区、教養部構内A P 22区(図2-3-上)では、13~14世紀の邸宅跡が発見されており、教養部西半から、医学部構内にかけて、吉田氏の所領であったと考えられる。

ところが、14世紀の中葉から後葉にかけて、遺構や遺物の出土量が減少する。これは、建武4(1337)年、氏の長者吉田定房が南朝に走り、吉野に移ったため、調査区一帯に存在した吉田氏の邸宅や浄蓮華院が、南北朝の動乱を機に衰亡したことを示すものであろう。後述する土砂の採取のための不定形土坑が、医学部構内で検出される時期は、この吉田氏の退転の時期に一致し、土地利用のうえでも、権利関係のうえでも、空白状態となった機をのがさず、黄灰色シルトを採取した結果である可能性が強い。

3. 西園寺公経の吉田泉殿

吉田泉殿は、京都市左京区の百万遍知恩寺の西南の字泉殿に比定されている。ここは白河扇状地の扇端部の湧水線にあたり、地下水位が高い。知恩寺の西には沸々という字がある。『花洛名勝図会』には

百万遍の西門前の畠の字なり。この地はじめは沼にして地中より水涌き出でて

ふつつつといひしゆゑに土人の野号なりといふ。

とあり、こうした地勢が泉殿の名称の由来になった可能性もある。

『山城名勝志卷第十三』*9は

鴨川ノ東昔吉田社西北有_二號_一スル泉殿-田地_上水石跡殘レリ

とし、『京都坊目誌』は、

吉田ノ院と云ふ名跡志に在_二牛ノ宮ノ北一町許_一。是れ古へ庭池の跡也。

今云ふ所。方三間許なり。古老云ふ。二十年前。猶池ありしと。

とする。いずれも、百万遍知恩寺の西南の字泉殿に比定している。

ところが、吉田泉殿の由来については、かなりの混乱がある。『花洛名勝図会』は泉殿の位置を

牛の宮の北一町ばかりにあり。今いふ所方三間ばかり、これいにしへ庭前の池の趾なりとぞ。

としながら、

この所は『園太暦』に載する御二条帝の仙宮白河の泉殿の古跡なりとぞ

と、後二条帝の仙宮の跡とする。

吉田泉殿の由来が混乱しているだけでなく、造営時期も不明確である。『明月記』建永2(1207)年5月26日の条に、

昨今聞、白河行隆辨宅跡可被立御所、依泉與也、白河今世衰微之所、興立頗無由歟、

とあり、同記嘉禄2(1226)年5月27日の条にも、

幕下被向吉田泉、帰路之次云々

とみえ、これ以後しばしば同記に登場する。『百練抄』建長7(1255)年6月5日の条には、

院御_二幸吉田泉殿_一。殿上人御隨身等有_二五番競馬_一云云。

と競馬を催している。『帝王編年記』文永2(1270)年6月4日の条にも、

於_二吉田泉_一公卿殿上人。御隨身。七番競馬。一院新院御幸云云

とある。『井蛙抄』には、

後嵯峨院ノ御時。吉田の泉にて。御連歌ありけり云云

と、連歌の会を開いている。『増鏡』*10にも、

正嘉3(1259)年よし田の院にても。つねは御うた合なとし給ふ云云

とある。後嵯峨上皇が何度も吉田泉殿に御幸し、連歌や競馬を楽しんだことがわかる。

吉田泉殿が衰退していった時期も、不明確である。いつのまにか、吉田社領となり、永

徳四年（1384）2月の吉田社の文書に和泉殿の名がある。

第4節 白河における生業の遺構

六勝寺という官寺に準ずる大寺院や、院の御所と御堂が続々と営まれた白河の地も、都市として発展し、時がたつにつれ、多くの在家が造られ、様々な生業が営まれた。例えば、陶土や壁土、または白砂を供給するための土取りは、条坊地割りのあちこちでおこなわれていたが、土取りは耕作地もしくは空き地でしかできない。このため、土の採取跡の範囲や時期を調べると、空閑地であった部分を知ることができる。本節では、こうした視点から、白河の条坊地割の中で繰りひろげられた人々の営みについて考察する。

1. 土砂の採取について

(1) 文献にみる土の採取

京都大学構内から岡崎にかけて、白河の名称の由来となった花崗岩砂が厚く堆積する。また、場所にもよるが、砂層の下層に良質の粘土の堆積しているところがある。これらの粘土や砂は、土器、瓦、壁土、庭園の撒き砂などとしての需要があり、時代を問わず、随所で採取している。京都大学構内でも、平安時代末期の粘土の採取跡〔泉・宇野ほか77〕から、江戸時代の大規模で組織的な土の採取跡〔五十川・浜崎ほか89〕まで、様々な遺構を検出している。

『明月記』建保5（1217）年2月8日の条には、

垂相又水瀬殿山上造営新御所、為眺望耳、此前後土木、惣盡海内之財力、

又引北白川白砂云々、遠近驚耳、振作白砂之運云々、

とあり、後鳥羽上皇の水瀬殿新御所に北白川の白砂が敷かれ、人々の耳目を驚かせている。白川の白砂の需要は高かったものと思われる。

白砂だけでなく、黒谷・岡崎一帯の土は陶土として取り引きされ、重宝されていた。陶土に関しては、近世の史料しかないが、『毛吹草』（寛永15（1636）年刊）は、

黒谷 茶入合土漠ノ土ニ似云

と、黒谷の土が唐物に似ているとし、『森田久右衛門日記』（延宝6（1678）年刊）は、

しがらき焼はぜ出申様は、あわた口焼手申様は、黒谷土すいひ仕り、

すな入申候へば、如此はぜ出申す由

と、黒谷土に砂を混ぜれば、信楽焼のように爆ぜる（はぜる）としている。

尾形乾山の記した『陶工必用』（元文2（1737）年刊）の「本窯焼土之覺」には、

黒谷土ニ山科石加へ水ヒ致候ませ加減有

洛東黒谷紫雲山金戒光明寺前より数年掘出候 上白土中白土下ヲさや土ト申候

又赤土在各用来候 上品ノ具ニハ上白ヲ中下各其器ノ品ニ応用候

とあり、金戒光明寺の門前を中心に黒谷土を採取していたことがわかり、また、

京ノ地ニテハ黒谷門巷人家ノ下ヨリ多ク年久敷掘出候

と、人家の下から採取していたことがわかる。

また、『伊藤陶山所蔵文書』には、

江州野洲郡南櫻村にて御用御茶碗工用の土取場九右衛門勤中、元禄十年関東より

被下置有之候へ共、粟田の里より道法十里餘有之、御用不便利に付、寶曆八寅（一

七五八）年右土取場返上、其の後洛東岡崎村辺にて地主相對を以土買取

とあり、粟田焼きの窯元である伊藤九右衛門が、近江国野洲郡から、陶土を買い求めているが、あまりに遠く、岡崎近辺で地主と交渉して、陶土を入手するようになったことがわかる。また、『菟藝泥赴』には、

熊野社より十間ばかり西をほりて河の彦四郎土をあきなえり

とあり、熊野社のすぐそばでも土取りのおこなわれていたことがわかる。

(2) 土砂の採取跡の遺構

京都大学構内においては、砂を採取の対象としたものと、粘土を採取の対象としたものの2種があった。時期も中世のものと近世のものにわかれる。75・89・90・110地点では中世の砂の採取跡を、74・134・139・143地点で中世の粘土の採取跡を、154・155・169地点で近世の大規模な粘土の採取跡を検出している（図5-2～4）。掘り上げた土量から見て、個人的に使用するためのものではなく、職業的に、かつ計画的に掘削したものと考えられ、土取りの職人の存在を窺わせる。以下に、その代表的な遺構をかかげる。

図1-3-134地点では、中世の粘土の採取跡を検出した（図5-2）〔五十川86〕。現地表の標高は、51.4m前後であり、ほぼ水平である。土の採取跡は表土の直下で検出し、調査区のほぼ全域に分布する。これらは、出土遺物や埋積状況から、14世紀前葉から中葉ごろに掘削され、時をあけずして埋め戻されたと思われる。たがい大きく切り合うこと

なく、接するように検出されることや、砂礫層が高く、黄灰色シルトがない調査区東南部には存在しないことから、黄灰色シルトを採取するための土取り穴と考えられる。調査区の北西部で、ほぼ同形の掘形を示し、一連の掘削によるものと判断できるものも存在するが、概して、その形状や大きさは一定ではない。その埋積状況をみると、埋土が西から東に傾斜しており、西側から数段階に土砂が流入したことを物語る。黄灰色シルトより上の土層を既掘の不定形土坑に埋め戻しつつ採取作業をおこなったとするならば、黄灰色シルトの掘削が、東から西におよんだと推定できよう。

134地点で検出した中世の遺構は、層位的にはシルトの採取がおこなわれる以前の井戸SE3・SE5、シルト採取による多数の土の採取跡、そしてそれが埋積して以後の井戸SE1・SE2・SE4と土坑SK1とにわけることができる。土の採取は、SE3・SE5を使用していた人々が、一時的または長期に渡って不在な状態を待っておこなわれたと考えられる。同じ医学部構内AP19区〔清水・吉野81〕で検出した同時期の多数の不定形土坑も、これと一連のものであろう。しかし、黄灰色シルトの分布する教養部構内AP22区〔五十川・飛野84〕では、不定形土坑をまったく検出していない。これは、14世紀前半ごろには、現在の京都大学医学部構内東半部が、黄灰色シルトの採取をまったく妨げるものがない、土地利用のうえでは、空白の地となっていたことを示すものと考えられる。藤原北家勧修寺家の南朝・吉野への退転との関連を検討する必要がある。

近世初頭の土の採取跡（図1-3-169地点、図5-3）〔浜崎90〕や、江戸後期の土の採取跡（図1-3-155地点、図5-4）〔五十川・浜崎ほか89〕でも、同様の状態であったと考えられる。

（3）土砂の採取方法

土の採取については、東大寺文書の中に、大和国大乘院窪庄の百姓が、一乗院に採取の停止を訴える一文がある〔奈文研82〕。また、文明4～5（1474～5）年に、薬師寺阿弥陀院領の水田で裏作に麦を作っていたところ、どのような権門の所領であっても、冬季の水田の土は採取できるとの主張のもとに赤土器座主が土を掘り取ったため相論となったことが『大乘院寺社雑事記』にみえる〔豊田35〕。これらの土は、いずれも土器製作の原料として採取されたものである。本調査区の黄灰色シルトの用途を特定することはできないが、土の採取は、周辺の人々の生活や権利関係と、密接に関連しつつおこなわれたことが想定できる。

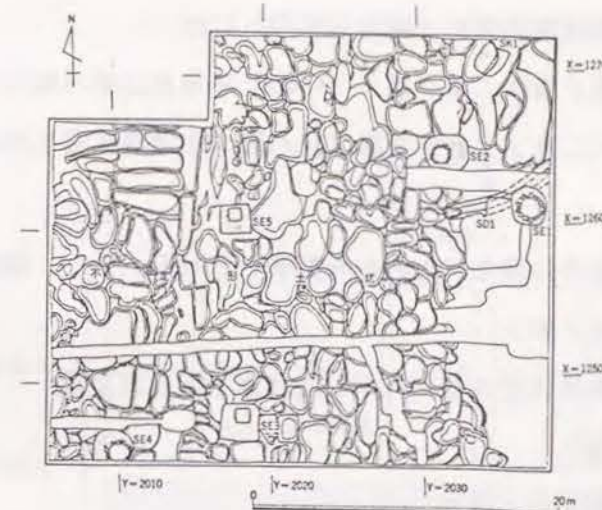


図5-2 中世の土の採取跡
（〔五十川86〕所収）

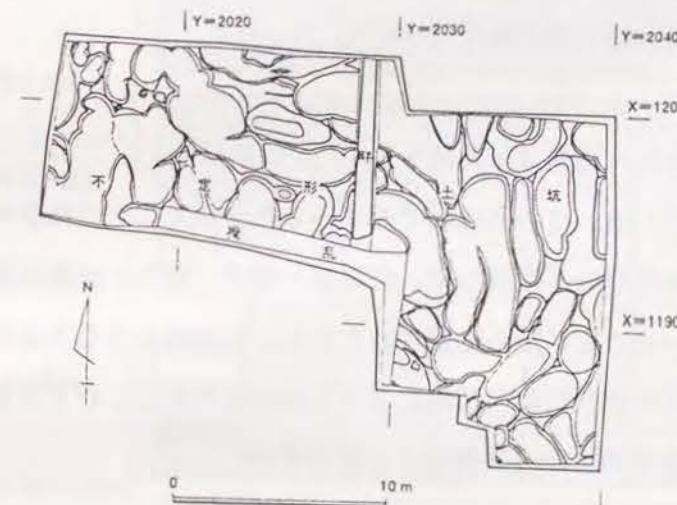


図5-3 近世初頭の土の採取跡
（〔浜崎90〕所収）



図5-4 近世の土の採取跡
（〔五十川・浜崎ほか89〕所収）

砂や粘土の採取方法について、『陶磁器説図』（明治五年刊）には、

山麓或ハ山頭ニ方六尺ノ穴ヲ掘リ漸次ニ深く掘ル（中略）平地及山頭ハ圓穴ヲ掘ル（中略）深十尺ヨリ三十尺ニ及フ 若シ水脈アレハ豎ニ水道線ヲ掘リ穴底ニ水溜ヲ作り溜水ヲ汲去ル

とあり、検出した土の採取跡がどのように穿たれたのかを髣髴とさせる。また、同書には、

通常東山邊ニテ掘り来ル方法左ノ如シ

第一層 黒赤土アリ東山土ト称ス壁ヲ墾ルニ用フ此土厚三四五尺及至一丈許ノ間一層ヲ為ス

第二層 淡灰色土出ツ瓦ヲ製スルニ用フ

第三層 巴初刺邦土出ツ或ハ陶器ニ用ヒ或ハ石灰ヲ合セ三和土ニ用フ厚一二寸ヨリ一尺ノ間一層ヲ為ス

第四層 陶土及道具土出ツ

右土質ノ層ト厚薄トハ其地ニテ異同アリ

と、土層ごとに土の用途を区分している。この調査区でもこうした方法で、土の採取がおこなわれたのであろう。なお、土の採取は「散所法師、河原者、穢多、非人」が壁土掘り、運搬、壁塗り、築地塀造りに携わったことが明らかにされている。以上のような不定形土坑の分布から、ある時期に権利関係が空白に近い状態にあった地域を知ることができる。とともに、当時の人々のたくましい生活力をかいま見ることができる。

第5節 小 結

白河の条坊地割の中核部分は、六勝寺や院の御所と御堂がその骨格部分を占め、国家レベルでの取り扱いを受けていた。その一方、こうした処遇は受けなかったものの、条坊地割り以前から白河の地に祭られていた寺社や、人々の邸宅や住居、そして、そこで生活する人々の生業が、条坊地割りの中で営まれていた。本章では、こうした寺社や邸宅、生業などに焦点をあて考察し、条坊地割の一面を構成するこれらの要素について、以下のようなことが明らかになった。

①条坊地割に先行し、9世紀末に建立された東光寺の位置は、法勝寺の北で、西面をとくに法勝寺西大路に接し、大炊御門末の北側で鎮守社の東天王社と並んでいたと考えられる。



図5-5 白河の諸社寺の位置の復原

- ②東天王社に対峙していた西天王社は、尊勝寺の北、今朱雀と尊勝寺東大路の間にあったと考えられる。
- ③崇徳天皇の霊を鎮めるために祀られた粟田宮は、賀茂川のすぐ傍らで、北は中御門大路末、南は春日小路末にあったが、度重なる洪水被害を避けるため、東に遷座している。遷座した場所は、当初の場所とあまり離れていなかった。
- ④吉田社の旧地は京都大学教養部構内に比定されているが、今のところ明確な遺構は検出していない。吉田若宮は医学部東端に比定できる。
- ⑤藤原北家勸修寺家の邸宅は、教養部構内西半から医学部構内にかけて、勸修寺家の菩提寺である浄蓮華院は医学部北端から、その北の字腰前の辺りに比定できる。
- ⑥条坊地割のあちこちで、土の採取がおこなわれていた。土の採取は近世まで続いているが、基本的には、耕作地や空き地を利用しており、土の採取がおこなわれたときには、都市空間として空白の場所であったと考えられる。

*1 『保元物語』「新院御出家のこと」

*2 RITZ OKAZAKI新築工事に伴う発掘調査で、京都市埋蔵文化財研究所の堀内明博氏にご教示頂いた。

*3 『後鑑』応永3(1396)年12月18日の条「前將軍被附近衛以南於聖護院」

*4 「拾遺都名所図会 卷之二」『日本名所風俗図会』注149

*5 『平家物語』卷十、寿永3年4月3日

*6 『吉記』寿永3年4月15日の条(『史料大成』所収)

*7 『源平盛衰記』彌卷 第四十一

*8 「東寺百合文書ケ五十九之六十二」

*9 『山域名勝志』卷第十三

*10 『増鏡』おりゐる雲卷

第6章 白河の都市的衰退

6-1 はじめに

6-2 天災と人災

6-3 戦乱と白河の荒廃

6-4 吉田社による浄蓮華院領の押領

6-5 小 結

第6章 白河の都市的衰退

第1節 はじめに

1. 院政の終焉と白河の衰退

六勝寺や、院の御所と御堂が栄華を誇ったのも、わずかな時期であった。衰退した理由はいくつか上げられる。ひとつは、白河・鳥羽で大々的に進められた造寺造仏を支えていた院政の衰退である。六勝寺をはじめ、院の御所と御堂の造営は、そのほとんどを受領の成功に頼りきっていた。このため、院政の崩壊と、武家の台頭による受領の衰退は、白河の御堂や御所の造営はおろか、その維持にすら大きな影響を与えた。天台座主慈円は『愚管抄』の中で^{*1}

保元元(1156)年7月2日、鳥羽院ウセサセ給テ後、日本国ノ乱逆ト云コトハ
ヲコリテ後ムサノ世ニナリニケルナリ

と述べて、時代が武者の世に転換したことを明確に示している。

さらに、地震・落雷・強風などの天災と、治安の悪化と人心の荒廃による人災が、衰退に拍車をかけた。堂塔の飾り金具欲しさに放火した例すら見受けられる。

また、白河の条坊の北部では、藤原北家勸修寺家流吉田氏が、南朝に従い、吉田から退転したため、所領としては空白の地が出現したりしている。

このように、衰退・疲弊していた白河に、壊滅的打撃を与えたのが、応仁の乱であった。この乱により、六勝寺や、院の御所や御堂は壊滅し、耕地化していった。本章では、白河が都市的に衰退していく過程について考察する。

2. 伽藍宝塔ことごとく灰燼となす

天皇制を支えてきた公家・社寺勢力と、武士勢力の力関係に大きな変化があったのは、承久3(1221)年のことである。この年、後鳥羽上皇と幕府の対立は頂点に達し、承久の乱が勃発した。この乱は、上皇方の敗北をもって終結し、天皇廃立、三上皇配流という前代未聞の事態を招いた。「むげの民と争いて、君の亡び給へる」^{*2}といった結果となり、これ以後、院政は消滅し、天皇・上皇の意のままに、御所や御堂を大々的に造営する時代は

終わりを遂げる。白河の御堂の荒廃ぶりを目の当たりにして、公家たちの嘆いている姿は枚挙にいとまがない。

『明月記』寛喜3(1231)年8月1日の条には、尊勝寺のわずかに残っていた東塔の焼亡について、

自承暦之比至于承安、予成人始、天下公私満耳造堂塔、及老後只聞其焼失、

不聞造営、雙甍満眼伽藍宝塔悉為灰燼、其跡為荒廃郊原

とある。承暦(1077~81年)から承安年間(1171~75)にかけて、堂塔の造営はあちこちでおこなわれていたが、最近はまったく聞かず、ただ荒れて行くばかりであるのを、藤原定家は嘆いている。

『玉葉』元暦2(1185)年11月16日の条には、

近日、白川辺顛倒之堂舎等、往還之輩偏用薪、此事猶以為罪業之處、於今者、

破取仏像云々、云金色、云彩色、散々打破仏軀、為薪云々、聞此事神心如屠、

雖云末世、争有如此之事哉

とある。記主の九条兼実は、白河の御堂が荒廃し、行き交う人々が御堂の古材はおろか、仏像を薪とするために、散々に破壊していることに憤慨し、嘆いている。

暦応5(1342)年3月20日、法勝寺が近辺在家の失火で延焼し、創建以来最大の被害を受け、存亡の危機に瀕したとき、『光明院宸記』*³も、

仏法、王法共に衰微の時分到来す歟。嘆きて余りあり。

と嘆いているが、如何ともしがたい状況であった。

第2節 天災と人災

院政の崩壊以後、新たな造営が滞った白河の衰退に、拍車をかけたのが天災と人災である。天災は地震、落雷、大風が、人災は治安の悪化と人心の荒廃による放火、盗難などがあげられる。

1. 地震による被害

院政期の造寺造仏の特徴は、規模の桁はずれな点にある。法勝寺の八角九重塔は、承元2(1140)年に再建されたものでさえ、27丈*⁴という異常に高いものであった。尊勝寺と得長寿院には長大な三十三間堂があった。こうした重厚長大な建造物は、構造的な新技術の

裏付けがあったわけではなく、大地震の前にはひとたまりもなかった。

(1) 古記録にみる大地震

六勝寺や、白河の御堂を襲った最初の地震は、元暦の大地震であった。『山槐記』元暦2(1185)年7月9日の条には、

陰晴不定。午剋地震。五十年已来未覚悟。家中上下男女皆衆居竹原下。自去比居住中山蝸舎也。法勝寺九重塔顛落重々、垂木以上皆落地、每層柱扉連子被相残。露盤八残其上折落。阿弥陀堂并金堂之東西廻廊、鐘樓、常行堂之廻廊、南大門西門三字、北門一字、皆顛例(倒)、無一字全。門築垣皆壞、南北面少々相残云々。遣人令見之處、申皆此如。聞得長寿院千体正観音、烏羽院御願 顛倒云々。

とあり、法勝寺九重塔が躯体と柱扉などを残し、大きな被害を受け、阿弥陀堂、金堂の廻廊や、周囲の築垣も大部分が転倒している。『吉記』の同日の条には、

天晴、臨夕陰、午剋大地震、洛中可然之家築垣皆顛、舎屋或顛倒、或傾倚、被打襲死去者多聞、(中略)予家西築垣壞了、後聞今日顛倒所々、(中略)

白河中、

延暦寺(法勝寺)

金堂廻廊、鐘樓、阿弥陀堂、同御所、行堂廊、中門、車宿、門々、

但法華堂不顛、三面築垣等、此外九重塔過半破損、

尊勝寺 講堂、五大堂、四面築垣、西門。此外東塔九輪折落、

最勝寺 薬師堂、三面築垣、

円勝寺 築垣并中御塔九輪破損、

宝莊嚴院 北廊築垣等。

得長寿院 卅三間已以顛、

とある。法勝寺の被害状況は『山槐記』とほぼ同じ内容である。尊勝寺は堂塔の被害が大きい。築垣や廻廊に被害が大きかったのは共通している。得長寿院は、供養後わずか13年で、すでに傾いている。『本朝世紀』久安5(1149)年5月12日の条には、

得長寿院修理間事也、件御堂頗西方傾

とあり、この地震の時点では既に倒壊していた*⁵。この地震後、得長寿院は廃寺となり、荒れ果てた。

(2) 花折断層と白河

大地震に、古い建物が倒壊していくことに不思議はないが、得長寿院の倒壊の仕方は特異である。前述の『本朝世紀』久安5年5月12日の条には、傾いた御堂を

以大木扶持御堂，何不叶哉

と、大木をもって支えようとしている。なぜ、こうした事態に至ったのであろうか。

元来、この白河一帯には、北北東から南南西にむけて花折断層が数条走っている。この内の1本が得長寿院の比定地あたりを走っている(図6-1)。得長寿院が造営後、わずか13年で大きく西に傾いたのは、断層の影響による不等沈下の可能性もある。

京都大学理学部構内BA28区の発掘調査では、地震で液状化した白川砂の層を検出した[浜崎，千葉92]。縄文晩期から弥生前期の遺物を含む黒褐色土粘質土上面で、東-西および南東-北西にはしる多数の地割れを検出した。地割れには黒褐色粘質土下層の砂が噴出しており、この砂はさらに上層の黄色砂まで吹き上げていることを確認した。地震にともなう噴砂であり、黒褐色粘質土より下層の、細砂と粗砂が互層に堆積した白河砂の層が液状化したものと考えられる。地震の時期については、弥生時代中期以降としか判明しな

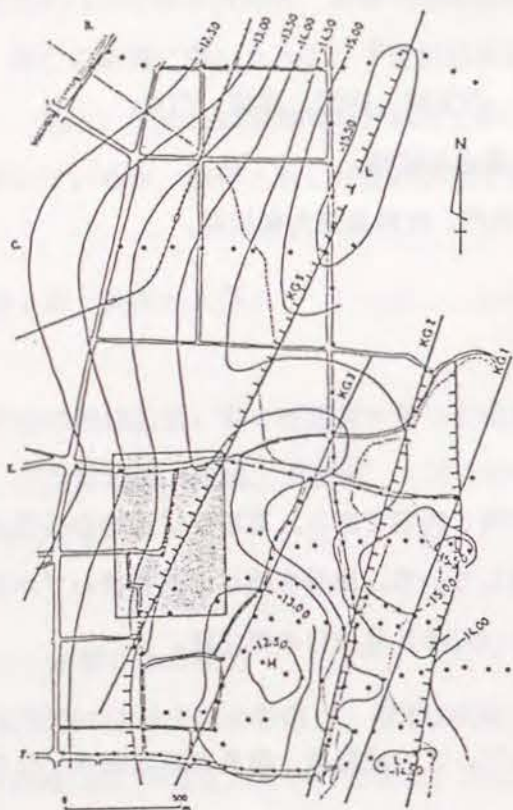


図6-1 ブーゲー異常の図

(〔西田・横山82〕所収)

かった。こうした白川砂の層は、白河一帯に通有のものであり、地盤の液状化現象は、非常におこりやすい状況であり、地震の被害を大きくしたと考えられる。

2. 火災による被害

六勝寺や白河の御堂・御所は、しばしば焼失しているが、自火よりも飛び火が多く、放火も多い。放火は堂塔の飾り金具をねらった盗賊の仕業であり、明らかな人災である。

(1) 失火と放火

『百練抄』承久元(1219)年11月27日には、

巳時、白川祓殿辺焼亡及=数丁-。延勝寺塔并金堂。成勝寺。最勝寺塔三基。

金堂。証菩提院等焼亡。是時鞠負廳焼亡。放火云々。

とある。白川祓殿辺より出火し延勝寺、成勝寺、最勝寺、証菩提院などが罹災しているが、その原因を放火としている。

有名な大火としては、寛喜の大火がある。寛喜3(1231)年8月1日に、法勝寺西方の在家より出火し、尊勝寺五重塔(東塔)が焼け落ちている。『百練抄』同日の条には、

終日風吹。丑刻法勝寺西方在家火事。餘炎及=尊勝寺五重塔-。拂地焼失。

とあり、尊勝寺の塔が焼亡したことを記し、『明月記』の同日の条には、

曉鐘以後車未来之間、南方寄東、有微火、驚見申候間車来、仍帰廬、此間火光劈髯、不幾白河云々、夜半許行啓、女房車寄西南小門、火光忽興盛焰如雪飛、又如雷動有声、雜人説、尊勝寺所残塔云々、此間雨降、

とあり、最初はわずかな火事であつものが、夜になって突然大火となり、東塔が焼け落ちている。『明月記』の翌日の条には、

曉火件塔焼了、適非銅盜之所為、二条之南有少々在家、其敵放火之間焔付塔云々とあり、堂塔の飾り金具などの銅製品を盗むために、放火したことが判明している。人心の荒廃ここにきわまった感があり、藤原定家は前述したように、この火事に関連して、

自承暦之比至于承安、予成人始、天下公私満耳造堂塔、及老後只聞其焼失、

不聞造営、雙覺満眼伽藍宝塔悉為灰燼、其跡為荒廃郊原

と嘆いている。

(2) 暦応の大火

暦応5(1342)年3月20日、法勝寺が近辺在家の失火で延焼し、創建以来最大の被害を受け、存亡の危機に瀕する。『光明院宸記』*⁶の同日の条には、

申の刻、東頗南方炎上あり。法勝寺回禄すと云々。数字堂舎并に九重塔以下焼亡の間、火氣太だ熾盛、(中略)金堂・講堂・塔・阿弥陀堂・惣社・南大門并に阿弥陀堂以下悉く焼失、残る所、五大堂・法花堂・北斗堂・薬師堂・円堂・常行堂等と云々。(中略)件の火、当寺北七、八町外人屋よりの失火と云々。数体の伽藍、九重塔婆、空しく灰燼と成り了んぬ。天を仰ぎ嘆息すと雖も、更に益なき者なり。(中略)金堂・講堂に於いては草創以後、全く其の例なく已に二百余廻 二百六十六年云々。に及ぶ。而して今初めて此の災に遭う。併せて仏法、王法共に衰微の時分到来す歟。嘆きて余りあり。

とあり、法勝寺から7～8町離れた人家の火事から飛び火し、その伽藍の大半を焼失している。さしたる経済的基盤をもたない法勝寺に、その復興はほとんど不可能であった。

この火事について、『中院一品記』の同日の条には、

申の刻許、焼亡あり。法勝寺塔と云々。其の後、金堂・講堂灰燼と成る。先ず勘解由小路、仏所小路、咄法印宿所に火出来と云々。阿弥陀敷堂先ず焼失すと云々。天下の重事、愁歎極りなき者なり。

とあり、その出火場所が、勘解由小路・仏所小路の咄法印宿所であったことがわかる。

『太平記』*⁷には、

康永元年三月廿日ニ、岡崎ノ在家ヨリ俄失火出来テ驍テ焼静マリケルガ、纔ナル細*一ツ遙二十余町ヲ飛去テ、法勝寺ノ塔ノ五重ノ上ニ落留ル。暫ガ程ハ燈籠ノ火ノ如ニテ、消モセズ燃モセデ見ヘケルガ、寺中ノ僧達身ヲ揉デ周章迷ケレ共、上ベキ階モナク打消ベキ便モ無レバ、只徒ニ虚ヲノミ見上テ手撥テゾ立レタリケル。サル程ニ此細*乾タル檜皮ニ焼付テ、黒煙天ヲ焦テ焼ケ上ル。猛火雲ヲ巻テ翻ル色ハ非想天ノ上マデモ上リ、九輪ノ地ニ響テ落声ハ、金輪際ノ底迄モ聞ヘヤスラントヲビタハシ。魔風頻ニ吹テ余煙四方ニ覆ケレバ、金堂・講堂・阿弥陀堂・鐘楼・経蔵・総社宮・八足ノ南大門・八十六間ノ廻廊、一時ノ程ニ焼失シテ、灰燼忽地ニ満リ。

(中略)院ハ二条河原マテ御幸成テ、法滅ノ煙ニ御*ヲ焦サレ、將軍ハ西

門ノ前ニ馬を*ラレテ、回禄ノ災ニ世ヲ危メリ。

とある。飛び火の経過や、被害がよくわかる。上皇も二条河原まで駆けつけ、將軍は西門の前まで駆けつけているが、なすすべもなかったようである。その後、貞和5(1349)年10月にも大火に遭っている。『康富記』応永25(1418)年8月18日の条には、

法勝寺五大堂被造営、近年以外荒廢、仏體被侵雨露之流故、諸国反錢被點了、

西面築地早被築者也、仏達皆転倒之間、自去年冬新仏皆被仰付仏師云々

とあり、この寺の荒廢ぶりが描かれている。

(3) 落雷による火災

高さ約27丈におよぶ法勝寺の八角九重塔をはじめ、巨大な御堂や、高い塔の林立していた白河の御堂には、落雷による焼失もあった。

承元2(1208)年、落雷のため焼亡した法勝寺九重塔が栄西によって修復・再建されるたのは、建保元(1213)年4月26日のことである*⁸。『元亨釈書』*⁹には、

去る承元二年、洛東法勝寺九層大塔災す。門下侍郎藤公経に勅し、修造を監し、予・周二州を其の費に充つ。三年秋八月、猶未だ一級も成らず。朝儀、西の東大の蠡を幹するを居以て付す塔事を以てす。西、辞すを得ず。其の落、亦東大の歳の如し。

とあり、その修造に難儀をしている様子がわかる。

第3節 戦乱と白河の荒廢

1. 南北朝の大乱

院政の終焉とともにその後ろ盾を失い、天災・人災に見舞われ、衰退していくばかりの六勝寺や白河の御堂を、さらに悩ませたのが、戦乱であった。戦乱による被害は、白河の地が戦場となり直接被害を受けるだけでなく、貴族、受領層の経済的疲弊は、御堂の修造や維持をより困難なものとし、さらに、南朝に従った人々が白河の地を捨てて移り住み、間接的に白河の地を衰退させている。

そのうえ、こうした空閑の地を押領しようとする第三者の登場により、事態は一層複雑なものとなる。本節では、南北朝の内乱が白河に与えた影響を中心に、戦乱や、退転の具体的な様子について考察する。

(1) 南北朝の乱と白河

南北朝の乱は、白河とも無縁ではなかった。正慶2(1333)年には、延暦寺僧徒が法勝寺に布陣し、六波羅勢と法勝寺門前で一戦を交えている。『太平記』八巻には、

京都ニ合戦始リテ、官軍動スレバ利ヲ失フ由、其聞ヘ有シカバ、大塔宮ヨリ牒使ヲ被_レ立テ、山門ノ衆徒ヲゾ被_レ語ケル。(中略)山門、已ニ来二十八日六波羅ヘ可_レ寄ト定ケレバ(中略)(両六波羅勢)七千余騎ヲ七手ニ分テ、三条河原ノ東西ニ陣ヲ取テゾ待懸タル。大衆スルベシトハ思モヨラズ、我前ニ京ヘ入テヨカラズル宿ヲモ取、財宝ヲモ管領セント志テ、宿札共ヲ面々ニ三十ツ、持セテ、先法勝寺ヘゾ集リケル。(中略)去程ニ前陣ノ大衆且ク法勝寺ニ付テ後陣ノ勢ヲ待ケル処ヘ、六波羅勢七千余騎三方ヨリ押寄テ時ヲドツト作ル。大衆時ノ声ニ驚テ、物具太刀ヨ長刀ヨトヒシメイテ取物モ不_レ取敢_レ、僅ニ千人許ニテ法勝寺ノ西門ノ前ニ出合、近付ク敵ニ抜テ懸ル。

(中略)山徒ハ皆歩立ノ上、重鎧ニ肩ヲ被_レ推テ、次第ニ疲タル体ニゾ見ヘケル。武士ハ是ニ利ヲ得テ、射手ヲ撰テ散々ニ射ル。大衆是ニ射立ラレテ、平場ノ合戦叶ハジトヤ思ケン、又法勝寺ノ中ヘ引籠ラントシケル、(中略)又法勝寺ニモ敵有トヤ思ケン。法勝寺ヘハ不_レ入得_レ、西門ノ前ヲ北ヘ向テ、真如堂ノ前神楽岡ノ後ヲニ分レテ、只山上ヘトノミ引返シケル。

とある。延暦寺の僧兵が六波羅勢と一戦を交えるために、法勝寺に陣取っている。戦乱にまぎれて、財宝を管領の機会をうかがっており、戦乱時の陣取りはこうした寺社には迷惑ではすまないところがあった。法勝寺の西門前でも戦闘が繰り広げられたが、ついに比叡山の衆は撤退している。この記事から、この時期の法勝寺には、まだ立てこもるのに十分な諸施設が残っていたことがわかる。

(2) 藤原北家勸修寺家の退転

この藤原北家勸修寺家の吉田の別業や、一族の菩提寺である浄蓮華院については、中村直勝の研究がある。勸修寺流吉田氏は、正治2(1200)年に薨った吉田経房以来、吉田を号しており、このころには吉田に定住していたと考えられている。この吉田経房以降の累代の所領処分状により、吉田南亭、吉田園領、吉田角家地などが存在したことがわかっていく〔中村直勝41〕。中村直勝氏は、経房がさして広くもない吉田の所領を、細分して子

孫に譲ることにより、浄蓮華院がすたれることのないように配慮していたことを明らかにしている。

しかし、こうした配慮もむなしく、建武4(1337)年に氏の長者吉田定房が南朝に従い吉野に移ったことにより、吉田の邸宅は遺棄され、浄蓮華院はその有力な支持基盤を失い、寺勢が急速に衰えた。

京都大学医学部構内A018区(図2-13)やAP19区、教養部構内AP22区(図2-2上)では、13~14世紀の邸宅跡が発見されており、医学部構内から教養部構内にかけての一带は、吉田氏の所領であったと考えられる。

これらの遺跡では、14世紀の中葉から後葉にかけて、遺構や遺物の出土量が減少することが報告されており、建武4(1337)年、氏の長者吉田定房が南朝に走り、吉野に移ったため、調査区一带に存在した吉田氏の邸宅や浄蓮華院が、南北朝の動乱を機に衰亡したことを裏付ける。

第5章第4節で前述した不定形土坑が形成された時期は、この吉田氏の退転の時期に一致し、土地利用のうえでも、権利関係のうえでも、空白状態となった機をのがさず、黄灰色シルトを採取した結果である可能性が強い。

2. 応仁の大乱と白河

文正2(1467)年の「御霊林の戦い」^{*10}に端を発した応仁の乱は、応仁元(1467)年5月には本格的な大乱となり、洛中に壊滅的な打撃をあたえた。応仁2(1468)年にはいと戦火は洛外にもおよぶ。『山科家礼記』の応仁2年7月4日の条には、

御敵吉田浄蓮華院発向、之焼言語道断子細也、敵者於吉田七人被打、吉田衆

十餘人被打、(中略)本所文車浄蓮花アツケラル、今日之焼

とあり、吉田の浄蓮華院が焼き討ちを受け、山科家が浄蓮華院に預けていた文車が焼亡している。

8月4日には聖護院と熊野社、法勝寺など岡崎一帯が焼き打ちを受け、11月1日には再び法勝寺が焼き討ちを受け、五大堂が破却され、かろうじて法灯を守ってきた延勝寺、円勝寺、成勝寺、最勝寺、歓喜光院、東光寺、善法寺、元応寺などが、この乱を境に廃絶する。

第4節 吉田社による浄蓮華院領の押領

1. 応仁の乱と吉田の荒廃

文正2(1467)年の「御霊林の戦い」に端を発した応仁の乱は、応仁元(1467)年5月には本格的な大乱となり、洛中に壊滅的な打撃をあたえた。応仁2(1468)年にはいと戦火は洛外にもおよび、7月には吉田郷^{*11}が、8月には聖護院と熊野社が焼き打ちを受け、吉田郷の西にあった浄蓮華院も同じころ兵火にかかり炎上した。この乱の後、聖護院は岩倉へ退転し、浄蓮華院は廃寺同様となった。こうした事態と併行して、吉田では所領の再編がおこなわれ、土地の利用状況も変化し、その様相は激変した。そして16世紀前葉に吉田一帯は吉田社の一円支配のもとにおさまリ、そのまま近世を経て近代をむかえる。

2. 吉田社による浄蓮華院領の押領

浄蓮華院については、第5章第2節でふれたが、正治元(1199)年に、藤原北家勸修寺流の吉田経房が建立した寺で、経房の死後は彼の菩提所となった寺である。この浄蓮華院や勸修寺家の吉田の別業については中村直勝の研究がある〔中村41〕。その中で中村は、経房がさして広くもない吉田の所領を、細分して子孫に譲ることにより、浄蓮華院がすたれることのないように配慮していたことを明らかにしている。しかし、こうした配慮もむなしく、建武4(1337)年に氏の長者吉田定房が南朝に従い吉野に移ったことにより、浄蓮華院は、その有力な支持基盤を失い、寺勢が衰えたようである。そして、応仁の乱によって炎上してからは荒廃をきわめ、その所領も、吉田(卜部)兼俱の率いる吉田社に蚕食され、ついには吉田社領に組み込まれてしまう。本節では、経房と同じ藤原北家勸修寺の流れをくむ中御門宣胤の日記『宣胤卿記』を中心に、浄蓮華院の退転の状況について述べる。

(1) 『宣胤卿記』と『奉行人奉書』にみる浄蓮華院領の押領

『宣胤卿記』の記主、中御門宣胤は藤原北家勸修寺家の流れをくむ末裔で、有職故実の記録のつとめた人である。84歳という当時としては異例の長寿の生涯を通して、日記を書き続け、応仁の大乱や明応の大火でその多くが失われながらも、当時の状況を知るうえで欠かすことのできない史料である。

応仁の乱以来、浄蓮華院は無住寺に等しい荒れようであった。『宣胤卿記』永正元(150

4)年閏3月11日の条には、吉田経房の供養のため、浄蓮華院の廟所を訪れたことについて、

乱来無寺、只竹木許也、石塔譏残、寺僧在京、今日招引諷經、焼香念仏
廻向、催涙

とあり、応仁の乱以来、寺は無住寺となり、荒れはてた中に石塔だけが残る有り様であった。こうした状況の中で浄蓮華院の所領に対する押領や、年貢の懈怠が始まる。吉田の浄蓮華院の寺域の押領に先立ち、延徳2(1490)年から明応4(1495)年にかけて、山城国乙訓郡久我庄内の浄蓮華院の所領の年貢が滞り、騒動が起きている^{*12}。

こうした状況と前後して、吉田社の浄蓮華院領に対する押領が始まる。『宣胤卿記』文亀元(1501)年10月10日の条には、

浄蓮華院住寺来、接同席、寺辺田畠混乱、吉田社領事、余口入、兼俱卿間事也
と所領の混乱がはじまる。浄蓮華院でしばしば先祖の法要を営んでいた宣胤は、浄蓮華院の住持と、吉田社の神官吉田兼俱のあいだを取り持つことになった。

しかし、伊勢神宮のご神体が吉田社に飛来したという「神器密奏一件」を、企てたほどの野心家である兼俱は、浄蓮華院からの再三の抗議も意に介していない。『宣胤卿記』文亀元年11月24日の条には、

浄蓮華院寺辺田畠、兼俱卿違乱間事、(中略)近日悉押之云々
とあり、ついには完全に押領してしまった。これに対して、中御門宣胤は吉田兼俱に重ねて抗議をしている。『宣胤卿記』文亀2(1502)年3月6日の条には、

浄蓮華院住寺被来、寺辺田畑、兼俱卿押妨間事、此事旧冬度々申遣事也、
不承引之上者、重入魂難儀也

とある。文亀元年の冬以来の押妨を非難し、度重なる申し入れを無視したことに憤っている。しかし、事態はそのまま吉田社に有利に展開し、幕府に持ちこまれた訴訟も吉田社の勝訴に終わった^{*13}。永正2年12月29日付の室町幕府奉行人奉書には、吉田社の神官吉田兼右にあてたものには、

境内浄蓮華院敷地并田畠等事、為神領嚴重地之处、近来彼院令抑留之、
別称本寺領之間、今度及訴陳之处、於社家者 公武証文数通明鏡之条、
如元被返付之上者、進退領知不可有相違之由、所被仰下也、仍執達如件、
永正二年十二月廿九日 豊前守判(松田頼亮) 大和守判(飯尾元行)
吉田二位殿

とあり、浄蓮華院雑掌にあてたものには^{*14}、

吉田社雑掌申当院分事、今度訴陳之处、為吉田境内之条、任数通之証文旨、
如元被付社家之上者、進退領知不可有相遺之趣、被成御成敗畢、令存知之、
向後不可有遺乱儀之由、被仰出候也、仍執達如件、

永正二十二月廿九日 頼亮判（松田） 元行判（飯尾）

浄蓮華院雑掌

とある。さらに、当所名主百姓中にあてたものには、

吉田社雑掌申浄蓮花院事、今度相論之处、為当社境内之条、任数通証文之旨、
如元被付社家之上者、進退領知不可有相遺之趣、被成御成敗畢、令存知之、
向後可全社納、若有違反之輩者、可被処罪科之由、所被仰出之状如件、

永正式 十二月廿九日 頼亮（花押）（松田） 元行（花押）（飯尾）

当所名主百姓中

とあり、吉田社の提出した数通の証文から、浄蓮華院は元来吉田社のものとされ、浄蓮華院側の明らかな敗訴となった。しかし、吉田社の神官の所有する文書には偽書が多く、この訴訟に提出した証文もその可能性もある。

翌永正3年には、浄蓮華院領における白川郷の農民の出作と、神楽岡東に新道をつくる件で、白川郷と争論におよんでいる。永正3年5月16日の幕府奉行人奉書には、

吉田社雑掌申社領浄蓮花院分出作禁制并神楽岡東新道停止等事、
対北白河地下人已下先度被成御下知之处、於出作者不令承状、
至新道者切開之、刺可発向吉田郷之企在云々、言語道断之次第也、
任条々堅御成敗之旨、向後可止其綺、猶以有違背之儀者、可被罪科之段、
重被成奉書之上者、令存知之、自然之儀、可合力吉田雑掌由、
所被仰出之状如件、

永正三 五月十六日 頼亮（花押）（松田） 宗基（花押）（齊藤）

東山十郷地下人中

とあり、まず、浄蓮華院を吉田社領と表し、この分への農民の出作と、新道の開削を禁じている。この新道から吉田郷を襲撃する意図があるとしており、周辺の郷村と緊張状態にあったこともわかる^{*15}。

これに対して宣胤は一門の署名を集め、再度幕府に訴えている。『宣胤卿記』永正5（1508）年9月15日の条には、

浄蓮華院田畑混吉田社領間事、一門中以連署可申武家事

とある。しかし、事態は好転せず、永正9年になると、

吉田社雑掌申当社境内浄蓮花院領事、被経御沙汰、被成奉書畢、守折中
（目録在別紙）御下知之旨、年貢等厳密可致其沙汰、次寺家号勸修寺寄進
分田畠事、被訪意見、一円被付社家畢、可令存知之由、所被仰出之状如件、

永正九年

九月十五日 英致（花押）（松田） 長俊（花押）（諏訪）

当社境内名主沙汰人中

と、勸修寺家が寄進したといわれている田畑まで訴訟の対象となる。『宣胤卿記』永正14（1517）年7月12日には、

参浄蓮華院本願之御墓、寺跡彌荒廃、一家中墓悉取散、本願御墓只一残、
不思議也、作田之間無通路式也、於近辺称名念仏廻向了、此田事吉田郷民
所行歟、以外事也

とあり、吉田経房の墓が一基だけ残っているのを不思議がるほどの荒れようとなった。周囲の状況も、寺領が耕地と化し墓地への通路すらなくなっていた。そのため、経房の墓から少し離れた所での法要を余儀なくされた宣胤は、吉田の郷民の所業におおいに憤慨するのであった。

しかし、宣胤は浄蓮華院領の押領に対しては抵抗したものの、積極的に浄蓮華院を再興しようとする意志は見られず、ついに浄蓮華院は退転し、天文2（1533）年には正式に吉田社領となったようである。『兼右卿記』天文2（1533）年11月24日の条には、室町幕府の奉行人奉書があり、

吉田社境内浄蓮花院領事、彼院棒応永元年御内書、申子細之間、
度々御糺明之处、田畠根本目録不分明、至延徳年中目録（飯尾大和
入道封裏）者、難被信用者也、於当社者、境内并泉殿諸散在
一円不輸神領之段、宜旨御判以下度々公驗柄焉也、然寺家出帶御内書
非可被棄置之条、被折中訖、各半分充（目録分）可被知行之、
次勸修寺号寄進分（泉殿跡内）事、寺家向雖有申子細、被訪意見之处、
為応永元年御内書以後之間、至比田地者不混折中、一円被付社家畢、
全領知、可被專御祈祷之由、所被仰下也、仍執達如件、
永正九年九月十五日 対馬守判（松田英致） 散 位判
吉田侍従殿

とある。これにより、浄蓮華院と吉田社の訴訟の経過と、その結果がわかる。浄蓮華院側が応永元年の御内緒を提出し、寺領であることを主張したのに対し、吉田社側が糾明したところ根本目録がはっきりとせず、また、延徳年中目録は信用しがたいとして却下された。この結果、浄蓮華院領一円が吉田社のものとなった。なお、この文書の中で、勧修寺家寄進とする所領を泉殿跡としているのは注目に値する史料である。

永正17年頃になると、この地一帯が吉田社の「一円不輸不易之神領」となるが、浄蓮華院側の出作の取り扱いが問題となる。結局、吉田社と浄蓮華院が年貢を折半することで落着する。その前後のことを下知した室町幕府奉行人奉書がいくつかある。ひとつは吉田社雑掌にあてたもので、

吉田社境内浄蓮華院事、去永正九年、彼院棒応永元年御内書、院領之段申子細之間、被経御沙汰、田畠根本目録不分明、至延徳年中目録（飯尾大和入道封裏）者、難被信用、於当社者、境内并泉殿諸散在孝継知行分等、或断寺社本主訴詔（訟）、或止名主称号、為自下地一円不輸不易之神領、雖一ヶ所、不可有別納地之旨、証文炳焉也、爰寺家出帯、御内書非可被棄置之条、被折中訖、然寺家出作之段、同日申加折中之奉書、至社家之御下知者、出作之儀不被書載、今度被訪意見之处、無根本出作証跡之条、任社家証文之旨、被停止者也、早目録（延徳度目録）分年貢半分宛、寺家与社家相对拾当所百姓前に定使可被直納、次未進分事、可被究済之由、所被仰下也、仍執達如件、

永正十七年十一月二日 上野介（花押）（斉藤時基）散位（花押）（諏訪長俊）
当社雑掌

と訴訟の経過に再度触れた後、一円を不輸不易之神領としたが、浄蓮華院側から出作についての申し立てがあり、浄蓮華院と吉田社で折半している。もうひとつは、境内名主沙汰人にあてたもので、

吉田社雑掌申当社境内浄蓮花院事、先年彼院領被折中之刻、寺家出作段申給御下知、申子細之間、今度被経御沙汰之处、無出作根本証跡之条、被停止訖、然上者寺家与社家相对、自百姓前年貢半分宛以定使可令直納之由、所被仰出之状如件、

永正十七年十一月二日 時基（花押）（斉藤） 長俊（花押）（諏訪）
当社境内名主沙汰人中

とあり、百姓に前年の年貢を半分ずつ納めるようにとの下知がくだっている。さらに、周辺の十ヶ郷にも周知徹底するため、

吉田社雑掌申当社境内浄蓮花院事、先年彼院領被折中之刻、寺家出作之段申給御下知、申子細之間、今度被経御沙汰之处、無出作根本証跡之条、被停止訖、可令存知之由、所被仰出之状如件、

永正十七年

十一月二日 時基（花押）（斉藤） 長俊（花押）（諏訪）

十ヶ郷中

とあり、浄蓮華院領は名実ともに吉田社領へと移行していった。

さらに、天文2（1533）年には、浄蓮華院の院主が死去する。『兼右卿記』天文2年9月16日の条には、浄蓮花院雑掌にあてた奉行人奉書がある。

当院主死去以来寺家有名無実之条吉田社境内当院敷地折中分事、任社家証文之旨、一円可被仰付之云々、不日可明申之由候也、仍執達如件、

天文二

九月十六日 貞広判（飯尾） 為完判（飯尾）

浄蓮花院雑掌

これによると、天文2年には浄蓮華院領は既に有名無実なものとなり果てている。

さらに、同年12月の奉行人奉書には、

吉田社境内浄蓮花院敷地并田畠等折中分事、今度両方雖申子細、云寺家退転、云証文明鏡、任 法住院殿御成敗之旨、折中分一円被付社家訖、於自然之儀者、宜令存知之由、所被仰出之状如件、

天文二

十二月卅日 貞広（花押）（飯尾） 長俊（花押）（諏訪）

とあり、年末には浄蓮華院は退転している。

第5節 小 結

武家勢力の台頭により経済的基盤が弱体化した朝廷に、新たな御願寺を院政期のように大々的に建立する力はなく、白河一帯に新たな御願寺の造営もなく、天災や人災、そして戦災に巻き込まれながら、この地域一帯が衰退していった。その盛衰を一覧表にしたもの

が、表6-1である。この表をみると、

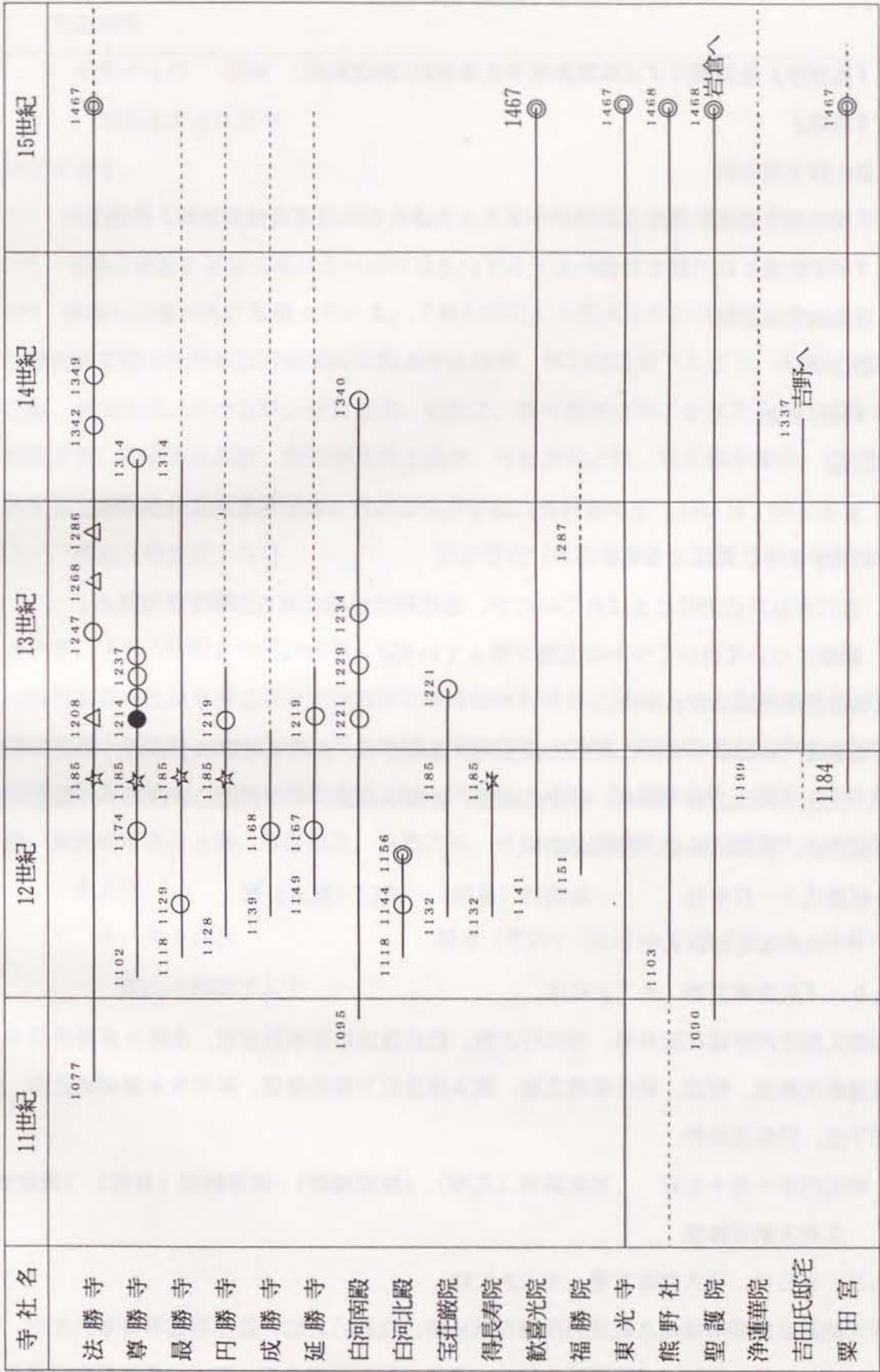
①白河に御願寺や御所が次々に造立されたのは、11世紀後葉から12世紀の前半にかけてのことであり、とくに12世紀の前半に集中し、院政の高まりと軌を一にしている。

②最初の衰退の兆候は、13世紀の前葉、1220年前後に見受けられる。円勝寺、成勝寺、宝莊嚴院が姿を消し、延勝寺も程なく衰退していった。この時期は天皇制を支えてきた公家・社寺勢力と、武士勢力の力関係に大きな変化があった、承久3(1221)年の承久の乱の時期にあたる。この乱は、上皇方の敗北をもって終結し、天皇廃立、三上皇配流という前代未聞の事態を招いた。これ以後、院政は消滅し、天皇・上皇の意のまに、御所や御堂を大々的に造営する時代は終わりを遂げたことを裏付ける。

③次の衰退の兆候は、14世紀前葉にある。この時期を限るのは元弘元(1331)年の元弘の乱を端緒とする南北朝の乱である。貴族、受領層の経済的疲弊は、御堂の修造や維持を困難なものとした。また、白河で繰り広げられた戦乱の直接的な影響もより深刻であった。正慶2(1333)年には、延暦寺僧徒が法勝寺に布陣し、六波羅勢と法勝寺門前で一戦を交えている。

④白河に致命的な打撃を与えたのは応仁の乱である。わずかに命脈を保っていた最勝寺、円勝寺、成勝寺、円勝寺は消滅し、歓喜光院、東光寺も廃絶した。聖護院は白河の地から退転し、岩倉長谷に移る。法勝寺、粟田宮、熊野社がわずかにその命脈を保つだけとなった。

表6-1 白河の寺社の盛衰



○火事 △落雷 ●大風 ◎戦乱 ☆地震

*1 『愚管抄』巻第四（『日本古典文学大系』86 所収）

*2 『増鏡』

*3 東山御文庫記録

*4 「院家雑々跡文」暦応3（1340）年2月の奥書をもつ（『大日本史料』所引）

*5 『平家物語』は17間まで倒れたとしている。

*6 東山御文庫記録

*7 巻二十一

*8 『明月記』

*9 二巻

*10 文正2年1月18日、上御霊神社の森でくりひろげられた応仁の乱の前哨戦。この年の3月改元があり、応仁となる。

*11 古代末以来吉田村とよばれていたが、室町時代後期には吉田郷とよばれた。

*12 騒動についてはいくつかの文書が残っている。

『猪熊信男氏所蔵文書』には、
醍醐地蔵院門跡雑掌申城州乙訓郡久我庄内浄蓮院田事、久我家雑掌依有訴訟、雖被所務於中置、前任当知行之旨（間カ）可令収納段、被成奉書訖、早年貢諸公事物以下、嚴密可致其沙汰之由、被仰出候也、仍執達如件、

延徳式十一月卅日 為頼判（飯尾） 貞□（数カ）判

当所名主沙汰人中

とあり、『久我家文書 十二』には、

山城国久我庄内浄蓮花院分事、当知行之处、散在百姓等寄事於左右、近年々貢難渋云々、言語道断次第也、所詮、早任奉書之旨、彼未済分以下被致催促、弥可令全領知給之由、所被仰下也、仍執達如件、

明応四年十月十七日 加賀前司（花押）（飯尾清房） 信濃前司（花押）（諏訪貞通）

久我大納言雑掌

とあり、さらに、『久我家文書 十二』には

久我大納言家雑掌申城州久我庄内浄蓮花院分事、当知行之处、散在百姓等寄事於左右、年貢以下近年令難渋云々、言語道断次第也、所詮、早任奉書之旨、年々未進等嚴密可致其沙

汰、猶以有遲怠者、可被処罪科之由、被仰出候也、仍執達如件、

明応四年

十月十七日 清房（飯尾）（花押） 貞通（諏訪）（花押）

当社名主沙汰任中

などがある。

*13 横山晴夫「室町期の吉田社領について」『國學院雑誌』第62巻第9号、1961年

*14 『兼右卿記』天文2年11月24日の条

*15 同様の文書が外にも残っている。『兼右卿記』の天文2年11月24日の条には、
社領浄蓮花院分出作禁制并神楽岡東新道停止等事、対北白河地下人已下、先度被成御下知之处、於出作者、不令承状、至新道者、切開之、剩可襲来当所之企在之云々、任条々堅御成敗之旨、向後可止其綺、猶以有違背之儀者、可被罪科之段、重被成奉書畢、被存知之、弥可被全領知之由、所被仰下也、仍執達如件、

永正三年五月十六日 豊前守判（松田頼亮） 遠江守判（斉藤宗基）

吉田者雑掌

とあり、『兼右卿記』の同日の条には、

吉田社雑掌申社領浄蓮花院分出作禁制并神楽岡東新道停止等事、対北白河地下人已下、先度被成御下知之处、於出作者、不令承状、至新道者、切開、剩可尙向吉田郷之企在云々、言語道断之次第也、任条々堅御成敗之旨、向後可止其綺、猶以有違背之儀者、可被罪科之段、重被成奉書之上者、令存知之、自然之儀、可合力吉田雑掌由、所被仰出之状如件、

永正三

十一月十六日 頼亮（花押）（松田） 宗基（花押）（斉藤）

東山十郷地下人中

とある。

第7章 白河の条坊地割の復原

- 7-1 はじめに
- 7-2 白河の条坊地割の方位について
- 7-3 大路・小路の配置について
- 7-4 白河の条坊地割の造営尺について
- 7-5 白河の条坊地割の範囲について
- 7-6 小 結

第7章 白河の条坊地割の復原

第1節 はじめに

本章では、すでに述べてきた道路に関連する遺構や、寺域を限る遺構をもとに白河の条坊地割の復原を試みる。復原の前提として、まず、方位の検討、造営尺の検討をおこない、次いで大路・小路の配置と条坊地割の施行範囲を検討する。

1. 大路・小路の築地と側溝

条坊地割の復原を試みる前に、条坊地割の基準線となる築地の中心線と側溝の位置関係について述べる。『延喜式』の「左右京職」^{*1}には、平安京の東西・南北の幅や、大路・小路の規格などが記されている。その中で大路は幅が8丈でも10丈でも

自=垣半_至=溝邊_各八尺 垣基三尺 犬行五尺 溝廣各四尺

であり、小路は

自=垣半_至=溝邊_各五尺五寸 垣基二尺五寸 犬行三尺 溝廣各三尺

とある。築地の中心線から「犬走り」をはさんで、溝の中心線までなら、大路で1丈、小路で7尺であったことがわかる。白河の大路・小路の規格が平安京と大きく異なっていたとは考えられず、また、条坊全体を検討するにはあまり大きな影響をおよぼさないで、溝から犬走りと築地塀の中心線までの距離は延喜式の数値に準拠した数値、すなわち大路で1丈、小路で7尺として条坊地割の復原を試みる。

第2節 白河の条坊地割りの方位について

1. 都城の方位について

都城の方位に関する研究は、藤原京、平城京、長岡京、平安京などで、精力的に進められてきた。太宰府の政庁中心軸線の振れは、N-0°34'24"-Eと真北から東に振るが^{*2}、平城京はN-0°15'-W、平安京はN-0°14'-W程度〔辻88〕と、ともに西にほぼ同じ角度で振る。いずれも、北極星を視準してその計画軸線を確定したと考えられるが、0°15'という角度は100mさきでは約40cmの誤差にあたり、こうしたずれがなぜ生じたのかは不明である。

2. 白河の条坊地割の方位の算定

白河の条坊地割の方位は、個別の遺構の方位は、法勝寺金堂の真北から西に $0^{\circ}11'40''$ 〔梶川77c〕や、尊勝寺九輪阿弥陀堂の真北から東に $0^{\circ}59'59''$ 〔上村81〕、尊勝寺五大堂の真北から東へ $0^{\circ}22' \sim 0^{\circ}42'$ 〔工楽・藤村73〕、尊勝寺金堂の回廊付近は真南北、東塔は真北から西に $2^{\circ}50'20''$ ふる〔杉山・岡田61〕などの報告がある。検出範囲の狭いことや、遺構の年代差によって多少の差があることなどから、わずかずつ違った方位が示されている。

ここでは図2-1-A地点とG地点や、H地点と尊勝寺の東辺のように、南北約1km離れた地点を基準として算出した。A地点では溝SD10の中央で、 $X=-108605.5\text{m}$ 、 $Y=-19895.3\text{m}$ を測り、G地点では築地跡の中心で、 $X=-109627\text{m}$ 、 $Y=-19907\text{m}$ を測る。この2点を結ぶ線が今朱雀の東辺にあたるが、今朱雀を大路とすると、後述するように築地の中心線から溝の中心線まで、10尺を測る。よって、A地点のY座標を東に約3mずらし、この2地点の東西方向の差14.7mと、南北差1021.5mから、真北から $0^{\circ}49'30''$ 東にふる方位を得る。

やや東に振りすぎのきらいはあるが、真北から東に $0^{\circ}30' \sim 0^{\circ}50'$ 偏った方位がとられたものと推定できる。

第3節 大路・小路の配置について

1. 大路小路の幅員について

白河の条坊地割の大路・小路の幅に関する文献史料はないが、基本的に平安京内における幅員が踏襲されたものと考えられる。すなわち、『拾芥抄』に記されているように、大路が8丈、小路が4丈であり、二条大路以北の東西方向の大路だけは10丈と考えて大きな齟齬はない。

ただ、二条大路末の幅員については、論が分かれた。街割の軸となった二条大路末の幅を、まず福山敏男氏が「承保勘文」の二条大路北辺と押小路末北辺の距離差56丈7尺から1町=40丈を差し引いた16丈7尺、すなわち約17丈二条大路末の幅員と推定した〔福山43〕。ついで杉山氏が8丈を〔杉山・岡田61〕、そして、工楽氏がふたたび17丈を提唱している〔工楽・藤村73〕。最終的には、最勝寺の南を限る築地と、成勝寺の北を限る側溝の検出により、17丈との結論が出た。二条大路は、鴨川以東の白河の地における延長の部分であ

っても、京内と同じように約17丈の幅員を保って作られていたのである。

南北の道路は、福山敏男氏の指摘したように、賀茂川より東を2坊、すなわち8町とし、法勝寺西大路の幅を大路とみて8丈、各町間の路は小路として4丈、8町の中央たる4町目の路は大路として8丈とすることに異論はない〔福山43〕。ところが、近年の調査で精密な測量をおこなった結果、平安京の二条大路北辺と東京極大路外辺の交点の座標が、 $X=-109728.15\text{m}$ 、 $Y=-20999.98\text{m}$ であったことが明らかになっている〔杉山92〕。

法勝寺の西を限ると考えられている南北溝46*3（図3-3-A地点）の中心線上の1点の座標は、 $X=-109768\text{m}$ 、 $Y=-19376\text{m}$ であり、この2点の座標から、平安京の東京極大路から法勝寺西大路の東辺まで、約1624mを測る。この数字は条坊地割りのほぼ3坊にあたる。そこで、3坊と仮定すると、

$$1\text{坊}=40\text{丈}\times 4\text{町}+4\text{丈}\times 3\text{（小路）}=172\text{丈}$$

であり、 $172\text{丈}\times 3+8\text{丈（法勝寺西大路）}+8\text{丈（今朱雀）}+8\text{丈（鴨川沿いの大路）}=540\text{丈}$ を得る。法勝寺西大路の側溝から築地中心線までを1丈とすると、造営尺は

$$1624\text{m}\div 5390\text{尺}=0.3013\text{m}$$

を得ることができ、全体に大きな齟齬をきたさない。このことは白河の条坊地割の南北方向の大路がすべて8丈の幅であった可能性を示すだけでなく、法勝寺の西大路が当所から計画的につくられ、平安京の東京極大路からちょうど3坊離れたところに法勝寺の敷地の東辺が定められたことを示唆している。

第4節 白河の条坊地割の造営尺

1. 都城の造営尺

都城制を敷き、条坊地割を施行していくには、まず度量衡制が確立され、正確な測量が行えなければならない。大宝令・雑令には度量衡制が定められ、土地測量には大尺を、建物には小尺を用いるようになった。藤原京も令大尺が基準として用いられたと考えられている。藤原京の朱雀大路は、測溝心々間距離が70大尺、路面幅50大尺、測溝幅20大尺とすべて大尺で計画されていたことが報告されている。藤原宮の小尺は1尺=0.294~0.295m、建設当初の平城宮の小尺は1尺=0.296~0.297mと考えられている。〔井上和人84〕

和銅6(713)年の尺度改正は、高麗尺である大尺を廃止し、小尺である唐大尺を採用し、〔井上光貞78〕。平城京は測溝心々間で210大尺と想定されている〔井上和人78, p. 695〕平

城京では小尺で計画された道は、和銅6年以降のものと考えられている。

太宰府も朱雀大路に関しては、路面幅、測溝心々いずれも大尺で完数となることが報告されている【鬼塚92, p85】。

平安京の造営尺を算定する試みは、早くからおこなわれている。『平安通史』（明治28年刊行）所収の「平安京実測図」は、近代測量術を用いて作製した実測図に、『延喜式』の京程を乗せ、東寺と堀川の位置が当時と変化していないという前提のもとに、0.999現尺を造営尺として算定した。

これに対して杉山信三氏は、昭和37年に発掘調査で確認した西寺の食堂院南門跡を基に西寺の伽藍中心線を設定し、現存する東寺の伽藍中心線との距離を測量し、897.5mを得た。この距離と、『延喜式』の京程の距離（3,000尺）から、0.987現尺（1造営尺=2.991667m）を造営尺として算出した【京都府教委64】。発掘調査の結果から造営尺を算出するという画期的な試みは、その後の発掘調査の成果と大きな粗齟をきたさず、この数値が概ね受け入れられている【杉山64】。

もっとも最近の平安京の造営尺については、（財）京都市埋蔵文化財研究所の成果がある。京都市埋蔵文化財研究所は、昭和52年以来、国土座標に則った基準点のネットワークを京都市内に展開し、以後の発掘調査に利用し、精密な造営尺の算出に大きな成果を上げた。昭和63年1月末現在では、1丈=2.984858m±0.000372mの数値を得ている【辻88】。

2. 白河の条坊地割の造営尺の算定

(1) 承保勘文と白河の条坊地割の造営尺

福山敏男氏が陰陽寮のいわゆる「承保勘文」をもとに、金堂の東南隅や、金堂の南庇、阿弥陀堂基壇の南端の位置などを明らかにしたことは、前述した。この「承保勘文」は、法勝寺金堂の方角が、六条内裏の悪方にあたるか否かを、承保3(1076)年に陰陽寮が調べたときのもので、六条内裏から法勝寺の金堂や阿弥陀堂、築垣までの詳細な実測記録が記されている。この勘文を詳細にみると、

勘申御願寺方角事、

從六条坊門小路南辺垣-至-于二条大路北辺垣-大路（略？）当金堂南庇敷、

北行六百廿三丈二尺、

從高倉小路西辺-至-御願寺西築垣-、東行六百六十四丈二尺、

当良方-分内也、但東加-八十三丈七尺四寸-、猶可-為-良分-、其分以東者当-寅方-東方分也、

從六条坊門南辺-至-于阿弥陀堂壇南端-件壇大路当-二条南小路北辺-、

北行五百六十八丈二尺、

從高倉小路西辺-至-于御願寺西築垣-、東行六百六十四丈一尺、

当良方-、此分東加-十七丈七尺四寸-、猶可-為-良分内-也、其分以東者当-寅方-東方分也、

右、依-宣旨-、計-丈尺-、以-一方六分之法-勘申如件、

承保三年七月九日

陰陽頭賀茂朝臣

御願寺南大門并件門東西築(垣)、

右從六条坊与(門)高倉-当-寅方-、明年大將軍方也、今年可-被-造築-、仍注申如件、

同年七月十日

連署同前

参-白河御願寺-所-注申-也、

從京極大路中央-至-于御願寺金堂辰巳角-、東西五百八十三丈六尺、

從-件角-至-于六条坊門-南北六百廿二丈許也、依-仰旨-注進如件、

七月十二日

主税頭賀茂

とある。この中で注目に値するのが、高倉小路西辺から法勝寺西築垣までの距離を664丈2尺としている点である。高倉小路の西側の側溝は、平安博物館が実施した「高倉宮・曇華院跡第4次調査」*4で検出されている。側溝の中心線の国土座標は、Y=-21421mを測る。平安京の方位が西にN-0°14'-W振ることを考慮すると、高倉小路の西側側溝の中心線は、二条辺りではY=-21421.25となる。これに小路の側溝と築地の距離7尺を加えると、Y=-21423.35となり、法勝寺西築垣の中心線、Y=-19379まで約2044.4mを測る。この距離から、承保勘文のさいに用いた尺は、約0.30779mであったことがわかる。この数値は承保3(1076)年に使用されていた尺度を知るうえで貴重な資料である。

(2) 白河における建築遺構と造営尺

白河の条坊地割の造営尺については、2次にわたる法勝寺金堂の調査から算出した0.303m【梶川77c】や、尊勝寺の五大堂に比定される遺構から算出した0.3014m【工業・藤村73】、尊勝寺の九昧阿弥陀堂の東西規模25.56m=85尺から算出した0.3007m【上村81】な

ど、個別の遺構から推定されているだけであるが、いずれにしても現尺から大きくはずれるものではない。また、平安京の造営尺に対して、いずれも長めの値を示すことは、承保勘文から算出した尺度とともに注目に値する。

(3) 白河の条坊地割の遺構と造営尺

前述した白河の条坊地割にともなう遺構と考えられるものから、条坊の造営尺を算出してみたい。まず、溝SD3(図2-2-H地点)と溝SD10(図2-2-A地点)の間隔約267mが、2町+小路2本(88丈)とすると、1尺=0.3034mとなる。

また、尊勝寺の西の築地(図2-2-F地点)の発掘調査は測量に国土座標を導入する以前のもので、やや精度が落ちるが、法勝寺西大路*5の東側溝(図3-3-A地点)の距離に法勝寺西側の築地までの距離を加えると、都市計画図(1/2500)の上で約534mを測る。街区を40丈四方とし、法勝寺西大路の道幅を8丈とすれば180丈、小路とすれば176丈がこれにあたり、1尺=0.2967mと1尺=0.3034mをえる。法勝寺の西を限る道が大路であるか、小路であるかは不明であるが、大路であるなら冷泉小路末と同様に変則的な町割がおこなわれ、大路が街区の部分の部分を削り込んでいた可能性もある。

南北方向では溝SD5(図2-2-E地点)の南に築地を想定し、図3-3-D1地点の築地との距離を測ると約575mを得る。この間を4町+大路2本+小路2本(188丈)とすると、1尺=0.3059mとわずかに長い数値となるが、前述したように冷泉小路末は4丈より広がったと考えられるが、仮に2丈広がったとすると1尺=0.3026mを得る。

ところが、近年の調査で精密な測量をおこなった結果、平安京の二条大路北辺と東京極大路外辺の交点の座標が、X=-109728.15m、Y=-20999.98mであったことが明らかになっている【杉山92】。法勝寺の西を限ると考えられている南北溝46(図3-3-A地点)の中心線上の1点の座標は、X=-109768m、Y=-19376mであり、この2点の座標から、平安京の東京極大路から法勝寺西大路の東辺まで、約1624mを測る。この距離が条坊地割りの3坊にあたる。すなわち、法勝寺西大路、今朱雀、賀茂川沿いの京極の道路幅を8丈、各町間の路は小路として4丈とすると

$$1 \text{ 坊} = 40 \text{ 丈} \times 4 \text{ 町} + 4 \text{ 丈} \times 3 \text{ (小路)} = 172 \text{ 丈}$$

であり、平安京の東京極大路から法勝寺西大路東端まで

$$172 \text{ 丈} \times 3 + 8 \text{ 丈 (法勝寺西大路)} + 8 \text{ 丈 (今朱雀)} + 8 \text{ 丈 (鴨川沿いの大路)} = 540 \text{ 丈}$$

を得る。法勝寺西大路の側溝から築地中心線までを1丈とすると、

$$1624 \text{ m} \div 5390 \text{ 尺} = 0.3013 \text{ m}$$

を得る。このことは法勝寺の西大路が、白河の条坊地割の最初の段階から計画的につくられ、平安京の東京極大路からちょうど3坊離れたところに法勝寺の敷地の東辺が定められたことを示唆している。

以上のような結果から、白河の条坊の造営尺として現尺と同じ0.303mに近い値をとると考えられる。いずれにしても、造営尺を算定する基準となり得る遺構の発見例が少なく、また、大路・小路や街区の幅に不明朗な点が多く、今後の発掘調査が待たれる。

第5節 白河の条坊地割の範囲について

白河の条坊地割の骨格は福山敏男の、今朱雀を中心に東西に4町ずつとし、南北路は今朱雀と法勝寺の西の道を大路とし、各町間の道を小路とし、これに法勝寺が東につきでていたする案【福山43】で大きな齟齬をきたさない。

大治2(1127)年、法勝寺の西側の大路が神楽岡まで延長されたことは前述した。このことから白河の条坊地割が、北は吉田山のあたりまでおよんでいたことは確認されているが、図25-D地点の溝が条坊地割の遺構と判明したことから、白河の条坊地割は洛中と同様に、一条大路まであったものと考えられる。

白河の条坊地割の南限については、『山槐記』久寿3(1156)年1月7日の条に、後白河法皇の法性寺への行幸の経路を記し、

西洞院南行、三条東行、東洞院南行、八条西行河原へ、河原ヲ斜折北向良、

八条坊門末堂西門へ入御

とあり、八条坊門小路が鴨川をこえて、末として鴨東の地におよんでいたことがわかる。

『百鍊抄』仁治4(1243)年1月4日の条には、

去夜祇園西大門前大路在家南北両面拂地焼亡。西及橋爪。東至今小路。

南限綾小路末。及数百家。

とあり、また、『華頂要略・門主伝』建治3(1277)年正月27日の条に、十楽院から登山する経路として

宮辻子北行、五条坊門西行、大和大路北行、四条東行、祇園中路北行、

三条東行、今朱雀北行

とある。条坊地割りが八条あたりまでおよんでいたのか、単に洛中の道が洛外に延長され

たものなのかは不明である。

第6節 小 結

以上のような調査結果や考察のほかに、字境界や古道も考慮し、白河街区の復原図を作成した(図7-1)。基本的には、南北の道は4町おきに、東西の道は2町おきに大路がある平安京の二条大路以北と、同じ型式をとっていたものとした。

条坊地割の方位は真北から東に0°40'偏ったものとし、造営尺は0.301mとした。条坊地割の範囲は、北が一条大路末まで、西は河原、東は北の2坊は吉田山西麓まで、大炊御門大路末以南は変則的に法勝寺を取り込む形で東に張り出す。南は三条大路末までは確実に条坊地割があったと考えられるが、三条大路末以南にどこまで条坊地割が施工されていたかは今後の課題である。

また、冷泉小路末や法勝寺の南側の押小路末、法勝寺の東辺などにやや変則的な部分が生じたのは、条坊地割に先行して法勝寺の北辺、東辺、南辺が確定されていたためと考えられる。法勝寺西大路は、平安京の東京極大路からちょうど3坊の位置にあたる。法勝寺の西辺だけは条坊地割を意識して、その位置を調整したものと考えられる。

なお、この復原図は方角地割の基本型を示したもので、六勝寺や院の御所などの占地の詳細については今後の課題としたい。

本稿作成にあたっては、梶川敏夫氏(京都市埋蔵文化財センター)、上村和直氏・堀内明博氏(京都市埋蔵文化財研究所)をはじめ、多くの方々の御教示を賜わった。末筆ながら、各位に謝意を表します。

*1 『延喜式』卷四十二 「左右京職」(『国史大系』第拾参卷所収)

*2 鬼塚久美子「8世紀太宰府の計画地割について」『人文地理』第44巻第2号, p. 85, 1992年

*3 京都市動物園医療・救護センター施設新築工事に伴う発掘調査で検出したもので、京都市埋蔵文化財センターの梶川敏夫氏にご教示頂いた。

*4 『平安京跡研究調査報告 第18輯』

*5 「法勝寺西大路」『明月記』建仁2(1202)年1月12日条, 前掲注*に同じ

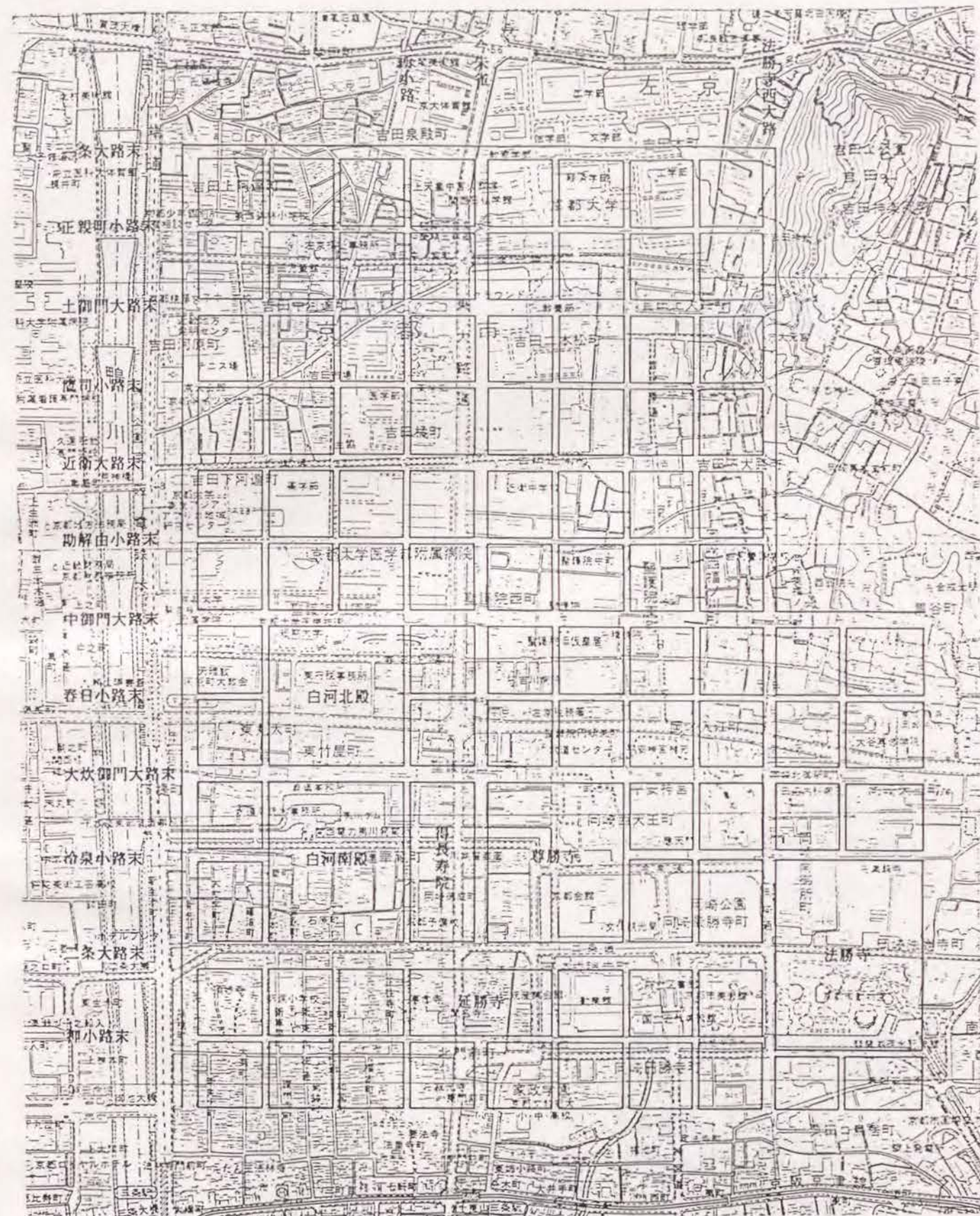


図7-1 白河の条坊地割の復原案

第8章 地理情報システムを用いた 都市遺跡データベースの構築

本書の目的は地理情報システムを用いた都市遺跡データベースを構築することである。遺跡に関するデータベースの構築で、遺跡の位置や年代などに関する情報を管理し、利用することである。

1. 遺跡や遺物のデータベースの構築

遺跡や遺物のデータベースの構築は、遺跡の位置や年代などに関する情報を管理し、利用することである。遺跡の位置や年代などに関する情報は、遺跡の位置や年代などに関する情報である。遺跡の位置や年代などに関する情報は、遺跡の位置や年代などに関する情報である。遺跡の位置や年代などに関する情報は、遺跡の位置や年代などに関する情報である。

また、遺跡や遺物のデータベースの構築は、遺跡の位置や年代などに関する情報を管理し、利用することである。遺跡の位置や年代などに関する情報は、遺跡の位置や年代などに関する情報である。遺跡の位置や年代などに関する情報は、遺跡の位置や年代などに関する情報である。遺跡の位置や年代などに関する情報は、遺跡の位置や年代などに関する情報である。

- 8-1 はじめに
- 8-2 図形情報データベースの構築
- 8-3 文字情報データベースの構築
- 8-4 地理情報システムについて
- 8-5 都市遺跡データベースを用いた条坊地割の復原

第8章 地理情報システムを用いた

都市遺跡データベースの構築

第1節 はじめに

発掘調査で検出した遺構や遺物の数は、年々増加の一途をたどり、遺構や遺物に関する情報を整理し、遺跡の全体像を把握することは大変な作業となってきた。個人での情報処理には自ら限界があり、また担当者の異動などにより、最初から情報を蓄積しなおすといった事態がよく見られる。一方、発掘区の大きさや場所が限定される市街地などにおける調査では、細分化され、しかも多年度にわたる調査の結果から遺跡の全体像を把握することは、時間的にも作業量的にも大変なものとなってきた。

本章の目的は地理情報システムを用いて都市遺跡データベースを試験的に構築し、遺跡に関するデータの処理や、遺跡の復原などをおこなうさいの有効性について、検討することにある。

1. 遺構や遺物のデータベースの開発

前述したような事態に対処するため、遺構や遺物のデータベースの構築が進められ、情報の検索などに効果を上げている。考古学の分野でも歴史研究支援のためのデータベース・システムの開発が試みられ^{*1}、土偶のデータベースや^{*2}、遺跡のデータベース^{*3}などが作成されている。筆者も光波測距器と携帯用コンピュータを連動させ、位置情報と文字情報を連結し、文字情報の検索結果を図示するシステムを開発し^{*4}、北白川追分町遺跡などでの運用を通じて、応用技術を蓄積してきた^{*5}。

また、民族学の分野では文字情報、映像情報、音響情報などを、一体化して検索するマルチメディア検索システムの構築が試みられている^{*6}。

ただ、こうした試みは文字情報や、文字情報と連結した画像情報であり、領域や空間インデックスをもつ図形情報は含まれていない。このため、遺跡や遺物などのデータベースの検索結果を、文字情報や遺跡・遺物分布図として出力できても、遺跡の分布図や遺構の配置図の中から、指定した遺跡や遺構の属性を表示するなど、文字情報と図形情報の間を双方向に検索・参照することはできなかった。

第8章 地理情報システムを用いた

都市遺跡データベースの構築

第1節 はじめに

発掘調査で検出した遺構や遺物の数は、年々増加の一途をたどり、遺構や遺物に関する情報を整理し、遺跡の全体像を把握することは大変な作業となってきた。個人での情報処理には自ら限界があり、また担当者の異動などにより、最初から情報を蓄積しなおすといった事態がよく見うけられる。一方、発掘区の大きさや場所が限定される市街地などにおける調査では、細分化され、しかも多年度にわたる調査の結果から遺跡の全体像を把握することは、時間的にも作業量的にも大変なものとなっている。

本章の目的は地理情報システムを用いて都市遺跡データベースを試験的に構築し、遺跡に関するデータの処理や、遺跡の復原などをおこなうさいの有効性について、検討することにある。

1. 遺構や遺物のデータベースの開発

前述したような事態に対処するため、遺構や遺物のデータベースの構築が進められ、情報の検索などに効果を上げている。考古学の分野でも歴史研究支援のためのデータベース・システムの開発が試みられ^{*1}、土偶のデータベースや^{*2}、遺跡のデータベース^{*3}などが作成されている。筆者も光波測距器と携帯用コンピュータを連動させ、位置情報と文字情報を連結し、文字情報の検索結果を図示するシステムを開発し^{*4}、北白川追分町遺跡などでの運用を通じて、応用技術を蓄積してきた^{*5}。

また、民族学の分野では文字情報、映像情報、音響情報などを、一体化して検索するマルチメディア検索システムの構築が試みられている^{*6}。

ただ、こうした試みは文字情報や、文字情報と連結した画像情報であり、領域や空間インデックスをもつ図形情報は含まれていない。このため、遺跡や遺物などのデータベースの検索結果を、文字情報や遺跡・遺物分布図として出力できても、遺跡の分布図や遺構の配置図の中から、指定した遺跡や遺構の属性を表示するなど、文字情報と図形情報の間を双方向に検索・参照することはできなかった。

2. 地理情報システムと遺跡データベース

本稿の目的は、C A D (Computer Aided Design) システムを用いた図形情報データベースと一般的な属性からなる文字情報データベースを組み合わせた、いわゆる地理情報システム^{*7}を用いて、歴史的史料の情報化の新しい手法の方向性と、その課題を呈示することにある。そのため、ここでは白河の条坊地割をケーススタディとして取り上げ、遺構の形態や位置などの図形情報と、遺構の時期や種類などの文字情報を双方向から検索・表示が可能な、白河の条坊地割に関する遺構の位置・形態のデータベースを作成し、条坊地割に関連する遺構の図形情報と文献情報を組み合わせたシステムが、どのような付加価値を生むのかを検証する。

第2節 図形情報データベースの構築

発掘した遺構をもとに条坊地割を復原する試みは、平城京、長岡京、平安京などの都城で数多く行なわれてきたが、正確な復原を地図上で行なうと、図全体が非常に大きなものとなり、作業上の障害となっていた。C A Dを導入する以前には、条坊地割の復原作業は、縮尺1/2500の都市計画図の上でおこなってきた。しかし、正確さを期するには縮尺1/2500の図では小さく、地割の方位、造営尺、遺構相互の位置関係などの詳細な検討に支障をきたしていた。また、全体像を把握するために張り合わせると、大きな図となり取りまわしに困難をきたした。そのうえ、白河一帯で実施した発掘調査は試掘・立合調査まで含めると、数百件におよび、こうした情報の整理は、都市計画図とカードでは限界に達しつつあった。

そこで、汎用のC A DソフトであるA u t o C A Dを用いて、図形情報のデータベースを作成した。遺構の位置や形状を、x y座標系の中で点の軌跡として入力し、ベクトル・データからなる図形データベースを作成した。ベクトル・データとして入力することにより、コンピュータの画面上で拡大、縮小、画層の重ね合わせなどが可能となった。

詳述すると、C A Dに遺構の図形データを入力することにより、

- (1) C A Dの拡大機能により、遺構と復原案の詳細な位置関係を確認、縮小機能により、遺構相互の位置関係や条坊全体を巨視的に検討することができる。遺構は数値データで入力しているため、方位、造営尺の検討を数値で行なうこともできる

- (2) 遺構と違う画層に復原案を描くことにより、遺構図に影響を与えることなく、何度でも試行錯誤を繰り返しながら復原案を検討することができる。条坊地割の方位や造営尺を微妙に変化させながら、検証することができる。

逆に、遺構のデータをC A Dで取り扱う際の問題としては、

- (1) 遺構は複雑な曲線からなるものが多く、正確に記録するためには細かく測点する必要がある、データ入力に要する人的負担が大きい。
- (2) データ量が多くなると、拡大、縮小、視点の変更などの画面表示などに要する時間が長くなる。

などがあげられる。こうした点をふまえながら、白河の条坊地割の図形情報データベースを作成した。具体的な手順としては、

- (1) 既刊の調査報告書などから、白河の条坊地割に関連すると思われる、平安時代末期から室町時代にかけての遺構を抽出した。
 - (2) これらの遺構の座標値を、国土座標第VI座標系に統一し、汎用C A DソフトのひとつであるA u t o C A Dに、ディジタイザを用いて、その平面形や位置を入力した。入力は遺構の種類ごとに画層と輪郭の線種、線の色をかえて入力した(図8-1~3)。
 - (3) 背景画像となる現在の街区や字境界、および、区画整理や字の統合が進められていない昭和初期の字境界も同様に入力し、必要に応じて表示するようにした(図8-1)。
- 以上のような手順で遺構の図形データベースを作成し、後述する文字情報データベースとの連結に備えた。

第3節 文字情報データベースの構築

文化財を扱うデータベースには、文化庁と奈良国立文化財研究所が構築を進める『全国文化財データベース』がある。このデータベースは、遺跡や建造物群を対象とする「不動産文化財データベース」と、美術工芸品などを対象とする「動産文化財データベース」とからなる。「不動産文化財データベース」については共通項目群が設定され、共通項目、項目番号、文字数、文字種などや、時代区分など各項目のコードが呈示され、データベースの核として定義されている^{*8}。本稿の主題はデータベースの項目やコードの定義ではなく、また、構築を試みるデータベースの主たる対象は遺構であり、こうした共通項目群を共有する部分は少ない。そこで各項目群やそのコードなどを尊重し、共有できる部分は共

有しながら、遺構のデータベースの構築を試みた。

文字情報データベースの作成は、

(1) データベース・ソフトのひとつであるdBASEⅢを用いて、発掘区や文献データベースおよび、遺構の種類ごとのデータベースを作成した。

(2) データベースの項目は、遺構番号、遺構の時期、関連文献など共通なもの、遺構の方位などデータベースごとに違うものを設定した。例えば、道路などではその方位、検出幅、などの項目を追加し、溝などではさらに傾斜方向、底のレベルなどを追加し、文字情報からなる遺構のデータベースを作成した。

第4節 地理情報システムについて

地理情報システム (Geographic Information System) は、本来は地表におけるさまざまな現象を数値化して空間的、地理的にとらえるシステムである。地理的空間を数値化した空間のデータ・モデルには、国土の自然条件 (海岸線、地形など)、社会・文化条件 (行政界、土地利用、交通路、集落など) などがある。この空間データ・モデルには、位置や形状のみならず、画像・統計・文献などの情報を含む。このため、地理情報システムの空間データ・モデルは地図を作成すると同時に分析する機能を持ち、単なる地図の図化システムと本質的に異なったものであり、その検索機能も単なるキーワード検索を越えるものである。

このため、地理情報システムは、地理学の分野だけでなく、施設管理、都市計画支援システムなど、空間データと非空間データ、すなわち図形情報と文字情報を連結して取り扱う分野にその利用範囲が広がった。本稿で構築を試みた遺構データベースもこの延長線上にあり、空間データ・モデルからなる図形情報データベースと、属性データからなる文字情報データベースの一体化をはかり、遺跡の分析の新たな方法を模索するものである。ここでは、現在、パーソナル・コンピュータ上で動作可能な地理情報システムに類する機能を持つAutoCAD (Release 12J版)をケース・スタディとして取り上げ、地理情報システムの可能性を探った。

AutoCADは元来、その仕様が公開されており、多くのユーザーがその使用法を工夫したことから、図形処理のプラットフォームとして使われ、素材型のCADと言われてきた。このプラットフォームとしてのAutoCADには、SQL (Structured Query

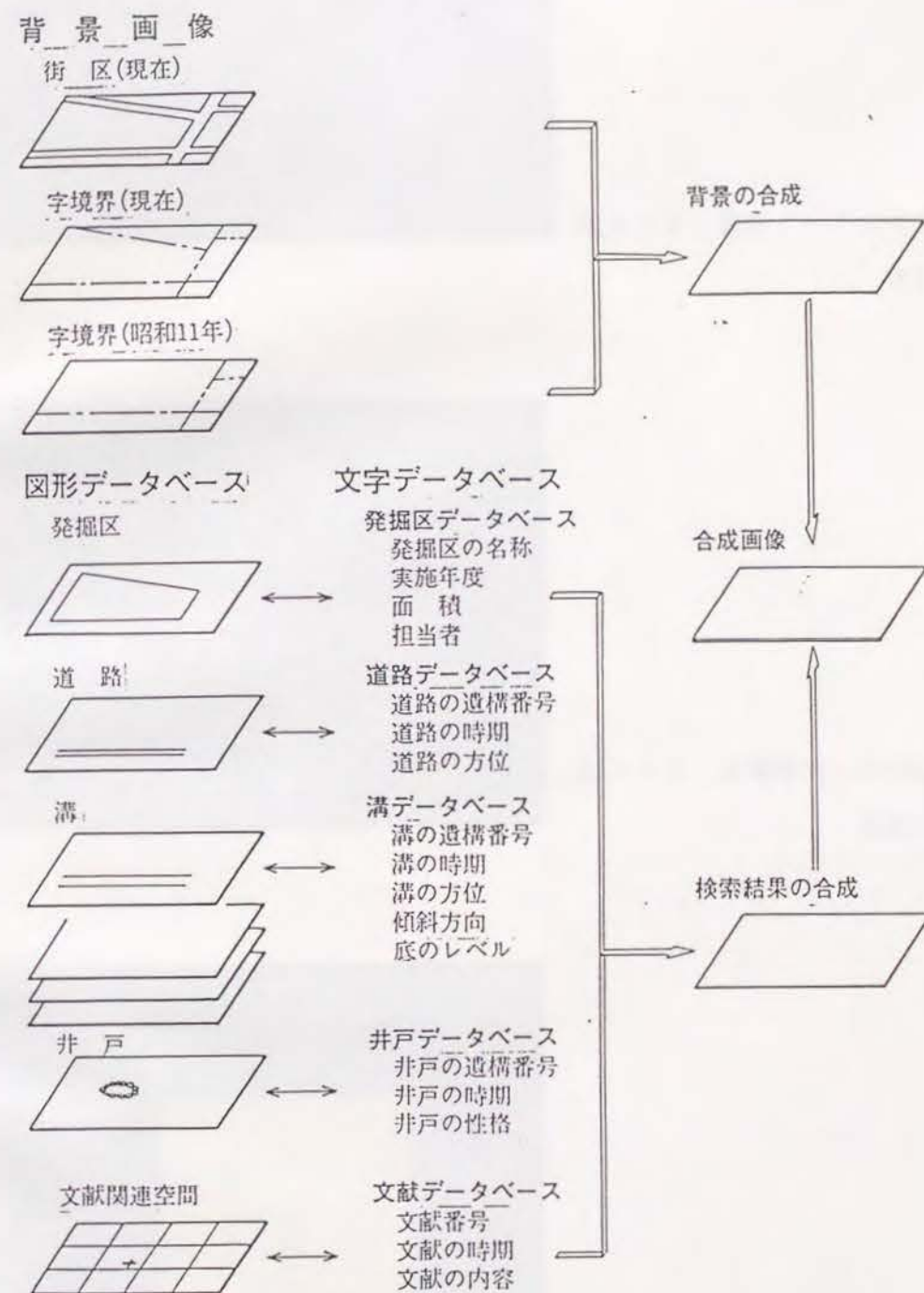


図8-1 地理情報システムを用いた遺跡情報データベースの構成



図8-2 遺構データベースの
背景画像

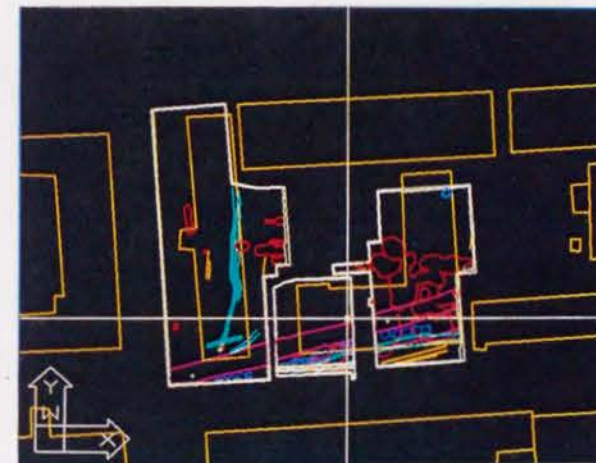


図8-3 本部構内AW28区
周辺の遺構

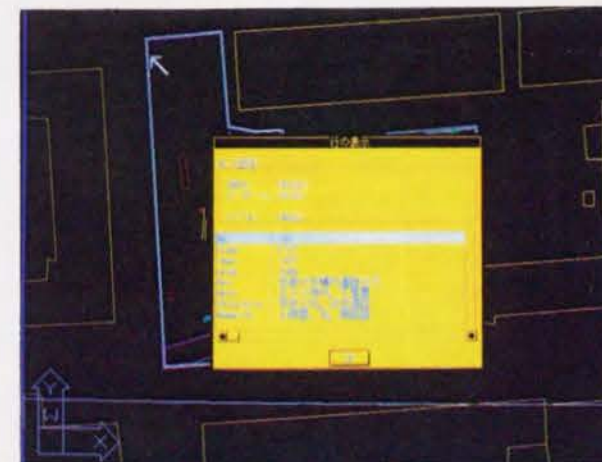


図8-4 発掘区の文字情報

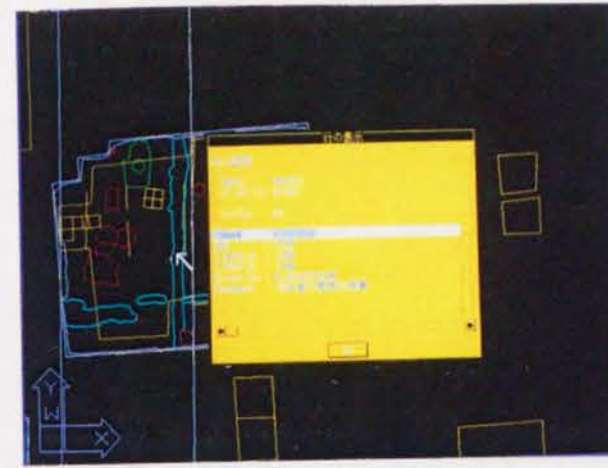


図8-5 教養部構内A P 22区
の遺構の文字情報



図8-6 検索結果を点線で表示

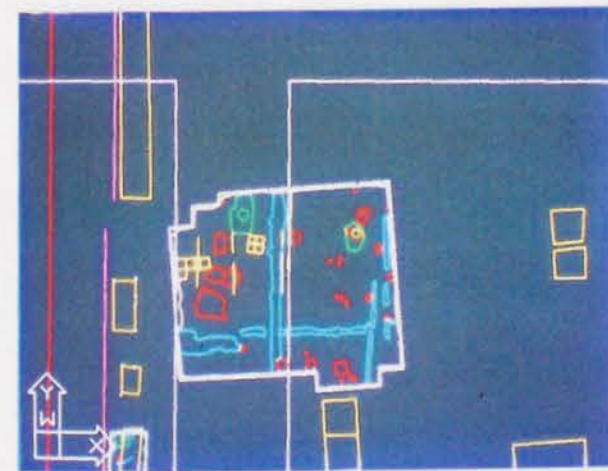


図8-7 溝S D 10と推定
築地中心線



図8-8 街路に関する文献
情報の表示



図8-9 検索結果のハイライト
表示



図8-10 白河の条坊地割復原図

Language 構造化問い合わせ言語)に対応したデータベースを連結できる拡張機能である A S E (AutoCAD SQL Exetention) が用意されている^{*9}。この拡張機能を利用すると、おもだったデータベースの文字情報データと、A u t o C A D の図形情報データを連結することができ、単なる図面ではなく、データベースに支援された図面として取り扱えるようになる。すなわち、C A D に入力した遺跡や遺構の図形情報に、その遺跡や遺構の時期や方位などの文字情報を連動させながら、双方向に検索、表示することができる。

A u t o C A D の拡張機能 A S E は、図形の属性データを処理する機能を拡張したもので、データベースに支援された C A D と捉えられており、具体的には、

(1) 従来の C A D では図形にともなう属性データが、その属性値を図形データと共に持つのに対し、A S E は連結情報のみを持ち、データは外部のデータベースファイルを参照する。このため属性数が多くなっても、C A D としてのレスポンスやデータ容量には影響を与えない。

(2) 文字情報や図形情報の修正は、各々、データベース・ソフトと C A D 上で単独に行える。さらに、図形情報と文字情報を連結した後でも、データベース・ソフトまたは C A D 上での編集結果を、データベースに反映させることができる。図形情報と文字情報はどの時点でも連結しており、それぞれの編集は即座に双方向に伝えられる。などの特徴を持つ。こうした特徴を利用して、白河の条坊地割の遺構データベースを作成し、地理情報システムの有効性を検証した。具体的には、

- (1) 図形情報として A u t o C A D に入力した現在の街区と字境界、および区画整理や字の統合が進められていない昭和初期の字境界を、画層を分けて管理し、背景画像として必要に応じて表示できるようにした(図*1)。
- (2) 文字情報データベースと図形情報データベースとを、A u t o C A D の拡張機能 A S E を用いて、連結した。データベースの連結は、遺構番号をキー項目として定義し、このキー項目を介しておこなった。これにより、条件の一致する遺構だけを図示したり、図の中で指示した図形の文字情報を表示するなど、図形情報とその属性である文字情報の間を双方向の検索が可能となった(図8-4~6, 8, 9)。

第5節 都市遺跡データベースを用いた条坊地割の復原

次に、地理情報システムを用いて作成した白河の条坊地割に関連する遺構データベース

を用いて、条坊地割の復原を試みた。遺構データベースをもとに、遺構の時期、種類、方位などを条件として検索した結果を図示し、さらに条坊地割の展開過程や廃絶過程、条坊地割の方位や造営尺などを、CADで表示した図から読み取れるか否かを検証した。背景画像の現在の画層や、新旧の字境界の消去と表示を試行し、重畳表示した検索やシミュレーション結果を見ながら、遺構に関連する文字情報を利用した各種の検索を実行し、このシステムの有効性を検証した(図8-4~9)。

さらに、CADの拡大、縮小、画層の重ね合わせ機能などを用いて、条坊の復原案を作成し、コンピュータの画面の中で重ね合わせて、復原案の方位や造営尺を検証し、復原を試みた。細部については、プロッターで拡大して作図し、検討をおこなった(図40)。

以上のような作業を試験的に進めながら、遺構データベースのあり方を模索した。時間の制約もあり、白河の条坊地割りに関連する遺構をすべて入力することはできなかったが、こうしたシステムが遺跡データベースとして、情報を共有したり、検索の手段として、情報管理に利用できるだけでなく、遺跡の復原や、視覚化にも有効であることが判明した。

遺跡のデータベース以外にも、既存の実測図面の実測範囲や、写真の撮影範囲や位置などを入力し、実測図や写真のデータベースを構築するなど、広い範囲に応用できる可能性をもつ。

また、CADに連動するレンダリング・ソフトやマッピング・ソフト、そして2次元画像処理ソフトを用いれば、より写実的な復原も可能であり、遺跡の復原に様々な可能性が生まれる。こうした復原の表現方法については、今後の課題としたい。

なお、本稿は文部省科学研究費 一般研究(C)補助金(課題番号:04805062, 課題:「地理情報システムを用いた白河の条坊地割の復原的研究」)の交付を受け、研究活動を行った成果の一部である。なお、本稿をまとめるにあたっては、(株)パスコ技術開発室の長谷川博幸氏、Projections Mapping Group Inc.のWilliam Mckenzie氏には技術情報を提供頂いた。心より感謝申し上げる次第である。

埋蔵文化財センター)1992年、「全国文化財データベースについて」『埋蔵文化財ニュース』75,1992年

*4 「マイクロコンピュータと遺跡調査 -光波タキオメータとマイクロコンピュータによる遺物分布図の作成-」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和57年度』1984年

*5 「京都大学北部構内BE33区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和58年度』1986年、「北白川追分町遺跡の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和59年度』1987年、東北大学文学部考古学研究室編『荒屋遺跡 -第2・3次発掘調査概報-』1990年

*6 杉田繁治・洪政図・山本泰規 『民族学情報有効利用のためのコンピューター応用手法についての基礎研究』(『国立民族学博物館研究報告別冊』第17号),1992年

*7 地理情報システムはその名称が示すように、本来は地理的な現象を数値化して、空間的、地理的に捉えるシステムであった。しかし、最近では、都市施設の管理や建築設計など、各種の空間データの解析にも利用されており、その名称と用途に乖離が見られるものの、文字情報と図形情報を同時にあつかうシステムの一般名称として、この名称を用いる。なお、地理情報システムに関しては、野上道男・杉浦芳夫『パソコンによる数理地理学演習』1986年、K.WESTLAND編『パソコン・マッピング入門-地図の図形処理-』1987年、碓井照子「地理的空間の分析と地理情報システム」『人文地理』第43巻第5号、1991年を参照した。

*8 「全国文化財データベースについて」『埋蔵文化財ニュース』75,1992年

*9 ASEに関しては、『AUTODESK CLUB』No.1 1992年、『AUTOCAD製品概要』1992年、『ASE-SQL』1992年(いずれもオートデスク株式会社発行)を参照した。

*1 「歴史研究支援情報処理の研究 -画像データを中心にして-」『国立歴史民俗博物館研究報告 第30集』1991年

*2 『土偶とその情報』(『国立歴史民俗博物館研究報告』第37集),1992年

*3 田鎖壽夫「遺跡データベースの構築について」『紀要XII』(岩手県文化振興事業団

第Ⅱ部 自衛的都市空間「構」に 関する都市考古学的考察

- 第9章 構の誕生
- 第10章 洛中洛外にみる構の展開
- 第11章 吉田の構と吉田社
- 第12章 上賀茂の構と上賀茂社
- 第13章 山科寺内町の構と本願寺
- 第14章 構の終焉

9-3	構の濫觴
9-4	構の誕生
9-5	小 結

- 9-1 はじめに
- 9-2 構の構成要素について
- 9-3 構の濫觴
- 9-4 構の誕生
- 9-5 小 結

第9章 構の誕生

第1節 はじめに

1. 律令制の解体と構の簇生

中国から都城制が導入され、方格地割の計画都市が藤原の地に構築されたのは7世紀末のことである。この人工的な都市空間は、道路の間隔を心々制から内法制にするなど、細部に変更を加えながら、恭仁京、難波京、平城京、長岡京を経て、約1100年にわたって王城であり続けた計画都市・平安京と受け継がれていった。

しかし、その平安京も遷都後、徐々にその中心を左京に移し、都城の中心となる皇居も里内裏として、その位置を東に移し、ついには前述したように、白河へと条坊地割が展開していった。こうした事態と並行して、公的空間である街路を私的空間として占拠する巷所が横行し、計画都市・平安京は時とともに大きく変貌してきた。

本稿で考察を試みる構は、律令制国家の王城としての平安京が解体した南北朝期あたりに、その濫觴を認められる。構は自らの居住空間を堀や土塁などの防御施設で囲み、出入口には木戸門や釘貫を備えた自衛的な防御空間である。この構は、応仁の乱の前後にその全盛期を迎え、「京中三分二構」という状態となる。さらに、洛中の構は天文法華の乱後の自治意識の高まりを背景に町組となる。自らの武装化はもとより、年貢・地子の免除を求め始める。

こうした動きは信長による焼き討ちと、秀吉による巧みな統制のもとでの「お土居」という総構えの構築をもって、終焉を迎える。さらに、二条城を中心とした東西方向に都市軸を回転させ、また、短冊形の町割を採用したことにより、古代以来の平安京は、近世都市京都へと変貌を遂げていった。本稿の目的は、いくつかの構の具体的な検証を通して、こうした都市空間の変遷を解明することにある。

元来、日本の都市・集落は比較的無防備であると考えられてきた。本来は、都としての機能と、城としての機能をあわせもつべき都城においても、日本では正門である羅城門の横にわずかに羅城が取り付けられていただけであった。こうした点は、恒常的に他民族や他集団の脅威にさらされていた大陸と、日本の相違としてしばしば取り上げられてきた。

原田伴彦氏は「日本封建都市論」*1の中で、「都市の囲郭が堺や平野郷、あるいは真宗関係の寺内町を除いてはほとんどおこなわれていない。」と述べている。しかし、日本においても社会的な緊張感が高まっていた時期には、集落全体を堀、土塁、堀などで囲い込み、防御的空間を構築していた。集落の周囲を大溝で圍繞する弥生時代の環濠集落や、同じく周囲を堀と土塁で囲む奈良盆地の環濠集落にがその好例である。

本稿で論じる構も、弥生時代の環濠集落に、その機能や形態上の類似性を見出す事ができる。本節では、先史以来こうした防御施設の構築されていた時期の社会的背景について考察する。

2. 倭国の大乱と環濠集落、高地性集落

人々が集住を始めた先史以来、その集住の形態やそのあり方は、文明の進化とともに大きく形を変えてきた。日本においては、移動から定着への転換期である縄文早期を経て、前期(BC. 4,000~BC. 3,000)に出現する環状集落をその初現とする。環状集落は中央に墓地を設定し、そのまわりに大型平地式建物、竪穴住居、貯蔵穴を同心円状に配し、周囲には馬蹄形に貝塚を形成していたが、環濠などの防御施設は検出されていない。この平面形態から、墓に埋葬した祖先を中心とする世界観のもとで、日常生活を営んでいたと考えられている。このような環状集落は北海道から沖縄まで分布し、縄文前期から晩期まで、継続的に構築されていた。

集落全体を環濠などの防御施設で囲むのは、弥生時代に入ってからのことである。弥生時代には、集落の周囲に防御施設を整えた環濠集落や高地性集落が、突然出現する。その分布や通有性から、広域にわたる軍事的緊張が歴史的背景として、指摘されている。「倭国大乱」と記されたこの時期の社会的、軍事的緊張が集落の形態に反映したのと考えられる。こうした状況は、自衛的都市空間「構」が族生した中世後半の状況に似ていたことがわかる。

環濠は弥生集落の最大の特徴であり、集落の周囲に濠を巡らしていた。濠は空堀が多い。こうした施設をもつ環濠集落は、弥生の前期と中期末に集中し、この時期に広域にわたる社会的・軍事的な緊張があったと考えられる。環濠は幅2.3~5.0m、深さ1.6~3.0mを測る。環濠が幾重にも取り巻く多重環濠の集落も多い。面積は数千~数万㎡におよぶ〔瀬田90〕。

さらに、弥生の中・後期には、瀬戸内地方を中心に、農耕には不適な高い山の見晴らし

の良い山上に集落が営まれるようになる。高地性集落と呼ばれているもので、見張りや通信のための施設と考えられていたが、最近、低地の環濠集落と同様な大規模な環濠の検出例が増加し、高地性集落の中には居住集落と考えられる例もある〔渡辺90〕。

3. 戦乱と土一揆

中世における軍事的緊張は、正長元(1428)年を皮切りに、次々と蜂起した土一揆と、応仁の乱後、織豊政権による統一政権誕生までの覇権をめぐる戦乱に大別できる。むろん、中世前半にも南北朝の大乱をはじめとする戦乱もあるが、基本的には土一揆などによる社会不安の方が継続的であり、深刻であった。

『大乘院日記目録』の正長元(1428)年9月の条には、

一天下の土民蜂起す。徳政と号し、酒屋土倉寺院等を破却せしめ、雑物等ほしいままにこれを取り、借錢等ことごとくこれを破る。管領これを成敗す。およそ某国の基これにすぐるべからず。日本開闢以来、土民の蜂起これ初め也

とあり、徳政を要求した土民が一揆を起こし、酒屋や土倉、寺院に押しかけている。記主の大乘院門跡尊は、この一揆を日本における最初の土一揆としている。

『宣胤卿記』の文明12(1480)年9月15日の条には、

土一揆内野辺りに充満す。三条坊門東洞院を放火し、聊か焼失す。都護、楽邦院等来臨し誘引せらるるの間、同道し先ず仏陀寺に行き、真如堂・誓願寺に参詣す。路次見及ぶ所の寺院・民家の口々、或は土を以て之を塗塞ぎ、或は箆を以て之を覆蔵す。末代の至極之を歎くべし。一条前黄来り談ず。夜に入り、上辺り土一揆物惣極りなし。一条高倉辺り放火。

とある。土一揆の放火を恐れた寺院・民屋は、戸口を土や箆で覆って、必死の防備をおこなっている。あちこちで押し込み、放火を繰り返す物騒な一揆に対する中御門宣胤の憤りが伝わってくる。

また、戦乱に際しては武士も町衆も町々の釘貫を固めている。『蔭涼軒日録』の文明17(1485)年5月23日の条には、

細川九郎幕下の諸將、西府の東に於て町々の釘抜を固む。一色殿諸兵は

西府の西町を囲む。伊勢守家臣三上越前守は諸兵を率い、西府の北門を囲む。

とあり、軍事的な緊張下における町々の防衛の状況がわかる。

第2節 構の構成要素について

周囲に対して防御的性格を示す構は、周囲を堀、土塀、土塁などで囲まれ、入り口には釘貫（針貫）、木戸門や、ときには櫓門などからなる。以下に、構の構成要素について詳細に検討する。

1. 狭間つきの土塀について

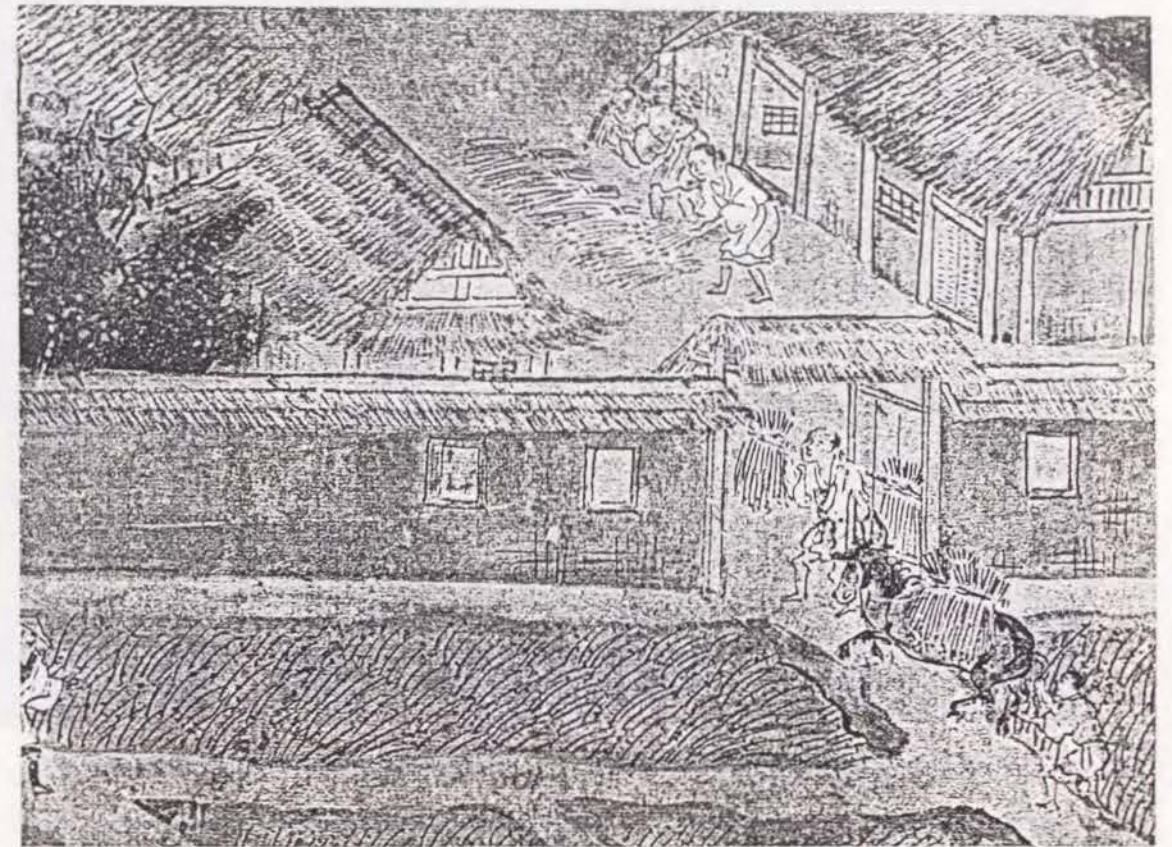
堀や土塁はもっとも容易に構築できる防御施設で、弥生時代の環濠集落には、極めて大規模なものがあった。防御のための堀は空堀が多く、断面形態はV字状をなすものが多い。素掘りの堀のような原始的な施設に、あまり大きな時代差はない。こうした中で、中世の構の特徴として、狭間つき土塀があげられる。

狭間とは、城壁・矢倉などに設けて、外の様子を見たり、矢や弾丸を発射したりするための小窓である^{*3}。その用途によって矢狭間・鉄砲狭間、大砲狭間・箭眼・銃眼などという。形は円形・半円形・三角形・正方形・長方形その他種々の形がある。『築城記』^{*4}には、塀と狭間の仕様について、

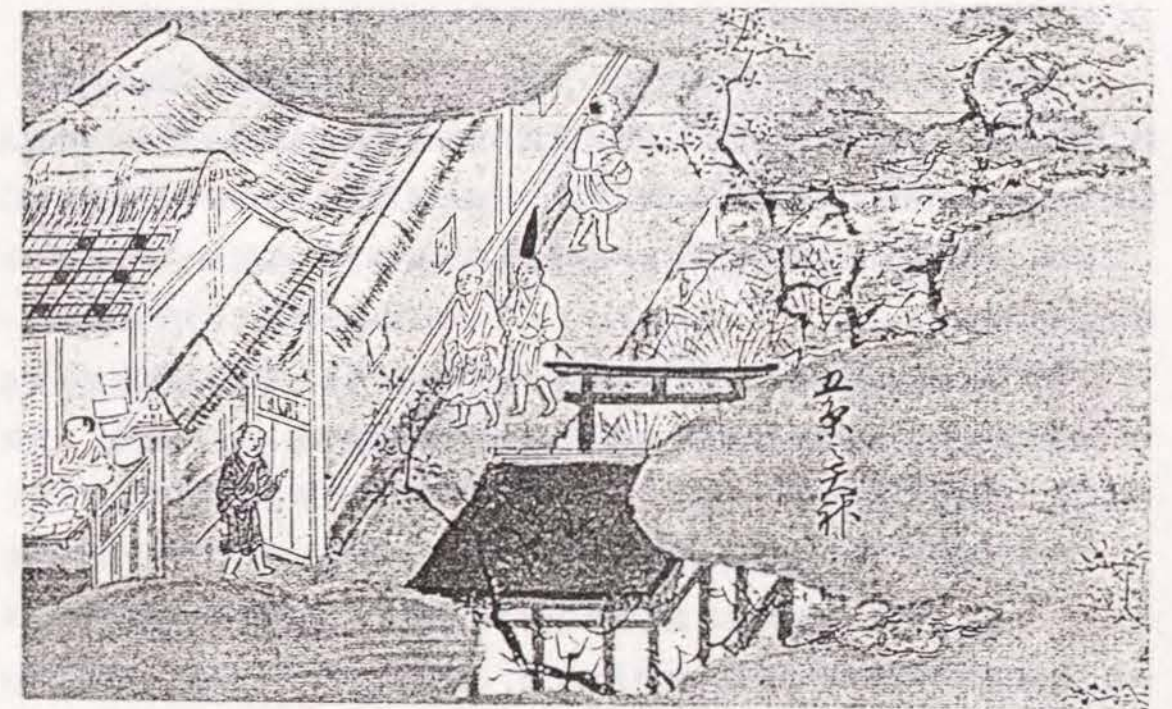
- 一 塀ノ高さ五尺二寸ばかり、サマノ長さ三尺二寸ばかり、サマノ口ノ廣さ、ぬりたて七寸ばかり、サマノカドヲ能おろして、矢の出よき様に可拵也
- 一 サマノ数ハ一町ノ面ニ卅と申。（中略）然ども不入サマヲバ、さまふたをしてふさぐ事ナレバ、サマ多して不苦

とある。縦約1m、横20cmばかりの隙間をあけ、矢が出やすいように仕上げることで、約4mおきにつくることがなどが、記されている。この中に、「狭間ふた」というものがある。必要に応じて開閉し、防御と攻撃を切り替える設備である。『太平記』^{*5}には、「狭間の板八文字に開いて」とあり、中世の早い時期からあったと考えられる。近世城郭の狭間に蓋付きの狭間が残っている例も多い。

狭間つきの土塀を知る好史料として、洛中洛外図がある（図9-1）。町田家本の西の京の集落を囲む狭間つきの土塀は、比較的幅が広く正方形に近い狭間である。入口の防御力を高めるためのものらしく、入口近くにしかもうけられていない。入口は木戸門である。狭間は奥まった側が二重線で描かれており、くぼんでいることから、内側から「狭間ふた」をあてていると考えられる。五条松原通、西洞院西にあった^{*6}五条天神の北に描か



町田家本洛中洛外図（西の京）



上杉家本洛中洛外図（五条西洞院）

図9-1 洛中洛外図にみる狭間つき土塀

れている構の土塀の様も同様に、窪んでいるように描かれている。

2. 釘貫と木戸門

釘貫の語源は諸説があり⁷⁾、①クキヌキ（漏貫）の義（大言海）、②クグリヌケ（漏抜）の義（鐘のひびき・俗語考）③クギを打ち通したところから（がい囊抄・志不可起）④クギはクギル義、ヌは助詞ノの同語で、キは城の意（筆の御霊）などといわれている。また、釘貫とは柱を立て並べて横に「ぬき」を通した柵をも意味していたが、後に柵のように作った粗末な門や、町の入口につくった木戸を意味するようになった。釘貫門などとも称され、基本的には入口の防御や遮断のための扉状の設備を指していた。

さらに、釘貫門は両方の柱の上部に2本の貫を通し、下に扉を入れた門を指すようになり、『運歩色葉』では「くぎもん」とも呼ばれた。『匠明門記集』には、

釘貫門之事 外端門也。一、柱の幅、間にて寸算厚さは七分算、

同下の貫内法は八寸内法にすべし、同上の横あい柱壱本はさみぬくへし

とあり、その構造と部材寸法を決定する根拠となる数字がわかる。『塵添*囊抄』には、

町々ニアル城戸ヲ、クギノキト云フ歟。文字如何。クギヌキト云也。平家ニモ成経帰洛ノ時、父ノ墓ニ参リテ壇築クキヌキサセト書ケリ。字ニモ釘貫ト書ク。人ヲ登セジトテ、釘ヲ打通シテ根ヲ返サザル故ニ、釘ヲ貫クト書ク歟。

と、防御のために打ちつけた釘を折り返さずに貫いたままにしたものを、その語源ではないかと類推している。

釘貫門の防御力をさらに増したのが、門の横木のう上に櫓を築いたものである。櫓は『太平記』巻十⁸⁾には、

木戸を誘えて垣櫓を搔て、数万の兵陣を雙べて並居たり。（中略）逆木を繋く引懸て、澳四五町が程に大船共を並べて、矢倉をかきて、横矢に射させんと構へたりとあり、『盛衰記』巻三十六⁹⁾には、

櫓を二重にかいて狭間を開きたり

とある。古来、土塀や土塁の隅部に高く築き上げ、攻め寄せる敵に側面から横矢をかけていた。上杉家本洛中洛外図の西院の城の入口には、簡単な櫓を門の上に築いている（図9-2）。この櫓の中には、武士が傍らに弓矢を立てかけて控えており、入口の警備のあり方がわかる。

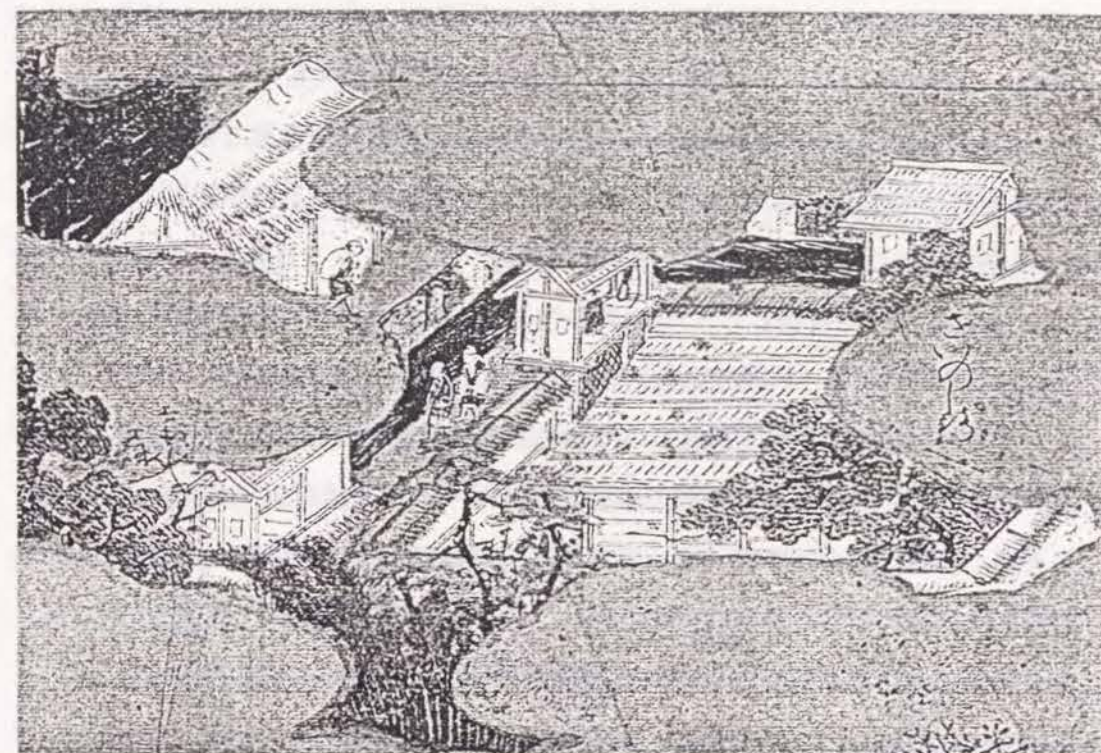


図9-2 西院の城の櫓門（『上杉家本洛中洛外図』より）

第3節 構の濫觴

構はある時期に突然出現したものではない。当初は世情不安の中で、用心のために釘貫や木戸門を構築したのに始まり、門番を置き、警護にあたり始めた。さらに、釘貫や木戸門で対応できない状況となり、周囲に堀や土塀をめぐるようになり、構が誕生する。本節では構の濫觴となる、釘貫・木戸門の構築と運営を詳細に検討し、構の出現に至る過程を考察する。

なお、京近郊に散在する構については、中世の農村における集村化現象をその素地として認識しておく必要がある。金田章裕氏は、畿内の沖積平野に分布する「コンパクトな集村形態」は奈良・平安時代まではさかのぼらず、こうした集村が形成されたのは南北朝の内乱を経た後のことであると指摘している。こうしたコンパクトな集村が構を構えていったと考えられる〔金田93〕。

1. 釘貫・木戸門の構築

南北朝動乱にともない、洛中洛外の諸処に木戸や釘貫が構えられる。『園太暦』観応2

(1351)年1月14日の条には、

此の間、洛中の狼藉常篇を絶す。就中、千葉の士卒等、所々に打ち入る。
此の辺り、去る比より木戸を構う。而して、其の辺り窺い見る輩之あり。
度々魂を消し了んぬ。木戸は仙洞咫尺然るべからずと雖も、之を取る。
時宜を伺い、且つは又密々武家に達し了んぬ。

とあり、武士の乱暴狼藉に対抗して木戸を構えている。木戸門以外の堀や土塀などは、構築されていないようである。『園太暦』文和2(1353)年6月25日の条には、

仰、晩に及び四条大納言(隆蔭)・大蔵卿入道等使を送りて云く。去る夜、
安楽光院新御所等、推参の物取の事以ての外なり。猶興盛なるべきの旨、
之を聞くの間、此の辺り城(木)戸を構え、随分警固すべきの旨、菊亭殿
広義門院の仰せなり。仍て兩人申し沙汰、在所に就きて面々申す所なり。
西大路南北并に柳原北釘貫辺り、殊に構えしむべきの旨、之を示す。下知
を加うべく、且つは大納言入道・園前宰相・忠広少將等、同じく触れ仰せ
らるべきの旨、報せ了んぬ。

とあり、盗人が安楽光院新御所に侵入したことから、木戸門を構えて警護するようにとの下知が下っている。『看聞御記』応永25(1418)年6月2日の条には、

仰聞く。世上此の間物言(語)あり。諸大名、分国勢共を潜に召し上げ、
誰の身上と露顕せざると雖も大名共用意せしめ、室町殿も用心あり。

御所四方の小路、大釘抜を打ちたる。

とあり、世情不安のため將軍の居所であった花の御所の四方の小路にも、大釘貫が設置されている。

「廿一口方評定引付」(『東寺百合文書』)によると、寛正6(1465)年8月に、

彼の用水の事、既に廿日以前と日限を指し仰せらるるの処、承引申されず
の間、定めて子細あるべき歟。仍て大宮・八条・壬生等針貫共、悉く柱を
立て添え、堅めらるれば然るべきの由、申さるる旨披露致す。

と、用水争いから争乱が起こりそうになり、用心のため、洛中南辺の所々の釘貫を補強するようにとの通達が出されている。

また、『康富記』嘉吉3(1443)年9月18日の条には、

或ひと語りて曰く。近日、土倉・酒屋洛中洛外歟。と西京住人、酒麴造作
の事を相論せしむ。管領成敗として酒屋等に付せられるの処、七月卅日御

教書を洛中に下さる。治部河内守奉行として書き下すと云々。西京住人等
鬱憤せしめ、北野社中に閉籠せしむ。又西京中、大道に木戸を結び、往来
の人通ぜずと云々。之に依りて諸人、北野社参叶わざる者なり。

とあり、自衛のための木戸ではなく、交通を妨げ北野社への要求貫徹の手段とするための木戸を西京住人が設けている。

『嚴助往年記』天文13(1544)年7月9日の条には、

大洪水、京中人馬数多流失す。在家・町々釘抜・門戸、悉く流失す。四条・
五条橋・祇園大鳥井(居)流失す。禁中西方の築地流損す。

とあり、洪水によって町々の釘貫・門戸が流失したとあるが、この記事から釘貫と町の木戸門とは別のものであったとする説もある。

『川角太閤記』天正10(1582)年には、

京中町近くなりしかば、齊藤内蔵助町あたりにて下知の様子は、いつもの
如く、くぐりはあき候てこれあるべく候。戸びらを押し明けよ。くぐりま
でにては、幟・さし物かまふべきぞ。其のうへ人数くり入るゝ事、はかゆ
き申すまじく、町々の戸びらを押しひらけよ。一筋にてはかなふまじ。其
の組々、思ひ思ひに、本能寺の森、さいかちの木、竹藪を、雲すきに目あ
てにせよ。夜はその通りまでを目当にすれば、踏みちがへる事もやありな
ん。其の分心得候へと、調子高に下知仕まはりたると聞こえ申し候事。

とあり、上洛する武士団が、町々の木戸門を押しあけ、町中に入ろうとしている。木戸門には「くぐり」と「町々の戸びら」があり、「くぐり」は開いているが「戸びら」は閉められており、「くぐり」ではすばやく押し入れないので「戸びら」を押しあけるようにとの下知が下されている。

2. 木戸門の開閉とその管理

つぎに、木戸門の開閉などの運用の実態について考察する。木戸門は夜間には閉鎖されており、通過するには、許可を必ませ2要としていた。『康富記』の文安(1447)年5月8日の条には、

今夜、一条東洞院釘貫闔し置くの処、或る男五、六人開くべきの由之を申
すと雖も、叶うべからざるの由、内裏門役返答の処、釘貫を昇り越え出で
んと欲するの間、門役の者共取籠め子細を尋ぬるの処、山名方土橋の被官

人と云々。土橋に申し遣わすの間、彼の方より乞い請け無為に帰すと云々。

之に依りて物惣なり。然りと雖も静謐し了んぬ。

とあり、夜間に木戸門を通過しようとした山名家の家臣土橋氏の被官人の武士数名と、門番が問答となり、強行突破をはかって、釘貫を乗り越えようとした武士がからめ取られたことが記されている。『建内記』の翌日の条には、

今夜、禁裏西面門外の針貫の内に狼藉ありと云々。以ての外物惣。武士ら警固に馳せ参ずと云々。仍て禁庭に至り内々参入す。高倉針貫案内を示し、之を開かしめ参り了んぬ。(中略)相尋ぬるの処、案内を示さず針貫を穿ち通らんと欲する物之あり。仍て門役番衆等遮ぎり留め相尋ぬるの処、山名の内土橋の内者なりと云々。仍て門役所より尋ね遣わすの処、相違なし。仍て彼の許に渡し了んぬ。殊なる事に非ずと云々。静謐珍重なり。翌日伝え聞く。一条衣服寺薬師に参詣する者なり。仍て諸方の針貫、近日早く閉し帰路を失う。四足門前の針貫を開くべきの由、種々懇望の処、承引せず。仍て無力少々穿ち通るの時、狼藉と号して打ち留めんと欲すの間、両方已に珍事に及ばんと欲す。仍て人を遣わし相尋ぬるの処、被官人相違なき歟。

土橋申し請くと云云。事実たれば、殊なる事に非ざる歟。

とあり、同じ事件を報告しているが、釘貫が四脚門であったことや、針貫は穿ち通ろうとすれば、通ることができる程度の構造であったことがわかる。また、釘貫が早くに閉まり帰路を失ったこと、一度閉ざすと滅多なことでは開けてもらえないことがわかる。

また、土一揆の際などにも用心のため、釘貫・木戸門が閉鎖されている。

『建内記』文安4(1447)年7月19日の条には、

土一揆、七条油小路に発向す。以南東寺辺。大名両三輩之を相禦ぎ、火事に及ぶ。土一揆度々誅戮せらると云々。御所辺り針貫を閉し土一揆の為、御用心と云々。

とあり、土一揆が七条油小路の金持ちの土倉を襲い、放火、殺戮をおこなったため、御所近辺の釘貫が閉鎖されている。同日の『東寺執行日記』にも、

為_レ得(徳)政、西岡土一揆、七条土蔵発向。七条辺在家へ懸_レ火。

仍公方勢土岐・斎藤大宮ヲ下向、八条クシケ(櫛笥)ノ木戸ヲ開カセテ寺中へ乱入シテ、坊ノ前ニテ乗順納所・伊与雑掌□□妙観院青侍比三人打_レ之。

とあり、東寺の中にも乱入していたことがわかる。

『耶蘇会士日本通信』永禄8(1565)年4月27日の条には、

同所を出て我等は真直にして広く平坦なる街路を通行せり。街路は城の如く悉く門を備へ、夜間之を閉鎖す。

とあり、町ごとにことごとく木戸門が備えられ、夜間には閉鎖していたことがわかる。

『フロイス日本史』には、

暴君関白は、大仏の建立、その他寺院の再建を命ずることに余念がなく、万人に及んだ数限りない暴政をもって、ますます自己を誇示し、尊大に振舞った。彼は都の市に〈かつて〉見られなかったような建造物とか豪華な〈諸建築〉を〈次々に〉完成し、日々〈新たに〉造築していった。彼は市に平屋の家が一軒として存在することを許さず、すべての家屋が二階建とされるように命じた。日本のごく古くからの習慣では、〈市の各〉町の他の町と分けする二つの門は、夜間は閉鎖することになっているが、関白はそれらの門を一つ残らず、すべて撤去させた。こうして〈都の〉すべての町は、昼夜、開放されることになった。

とあり、秀吉が強権を発して、夜間閉鎖していた町々の木戸門を撤去させている。これは、族生した構を統一し、土居で囲んで京都をひとつの町とする秀吉の施策の一環であった。

第4節 構の誕生

1. 南北朝の大乱と構

中世的な構が京の内外に現れてくるのは、14世紀のことである。釘貫、木戸門だけを構えていた状態から、堀や土塀、土塁をとまなう本格的な構へと発達してくる。『続史愚抄』正慶2(1333)年3月8日の条には、

依_レ兵起_ニ構_ニ針貫于京師_ニ 按_ニ針貫者_一權敷。三條以北、川原以西、東洞院以東、中御門以南。可_レ鑿_ニ大堀_一旨被_レ定云。

とある。六波羅探題が洛中に釘貫を構え、また大堀を鑿とうとしている。ここでは、三条以北、川原以西、東洞院以東、中御門以南の広い範囲を囲む大堀を計画しており、構の濫觴として注目に値する。なお、ここでは釘貫を針貫(抜)と称している。

また、『東寺百合文書』*10の中に法性寺境内の検断権について東福寺の雑掌の言上文が

ある。文明14(1482)年10月のもので、

東福寺雑掌謹んで支え言上す。

法性寺大路境内検断の事

右在所は、当寺領法性寺境内として往古より検断に於ては、更に他の妨げなし。或は山門領域は公家・武家領所々地子等知行分之あり。東寺領また同前。屋地子に於ては其の綺を成さざるなり。殊に公方普請たるの処に非分の課役と号するは何ぞ哉。次に、応永卅四年、唐橋通釘貫之を改め一橋爪に之を構うと云々。彼一橋の堀は当寺本願檀那光明峯寺殿(九条道家)の御時、法性寺構として重ねて之を鑿たれ、今にその隠れなし。然る間、毎年橋并釘貫之を修補す。此の趣御披露に預り、東寺雑掌の姦訴を停止せらるれば、寺家大慶たるべき者なり。仍て言上件の如し。

文明十四年十月 日

とある。検断に関する訴えもさることながら、応永34(1427)年に、唐橋通りの釘貫を一ツ橋通り(泉涌寺道)に移したことについて抗議している。一橋には堀があり、この堀は13世紀前葉の九条道家の代に掘削したものであり、法性寺構と呼ばれていたことがわかる。

2. 応仁の乱と構

そして、応仁の乱が勃発すると、洛中洛外の諸処に構が出現する。『後知足院房嗣記』の応仁元(1467)年5月30日の条には、

方々要害に堀を掘る由申せしむるの間、侍共に仰せ付け鷹司面を掘らしめ了んぬとあり、連日の戦乱に備えて、要害化が進められている。

日野内府勝光は、その邸宅の周囲に大堀を構えたが、避難路がなく、万一の場合は自決の覚悟であったといわれている^{*9}。

三条西実隆も自邸の自衛をはかっている。『実隆公記』延徳2(1490)年2月28日の条には、家の周囲に堀を掘った記事がある。また、同記大永7(1527)年11月28日の条には、

凶賊、此の辺りに闖入すべきの由風聞す。仍て門際に牆を構えしむ。

比興々々。北釘貫の前に堀を上げ竹を以て牆を構う。件の竹五十本、

帥所望す。権中納言の者なり。

とあり、自邸の門際に牆を構築している。さらに、北の釘貫の前には、土を掘り上げ竹で牆を構築していたことがわかる。

『見聞雑記』の応仁2(1468)年7月27日の条には、

針小路猪熊ノ世楽寺ノ藪垣ヲ破り堀ヲホリ了。

とある。

そして、応仁の乱に際し、前述のように町の防御などのために、各町に木戸が設置される。「廿一口方評定引付」(『東寺百合文書』)文明18(1486)年9月2日には、

一、八条大宮角敷地大島所望申す間の事。

(中略)徳政等の時は、*閉し出入を止むべきの由申す者なり。衆儀の趣は、往古の木戸を築閉するの上は、今更、大路え路を通すべきの事然るべからずと雖も、申すの如く用害致さば居住せらるべきなり。

とあり、木戸を築くことは要害であるとの認識がある。さらに、木戸だけでなく、その前に堀や櫓が設けられるようになる。「廿一口方評定引付」(『東寺百合文書』)の文明19(1487)年5月8日には、

若衆中より申さる。近日夜盗以ての外なり。仍て所々の構沙汰あるべしと云々。(中略)次いで実相寺木戸の前堀をさらえ、木戸の内櫓を挙げらるべきの由、治定し了んぬ。

とあり、治安の悪化にともない、諸処で構が構築されていた。実相寺の前では、堀が掘られ、また木戸の内側には櫓が設けられている。

逆に、壬生構では法華堂普請のため、構の堀が埋められている。『晴富宿禰記』文明10(1478)年1月14日の条には、

今朝より壬生構之を壊つ。五条坊門、櫓筒に至り路次を掃次(除)す。

櫓筒以東妙蓮寺・妙覚寺の間、堀之を埋む。譜請法華堂より之を沙汰す。

とある。しかし、『北野社家引付』長享2(1488)年12月8日の条には、壬生官庫の堀を掘るようにとの督促が、西京散所民に出されている。堀の掘削、埋めもどしは日常적으로こなわれていたのであろうか。

3. 天文法華の乱と構

天文法華の乱も洛中洛外に大きな被害をおよぼした。このため自衛のために多くの要害が築かれている。『鹿苑目録』天文5(1536)年5月29日の条には、

六角早鐘、用(要)害の溝を掘ると云々。

とあり、六角堂の鐘を鳴らして要害の溝を掘っている。

『兼見卿記』天正12(1584)年4月14日の条には、

十四日庚申、松田勝右衛門尉見舞の為出京す。宿所に罷り向う。山王祭見物の為坂本へ下向なり。筑州屋敷妙見(顕)寺大普請、外城の堀下京衆之を掘る。

とあり、妙見寺をその居所とした筑州屋敷の外堀普請に、下京の町人が徴発をうけている。

第5節 小 結

以上、構の誕生とその歴史的背景について考察を進めてきた。この結果、

①中世の構は、環濠集落や高地性集落が多数構築された弥生時代とよく似た、社会的・軍事的緊張感の高い時期に構築された自衛的空間である。

②奈良盆地の中世の環濠集落の起源を南北朝以降とし、その目的は村を周囲の脅威から守ることとし、寺内町、城下町の萌芽と考えた堀部日出雄氏の説は、惣村と構の関連を考察する上で重要な手がかりである。

③構は、木戸門または釘貫、堀、土塀・土塁などで囲まれた自衛的、防御的な空間であり、南北朝の内乱あたりを契機に現れてきた。初期の段階では、堀や土塀・土塁をともなっていたかどうか明確でない例も多いが、土一揆が頻発した応仁の乱前から、戦乱が間断なく続いた中世後半には、周囲を何らかの防御施設で囲んでおり、軍事的緊張の高まりをうかがわせる。

④構の釘貫・木戸門の管理は厳格におこなわれ、夜間は閉鎖され、強行突破をはかると有力大名山名氏の被官人ですら、門番にからめ取られるといった状態であった。

*8 『太平記』巻十 稲村崎成=干潟-事

*9 熊谷向大手

*10 『東寺百合文書』函え 文明十四年十月

*11 『大乘院寺社雑事記』応永元年6月2日の条

*1 『宗長手記』大永7年2月12・13日の条(島津忠夫校注『宗長日記』)

*2 『日本の封建都市』p.11

*3 『広辞林』

*4 『群書類従』第十八巻

*5 「一 頼堂図忠」

*6 『雍州府志』巻二

*7 誤源記、日本国語大辞典

第10章 洛中洛外にみる構の展開

構は遺構と遺跡・遺物を通じて、最も豊富に知られる。武士の構は、武士の社会を反映したもの、公家の構は公家の社会を反映したもの、町衆の構は町衆の社会を反映したもの、惣村の構は惣村の社会を反映したもの、寺院を取り巻く構は寺院の社会を反映したもの、検出した構の遺構は、これらの構の展開を示している。武士の構は、武士の社会を反映したもの、公家の構は公家の社会を反映したもの、町衆の構は町衆の社会を反映したもの、惣村の構は惣村の社会を反映したもの、寺院を取り巻く構は寺院の社会を反映したもの、検出した構の遺構は、これらの構の展開を示している。

武士の構は、武士の社会を反映したもの、公家の構は公家の社会を反映したもの、町衆の構は町衆の社会を反映したもの、惣村の構は惣村の社会を反映したもの、寺院を取り巻く構は寺院の社会を反映したもの、検出した構の遺構は、これらの構の展開を示している。

社会的・軍事的関係の中で、武士の構は、武士の社会を反映したもの、公家の構は公家の社会を反映したもの、町衆の構は町衆の社会を反映したもの、惣村の構は惣村の社会を反映したもの、寺院を取り巻く構は寺院の社会を反映したもの、検出した構の遺構は、これらの構の展開を示している。

洛中にあって最も多かったのが、町衆の構である。町衆の構は、町衆の社会を反映したもの、公家の構は公家の社会を反映したもの、町衆の構は町衆の社会を反映したもの、惣村の構は惣村の社会を反映したもの、寺院を取り巻く構は寺院の社会を反映したもの、検出した構の遺構は、これらの構の展開を示している。

町衆の構は、町衆の社会を反映したもの、公家の構は公家の社会を反映したもの、町衆の構は町衆の社会を反映したもの、惣村の構は惣村の社会を反映したもの、寺院を取り巻く構は寺院の社会を反映したもの、検出した構の遺構は、これらの構の展開を示している。

惣村の構は、惣村の社会を反映したもの、公家の構は公家の社会を反映したもの、町衆の構は町衆の社会を反映したもの、惣村の構は惣村の社会を反映したもの、寺院を取り巻く構は寺院の社会を反映したもの、検出した構の遺構は、これらの構の展開を示している。

- 10-1 構の類型と諸形態
- 10-2 武家の構
- 10-3 禁裏と公家の構
- 10-4 町衆の構
- 10-5 惣村の構
- 10-6 寺院を取り巻く構
- 10-7 検出した構の遺構
- 10-8 小 結

第10章 構の展開

第1節 構の類型と諸形態

応仁の乱の勃発以降、京内外の治安状態は悪化したままとなり、乱以降、自衛のための構は連綿と構築・維持されていく。構を構築した主体は、武士がその拠点として構築したものや、公家が自らの邸宅を守るために自邸の周囲に築いたもの、そして、町衆が自らの町を町を守るため、一致団結して築いたものなどがある。さらに、洛外においては上賀茂社や吉田社の社家が主体となって築いたものや、自らの村落を守るため、土豪が主体となって築いたものもある。日蓮宗や一向宗の信徒の築いた構も京の内外にあった。本章では、これらの構の構築のあり方や主体などから、いくつかの類型に分類し、考察を試みる。

構の構築主体としては、武家、公家、社家、土豪などがあげられる。武家の構としては、二条御所武衛構、伊勢殿構や、秀吉が妙建寺を立ち退かせ、その跡地に構築した妙顕寺の構などがある。戦をなりわいとする武家の構であり、その居館は基本的に自衛的・防御的性格をもつが、中に居住するものは限られており、他の構とは性格が異なる。

社会的・軍事的緊張の中で、自衛のために構を構築したのは、内裏や公家も例外ではなかった。内裏はその四周に惣堀を構えている。内裏の要害化には禁裏六町を初めとする町衆の親密な協力があり、周辺の町衆と隔絶していた武家の構とはやや様相を異にする。

洛中にもっとも多かったのが、町衆の手による町衆の構である。町衆、公家が渾然一体となって暮らしていた一条烏丸の構や、壬生構、白雲構、新在家の構などがあげられる。さらに、具体的な名称は不明であるが広橋殿遺跡、上御霊町遺跡、御池東洞院遺跡、西前町遺跡などで、構の堀と思われる遺構を検出している。

洛外の惣村も、その周囲に堀をめぐらし、木戸門を構えるなどして構と化した。粟田口の構、田中構、革島の構などがあげられる。上久世城ノ内遺跡、鳥羽遺跡などでは、構の遺構が検出されている。田中構のように土豪の渡辺氏が中心になって構築した構であり、革島の構も在地の土豪を中心に構築したものである。

神社の社家町が構えと化したものもある。吉田社の神官吉田氏が主体となって構築した吉田の構や、上賀茂社の社家が置文を定めて構築・維持していた上賀茂の構がその好例で

ある。

真宗門徒の構は、寺内町と呼ばれたほうが通りがよい。京郊では、山科寺内町の構があった。仏国を夢見た門徒が本願寺をその核とし、周囲に門主や坊官、そして一般門徒の住区を配し、さらにその周囲を堀と土塁で囲んだもので、環濠城塞都市ともいえるものであった。

一方、日蓮宗との構築した構は法華宗寺院をその中核としたもので、いずれも洛中であり、洛外の真宗門徒の構と好対照をなしている。

本章では、こうした構の構築主体と、構の性格やあり方について考察する。

第2節 武家の構

武家が外敵に対して防御施設を構築するのは当然であるが、中世後半にはその邸宅も構として認識されていた。武家の構の筆頭として、管領斯波義将が造営した邸宅「武衛陣」がある。康永年中(1342~45)に義将の造営したもので、代々斯波氏に伝えられてきたが、応仁の乱で荒廃し、將軍足利義輝の邸宅となる。東は烏丸小路、西は室町小路、北は勘解由小路南は中御門大路に囲まれた方1町に比定されている。『足利季世記』には、上京勘解由小路室町の武衛陣邸とある。「二条御所武衛構」とか「二条御所武衛陣の御構」とも称されており、將軍邸宅も構として捉えられていたことがわかる。

応仁元(1467)年8月23日、土御門天皇は戦乱を避けて、足利義政の室町殿に移徙した。この室町殿を中核に東軍が構築したのが、「御構」と称された構である。数多の構の中で、最大の規模をもち、小川以東、烏丸以西、寺の内以南、一条以北の範囲に比定されている〔高橋83, p292〕。

また、上洛した秀吉の屋敷地は、もともと日蓮宗の妙顕寺を退去させて築き上げたものであった。秀吉はこの妙顕寺を寺の内に移し、さらに外堀を構築している。妙顕寺は天文法華の乱の後、旧地二条西洞院に還住していたが、天正3(1575)年10月18日に、

二条以南、三条坊門以北、油小路と西洞院の間東西巷町南北式町

の地を安堵され⁴⁾、寺地を移していたが、『兼見卿記』天正11(1583)年9月11日の条には、

妙見寺築州屋敷二成り、寺中悉く壊し取ると云々。近日普請之在りと云々

とあり、さらに同記の天正12(1584)年4月14日の条には、

十四日庚申、松田勝右衛門尉見舞の為出京す。宿所に罷り向う。山王祭見

物の為坂本へ下向なり。筑州屋敷妙見(顕)寺大普請、外城の堀下京衆之を掘る。

とある。外堀の普請に、下京の町人が徴発をうけたことがわかる。翌年には、前田玄以の居所となっている。『宇野主水記』の天正13(1585)年7月6日の条には、

京都二ハ玄以宿所号民部卿法印三條也、元妙顯寺ト云寺也。ソレニ要害ヲカ

マヘ、堀ヲホリ、天主ヲアゲテアリ。秀吉御在京之時ハ、ソレニ御座候也。

常ハ玄以ノ宿所也。

とある。妙顕寺は妙顕寺の間違いで、妙顕寺跡の構には天主もあったことから、すでに城郭に特化していた可能性もある。なお、二条妙顕寺の堀は、秀吉の聚楽第への移徙にともない城としての機能は廃され、堀が埋め立てられている。『上下京町々古書明細記』には天正15(1587)年には、

二条妙顯寺の堀をを埋申候其手間賃

として、5貫文が支払われている。

このほか、武家の構としては伊勢殿構がある。構としては新しく、聚楽第造営のさいに伊勢兵部少輔の邸宅があったところで、遺構は残っていないが構はあったと考えられる。

『上下京町々古書明細記』は、「伊勢殿構惣中」の注書きとして

今ノ入江殿図子町之事 替地二成

とあり、伊勢殿構の人々が上立売の辺りに替え地となっている。文禄4(1595)年頃のことである。

第3節 禁裏と公家の構

戦を生業とする武士が邸宅に防御施設を構築し、構としてしつらえるのは当然であるが、公家も自らの邸宅を構えとなし、自衛の体制をとっていた。治安の乱れた戦国時代には、禁裏もその例外ではなく、その要害化はしばしばおこなわれていた。

1. 禁裏の要害化

『御湯殿上日記』文明16(1484)年6月4日の条には、

洛中に盜賊横行し、狂人禁裏を犯す。朝廷、幕府に命じて皇居東方に溝渠を掘らせる。

とある。朝廷の権威も地に落ち、禁裏に侵入するものもいた。このため、幕府に命じて、皇居の東に溝を構築している。

明応4(1495)年にも、堀の普請が命じられており、同年10月14日付けの井関氏にあてた奉行人奉書には、

内裏御近辺堀事、度々被相触之处、嵯峨之輩于今無沙汰、不可然、任

東山殿普請之例、各可勤仕之旨、堅可被加下知之由候也、仍執達如件、

とある。内裏の警備の強化が継続的におこなわれ、そのため嵯峨の地下人が徴発されているが、あまり素直に徴発に応じていないようである。明応8(1499)年には、土一揆の蜂起に対処して

内裏御近辺堀普請事、来二十日已前可致其沙汰、於難渋者可被処罪科之条如件

明応八 八月十六日

なる奉行人奉書が発給されている。さらに3日後の19日にも督促の奉書があり、明応4年の堀普請と同様に、普請がなかなか進まなかったことがわかる。

また、時代は降るが、西岡一揆に際し、禁裏六町の町衆が小屋を建て警固にあたっている。『言継卿記』元亀元(1570)年10月4日の条には、

禁中に御近所六町々人、御警固の為小屋懸けの間、之を廻覧す。次いで内

侍所へ立ち寄り了んぬ。次いで西岡一揆発り、東の山下へ千人計発向、鯨

浪を揚げ殊事なく之を打ち入る。武家の為、徳政を行なわると云々。

とあり、禁裏六町の町衆が土一揆の警戒のため、御所に小屋掛けをしている。町衆と禁裏の密接な関係がよくわかる。

『上下京町々古書明細記』の元亀4(1573)年7月の新在家緒屋町に関連して、「内裏惣堀」とあり、内裏の四周に堀が築かれていたことがわかる。

2. 公家の自邸の構

『後知足院房嗣記』の応仁元(1467)年5月30日の条には、

方々要害に堀を掘る由申せしむるの間、侍共に仰せ付け鷹司面を掘らしめ了んぬ

とあり、記主近衛房嗣は、連日の戦乱に備えて、自邸の鷹司小路に面した部分に堀を掘り、その要害化を進めている。

『宣胤卿記』文明12(1480)年2月2日の条には、

行下亭、東北垣内令穿堀、東至河原無家、北至近衛無屋、一向荒野之間、

為用心也

とあり、中御門宣胤は用心のため邸内の東と北に堀を掘っている。中御門宣胤亭の東は河原まで、北は近衛大路まで人家のなかったことがわかる。

三条西実隆も自邸の自衛をはかっている。『実隆公記』延徳2(1490)年2月28日の条には、家の周囲に堀を掘った記事がある。また、同記大永7(1527)年11月28日の条には、

凶賊、此の辺りに闖入すべきの由風聞す。仍て門際に牆を構えしむ。

比興々々。北釘貫の前に堀を上げ竹を以て牆を構う。件の竹五十本、

帥所望す。権中納言の者なり。

とあり、自邸の門際に牆を構築している。さらに、北の釘貫の前には、土を掘り上げ竹で牆を構築していたことがわかる。

第4節 町衆の構

正長の土一揆をはじめとする土一揆などの混乱状態や、応仁の乱以降の恒常的な戦乱を通して、町衆の中に自衛のための団結と自治意識が芽生えはじめていた。有事の際には合力して事に対処し、平時にも構の構築・維持などで協力しあっていた。こうした状況は諸先学の研究が数多くあり、中でも高橋康雄氏と今谷明氏の業績に詳しく、ここではあまり触れない

1. 一条烏丸の構

大永7(1527)年、烏丸の町では三好軍と町人の間で衝突があった。室町幕府に政権をかけた戦いを挑んでいた細川晴元方が、抵抗する町人との間で起きた騒動であった。

『言継卿記』の大永7(1527)年11月27日の条には、

世上念物惣の間、此方つしの口にかこいをさせ候。中御門より三色木十本、

借候。此方より三色木三本、其外柳原よりも木共出候。此方よりも木共竹等

出し候了。

とある。資材を供出して町の辻子の入口に囲いをつくり、要害化している。『言継卿記』の筆者山科言継も一条烏丸の住民であった。ここには中御門家のような公家や、町人が渾然一体となって住んでいたところであるが、結束力の強い町であり、武士の押妨に対抗し、

辻子の入口に材木を持ち寄り防御のための囲いを作っている。

こうした状況の中で武士との衝突が起こる。『二水記』の同日の条には、

午前、一条烏丸の小家、牢人所縁と号し押し入る事之あり。然ると雖も、町人馳せ集り無事落居し了んぬ。午後、薬師寺観音堂等に詣り、此の次、柳原亭に向う。(中略)晩頭又、行事官宿所に押し入り強に及ぶの儀、仍て上下町人数百人馳せ集り、時の声を揚げ、後、四方を攻むるなり。其の声度々に及び、頗る軍中の如し。不可思議の体なり。夜に入り事なし。両方相宥す。

とあり、武士が一条烏丸に押し寄せ、押し入ろうとするが、町人が集まり、これを押し返している。さらに、この武士たちが無体を続けたため、上下の町人数百人が集まり、関の声を上げ、一致団結して武士を押し返している*2。

さらに、『言継卿記』の翌月の一日の条には、

一、昨日之無念に、此ちやうへよせ候由申候。ちやうのかこい仕候間、竹所望之由申候間、十本道候。此方のつしの口にかまへを仕候了。此方よりちやうへ酒をのませ候了。

一、禁裏四足之前にもかりを可仕之由、局務申候間□□□□□罷候。皆々近辺之衆竹柱等出し候。此方よりも竹□□□□□縄等出し候。皆々被_レ出候衆四条、老父、万里小路、庭田□□□□□、薄、局務、官務等也。皆々人を被_レ出候。

とある。「町の囲い」を作り、辻子の口に構を構築したことがわかる。

この武士の横暴の事件の後、さらに、小競り合いは続き、『言継卿記』の享禄2(1529)年1月10日の条には、

八時分より河(革)堂之鐘事之外つき候。一条殿御池へ地子を可取之由申て、柳本名字之物兩人打入、妻子共人しちに取候由申候了。老父は一条殿へ参候。事之外之凶ふ也。

とあり、柳本衆の押妨に革堂の鐘を鳴らし、町衆を集めて対抗している。さらに、同記の翌日の条には、

朝飯以後、摂取院・甘露寺・伯・広崎・一条殿等御礼参候。一条殿へは面より無道之間、室町の在家の烏屋より参候。又河(革)堂之鐘をつき候。町々起て取巻ときをあげ候。北より高屋弥助取かけ候所にて取相候て、柳

本新三郎衆七八人手をひ、三人死候。南は町々物ともと取合候。伊勢守衆・仁木二郎内中小河山城守殿、中分入候て矢を留候。一条殿よりも矢を射出し候。(中略)一条殿に候人数二百人計候也。其外、室町之物共、悉一条殿裏へつめ候了。中分に成候間、予皆々同道仕候て、暮々罷帰候。柳本新三郎人数、昨日は二百余人候か、今日百二三十候由申候了。一条殿へも取かけ候つる。射出し候事候つる。

とあり、争乱状態が継続していたことがわかる。個々で注目に値するのは町衆が一致団結してことにあたっている点で、当時の町衆の自治と団結の風を読みとることができる。構の構築がこうした一体感を醸し出したのであろう。

2. 白雲の構と新在家の構

白雲の構はもとは、新町今出川を上がったところにあつたが、水質が機業に不向きなことから、天正16(1588)年に、烏丸小路の東、上長者町通りの南のに移転し、方2町の新在家町となった。旧地は元新在家町と名称を変更している。

白雲の構がいつ頃から構築されたかは定かではないが、『小早川家文書』二の一五〇号には、

今月三日於白雲構、親類被官人数輩注文在之、或討死、或被疵之条、尤神妙、弥可被抽戦功之由、被仰出也、仍執達如件、

応仁元 十月七日 (布施) 貞基(花押)

(飯尾) 之種(花押)

小早川備後守殿

と、応仁の乱の緒戦の中で、白雲の構においても合戦があり、死傷者が出たことがわかる。

また、『実隆公記』文明6(1474)年8月5日の条には、

今日誓願寺之鐘、於白雲構之外鑄之、貴賤群衆

とあり、白雲構のやや西にあった誓願寺の梵鐘の鑄造を、構の外でおこなっている。白雲の所在については、『宣胤卿記』長享3(1489)年5月8日の条には、

今夜上京大火事、西大路以南、室町以西、北小路以北、此内少々有残所、

西ハ白雲之西小路、不出小川程也

とあり、新町今出川の一带と考えられている。

また、新在家については、『上下京町々古書明細記』の元亀4(1573)年7月付けの織田

信長の朱印状の写しがある。その中で新在家緒屋町について、まず、注記で、

此地本文之通烏丸ノ東、上長者町ノ南ニ有今、新在家御門ノ通り也、

元白雲ノ地より引移ス事

とある。烏丸小路の東、上長者町通りの南にあり、白雲から移転してきたことがわかる。

さらに、

内裏惣堀より南江二町近衛を限 東は高倉を限 西は烏丸を限

二町当たるべし 惣構は下京ニ准事

とあり、内裏の南、近衛と高倉と烏丸に囲まれた方2町の区域が新在家であったことがわかり、さらに惣構は下京の構に準じて構築されていたことがわかる。

第5節 惣村の構

土豪が中心となってとりまとめたり、惣村が一致団結して構築した構が、洛外の随所に点在していた。京都周辺以外にも惣村の構の例が報告されており、本節では、こうした惣村の構について考察する。

1. 粟田口の構

粟田口は三条通りを東に進み、鴨川をわたり東山にさしかかる一帯である。東海道、東山道の京への入口にあたることから粟田口と呼ばれた。『山科家礼記』の応仁2(1468)年3月29日の条には、

東山通路事、近日令一揆、依致警固、無其煩云々、尤以被感思食畢、所詮、

郷々村々族申合之、於粟田口辺構要害定結番、至御敵輩者堅相支之、別而

抽忠節者、可有思賞候者、可被相触山科郷之由、被仰出候也、仍執達如件

応仁二 布施下野守

二月廿一日 貞基在判

諏訪信濃守

忠郷同

山科家雜掌

とあり、一揆に対する警護のため、粟田口の辺りに要害を構えていた。

この粟田口の構は洛中洛外図にも散見され、その状況を視覚的に知ることができる(図

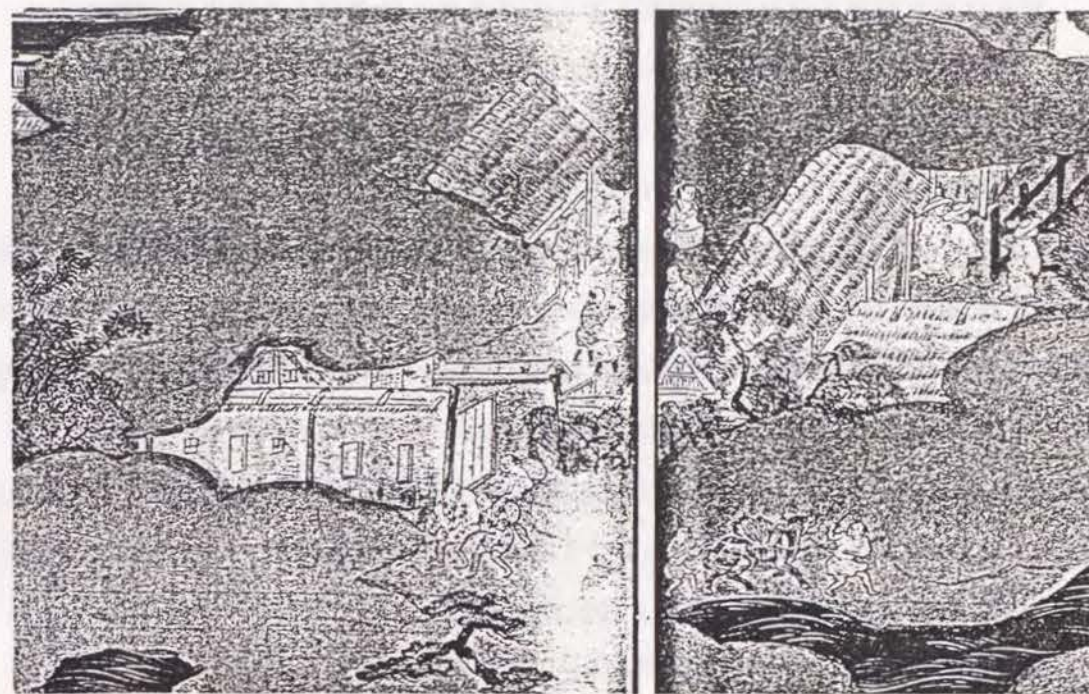


図10-1 粟田口の構(『洛中洛外図 上杉家本』)

10-1)。人々の行き交う三条通りに、両側に狭間つきの土塀がある木戸門が描かれている。土塀には、窪んだ形で描かれた蓋つきの狭間と、小さな小窓が描かれている。

2. 田中の構

田中の構は現京都市左京区田中に位置する。京都大学農学部約00m北東にあったと考えられている。田中の構は、この地の土豪渡辺氏が天文法華の乱や信長上洛の際に抵抗を試みており、しばしば戦渦に巻き込まれている。渡辺氏の影響力のもとに、郷民が自衛のために群集し、防御施設の堀などを構築したと考えられている。こうした構のあり方を、領主の主導のもとに構築・維持管理のおこなわれた吉田構、聖護院構や、氏人が主体となって堀などの維持管理をおこない、「置文」を定めて一戸あたりの分担をきめ、自ら律していた上賀茂構ほど明確な資料は残っていないが、田中の構の構築とそのあり方について考察を進めたい。

(1) 中世の田中の構

田中の構が文献に現れてくるのは、文明6(1474)年のことである。『親長卿記』の文明6年8月1日の条には、

近日物(騒)、(中略)夜に入り田中構 田中郷の輩、先年炎上の後、構五

霊日に人々群衆、近日田中構と号す。火事あり。敵忍び入り焼き立て押せ寄すべきの由、近日風聞す。人々已に其の思いの処を存じ、自火の由を注進し安堵せしめ了んぬ。

とあり、田中構と称されるようになったのが、文明年間ごろであったことがわかる。敵方の放火の噂もあったが、諸情勢を勘案し自火による火事であったとして届け出ている。文明6年7月以降、応仁の乱は再び激しさを増しており、世情が物騒であったため、敵が忍び込んで放火し押し寄せるとの噂は止めようがなかったものと思われる。また、この火事より前にも、田中構は炎上していたことがわかる。

このほかにも、火事はしばしば発生しており、『実隆公記』の文亀3(1503)年5月24日には、

寒気季秋の天の如し。(豊原)統秋話に来る。念誦、写経等の外事なし。
夜に入り火あり。田中構と云々。

とある。

さらに、戦乱による被害もあった。朽木村に隠棲していた將軍足利義晴と、結託した木沢長政の軍勢によって、田中の里が焼き払われた。『二水記』の享禄3(1530)年12月29日の条には、

午の時、又東衆田中の里に出張し、悉く焼き払い了んぬ。

とあり、田中構全体が焼き払われたようである。

天文法華の乱の際には、田中の土豪渡辺氏が法華教徒を裏切ったため、法華衆によって田中構が焼き討ちに遭う。『鹿苑日録』の天文5(1536)年7月22日の条には、

寅刻ヨリ法花衆打廻。卯刻松崎城落。岩蔵の山本、田中之渡辺裏返云々

午時也。故法華衆責田中放火。当寺エ可責入ノ雜説アリ。

とある。この法華衆の打ち廻りの後、すぐに延暦寺山徒が法華二十一ヶ寺、すなわち法華宗との構を焼掠している。

こうした世情不安の中で、田中村の郷村としての結束も高まり、地下人による徳政要求なども出されている。天文15(1546)年12月7日には、

一、田中村地下人等申状 天文十五、十二、七

右、方々ニ於て借用せしむ料足都合七十貫文の事、

目録は別紙に在り。或は売券、或は好取の預状と雖も、利平を加うるの段
分明の上は、徳政の御法に任せ、十分一進納の条、御下知を棄破成し下さる

れば忝く存じ奉る。若し此の旨偽り申さば、御法に任せて御成敗に預かるべき者なり。仍て言状件の如し。

と、徳政を飯尾忠房に要求している*3。

(2) 上の渡辺と下の渡辺

中世から近世にかけて、田中一帯を治めていたのが、渡辺氏である。近世にはいると、一乗寺村の庄屋となる上の渡辺と、田中村の庄屋となる下の渡辺に別れる。田中構の構築にも、この渡辺氏が関与していたと考えられる。天文法華の際には、法華衆徒と山門の板挟みとなり、法華宗とを裏切ったため、前述のように焼き討ちを受けたが、信長上洛の際にもこれに抵抗し、一時蟄居を余儀なくされている。『信長公記』の元亀4(1573)年7月21日の条には、

京都に至つて御馬を納められ訖んぬ。公方様御同意として、叡山の麓一乗寺に足懸り拵へ、渡辺宮内少輔・磯貝新右衛門兩人楯籠り候。降参申し退散、磯貝新右衛門、紀伊国山中に蟄居候のを誅せられ候なり。

磯貝氏は比叡山中を近江に抜ける山中越えの途中にある山中村の土豪で、渡辺氏とともに、その居館のひとつである一乗寺に立てこもり、信長に抵抗した。『年代記抄節』の同年同月20日の条には、

山城所々焼払ヒ、大和多門ノ城ノアタリ、手カイ、大路、寺門、僧坊マテ
打入乱妨。田中渡辺城責候。アツカヒニテノキ申候。城放火。山本シツ
(静)原ノ城候ヘトモ、城中ツヨク候間、相城ヲツケ引。細川右京大夫
(昭元)堺ヨリ上洛、則横嶋ノ城へ入。

とあり、田中に渡辺城と呼ばれる防御施設があったことがわかるが、これが田中の構を指しているのか、その近辺にあった独立した城郭施設を指しているのかは不明である。

いずれにしても、信長に対する抵抗は敗退に終わり、田中構の中世的なあり方も終わりを告げる。洛中の構を支えた町や町組が、織豊政権によって解体され、近世的な町に変貌していったのと軌を一にしている。

渡辺氏も一時身を隠していたが、織豊政権の中に取り込まれた形で、ほどなく一乗寺、田中の庄屋として復帰している。『兼見卿記』の天正11(1583)年12月17日の条には、

田中郷出作の儀、下百姓田口左介所へ催促に来る。今度公家衆の配分、其の

給人方の衆五人、烏丸（光宣）青侍、四辻（公遠）、実相院の侍従、清少納言（舟橋国賢）新三郎、渡辺弥十郎田中の庄屋なり。案内者として召し連れ来る。各召し寄せ、申し理り返し了んぬ。認め申し付すなり。

とある。渡辺弥十郎が田中村の庄屋として、吉田村の領主で吉田社の神官でもある吉田兼見を訪れている。田中村は後述するように所領が細分されており、その領主たちが、多数の村民が出作をおこなっている吉田村に挨拶にきている。

同記の同月28日の条には、

早々南豊軒来る。田中郷田地の儀なり。松田勝右衛門尉へ田地を注し喜介へ持ち遣わし了んぬ。（中略）渡辺弥十郎来る。出作の儀、弥相済し了んぬ。

とあり、田中郷の出作分の配分をまとめている。

と、田中村をまとめて、取り仕切っていた状況がわかる。

（3）近世の田中村

近世の田中村も中世の田中村と大きな変化がないままに踏襲されたと考えられる。中世の谷か構を復原する手がかりとするために、近世の田中村の復原を試みる。所領は相変わらず細分されたままであった。享保14(1729)年の山城国高八郡村名帳にある田中村の石高と領主は、947石の総石高に対し、37人の領主が最高の100石から、最小の7升まで、大小さまざまに細分されていた。おもだった領主だけでも、禁裏、宝鏡寺、聖護院、青蓮院、日野殿家、東坊城殿家、林大学頭、竹田慶安、知恩院、浄花院、黒谷寺、南禅寺宝厳院、頂妙寺領、本法寺、長楽寺、円寿寺、正法寺などがあげられる。

こうした状況を描いたのが、山城国愛宕郡田中村耕地絵図（京都府立総合資料館蔵）である（図10-2）。図全体が多少ひずみ、地図としての精度は高くないが、竹内慶安、林大学頭などの各領主の所領が色分けして記入してある。田中村の範囲は中央の居村と書き込まれているところで、東端に田中神社も描かれている。

元文6(1741)年3月5日付けの『黒谷寺領田中村絵図』（京都大学文学部国史学教室所蔵）は、田中村の宅地の一筆ずつを描いたものであり、これと組をなし、一筆ごとの地権者と面積、および隣接する土地の地権者の名を記した『黒谷分山城国愛宕郡田中村水帳』とともに、『山城国愛宕郡田中村耕地絵図』（図10-2）と対照を試みたが、具体的な宅地の同定はおこなえなかった。

近世の田中村の状況を知る好資料に、『天明6写 洛中洛外図』（京都大学附属図書館蔵）

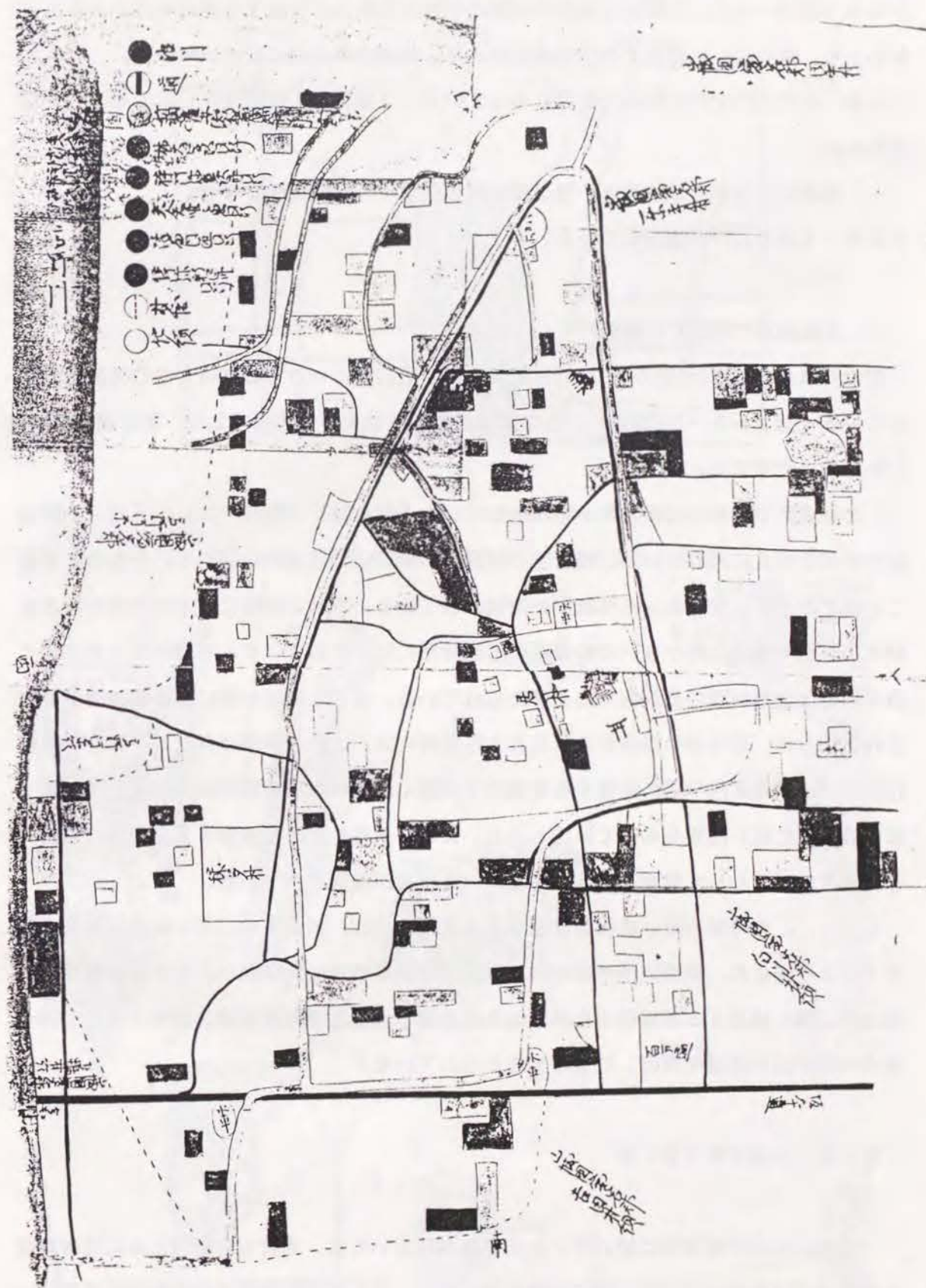


図10-2 山城国愛宕郡田中村耕地絵図（京都府立総合資料館蔵）

がある(図10-4)。比叡山と高野川の間の平坦地の中央に位置する農村集落であることがわかる。東のはしに現存する田中神社があり、集落はその西に広がっている。

なお、近世の田中村も何度か火災にあっている。『隔冥記』の寛文7(1667)年2月1日の条には、

初夜前、火事の早鐘鳴る。東の田中村の民屋十九間焼亡するなり。
とあり、火災で19戸が焼失している。

(4) 発掘調査で検出した遺構

田中の構から約100m東の所で、15世紀から16世紀初頭にかけての遺物を含む流路を検出している(図2-3-153地点)。この調査区は、京都大学北部構内北端、御蔭通りに隣接した地点に位置する。

この調査区で中世の流路SR1を検出している〔宮本88〕(図10-2)。SR1は調査区中央部を南北に流れている。埋積土の状況からすれば、恒常的に流れていたものとする
ことはできず、空堀であった可能性が指摘されている。SR1を境に、中世の遺物包含層
がその東西で明瞭に異なり、この流路の形成時期には、これをはさんで調査区の東半部と
西半部では土地利用の差があったと考えられている。SR1の東と西には多数の溝が検出
されているが、切りあい関係から、SR1形成時には、これら溝群が存在していた可能性
は少ない。調査区西半部に堆積する茶褐色土は厚く、それ以前の地形は調査区中央付近で
東に高く西に低い段差をもっていたものといえる。茶褐色土の堆積後SR1が設けられ、
それが土地区画として重要な意味をもっていたことが指摘されている。

しかし、この時期の厚い遺物包含層である茶褐色土は、調査区中央部を南北に流れるSR1により画され、調査区西半部のみに存在している事実は興味深い。SR1は幅6mにおよび、厚く堆積する茶褐色土を画するための濠であるとするならば、SR1は田中構一帯の中世村落の地境を設定したものと考えられている。

第6節 寺院を取り巻く構

治安の乱れが恒常的に続いていた中世後半においては、寺院も自衛のために防御施設を構築せざるを得なかった。建仁寺構や法性寺構、そして一向衆徒が仏国を夢見て築いた本願寺寺内町の構、法華宗とが築いた洛中法華二ヶ寺を核とした日蓮宗徒の構があげら

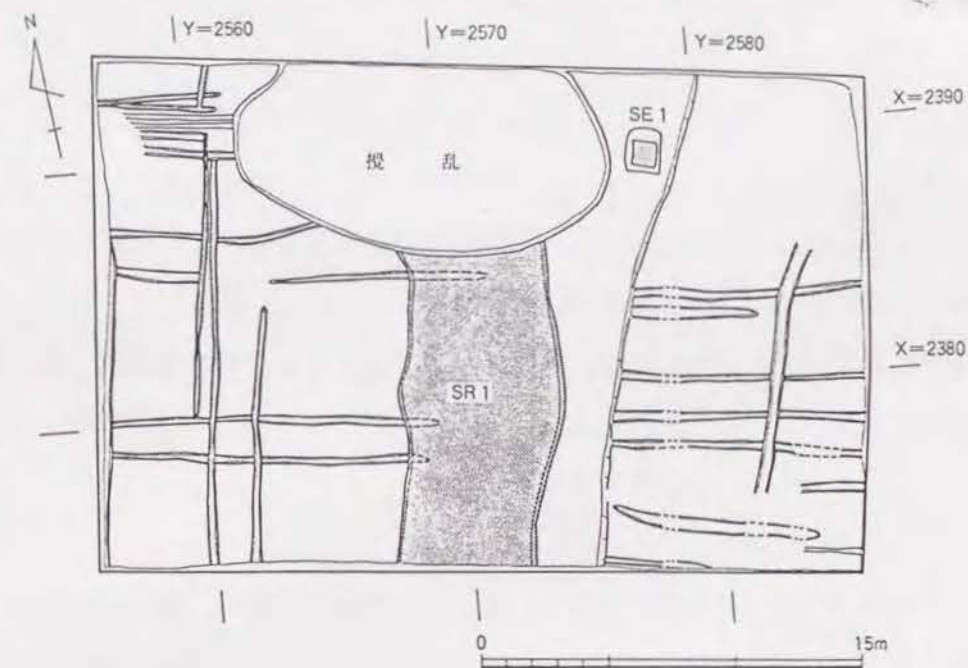


図10-3 京都大学北部構内BJ31区の中世の遺構



図10-4 田中村とその周辺(『天明6写 洛中洛外図』京都大学附属図書館蔵より)

れる。本願寺寺内町の構は、別途に章をたてて詳述する。

1. 建仁寺の構

応仁の乱後の混乱の中で、五山十刹のひとつ建仁寺が、惣構えを構築している。

『八坂人社文書』*⁴上の八九四号には、室町幕府の奉行人奉書の写しがあり、それには、

建仁寺雑掌申当寺惣構北面堀事、違乱云々、太不可然、所詮、於子細者、

可有糺明之上者、止嗷々之儀、不日可被明申之由候也、仍執達如件、

明応三 十月卅日 (飯尾) 元行 (花押)

(飯尾) 為規 (花押)

祇園執行御房

とあり、明応3(1494)年10月30日前後に、建仁寺と祇園社の間で、建仁寺の惣構の北面の堀をめぐる、争論となっている。

さらに、明応8(1499)年の土一揆の蜂起に際して、さらに寺の周囲に堀が掘られている。『祇園社記』*⁵には、明応8年8月22日付けの奉行人奉書が写されている。

それには、

建仁寺雑掌申土一揆蜂起事、依有風聞、為要心可掘堀於寺辺旨、被成奉書、

若
□可社領混合歟、宜被存知由、被仰出候也、仍執達如件、

明応八 八月廿二日 (飯尾) 元行判

(松田) 頼亮判

祇園執行御房

とあり、土一揆の蜂起に対処し、要心のため堀を寺辺に掘ろうとしているが、祇園社の社領と建仁寺の寺領が混合しており、善処するようにとの奉書が下されている。

さらに、その翌日には、

堀普請事、不謂先々免除之在所、勤士之处、当所地下人難渋、太不可然、一
両日中可致其沙汰、猶以令遅怠者、可被処罪科、土用近々間、堅可被加下知
之由候也、仍執達如件、

明応八 八月廿三日 (松田) 頼亮 (花押)

(飯尾) 元行 (花押)

祇園執行御房

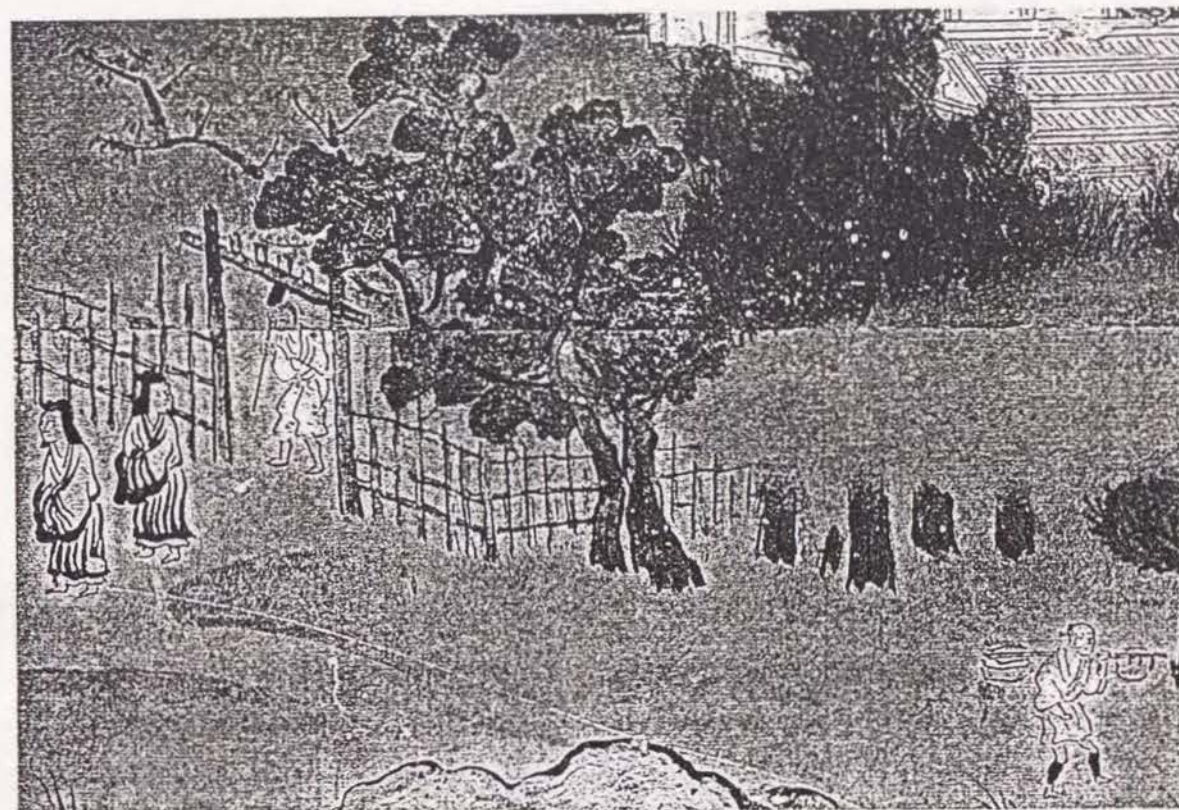


図10-5 建仁寺の構 (町田家本洛中洛外図)

とあり、堀の普請に徴発した地下人が従わず、祇園社執行に下知するようにとの奉書が下されている。

この建仁寺の構を描いたと思われる資料に、町田家本洛中洛外図(図10-5)と法観寺参詣曼荼羅図がある。大永5(1525)年頃の制作といわれる町田家本洛中洛外図には、賀茂川の東、建仁寺の伽藍の西に、粗末な柵と、柱と貫だけの結界の意味しかもたないような出入口が描かれている。法観寺参詣曼荼羅図には、狭間つきの土塀が両側に付く木戸門と、建仁寺に向かう方向に柱と貫だけの入口が描かれている。詳細な同定はできないが、建仁寺に関連する構の可能性が高い。

2. 聖護院の構

聖護院の創設は、寛治4(1090)年、白河上皇熊野詣での先達としての恩賞に、熊野三山検校職に任じられた増誉がおこした白川院に始まる。後白河天皇の皇子静恵法親王が4世門主となったことから、宮門跡となった。その位置については、『兵範記』仁安2(1167)年4月26日の条に、

参白河法務御房、中御門末聖護院也

とあり、現在地とほぼ同じ位置にあったと考えられている。しかし、応仁の乱に巻き込ま

れ、焼亡する。『碧山日録』応仁2(1468)年8月5日の条には、

東西兵破=聖護院及諸教寺-

とあり、この後、聖護院は岩倉長谷の地へ退転していった。その後も、京の内外を転々とし、延宝4(1676)年に再び現在地に帰還し、現在に至っている。

この聖護院には周囲に集落が存在し、応仁の乱前には構を構築していた。

(1)「鈴鹿家記」にみる聖護院の構

鈴鹿家記は吉田社の禰宜鈴鹿家に伝わる年代記で、延元元年(1336)から慶長四年(1599)までの断簡を集めたものである。文献史の常識として、日記には偽書が極めて少ないと考えられているが、この鈴鹿家記は人物名が日記の時期と対応せず、また、食生活語彙などが100~200年近く、時代錯誤をしていることから^{*6}、偽書と考えられている。確かに吉田社の神官には偽書を平気で作成した前科がある。伊勢神宮のご神体が吉田社の大元宮に飛来したと天皇に密奏したのは、吉田兼俱であり、近世には『神敵吉田兼俱謀計記』なる書物が流布したほどである。鈴鹿家記もこうした時期のものだけに信頼性は低い。しかし、鈴鹿家記の中には構の堀を構築する具体的な話があり、また、日記であり、争論のための文書ではないことから、日付はともかく内容が全くの偽書とは思えない。

福山敏男氏は、鈴鹿家記について、「延元元年の条に兼熙が、貞治三年の条に兼富が、応永元年の条に兼名・兼俱が、応仁元年の条に義満が出ることなど、まだ生まれてもいない人物である点から、年紀を一律に数十年ひき上げてあるらしく、作為のひどいものであることがわかる。数十年下ったときの記事とすれば、史実とみられる点もあるかもしれない。」としている〔福山77〕。

鈴鹿家記の構の構築に関する記述は、堀の幅や深さ、長さから、召集をかけた村人の人数とその接待まで、事細かに書き上げられており、こうした記録を偽書にする理由がわからない。とりあえず内容を検討してみたい。

(2)「鈴鹿家記」にみる聖護院の構

聖護院村で惣堀が掘られたのは、鈴鹿家記では建武3(1336)年となっている。食生活語彙の研究から鈴鹿家記の年期は100~200年古く記されている可能性が高く、こうした記事も15世紀の半ば以降の記述である可能性が高い。鈴鹿家記の建武3年2月5日の条には、

朝飯過、聖護院天足隆宗殿・畠中重則殿ヨリ使参。聖護院村惣堀、明日・明

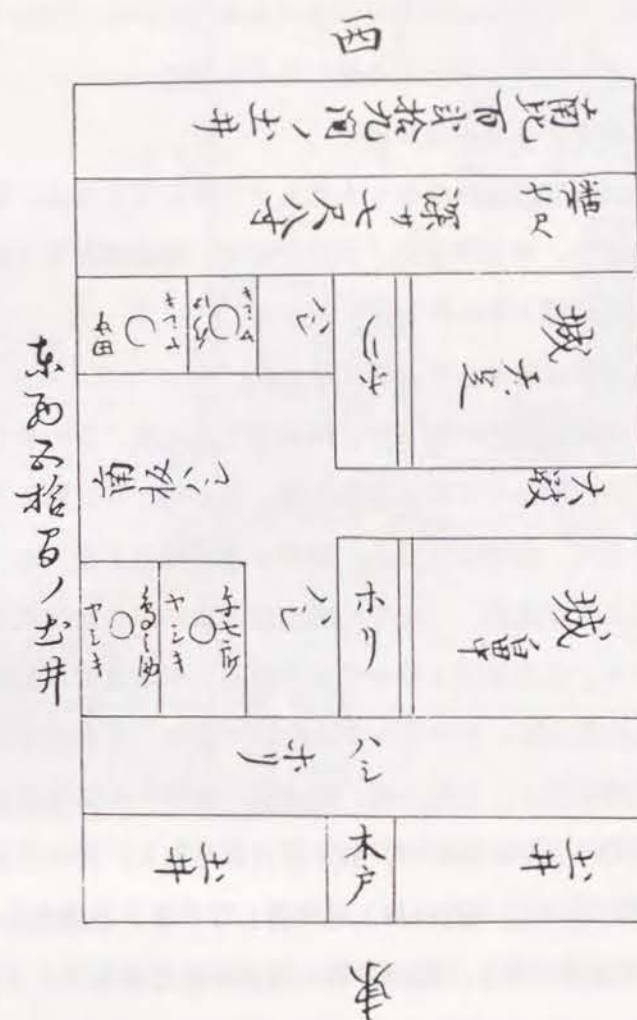


図10-6 聖護院の構(『鈴鹿家記』より)

後日仕舞申度々吉田村ノ百姓一兩日ヤトイ申度キ由申来候。則兩人ヨリノ使御本所え申上ル。今日ヨリ百姓不_レ残堀ヲホリニ可_レ参由御申付、御兩人へ今日ヨリ百姓共可_レ進由申遣。俄ニ定使太彦兵衛申付フレサセ不_レ残聖護院へ参祝(集)。禰宜・神人・侍・百姓家ヤクニ出スヘキ由山城兩人申付ル。人数七十二人。奉行・山城兩人参御本所ヨリ七十式人米式升ツ、被_レ下。巳ノ中刻ヨリ南表向ノ堀幅七尺ニフカサ七尺八寸長サ三拾九間、巳刻酉ノ刻マテ
ホリ申。天足六太夫殿・畠中新八殿ヨリ吉田・聖護院百姓えムキワリ大荷、桶ニ八荷スモミ干し鰯出ル。(中略)

とある。聖護院の天足隆宗と畠中重則野死者がきて、聖護院村に惣堀を掘るため、吉田村の百姓を2日間雇いたいと申し入れてきた。領主の吉田氏は即座に許可し、禰宜・神人・侍・百姓総勢72人が堀を掘りにいっている。堀は南面の堀が幅7尺、長さ39間にわたって

掘りあげられている。その平面図が5日の条に描かれている(図10-6)。この日の「南表向ノ堀」は天足、畠中両氏の城の南の堀と考えられる。

この作業は翌日も続き、6日の条には、

乙巳晴天、山城守聖護院へ百姓七十式人メシツレマイラル、朝飯辰ノ上刻ニ
タヘ山城トカワル。今日拾壱間ノホリ仕舞可レ申由本所ヨリ溝口御使ニ参、
カシコマリ申由百姓トモヘ申渡ス。(中略)

とある。しかし、2日では終わらず、翌7日の条にも、

少雨天、卯ノ中刻聖護院村西ノ方、南北百式拾九間ノフカサ七尺八寸ニホリ
タテサセ申。粟田口ヨリ廿五人スケニ参、岡崎村ヤリ五拾人スケニ参候。白
川村ヨリ四拾五人、田中ヨリ廿人、四村ヨリ百四拾人増人カ、リ、山城兩人
御本所へ手紙ニテ申遣候。(中略)西カワノホリ深サ七尺八寸ニ百廿九間、
午刻ホリタテ中、北五拾間ノフカサホリ申候。未ノ上刻、聖護院ハ兩人ヨリ
式百五拾式人夕飯出ル。汁サクハアエ物、ヤキ物、香物大樽五荷仕廻。普請
西ノ下刻ニ仕舞申帰ル。本所へ参、聖護院ノ様子一々御物語申。

とある。吉田村だけでは人手が足らず、粟田口村から25人、岡崎村から50人、白川
村から45人、田中村より20人、総計140人を増員している。聖護院村の西側に深さ7尺8寸、
長さ129間の堀を掘りあげている。図10-6の西側の堀にあたる。ところが、この堀は土居
を外側に築いている。土居の内側に堀があると防御行動の妨げになるだけでなく、ひとた
び敵が土居に取り付くと構の中が見通され危険である。弥生時代の環濠集落もこうした土
居の作り方をしているがその意図は不明である。

聖護院の構の惣堀の完成の3日後、吉田氏と畠中氏が会談をしている。同月の10日には、

御本所當地聖護院殿御領ニハイツコロヨリ御領所ニハ成申候ヤ 重則其段
ハシカト不存候隆宗先祖寛元丙午四年十二月八日ニ初テ天足隆久居住仕候
寶治戊申二年三月十五日年百五才ニテハイハテ其世倅隆次ト申候マテハ此
在所名ヲ畠中ト申候(中略)延元丙子二月ニ隆宗聖護院ノ惣カマエノホリ
仕天(中略)畠中殿モ惣カマエノホリハ家ノ久記ニノセヲカルヘキ由御本
所御申ナサル(中略)私代ニハ惣堀仕候コトケ様ニ家ノ記ニ末々ヒマコワ
シハイツルノ子ノ末々マテリンシ出ス様ニケ様ニ書置申

とあり、よもやま話の後で、この惣堀の構築のことを末代まで伝えようとしている。

また、応仁元年12月2日には、



図10-7 聖護院村とその周辺(『天明6写 洛中洛外図』京都大学附属図書館蔵より)

聖護院殿西ノ城へ御成之由東城ハ畠中殿ノ城トモ申又ハ澤井殿ノトモ申候
畠中東ハ私城ミテ御座候西ノ御門跡ノ御成被遊候ハ澤井隆俊城ニテ御座候
ト被申候

とあり、図10-6の東西のふたつの城があり、東城が私城であったことがわかる。

(3) 近世の聖護院村

応仁の乱で焼亡し、岩倉長谷へ退転した聖護院は、豊臣秀吉の命で京内の御所八幡町に
移され、何度かの火災の後、現在地に復帰したのは延宝4(1676)年のことである。

延宝4年に聖護院が洛中から現在地に移転するにあたり、大工頭中井家が敷地の実測を
おこなっている。京都府立資料館所蔵の中井家文書のなかに「聖護院御門跡御替地御屋敷
表繪之通間数坪数立會相改候所相違無御座候以上延宝四丙辰年(1676)六月廿九日」と表
書きされた図がある。東西五十間、南北七十四間、門前に幅十間の空地が実測されてい
るが、現在の敷地の規模と完全に一致し、移転後はまったく変化していないことが知られる。

近世の聖護院村の様子は、京都大学附属図書館所蔵の天明六年洛中洛外図(1786年)には
聖護院の西と南に聖護院村の集落がえがかれている。聖護院宮の西と南に聖護院村の集落

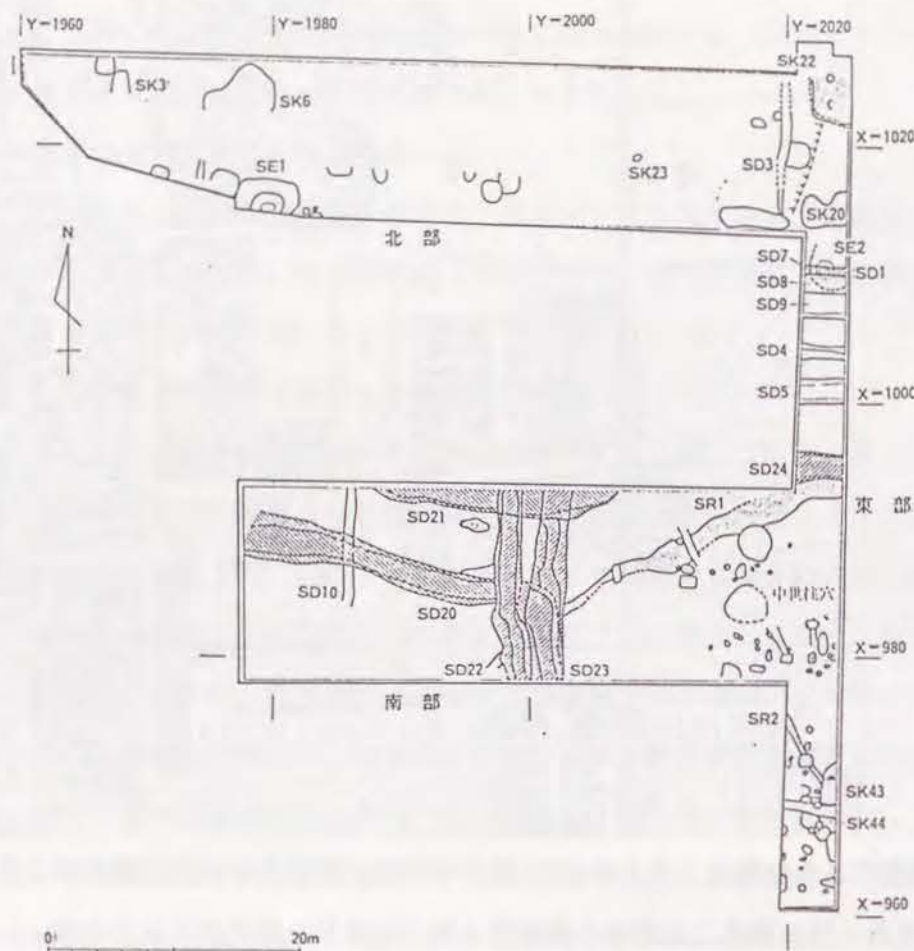


図10-8 京都大学病院構内AH19区の遺構（〔浜崎ほか93〕所収）

が広がり、集落の周辺は藪のようなもので囲まれているのがわかる。近世においても、洛外では用心のため、村の周囲に何らかの結界のような施設を設けていた可能性がある。

京都大学病院構内AH19区の発掘調査で、聖護院村の西を限っていた可能性のある大規模な溝SD20～24を検出した〔浜崎ほか93〕。

SD20は検出幅2m、深さ0.8m、断面逆台形を呈するもので、東西軸に対してやや斜めに25m以上走り、東端のY=2000m付近で南に曲がる。SD21は溝の南半分しか検出していないが、検出長19m、幅1.8m以上、深さ0.3mを測る。SD22、SD23は相接し、ほぼ南北方向に走る溝で、SD22は検出長14.5m、幅1.3m、深さ1.3mで断面逆台形。SD23は検出長14.5m、幅2.8m、深さ0.4mで底は不定形。SD24はほぼ東西方向に走り、検出長3m、幅2m、深さ1.0mを測る。

SD20、SD21は、近世の出土遺物が少なく、埋積の際に混入した中世の遺物が多く含まれる。これに対し、両者を切って掘られたSD22、SD23は、瓦や近世の陶磁器を大量に含む。これらの溝は江戸時代後期のものと考えられる。

当時のこの地には、現在東大路通りの東側に移転している、照臨院なる寺院のあったことが分かっている。この溝や瓦もそれに関連するものの可能性があるが、さらにその外側を囲む聖護院村の西を限る溝の可能性もある。前述の中井家本洛中洛外図では、SD22、23が聖護院村の西端にあたる可能性もある。

第7節 発掘調査で検出した構の遺構

京都の内外で実施してきた発掘調査でも、構に関連すると思われる遺構がいくつか検出されている。具体的にどの構と関連するかは不明であり、とりあえずこれらの遺構を現在の地名で呼び表す。

1. 藪之内構について

京都市上京区下立売通新町西入ル藪之内町で検出された遺構は構の堀と考えられている〔伊野91〕。調査区は平安京の西洞院大路（幅約24m）と、近衛大路（幅約30m）の交差点にあたり、溝の平面構成も平安京の街路の骨格を踏襲したと考えられる位置で検出されている（図10-9）。そして、各遺構の変遷が次のように報告されている。

構の遺構は平安京の西洞院大路を踏襲した室町時代の道路をともなう側溝として検出さ

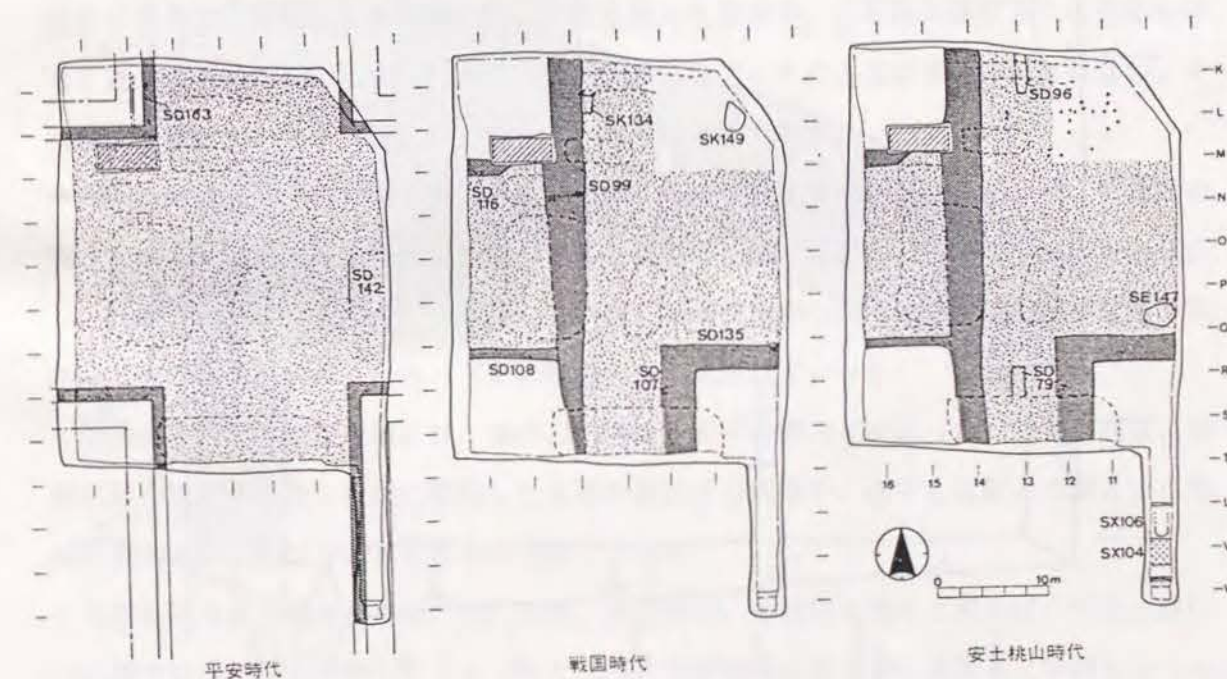


図10-9 平安京（左京近衛・西洞院辻）の主要遺構変遷図（〔伊野91〕より）

れた。西洞院大路を踏襲した道路の西側溝としてS D99が、東側溝としてS D107が検出されている。西側溝のS D99は東西方向の近衛大路を掘り切っているが、東側のS D107は近衛大路の南側で東に折れ曲がる。

東側溝S D107の幅は約3.4mで、断面は逆台形であり、西側溝S D99の幅は、近衛大路以北で約3.1m、近衛大路以南で約2.4mの逆台形で、深さ約1～1.1mを測り、側溝より規模が大きく、堀と考えられている。これらの堀は出土遺物から、戦国時代から安土・桃山時代にかけて存続していたと考えられる。

17世紀前葉に道路に盛土が行われ、堀が埋め立てられ、一度平坦にした後に新たな側溝が掘り直されている。遅くとも17世紀前葉までに構がその機能を必要としなくなったと考えられる。こうした遺構の中で、西北部の堀に囲まれた一画を調査担当者は構の遺構と推定している。構の西北端を検出したため、構の内部については明らかにされていないが、構の盛衰と、平安京の街路の踏襲を知る上で貴重な資料である。

2. 両御霊町の構

京都市上京区両御霊町の京都府警察110番指令センター新築にともなう発掘調査で、構の

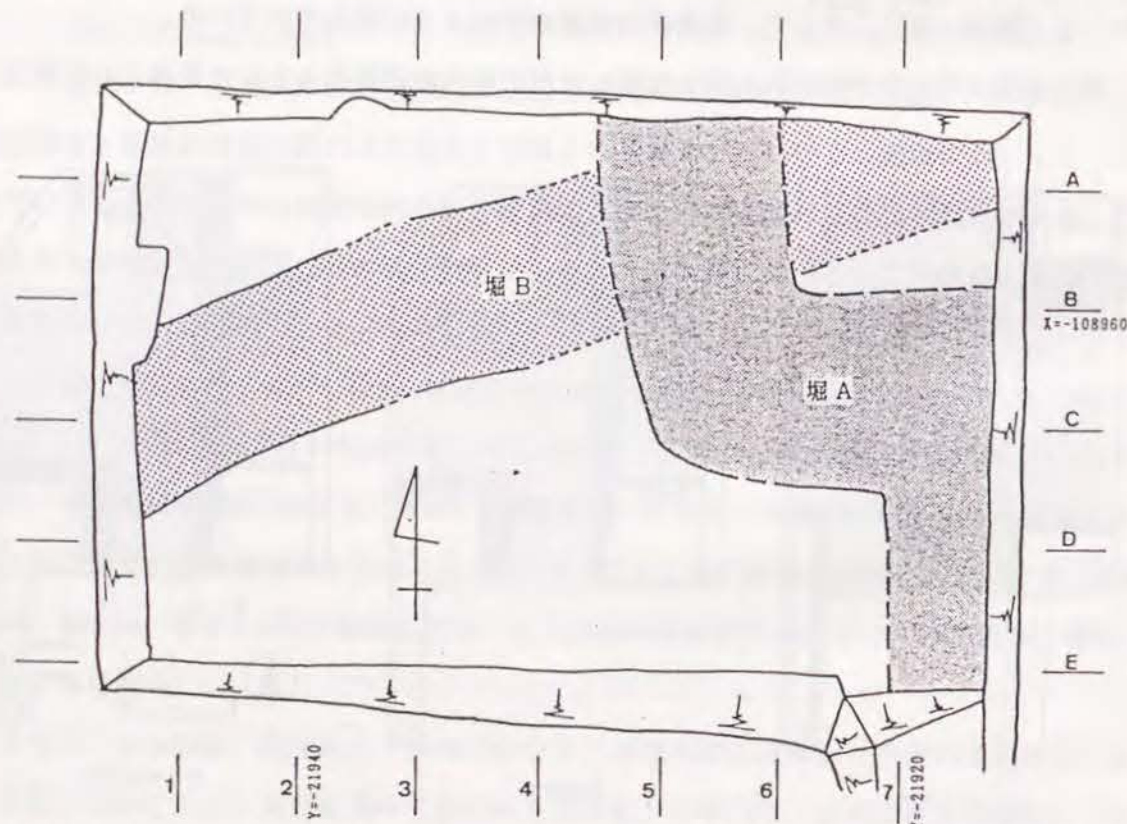


図10-10 平安京跡・旧二条城跡北地区第2面(安土桃山時代)遺構平面略図(〔森島93〕)

溝と考えられる遺構が検出されている〔森島93〕。この調査区は、平安京左京一条三坊六町のうち、南西約六分の一の範囲で、修理職町の一角にあたる。北地区第2面(安土桃山時代)時期差のある2本の素掘りの堀東半部で検出した。堀Aは、クランク状に屈曲するもので、幅約6～7m、深さ約2.2mを測る。下半部は自然堆積層で、上層は人為的に埋められている。堀Bは調査区を西南西から東北東に横切るもので、堀Aに切られる。幅約5m・深さ約1.4mを測る。埋土の様子から、空堀で、南側に土塁を伴っていたことがわかる。2本の堀は16世紀の中葉から後半の遺物を含むが、堀Aは堀Bが埋められた跡に掘られている。2本の堀の性格については、町の構の堀、旧二条城に関連する堀、聚楽第に伴う大名屋敷の堀などの可能性が考えられるが、その特定についてはさらに検討が必要としている。

第8節 小 結

以上、様々な構をその構築主体などをもとに分類し、概観してきたが、現代の都市の下敷きになっている構の遺構に関する情報は、質・量ともにばらつきがあり、単純に比較検討するにも大きな困難がともなった。

武家の構については、二条御所武衛構や、秀吉が妙顕寺を改造した妙顕寺の構、伊勢殿構などがあり、禁裏と公家の構には、惣堀を構えた禁裏や、三条西実隆のように自邸を構としたものもあった。しかし、内部空間における生活とその主体が普通の構とは違い、考古学的な調査もあまり実施されておらず、詳細は不明である。

町衆の構には、山科言継が町人らと混住していた一条烏丸の構や、白雲の構、新在家の構などがあつた。治安の悪化に対処して構を構築していく過程で、町としての結束が高まり、外敵に対して一致団結して対抗している。自治と自衛の気風をもった町組の濫觴である。こうした構がやがて上京・下京の惣構えへと発展していった。

洛外に散在する惣村の構には、粟田口の構や、田中の構などがあつた。田中の構は、法華宗徒を裏切ったり、信長に抵抗した土豪の渡辺氏の性格や、洛中と比叡山の間という地理的要因から、しばしば焼き討ちの対象となった。

寺院を取り巻く構としては、建仁寺構、法性寺構、聖護院の構などがあげられる。建仁寺の構では構の堀を構築しようとしたところ、寺領の混乱を理由に祇園社と争論になった。構の堀で寺領を取り込もうとしたのであろうか。聖護院の構については、年代観の危ない

史料であるが、構の堀の構築の段取りや、人夫の手配、堀の幅、深さ、長さなどを、推察することができた。

*1 『妙顕寺文書』

*2 この事件に関しては、烏丸町住人の行動は反堺公方府，親室町幕府を鮮明にする，きわめて政治色の濃いものであったことが明らかにされている。

*3 『徳政賦引付』

*4 『八坂人社文書』上 八九四号

*5 『祇園社記』続録第三

*6 川上行蔵「食生活語彙からみた『鈴鹿家記』の史料性について」『歴史公論』No. 73, 1981年，この中で川上氏は「大部分の語彙の通用期間は比較的短く，ほとんど100～200年の間に集中して現れ，通用期間が400～500年にわたるものはすでに少ない。したがって，通用する食生活語彙は，それぞれの時代によって限定されている。疑わしい語彙が数十例に及ぶとあっては，問題は別であろう。『鈴鹿家記』には初見年次から100年以上を遡る食生活語彙が50例もあり，200年以上を遡る語彙が26例にも及ぶ。食生活語彙に関する限り，資料根拠とすることはできないものとする。」としている。

第11章 吉田の構と吉田社

11-1	はじめに
11-2	吉田の構の空間構成
11-3	古図にみる吉田の構
11-4	『兼見卿記』にみる吉田の景観
11-5	吉田の構から近世の吉田村へ
11-6	小 結

第11章 吉田の構と吉田社

第1節 はじめに

応仁・文明の大乱で再三にわたり甚大な被害を受けた洛中・洛外の人々は、みずからの集落を戦火から守るため、集落の周囲を柵、堀、土塁などで囲み、出入口には木戸門を設けた。こうした防禦施設は構（かまえ）とよばれていたが、この構は洛中・洛外を問わず構築され^{*1}、戦乱の有無にかかわらず維持されていた。上賀茂社の氏人が上賀茂社の門前に構築した構や、京都大学北部構内の北西約100mの所にある田中神社を中心とした田中構、真宗門徒が仏国を夢みて「構のほり」をめぐらした山科本願寺寺内町などがその好例である。みずからの住空間をすべて囲いこむという点で、城郭や寺社の防禦施設とは違った意味を持っていた。上賀茂の構は、氏人が申し合わせをおこない、堀を構築する分担を決めたり、構の維持管理に関する置文を作成するなど、氏人が自衛のために結束して構築したものである^{*2}。田中構も文明5（1473）年ごろに、田中の郷民が結束して構築したものである^{*3}。それに対して、吉田構は吉田家が主体となって構築したものらしく、維持管理も吉田家の指揮下でおこなわれている。以下、本節では吉田構の状況を、吉田社の神官吉田兼見の記した『兼見卿記』を中心に復元してみたい（表11-1）。なお、吉田構は『兼見卿記』の中では「在所之構」とよばれている。吉田構の名称は兼見の弟梵舜の日記『舜旧記』によった^{*4}。

第2節 吉田の構の空間構成

1. 北之在所と南之在所

吉田構の中は大きくふたつに分かれ、「北之在所」と「南之在所」があった。天正12（1584）年5月15日の条に、斎場所の屋根を葺き替えるために藁を集めたという記述があるが、集まった藁束の数より、「北之在所」に約40戸、「南之在所」に約30戸の地下の家があったことがわかる。出入口も「北之構」と「南之構」があった。「北之構」に付随して橋の記述があり、「南之構」に付随して堀の記述があるが、常識的に考えて南北両構の

前面には堀があり、橋がかかっていたものと思われる。そして、南北両構には惣門または構とよばれる防禦用の門が構築されていた。

吉田構の周囲は堀で囲まれていたと考えられる。南には「南之外堀」があり、北には後述する「馬場之南之堀」があった。「西之堀」の記述はないが、「西之堀道」があることによって西の堀とそれに平行する道があったと考えられる。東側については「内山之堀」に関する記述が再三あり、堀があったと考えられるが、吉田構を吉田山から完全に切り離して防禦していたのか、山腹にある吉田社などを含めて防禦していたのかは不明である。このように堀と惣門で固めた吉田構の防禦能力は相応にあったことが、元龜4（1573）年に信長上洛の噂を聞いた近郷の人々が、あわてふためいて吉田構に逃げこんできたことからわかる。こうした有事に備えて、構の堀の維持管理は間断なくおこなわれていた。織豊政権が成立する前後の不安定な世相を反映していると考えられる。

第3節 古図にみる吉田の構

1. 洛中洛外図にみる吉田の構

こうした吉田の景観を具体的に示してくれるものに洛中洛外図がある。『兼見卿記』の記事より50年ばかりさかのぼるが、大永5（1525）年以降に描かれたと考えられている町田家本洛中洛外図屏風の右隻を見ると、のぞき窓らしきものがある築地塀と、木戸門で囲まれた吉田構の様子わかる（図11-1）。西向きの木戸門は、南北いずれの構にあたるかは不明であるが、洛中に向けて開かれている点では、後述する近世の吉田村の惣門と同じである。出入口の木戸門の両側には土塀が続き、土塀には狭間蓋のついた狭間が描かれている。構の中に藁葺きの家が5棟ばかり描かれている。家の前で蓆をひろげ農作物を干していることから農家と考えられる。社家の邸宅や、構の堀などは描かれていない。

吉田構のすぐ北側で、吉田社にむかってのびる2条の松並木のある所が、「春日之馬場」である。この馬場之松並木には大木が多かったため、神木であるにもかかわらず、所望する権力者があとを断たなかった。『兼見卿記』に断わりあぐねる吉田社の様子がよみとれる。この馬場の位置は近世になっても変わらないが、「北馬場」「南馬場」の2本となり、松並木は3条になった（図11-）。この馬場の南に土塁をはさみ幅1間の堀がある。『兼見卿記』の「馬場之南之堀」がこれにあたると考えられる。現在この2本の馬場がそのまま吉田社の参道となったため、参道の中央に1列の松並木が残る結果となった。

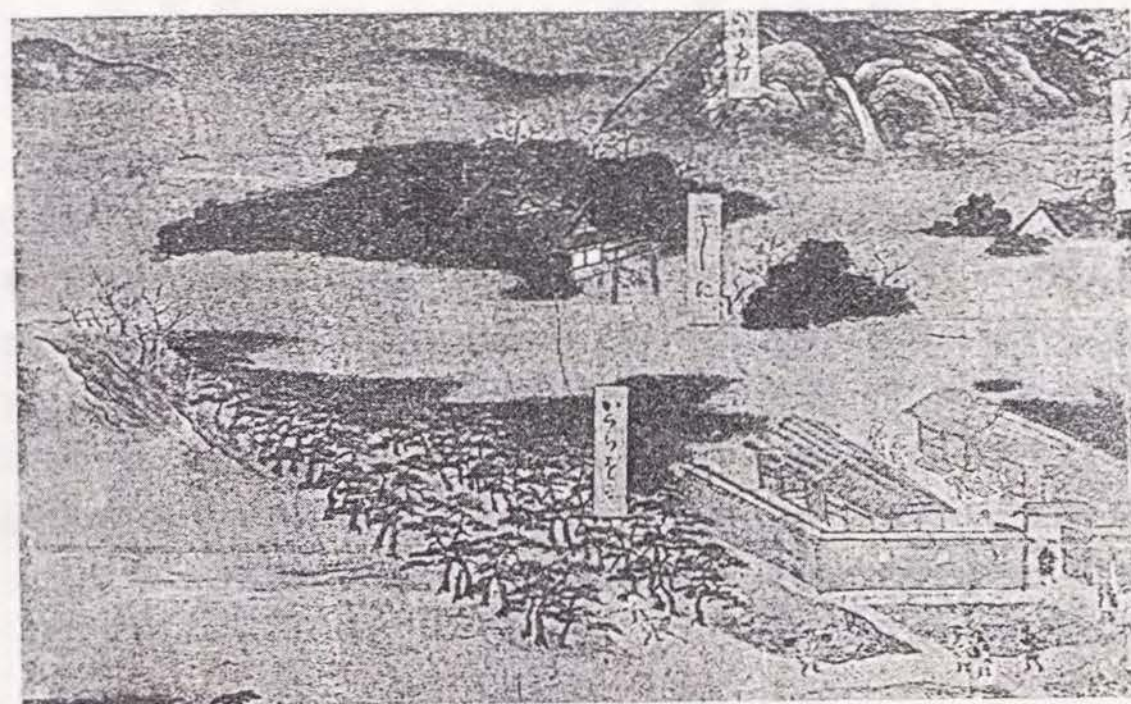


図11-1 町田家本洛中洛外絵図（東京国立博物館蔵）



図11-2 吉田社家住宅配図（天理大学附属図書館蔵）

第4節 『兼見卿記』にみる吉田の景観

次に吉田構の中で大きな景観構成要素となっていたであろう吉田家の邸宅について、ふれておく。『兼見卿記』には兼見邸に関する記述は多いが、逐一系列記することは省略し、その大要を伝えたい。まず、兼見邸の母屋は瓦葺きの二階建てで、面（表）の座敷、裏の座敷、奥座敷、茶湯座敷、小座敷のほか、青女不断の座敷（兼見夫人の居間）、台所などのある豪邸であった。屋敷内には他に馬屋、二階土蔵、客殿、別屋などがあった。東と北には庭があり、北の庭には山中路より運び出した白川石が据えられていた。兼見邸の周囲には築地と堀がめぐり、特に西側の堀は二重であった。兼見邸のこうした様子から、ほかの社家も相応に立派なものであったと推定できる。近世の社家町の景観は中世末には完成されていたものと思われる。

第5節 吉田の構から近世の吉田村へ

近世の吉田の社家町^{*5}は、基本的には吉田構の町割りを踏襲したものと考えられる。本節では吉田の社家町とその周囲の状況を明らかにし、吉田構を復原する上での手がかりとしたい。そのため、天理大学附属天理図書館吉田文庫所蔵の「吉田社家住宅配図」（図11-3）と「吉田社周辺絵図」（図11-4）を中心に、吉田の社家町の復原を試みた（図11-5）。

1. 吉田社家住宅配図にみる吉田

「吉田社家住宅配図」^{*6}は、社家町の中に住む人々の屋敷の配置をしるしたものである。この図の町割りを、都市計画図の上に復原してみると、そのまま現在まで踏襲されていることがわかる。社家町の出入口は、斎場所に向かう東向きの「坂口」以外は、洛中洛外図で見たように西向きである。この西向きの出入口のうち、「中口門」が「北之構」に、「南口門」が「南之構」に対応するものと考えられる。なぜなら、「北口」周辺の町割りは社家町の南半と比べて多少混乱が見えるうえ、『兼見卿記』に「在所之北藪」などの記述があることから、もともと藪であった所をなしくずしに宅地化した可能性があり、「北口」は新しい出入口と考えられる。その上、「中口門」や「南口門」にはその名称に門が

表11-1 『兼見卿記』にみる吉田構の主要関連記事

記 載 日	記 載 事 項
1572 元亀 3. 閏 1. 9 " " 3. 22	在所北之構普請、橋以下申付了 （信長が）社頭馬場之木一本御所望之旨仰云々（中略）不是非、馬場之内切大木了
1573 元亀 4. 3. 17 " " 3. 29	在所之構門以下、申付普請了 （信長上洛）近郷男女逃入当郷無正躰、堅申付、打両門令堅（警？）固了、（中略）兩人（柴田勝家ほか）来、両門堅令番了
" " 6. 8	自武家御所（足利義昭）当社馬場之松木五本御所望之旨両使也、御理毎度不相届、不及是非、畏之由申入了
1575 天正 3. 2. 15	（信長より）為十郷山中路可造之由村民申付也、（中略）不及是非、六百間之分請取之
1578 天正 6. 7. 5 " " 10. 2	南之在所火事、廿間計焼亡 山中路普請遣人足、後刻罷出見舞
1597 天正 7. 2. 8	在所之北藪へ之通路無正躰、牆之事人々之分申付也
1580 天正 8. 閏 3. 6 " " 10. 22 " " 11. 18	（村井貞勝）松木一本所望、召連杣来、馬場之木、南方西之第一之木採之 内山ニ新堀之事申付、普請 （近衛前久）馬場之木一本御所望、畏之由申了
1581 天正 9. 2. 23 " " 4. 22 " " 9. 6	於當所春日馬場可令乗馬之由申来 於當弓場而の所望也 普請内山新堀也
1582 天正10. 3. 6 " " 6. 12 " " 6. 24 " " 7. 16 " " 12. 15	西面之土居牆已下普請出来畢（『兼見卿記別本』） 在所之構、南之外堀普請、白川・浄土寺・聖護院三郷之人足合力也 在所之構普請、堀也 於當所南之在所施餓鬼之事案内申候 普請、右馬助屋敷之東堀之南北七間、南之在所今小路留道堀切南衆普請、北衆右之堀也
1583 天正11. 閏1. 24 " " 4. 17 " " 5. 27 " " 7. 22 " " 10. 20 " " 12. 27	西之堀道之筋垣ヲ仕了 馬場之南之堀普請申付了 三条之伊藤方ヨリ山中路普請之儀申来、御朱印諸式免許之由申理了 （山中郷の）磯谷彦四郎来云、山中路道作之儀（中略）令対面申理了 普請申付、与一屋敷通掘堀、去年新道通也 南之構藪之内ノ堅木切之
1584 天正12. 5. 15 " " 5. 22 " " 9. 3	小麥之藪、地下家次四束宛出之、北之在家源三郎奉行ニ申付百五十四束、南在家平左衛門奉行、百十八束観音堂ニ置之、斎場所御屋根之用也 當郷惣門南ニ打高札 普請、月斎之東掘之、惣別古堀之其内猶掘之

つくのに対し、「北口」にはつかず、正式な出入口ではない可能性が高いからである。

「中口門」の具体的な姿は、「拾遺都名所図絵」天明7（1787）年刊に詳しい（図37）。それによると、「中口門」は社家町の西側の南北路よりひがしによせて建てられ、門の前には石垣により柵形が構築されている。この柵形のため、「中口門」のあった四つ辻は、今も街路が食い違っている。「南口門」もその比定地で街路がくい違っており、石垣による柵形があったと思われる。

「吉田社家住宅配図」の中で、「采女」、「主馬」、「主水」、「左京」などの社家の名は、「中口門」から「坂口」へぬける東西路と、社家町の中を南北にぬける道の北半に集中する（図40の濃い斜線部分）。図37でも、東西路の南北両側に、立派な門構えの社家が整然と並んで描かれており、社家と地下の居住地域は明確に分離されていたと思われる。なお、この図で右下に「萩原殿」とあるのは「吉田殿」の誤りである。

「吉田社周辺絵図」は、吉田の社家町の北辺から、吉田社領と白川村の境界である白川道までを描いた図で、道路、堀、馬場などの幅や長さが書きこまれている。この図は、吉田社の北に宝永年間（1704～1711）から元文年間（1736～1741）のわずかな間だけ存在した東照宮^{*7(24)}が描かれていることから、18世紀前半のものと思われる。この図には、白川道やそれにとりつく南北路、そして東照宮にむかう新道が詳細に描かれている。白川道は「坂本海道」とかかれ、幅は2間とある。この白川道の南側に少し間をあけて水路が平行する。こうした状況は、AW28区の発掘調査^{*8(25)}やAX28区の発掘調査^{*9(26)}で得られた知見と一致する。特にAX28区では、白川道と水路との間で、土留めの杭や野壺を多数検出し、近世の白川道周辺の景観復原を可能にただけでなく、吉田の郷民がしばしば補修を命じられた、中世の白川道と推定される遺構を検出している。南北路は幅が8間で、白川道にとりつく所には石橋があった。この道の異常な広さは東照宮の新造にともなう拡張のせいであろうか。AT27区の発掘調査^{*10(27)}で近世の南北路を検出したが、幅は2.5mしかなく、図中の南北路との関係は不明である。東照宮に向かう幅6間の新道については、立合調査を含め、いまだ確認していない。

第6節 小 結

以上、応仁の乱以降の吉田構について述べてきた。本章では、吉田社の神官吉田兼見の日記『兼見卿記』の記事をもとに、吉田構が「北之在所」と「南之在所」のふたつに別れ、北に約40戸、南に約30戸の在家のあったことを明らかにした。これらの在家を取り囲む構



図11-3 吉田社周辺絵図（天理大学附属天理図書館蔵）



図11-4 吉田春日社、新長谷寺の図（『拾遺都名所図会』）

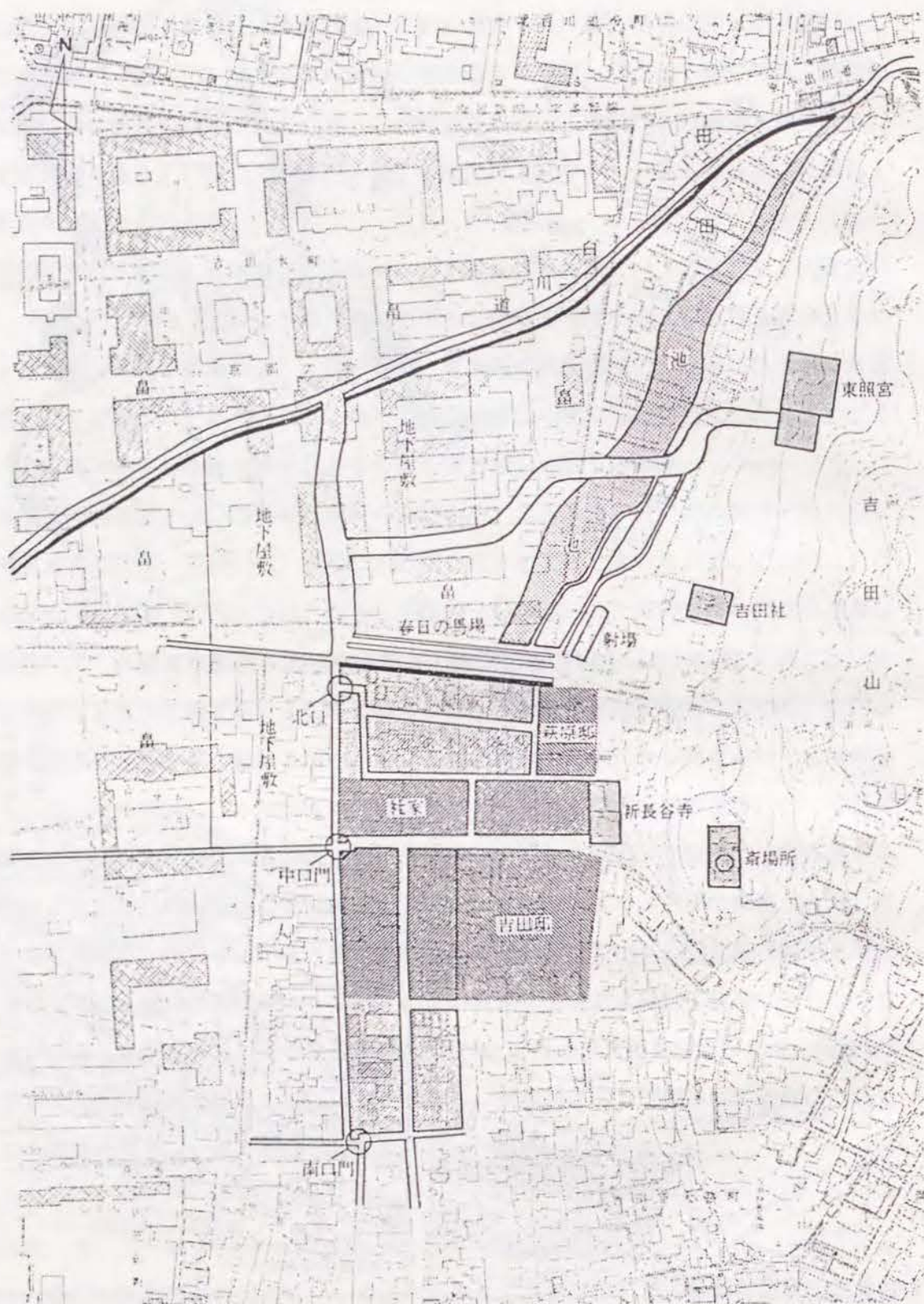


図11-5 吉田村の復原図

の出入口も北と南にあり、「北の構」、「南之構」と呼ばれていた。南北両構には惣門があり、南、西、北の3方に堀があった。町田家本洛中洛外図には1525年前後の吉田の構の様子が描かれている。惣門の両側には狭間付きの土塀が続き、有事への備えを見せている。

さらに、直接吉田構の復原の手がかりとなる古図や、発掘調査で検出した遺構もないことから、まず、近世初頭の吉田村を復原し、中世の吉田構について考察した。

吉田の社家町についてはその景観を復原し、中世後半から近世の吉田の集落の状況を明らかにした。なお、乱前の吉田については、所領の再編や、乱による資料の散逸のため不明な部分が多い。発掘調査でも手がかりはなく、乱前に吉田の地にあった勤修寺家、福勝院、吉田社の旧地については今後の課題としたい。

また、この小論をまとめるにあたり、資料の閲覧と掲載を許可していただいた天理大学附属天理図書館に、文末をかりて謝意を表します。

*1 高橋康夫は上京だけでも武衛構、実相院構、白雲構、田中構、柳原構、讃州構、御所東構、山名構、伏見殿構、北小路構、御霊構のあったことを指摘している。「応仁の乱と京の都市空間」『歴史公論』No. 72, 1981年 p. 100

*2 谷直樹「上賀茂の歴史」『上賀茂』京都市都市計画局編, 1978年pp. 1-14

*3 『親長卿記』文明6(1474)年8月1日の条 「田中之郷輩、先年炎上之後構、五霊日群集、人々近日號田中構」

*4 『舜旧記』元和2(1616)年3月8日の条 「今日吉田構之堀、新度畠堀普請也」

*5 吉田構の名称は近世にはいと消滅する。本稿ではこれと区別して近世の吉田の集落を社家町とよぶ。なお、社家については京都市町名変遷史研究所の松本利治氏の御教示を得た。

*6 江戸時代初期の写しと伝えられている。

*7 「神楽岡東照宮之事」『神業類要 上巻』

*8 岡田保良・吉野治雄「京都大学本部構内AW28区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和54年度』, 1980年pp. 21-30

*9 第I部第2章

*10 五十川伸矢「京都大学本部構内AT27区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和55年度』, 1981年pp. 21-34

第12章 上賀茂の構と上賀茂社

12-4 上賀茂の構と惣中置文

12-5 小 結

- 12-1 はじめに
- 12-2 上賀茂六郷と往来田
- 12-3 上賀茂の構の遺構
- 12-4 上賀茂の構と惣中置文
- 12-5 小 結

第12章 上賀茂の構と上賀茂社

第1節 はじめに

上賀茂一帯に、人が住み始めた確実な時期は縄文後期前半ごろにさかのぼる^{*1}。北山の山間から、京都盆地に流入してきた賀茂川が形成した扇状地は、住環境としては良好であったらしく、弥生時代後期の竪穴式住居跡や、古墳時代前期と後期の竪穴式住居跡がまともに検出されている。この扇状地に集落が構築されたのは、遅くとも弥生～古墳時代にさかのぼりうる。現在の上賀茂の集落から植物園一帯にかけては、植物園遺跡と称される弥生～古墳時代の集落遺跡が発見されており、この地一帯が古くから開けていたことがわかる〔竹原93〕。

平安京の遷都に先駆けて、賀茂別雷神社が現在地への遷座して来たのは、7世紀以前のことである。この遷座とともに、集落の中心も賀茂別雷神社の南に移ったと考えられている。この集落は、賀茂別雷神社の社家を中心として構成され、中世には構を構築し、上賀茂の構となる。この上賀茂の構を間接的に支えたものとして、往来田の制度を見過ごすことはできない。

上賀茂社には往来田と呼ばれる特異な制度があった。これは一定の資格を持つ氏人に、5反の田地が貸与されるもので、死亡時に返却し、次の有資格者に渡される。田地が神社と氏人の間を往き来するため、こう呼ばれたといわれる制度である。上賀茂社の氏人は、この往来田の制度で経済的に支えられていた面もあるが、それ以上に土地の専有を排除した平等な手法が惣村のあり方に反映し、氏人の中に自治的な団結をはぐくんできた。氏人は氏人物中とよばれる自治的な総意決定機関を組織し、構の構築をはじめとする様々な共同作業を置文まで作成して、一致団結しておこなってきた。賀茂六郷と称された、惣村としての上賀茂村の連帯を経済的に支えた制度であり、中世の上賀茂を語るうえで欠かすことのできない制度である。

児玉幸多氏は、往来田の制度と六郷の成立がほぼ同時であり、文永年間(1264-1275)頃であるとする〔児玉37〕。氏人物中もこのころからあったと考えられ、こうした要素が影響しあいながら、上賀茂の構が構築され、維持・管理されていったと考えられる。

上賀茂には神社と社家を中心に、古文書が残り、往来田に関連する文書をはじめ、構の維持管理の状況を示す史料が残っている。本章では、この上賀茂の構について、とくに氏人の構の維持管理などを中心に、構を支えたこうした制度とともに考察する。

第2節 賀茂六郷と往来田

1. 賀茂別雷神社と賀茂六郷

賀茂別雷神社^{*2}が現在地に遷座してきたのは、平安京遷都以前のことであり、その伝説から、大和葛木山から、山城国岡田の賀茂を経て、「久我の国の北山基」と称されていた北山に程近い場所に遷座した後、現在地に至ったと考えられている。

『類聚国史』の天長10(833)年12月には、

賀茂社以東一里許に道場あり

とあり、このころ既に、現在地一帯に集落の中心を移していたと考えられる。

平安京遷都以前から、上賀茂一帯で大きな勢力を保持しており、さらに平安京遷都後は、伊勢神宮に次ぐ社格となり、正一位を与えられている^{*3}。

寛仁元(1017)年、後一条天皇は賀茂社に参詣したさいに、賀茂別雷神社と賀茂御祖神社に平安京の北辺に位置する愛宕郡のほとんどを寄進している。『日本紀略』寛仁元年11月25日の条には、

天皇行幸賀茂社、皇太后同輿、宣命云、愛宕郡可奉寄之由、先年祈申、両件郡、或帝王城都、或明神鎮地、皆是万代相伝之处、非一人自由之地、仍南限皇城北大路、東限郡界、但此内有凌室蔵氷之邑、是百王之職事、難致一時之改易、縦在神郡内、可除此一邑、抑上下御社平均所進分也

とあり、上、下の両賀茂社に参詣し、氷室の村を除く愛宕郡のほぼ全域、すなわち平安京の北辺にあたる皇城の北大路から、西は大宮大路まで、東と北は、愛宕郡郡界までの地域を寄進している。この地域が、賀茂(川上)、小野、錦織(岡本)、大野(小山)の4ヶ郷にあたり、後に賀茂境内六郷となる。この六郷の内、小野郷以外の五郷に、往来田が設定され、各郷1反、合計5反が氏人に配給された。

中世の賀茂別雷神社の所領は四十一ヶ所におよんでいるが^{*4}、この上賀茂社境内六郷は往来田制度などをつうじて、上賀茂社との結びつきが特に強く、所領の中でも中核をなすものであった。

2. 氏人惣中と往来田

前述のように、往来田の制度は、賀茂別雷神社から賀茂社の氏人140人に対して、賀茂六郷の内小山郷を除く五郷より、各一反ずつの田地を配給する制度であり、有資格者の氏人が死去するとその配給田は賀茂社に返納され、次の有資格者に給される。この制度は土地の所有関係を明解かつ平等にし、氏人達の自治と連帯の基盤となった制度であった。

『賀茂注進雜記』には、140人の氏人は往来田に空きがあれば、年齢次第で配給されることが、そのためには神社の神事や番役を、懈怠なく努める義務があることなどが記されている。さらに、同記所収の「経久日記」には、

経久神主任中、一条以北ノ水田甲乙人等カ為ニ、濫妨セラルル分、徳政ノ御沙汰有テ社家ニ返シ附ラル。依レ之社寺・氏人会合シテ更ニ配分ス。社司ハ十九人ニ配分、氏人ハ一人別ニ五段ヲ結テ、老者次第ニ配当ス。氏人中ヘ七十町也

とあり、外部に売却されていた田地が徳政により返却され、其の地を社司と氏人で分配したことが記してある。これが往来田の始まりで、鎌倉時代末期ごろのことと考えられている。氏人の割当分の70町はちょうど140人×5反にあたり、当初からこの面積が往来田として確保されていたことを示唆する。

往来田の受給の資格の詳細は、①春・秋の氏神祭に5～6才の頃から努めていること、②16～47才まで貴船社参詣の役を務めていること、③賀茂の競べ馬の乗り尻の役を務めていること、④1年間休まず上賀茂社で祓えの修行をする精進頭を務めていること、などがあげられている。こうした取り決めにより、惣としての結びつきもより強いものとなっていったと考えられる。

文永年間ごろから、氏人は惣中を形成する。氏人惣中は往来田をもつ10名の宿老と130名の若殿原、および往来田をもたない無足人である小殿原からなり、惣中に関わる事柄は「惣中寄合」で決定されていた。

このほか、貴船などにもこうした往来田があり、文明9(1477)年8月付けの『室町幕府奉行人奉書』^{*5}などで、こうした田地の貸し借りをめぐる騒動を知ることができる。弁済のない借金のかわりに往来田の差し押さえもおこなわれている^{*6}。さらに、天文年間(1532～1555)頃から統制が乱れ、往来田が売買されるようになり、洛中や他郷の町人などが買得しており、中世的なあり方は大きく変化する。

第3節 上賀茂の構の遺構

つぎに上賀茂の構の範囲などについて、須磨千頼氏の宝徳3(1451)年の「地かがみ帳」をもとにした往来田の詳細な復原図〔須磨72〕、発掘調査で検出した遺構、洛中洛外図や上賀茂惣絵図などの絵画資料をもとに考察する。

1. 上賀茂の構と往来田

上賀茂社には、室町時代来の一連の検地帳が伝えられている。宝徳3(1451)年作成、明応9(1500)年書写の河上・大宮・小山・中村・岡本五郷の地かかみ帳と、享禄5(1532)年の岡本郷検地帳、天文19(1550)年の五郷の検地帳がそれである。この検地帳の記載の順序や、挿入されている字地名、注記などを手がかりに復原したのが須磨千頼氏であった。検地帳の注記にある「一ノ坪」「二ノ坪」「ハヲリ」などから、条里制地割が遺存していることを知り、明治期の地籍図の上でその復原を試みたものである(図12-1)〔須磨72〕。この結果、宝徳の地かかみ帳の田地の1筆ごとの記述と、明治期の地籍図が極めてよく一致し、こうした地割が現在に残っていることが判明した。同様に、享禄5(1532)年の岡本郷検地帳、天文19(1550)年の五郷の検地帳で試みた結果もほぼ同じであり、中世後半の往来田の地割のあり方には、大きな変化のなかったことが判明した。

宝徳3年、享禄5年、天文19年の地かかみ帳記載田地の復元図のうち、上賀茂の集落の近辺で往来田のない部分は、住居地と考えられる。その範囲を、昭和10年の都市計画図の上に示した(図12-2 梨地部分)。田地のみを対象とする検地帳で復原できない部分が集落であるが、集落の中には社司、氏人のほかに地下の住居も含まれており、中世の上賀茂の構の範囲はこの梨地の中に含まれていたことになる。

なお、図12-2から、昭和の初期においても、上賀茂の集落は賀茂川沿いの部分に膨張しただけであることがわかる。この新たに宅地化した部分は、享禄の検地帳で「川成」、「流云々」、「川ヨリ川成」などの注記があった*7部分(図12-2 斜線部分)と同様の状態、すなわち賀茂川の増水や洪水ですぐに川となったり荒れてしまったりする土地であったと考えられる。『上賀茂村絵図』(京都府立総合資料館所蔵)には、このやや下流の地点で、「御社地流失」の注記があり、川成りを裏付ける。往来田などの田地を減じることなく、居住地を増やすために河原に近い状態であった部分を開発したものと考えられる。

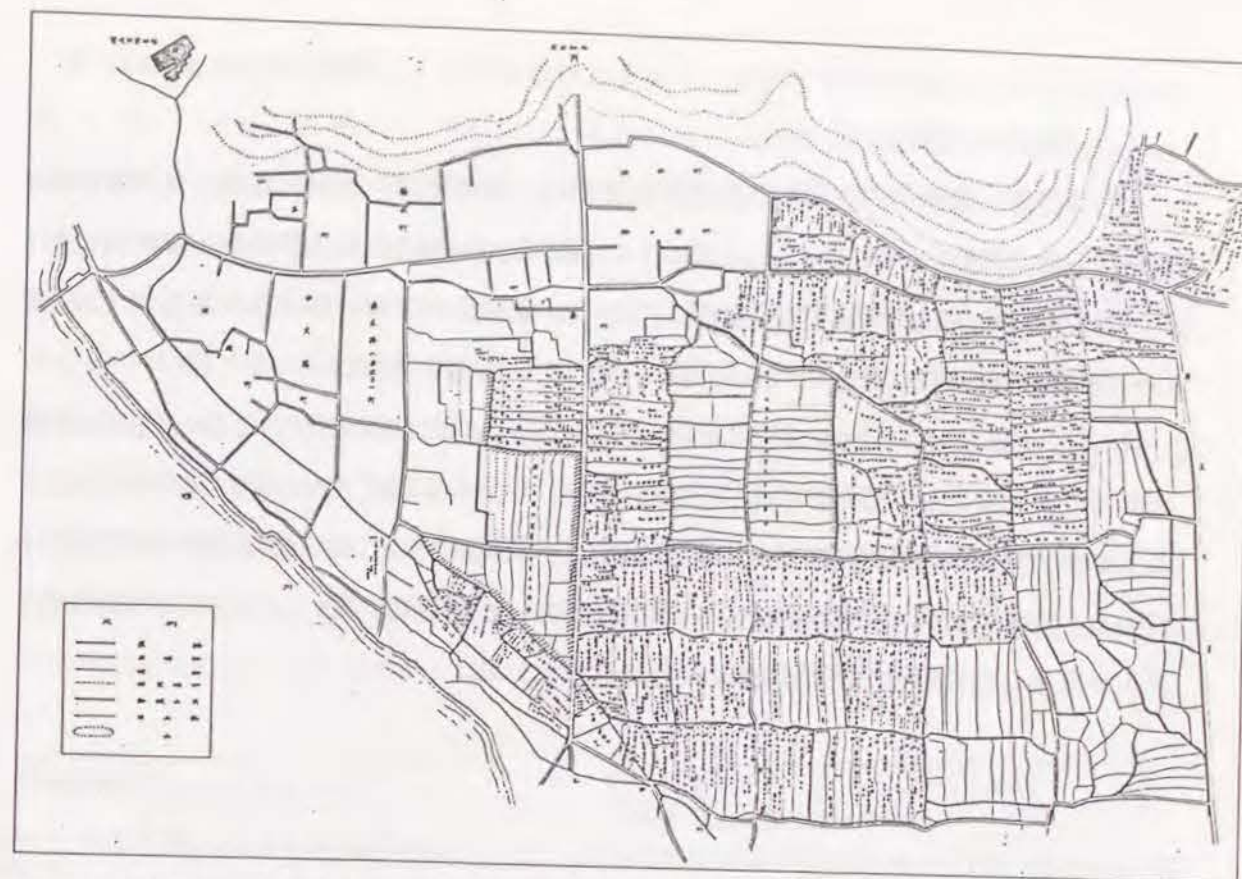


図12-1 宝徳3年岡本郷地かかみ帳記載田地復元図(〔須磨72〕所収)

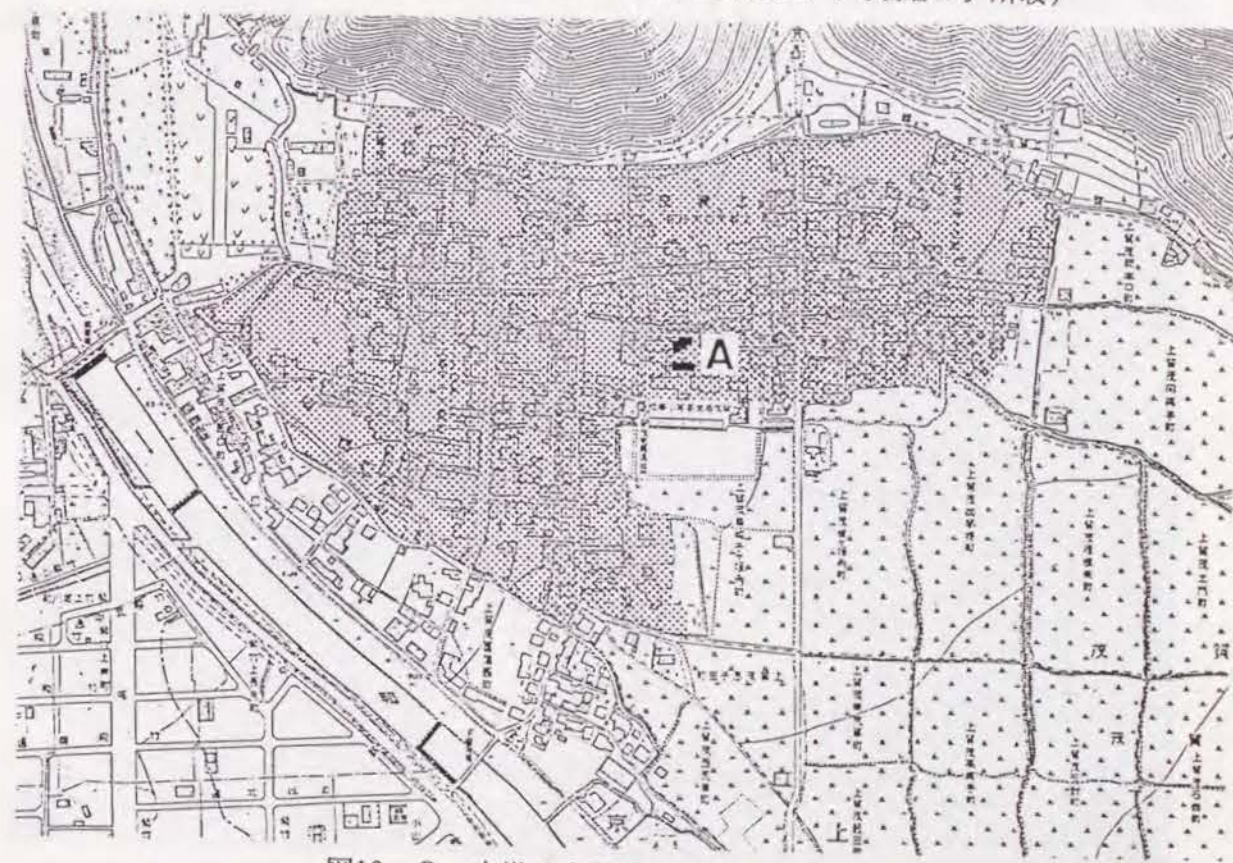


図12-2 中世の上賀茂の集落の範囲

2. 発掘された堀の遺構

上賀茂の構に関連すると思われる堀状の遺構は、集合マンションの建設に伴う事前調査で検出した〔高90〕（図12-2-A地点）。調査地は京都市北区上賀茂竹ヶ鼻町4にあたり、構の東端に近いと調査担当者は考えている。調査区内では、構の南を限る溝1と、構の中を区画していたと考えられるL字状に屈曲する溝4を検出している（図12-4）。

溝1は、幅4.45～4.85m、深さ1.31mの東西方向の溝で、検出長は16.3mにおよぶ。断面形は逆台形を呈し、底部は平坦である。検出した溝の東端で北から南へスロープ状に下降する突出部が確認されている。この突出部は、溝幅を狭め、橋を渡した部分と考えられている。ここに上賀茂の構の出入口のひとつがあった可能性が高い。出土した遺物から、溝1が埋没した時期は室町時代後半と考えられている。

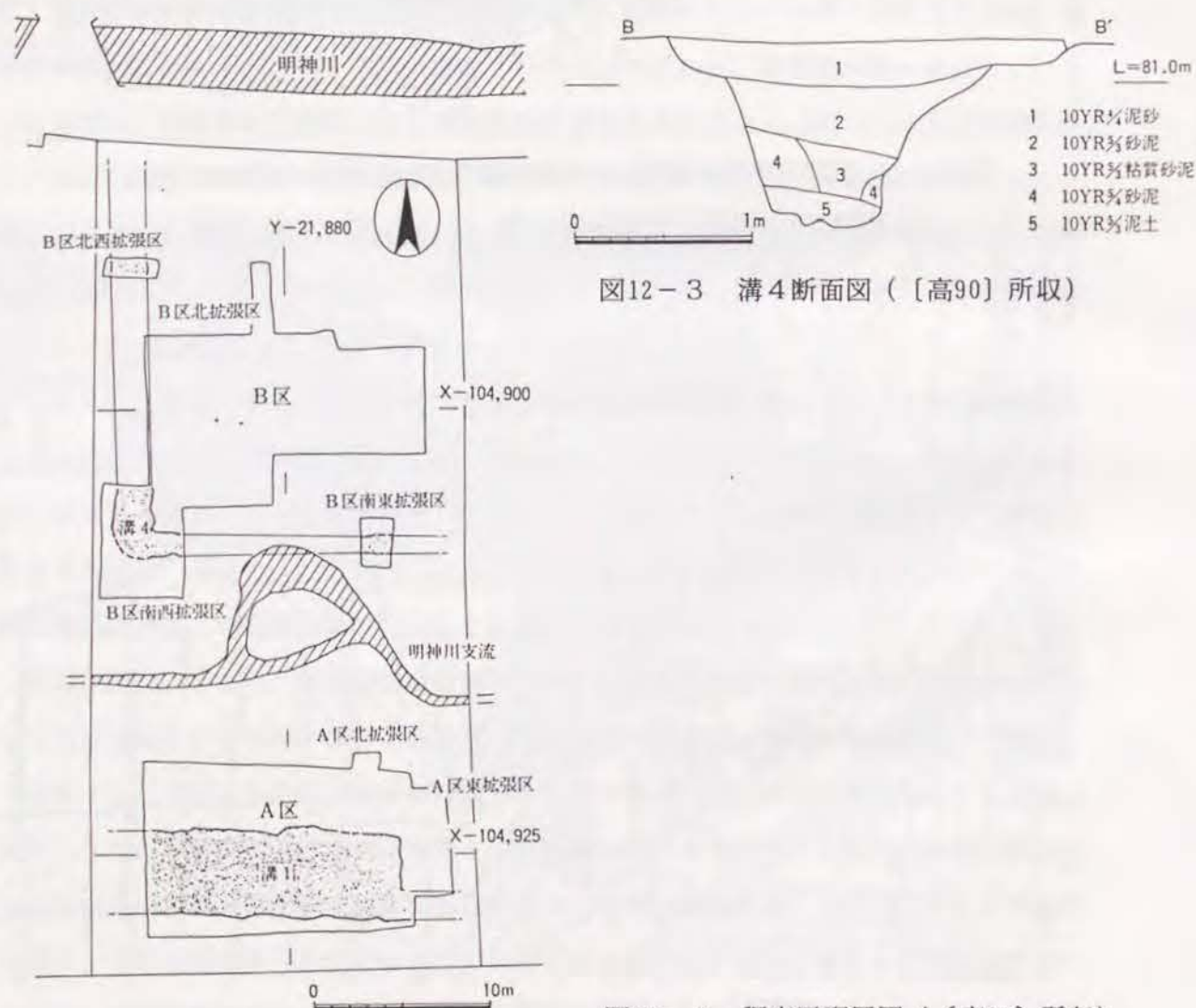


図12-3 溝4断面図（〔高90〕所収）

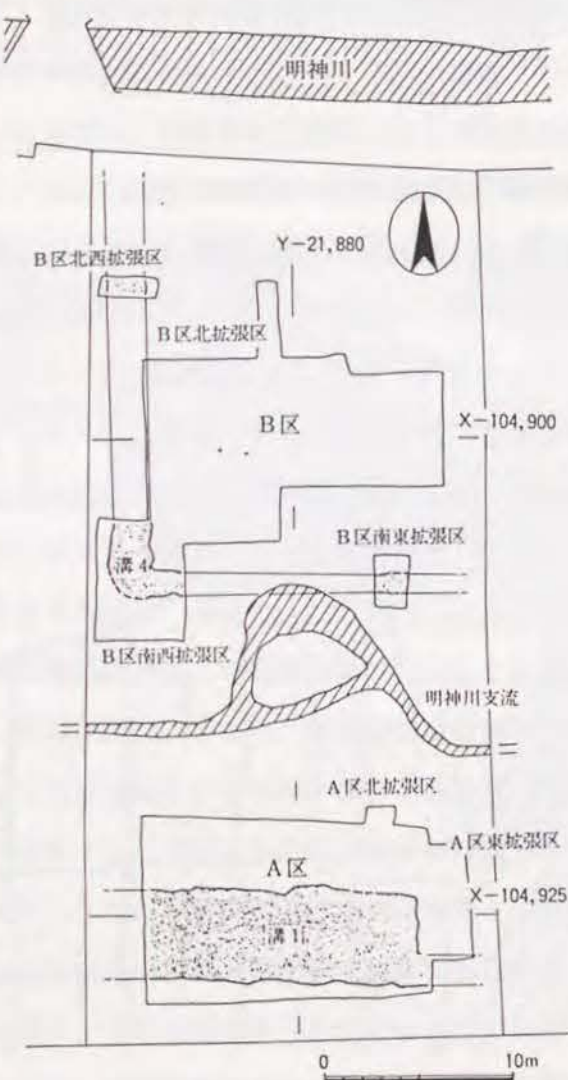


図12-4 調査区配置図（〔高90〕所収）

溝4は調査地西端を南行し、L字状に折れ曲がり、東行する溝である。溝の南北部分は幅、1.8m～2.0m、深さ0.59m～1.08m、検出長16.4mを測り、東西部分は幅1.02m～1.43m、深さ0.81～0.91m、検出長15.6mを測る。南北溝は東西溝より幅が広い。

溝4の東西部分の西端はある時期3～4段の石を積み上げ埋め立てられている。南東拡張区でこうした状況が見られないことから、東西溝西端の限られた部分が埋められたと考えられている。構の平面構成の変化にともない、溝をわたるための陸橋などを構築した可能性がある。溝4の埋没時期も溝1と同じ室町時代後半と考えられているが出土した土器に多少の時期の差があり、溝4がやや早い段階で廃絶したと考えられている。

後述する上賀茂惣絵図には調査地のやや北よりの一帯に、「堀の内」の字名があり、堀の内側が北にあったことを裏付ける。この調査区は、上賀茂の集落が東に突出している部分の南辺にあたり、出入口のひとつがここにあったのは間違いないと思われる。

3. 絵図にみる上賀茂村

上賀茂の構の様子を知る好資料として、上杉家本洛中洛外図がある（図12-5）。上賀茂社の鳥居の位置と、賀茂川の流れの方向から、この構の入口は集落の西端のものと考え



図12-5 上賀茂の構（上杉家本洛中洛外図）

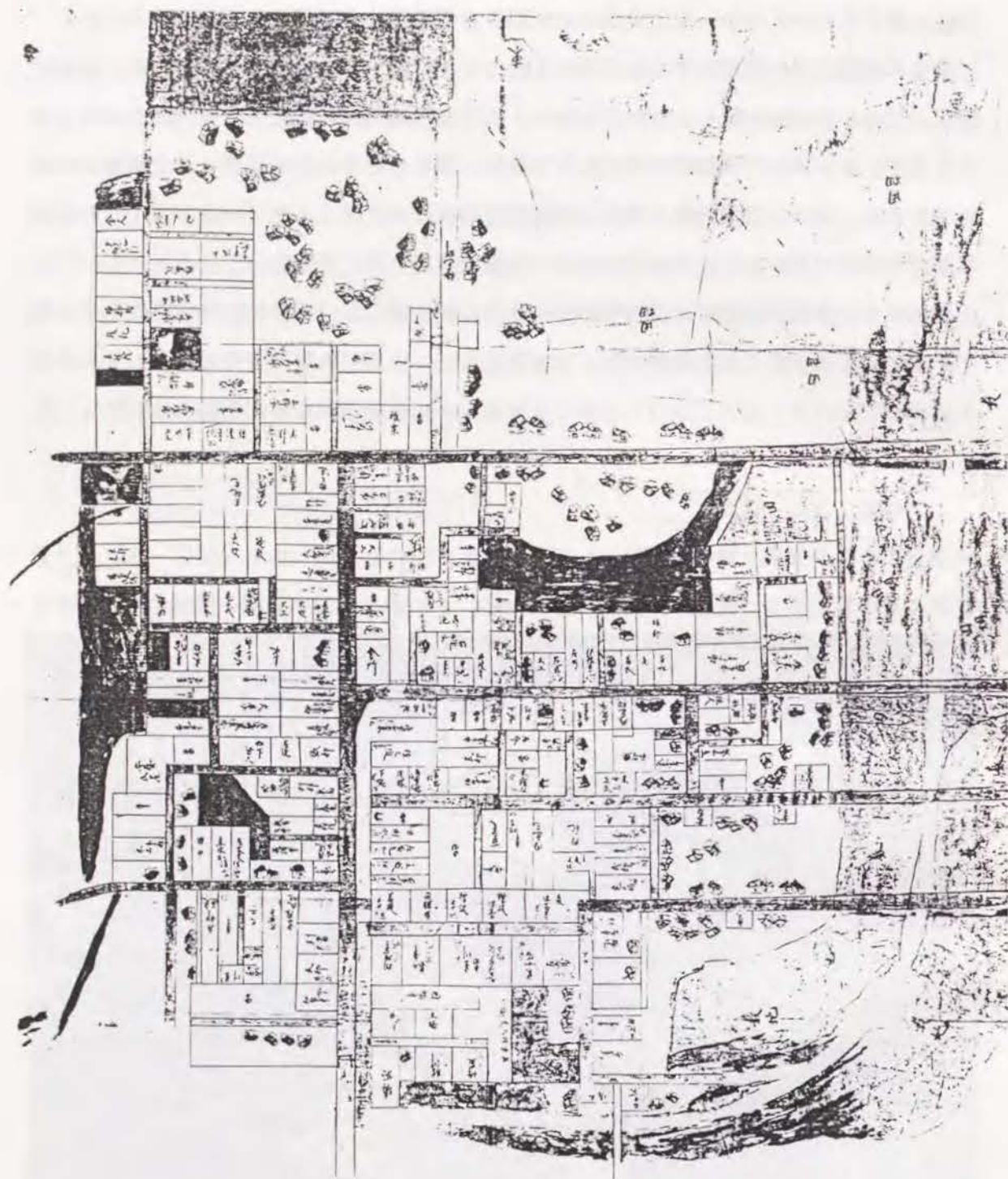


図12-6 上賀茂図（京都府立総合資料館所蔵）



図12-7 上賀茂惣図（内閣文庫所蔵）

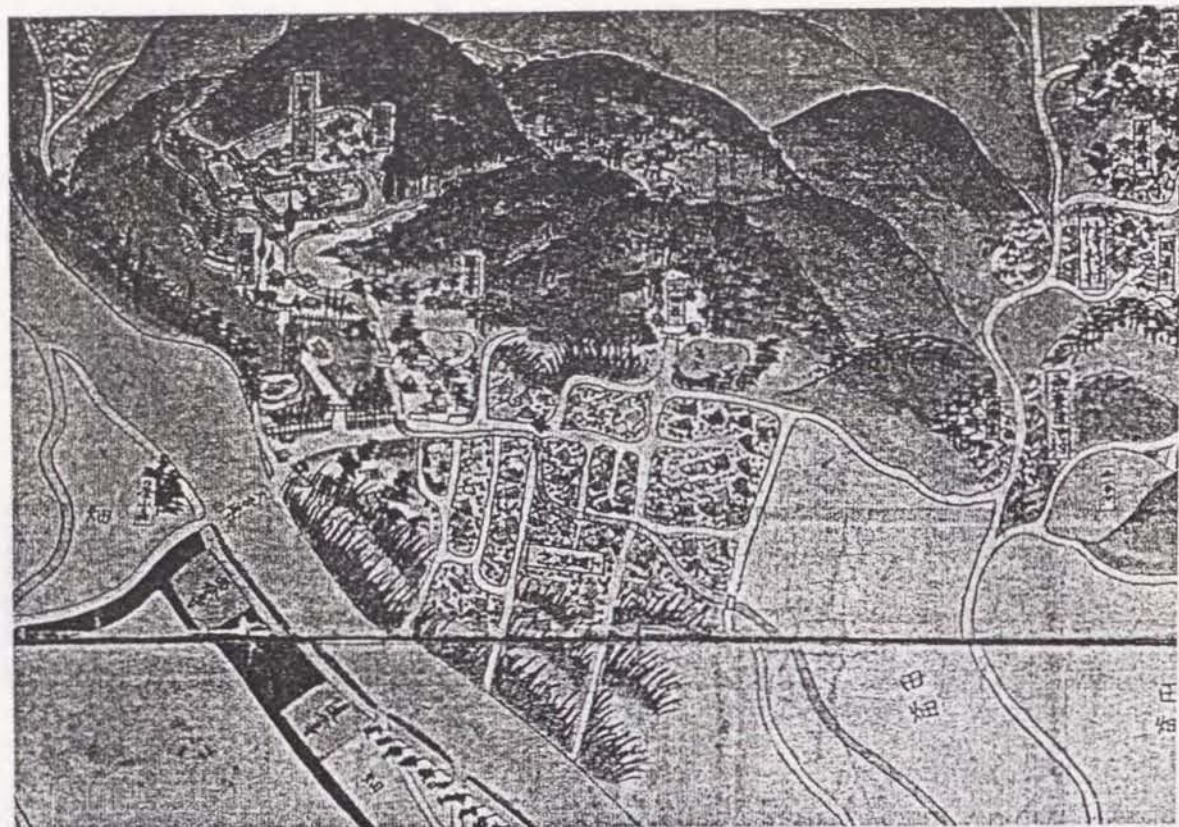


図12-8 洛中洛外絵図にみる上賀茂（京都大学附属図書館所蔵）

られる。土堀の手前に集落があり、向側に橋と水路があることから、手前が構の内部と判断できる。入口の扉は描かれていない。狭間も外部からみたときと同じような描き方をしているが、蓋つきの狭間の外観が内外とも同じなのは不思議である。

上賀茂の構の土堀や、そのすぐ東の深泥池の集落の土堀（図9-1-下）、粟田口の構の土堀（図10-1）では、狭間と狭間の間に、さらに小さな小窓がある。この小窓の中には、十字の木組みが見える。この小窓は洛中の構の土堀には見受けられず、洛外の構の土堀に散見されるが、この小窓の性格は不明である。

図12-6は元文年間（1736～1741）ごろのものと伝えられる上賀茂の在家の図である。この図には社家は名前が戸別に記され、地下は家の絵柄で表されている。この図を見ると地下の家は上賀茂の集落の西南辺と、東に突きだした部分の東辺と南辺に集中していることがわかる。後述するように上賀茂の構の中に建てることのできる屋敷数は限られており、構の範囲は地下の少ない集落の北よりの部分の可能性が高い。

図12-7は江戸後期の上賀茂惣図である。社家と地下の家の絵柄に差はなく、区別することはできない。

図12-8の洛中洛外絵図は天明6（1786）年写しの肩書きをもつ。18世紀の上賀茂村の形

態とその範囲を知る好資料である。集落の形態は宝徳3年の地かかみ帳から推定した範囲とほとんど変化がない。昭和10年の都市計画図に描かれている賀茂川沿いの人家もなく、藪となっている。

第4節 上賀茂の構と惣中置文

1. 構の維持管理について

上賀茂の構の維持管理については、その具体的なあり方を記した文書がいくつか残っている。賀茂別雷神社文書に含まれる文明8（1476）年10月13日の日付をもつ定め書きには、

定、若殿原中記し置く条々の事

一、構四半町分、これを構うべき事

一、堀の事、宿老十人の外、人別下地に当て、堀一間宛これを掘らるべき事

一、構中の家の事、父子兄弟の中に一間宛これを立てられるべき事

一、彼の家、これを造られざる方は、往来田三ヶ年分これを勘落せしめて、構へこれを寄付すべき事

一、往来田一人別につき、三疋宛出銭あるべき事

一、此の如くこれを定め置く處、若し一夜卜他宿され候は、往来田を次座として競望せられるべきの事

右条々、一味同心定め置く上は、早速に沙汰執るべきの状、件の如し、これに追加す、堀地子は惣の公平において沙汰あるべく候なり。

文明八年拾月十三日

と、構の維持管理に関する惣中の決定事項が記されている。この置文の解釈は谷直樹氏の研究に詳しく【谷78】、以下ではそれを参照しながら考察する。

置文の第1項では、若殿原は各々構を四半町分築くことを定めている。町を長さの単位とすれば四半町すなわち4分の1町（15間、約30メートル）分の長さに築いたことになる。ただし、これが若殿原各人に課せられた長さとする、若殿原は130人いたことから、その全長が3900mという長大なものとなり、全員に課せられたものとしては短い。次の項に堀の掘削の定めがあるため、第1項の構は土堀や土塁などの地上の構築物に関する義務である可能性が高い。

第2項は堀についての規定で、氏人中のうち宿老10人を除いた若殿原衆130人が、人別に1間ずつ分担して堀を掘るよう取り決められている。堀の総長は130間（約250メートル）に及び、これに宿老衆の分担が別にあったとするならば、さらに長大な堀が築かれたことになる。

第3項では、構の中に家を造立する者は、一家に一軒ずつと制限し、限られた構の中にできるだけたくさんの屋敷を集中するよう互いに配慮を加えていたと考えられている。地下の住宅はこの中には構築できなかったのであろうか。

第4項は構の中に家を造らない者は、往来田の名簿からはずし、3ヶ年分の得点を構の構築と維持費として寄付するよう定めている。一方、第5項目では、構中に家を造立する氏人に対して、往来田一人別に三疋ずつ納めるよう義務付けている。

そして第6項目では、他宿を禁じているが、掟を破れば往来田を返納することも記されている。さらに追加で堀の地子に関しては、公平な処置すなわち惣で負担していたのではないかと考えられる。自治・自衛の気構えのあふれた置文である。

さらに、永正9年（1512）4月に氏人惣中が定めた置文をみると、氏人らが厳しい罰則を含んだ定めをつくっていたことがわかる。『賀茂別雷神社文書』に含まれている永正9（1512）年4月の定めには、

定 氏人口

一、盗人之事、口内之雑物并田地之種物、畠之口物、山林之竹木伐取事在_レ之は、社務之御家子、同月次之十年之為御人数、時日不_レ移、やさかしあるへき者也。然_レ其盗人顕形之時は、為_二社務御家子_一、同月次之十年之御人数可_レ有_二闕所_一之事。

一、やな（築）・蟹菓・関川あるへからさる在所之事。社辺同里懸_二其外諸_一、渴年田溝除_二ケ_一、溝ノやな迄可_二禁制_一者也。雖_レ然別而やなあるへからさる在所、上は一本松、下は今井お（を）限者也。尚々社辺里懸_二え_一は雖_レ為_二*（暫）時_一、関川、やな・蟹菓共ニ可_レ被_二停止_一者也。如_レ此相定之處ニ、万一無_二承引_一輩在_レ之は一反田勘落、次座_二え_一可_二当行_一者也。将又、於_二無_一往来反田・仁_二躰_一は、氏人職可_レ果者也。但其外瀬違者不_レ能_二禁制_一者歟。

一、山廻之事、不_レ寄_二檢不_一背_二過料_一可_二相懸_一之處、毎々用捨不定由風聞在_レ之。事實は太不_レ可_二然_一者也。将又於_二山守之御人数_一、万一雖_レ為_二一葉一

枝_一、私曲之儀顕形在_レ之は、可_二反田勘落_一事。

一、諸商人出入之處、押買或臨時非法之課役お相懸仁_二躰在_レ之は、見相隨盗人之可_レ被_二行_一御沙汰之事。

一、自然火事時、屋内之諸雜具相互ニ取出、可_二馳走_一之處、万一私曲輩在_レ之は、可_二為_一放火人者歟、然間可_レ行_二死罪_一之事。

一、毎々寄_二事於左右_一、地下小家に火お付事、太不便之次第也。所詮於_二向後_一は不_レ可_二有_一闕所者也。然共為_二其罪科_一と、一日御日供焼申候は可_二有_一御免者也。同社務之御家子中_二え_一式十疋可_二沙汰_一之事。

一、構堀ニ田植或構ヲ破取事在_レ之は、罪科可_二為_一同前之事。

一、類火之事は相合ニ侘事すへき者也。

右条々、衆儀一同相定處、尚無_二承引_一輩在_レ之は、反田・往来田共勘落シ、次座可_二当行_一者也。尚々盜賊之儀出来之時は、所司目代・沙汰人両所可_二注進_一也。然は不_レ移_二時剋_一やさかしあるへき之旨、衆儀一味同心定置處状、如_レ件。

永正九年四月 日

（以下百二十五名氏人連署略）

とある。窃盜行為の厳禁、溝への築などの設置の禁止、放火は死罪などの取り決めがなされている。さらに火事を出した時の対処の仕方なども決められている。この中に、構の堀に田植えをすることと、構を破り取ることが明文化されて禁止されていることは、少なくとも永正9（1512）年までは構が存続しており、堀や構が臨時的なものでなく、永続的なものであったことがわかる。また、文明の一社騒乱より40年近くを経て、こうした施設の本来の目的が軽視され、構の堀に稲を植えたり、構を破壊するような事態も発生していたことをうかがわせる。

第5節 小 結

以上、文献や古絵図、発掘調査の成果などをもとに上賀茂の構の維持管理のあり方などについて考察し、以下のような結論を得た。

氏人に対して5反ずつの田地を給付し、氏人の死去とともに返納し、次の氏人に田地を順送りする上賀茂社に独特の往来田の制度は、土地の所有関係を明解かつ平等にし、氏人

達の自治と連帯の基盤となった制度であった。往来田の制度は、経済的に氏人達を支えただけでなく、土地の受け渡しをはじめとする諸事を決定するため、氏人惣中という総意決定機関の組織化を促し、惣のための活動に氏人を巻き込み、自治・自衛の雰囲気醸し出すのに大きな役割を果たしたと考えられる。氏人惣中の置文の形で構の維持管理のことも決められていたが、こうした文面以上に、氏人惣中とそれを支えた往来田の制度の持つ意味は大きい。

古絵図をもとに復原した江戸時代前期の集落の範囲と、宝徳3年(1451)の「地かがみ帳」をもとにおこなった須磨千頼氏の岡本郷田地復原図を比較検討したところ、江戸時代前期の集落の範囲が少なくとも15世紀の中葉には集落化していたことが判明した。この集落の範囲は近世を通して変化せず、近代に賀茂川沿いの川成りの藪地が宅地化しているだけである。

構の維持管理に関する規則を定めた文明8年の「置文案」では、構の中には一親族に一軒の家しかたてることを認められておらず、したがって、構の範囲は集落よりひとまわり小さかったものと考えられる。上賀茂図(図12-7)には社家と地下の居宅が描き分けられているが、構の中における居住を社家に対して制限しながら地下を住まわせるとは考えにくく、従って上賀茂の構の範囲は、図12-2の梨地範囲より小さく、A地点で検出した構の溝の位置とも齟齬をきたさない。しかし、上賀茂の集落の中に構えられた構の詳細は不明であり、今後の課題である。

上賀茂社の氏人と氏人惣中による自治の気風は、構の性格にも影響をおよぼしていた。かなりの数の地下屋敷を構の中に内包し、維持管理も吉田氏の主導のもとにおこなっていた吉田構などとは、その様相を大きく異にする。非農業的要素が多く、構の維持管理や、往来田の維持管理、惣中における日常的な様々な取り決めに見られる自治的な要素は、時代を突出したものと考えられる。氏人が主体となって維持管理にあたり、ひとりあたりの分担なども自ら律していたことを通じて、自立的なあり方が確立されていったと考えられる。

*3 『日本紀略』大同2(807)年5月3日の条

*4 『吾妻鏡』元暦元(1184)年4月24日の条

*5 『室町幕府奉行人奉書』の中にみられる文書で、「往来田・貴布禰請文」として、古備前守往来・貴布禰六段・孫壽大夫往来五段・古六朗大夫往来五反、為後世菩提御訪、十ヶ年自衆中預給候間、更以不可失脚下地お候、年季過候者、臈々可返進申候、萬一、或令沽却、或雖為小半、御下地失之事露顯時者、堅可預御罪科候、其時不可有一言子細候、仍為御日状如件、

文明九年八月 日

宮内少輔

とあり、10年の期限で預かった往来田や貴船田の返却命令が出されている。

*6 『室町幕府奉行人奉書』の中にみられる文書で

「就山(端裏書)城守儀置文」

定氏人中置文之事、

右子細者、去年山城守就倭文庄(美作久米郡)下卅貫文之事、就徳政之儀、子息式部少輔其請乞無紛之處、至當年無沙汰、言語道断次第也、所詮、卅貫文之内、且返弁、残り彼父子兄弟往来壹段田・貴布禰田迄相當之程押取之、可付社屋修理處、萬一傍輩中或雖為俗在・出家、彼在所江不可有出入、若無承引、令家來寄儀〔騎〕負畚之族在之者、往来田令勘落、次座江可宛行者也、同俗在於出家者、所を可追放者也、將又、就此事、萬一傍輩中及難儀事令出來者、十五年毛可進之者也、仍為後日置文之状如件、

永正十七年八月十二日

壹岐守

藤松大夫

紀伊守

幅松大夫

とあり、惣中の決定で往来田を差し押さえている。

六四 賀茂社社司氏人置文

*7 須磨千頼「賀茂別雷神社境内諸郷田地の復元的研究 -岡本郷の場合-」『日本社会経済史研究 中世編』1972年

*1 上賀茂遺跡(上賀茂本山町)

*2 正式名称は賀茂別雷神社であるが、下鴨の賀茂御祖神社と区別して、各々を上賀茂神社、下鴨神社と称している。

13-1 はじめに

13-5	南殿の遺構
13-6	古図にみる南殿
13-7	南殿の縄張りの復原
13-8	本願寺退転後の山科
13-9	山科寺内町をとりまく

歴史的環境

13-10 小 結

第13章 山科寺内町の構と本願寺

第1節 はじめに

山科本願寺寺内町は、京都東山の東、山科の荒れ地に本願寺の門主蓮如が建設した寺内町で、文明10(1478)年に建設が始まり、天文元(1532)年に法華衆徒らの焼き討ちを受けて放棄されるまでの50余年間、本願寺の総本山としてにぎわった。この山科本願寺寺内町は「本願寺の構」とも称され、構として認識されていたことがわかる。

天文元年8月24日、山科寺内町は50年あまりの華やかな「仏国」の歴史を閉じ、烏有に帰した。しかし、山科寺内町および南殿の遺構の一部や、蓮如、実如、証如上人の墓所は今に残り、おしよせる開発の波の中で寺内町のおもかげをつたえている。

この山科寺内町の復原を、2次にわたる発掘調査や、現存する土塁・堀の実測調査、近世の古図、地籍図などをもとにおこなってきた^{*1}。寺内町の中には門徒の居住地区もあり、一般的な城郭とは性格が異なるが、山科盆地中央の平坦地に堀と土塁を巡らし環濠城塞化した姿は、築城技術の発達過程を知る上でも貴重な資料である。

本章では、山科寺内町の現状を明らかにし、古図などの資料とあわせて、寺内町の復原を試みるとともに、発掘調査で出土した遺構を含めた寺内町の遺構の保全・活用にむけての基礎資料を呈示する。

1. 山科寺内町の構

応仁・文明の大乱の前後、洛中・洛外の人々は戦火にそなえて「構(かまえ)」とよばれる防禦施設を構築した。洛中の壬生構、六角構、武衛構、洛外の田中構、吉田構など枚挙にいとまがなく、「京中三分二、大堀をかまえ」といわれる状況であった。山科寺内町の「構」もこうしたもののひとつであり、「本願寺の構」などとよばれていた。その規模は他の「構」とは桁違いのものであり、「山科本願寺の城」ともよばれ、城郭史上も注目し値するものであるが、内部に門徒の生活する町を内包しており、単なる城郭とはその性格を異にしていた。山科本願寺寺内町が坊舎だけではなく、信者の居住地を内包する点は、その後の寺内町の原型となる点で重要であるとともに、内部に居住地を持つという構の範

疇にも入ることを示す。その様子は以下に掲げる山科寺内町の古図に詳しい。

第2節 山科寺内町の遺構

1. 現存する山科寺内町の遺構

山科寺内町の遺構の大部分は旧状のまま近代を迎えた。しかし、明治時代の開墾や、大正時代の河川の付け替えと工場の建設、そして昭和30年以降のバイパスや新幹線建設工事などにより、その大部分が破壊され、現在わずかに内寺内の東北隅（図13-2-A地点）と、御本寺の西側の一部（B地点）、および御本寺西南の隅の部分（C地点）の3カ所を残すだけとなった。

昭和49年6月、発掘調査と相前後して、京都大学工学部建築学教室西川研究室は寺内町復原の基礎資料を得るため、残存している土居と堀の実測調査を行なった。図13-2はこのときの実測図をもとに作成したものであるが、このわずか10年間の間に寺内町をとりまく状況は大きく変化し、そのため、はからずもこの実測図がこの10年間の変化を検討するための定点となった。ここではこの図をもとに寺内町の遺構の現状と近年の変化について述べる。

A地点の土居 内寺内の東北隅にあたる部分で、「L」字形の土居が東西約75m、南北約60mにわたって残っている。東北の隅はややくぼんで、入隅となっている。土居の北側には、東西約40m、南北約20m、深さ約3mの落ち込みがある。この落ち込みは最近までプールとして使用されていた。堀跡の一部を拡幅してプールに転用したものであろう。現在の地表面から測った土居の高さは、西よりの部分で6.5~7.0m、土居の屈曲部のひとときわ高い所は9.2mに達する。土居の頂上の平坦部（馬踏）の幅も広く、死期を悟った蓮如が四方の土居の上を輿に乗って一巡した様子を髣髴とさせる。A地点の土居は後述するB・C地点の土居が4~5mであるのと比べて、かなり高い。三条街道に面する部分の防御の重要性を示すものである。この土居の北側は山科西野様子見町である。この土居のひとときわ高い部分が、三条街道の様子見に利用されていたのであろう。現在、この土居と堀跡は、高層団地内に設けられた公園の中にとりこまれている。樹木に覆われた土居とその斜面は、高層建築の建ち並ぶ団地の中に潤いをもたらし、付近の子供たちの格好の遊び場ともなっている。

B地点の土居 御本寺の西北隅から雁行しながら南へ続く土居と堀跡である。奥田邸



図13-1 山科寺内町の位置

の北側では、幅14m、高さ4mを、西側では、幅10m、高さ3mを測る。奥田邸の南の道は、御本寺（第1郭）より西に出る道を踏襲したものである可能性が高い。「野村本願寺古御屋敷之図」の西側に向かって開く唯一の出入り口がここにあたると思われる。なお、この土居の東と西では、地表面に1.5~2.0mのレベル差がある。御本寺は西側の集落より、1段高い所にあったようである。

B地点の遺構の大半は私有地にあり、開発による破壊が著しい。図中の駐車場部分は実測調査の前年に、約60mにわたり土居を削平して造成したものである。また、図中の破線部分も実測調査後に破壊された部分である。奥田邸の西側の堀は実測後に埋め立てられ、現在は道路となっている。

C地点の土居 バイパスと新幹線により、B地点の土居と分断されてしまった土居である。堀は暗渠となって国道の下をくぐり、南北あい通じている。C地点では図中の「オチリ」と呼ばれているあたりの土居がよく残っている。特に、「オチリ」の北側の土居の

残りがよい。この土居の上面にはかなり広い平坦部があり、ここに何らかの施設があったと考えられている。天文元年の寺内町の焼き打ちの際、日蓮宗徒らが乱入した「水落」がこの「オチリ」にあたる可能性がある。西側の堀は享保8年の「城州宇治郡山科郷東野村田地用水溜池絵図（比留田家文書）」では、幅13間、長さ120間の溜池として描かれている。実測調査の際には、豊かな水をたたえていたが、現在西側の堀はすべて埋め立てられ、駐車場となっている。

2. 山科寺内町第1次・第2次発掘調査

この調査が実現に至ったのは、直接には京都市の埋蔵文化財指導行政が制度的に整備されたことによるところが大きく、さらに当時ようやく中世の遺跡あるいは都市遺跡に対する考古学調査の必要性が全国的に認められるようになってきたという背景があった。具体的には、平安京調査によって京都の埋れた町の歴史が注目されつつあったのをはじめ、福井県の「一乗寺朝倉氏遺跡」の調査が1968年以降福山市が断続的に調査を行い、1973年からは広島県によって開設された調査所が15か年計画で本格的な発掘調査を実施するというはこびになっていた。

1973年当時、山科寺内町推定域内では、京都市によって高層住宅の建設計画がすすめられており、すでに工事の完了した部分につづいて、新たに建設工事がすすめられており、すでに工事の完了した部分につづいて、新たに建設工事がはじめられようとしていた。京都市文化観光局文化財保護課では、工事主体となる市の住宅供給公社に対し、遺跡調査の必要性を説き、協力するように要請した。

公社はこれに快く応じ、調査経費の全面的な負担をも快諾された。発掘調査を受託したのは、六勝寺研究会（木村捷三郎氏）であったが、京都大学工学部建築学教室がこれに協力して調査体制を組むことになり、新たに「山科寺内町遺跡調査団」が発足した。さらに、京都大学考古学研究会や、橘女子大学考古学研究会をはじめ、多くの方々の参加と協力をいただいて、発掘調査を実施するはこびとなった。これが第一次調査である。1973年5月21日に試掘を開始し、同年8月4日には現場の作業を終了した。

その翌年、山科区西野山階町にあるガソリン・スタンドで、敷地を拡張して隣接する畑地に石油タンクを埋設する工事が行われるという届け出が、京都市文化財保護課になされた。保護課と調査団、それに施工主である東山石油株式会社（西村太一郎氏社長）三者の協議の結果、とりあえず、整地及び掘削工事に調査団が立会うこととし、1974年10月9日

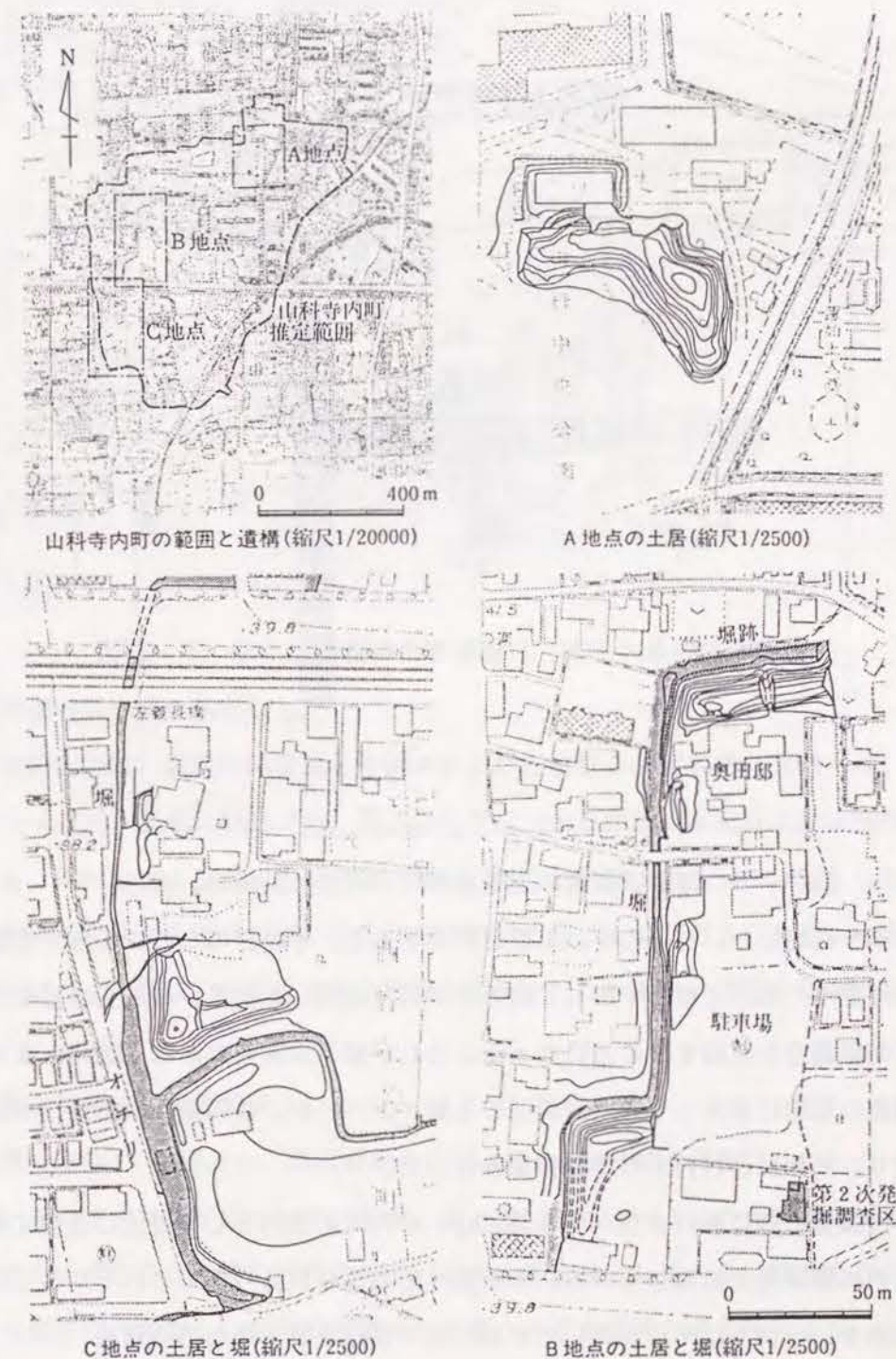


図13-2 山科寺内町の遺構の現状

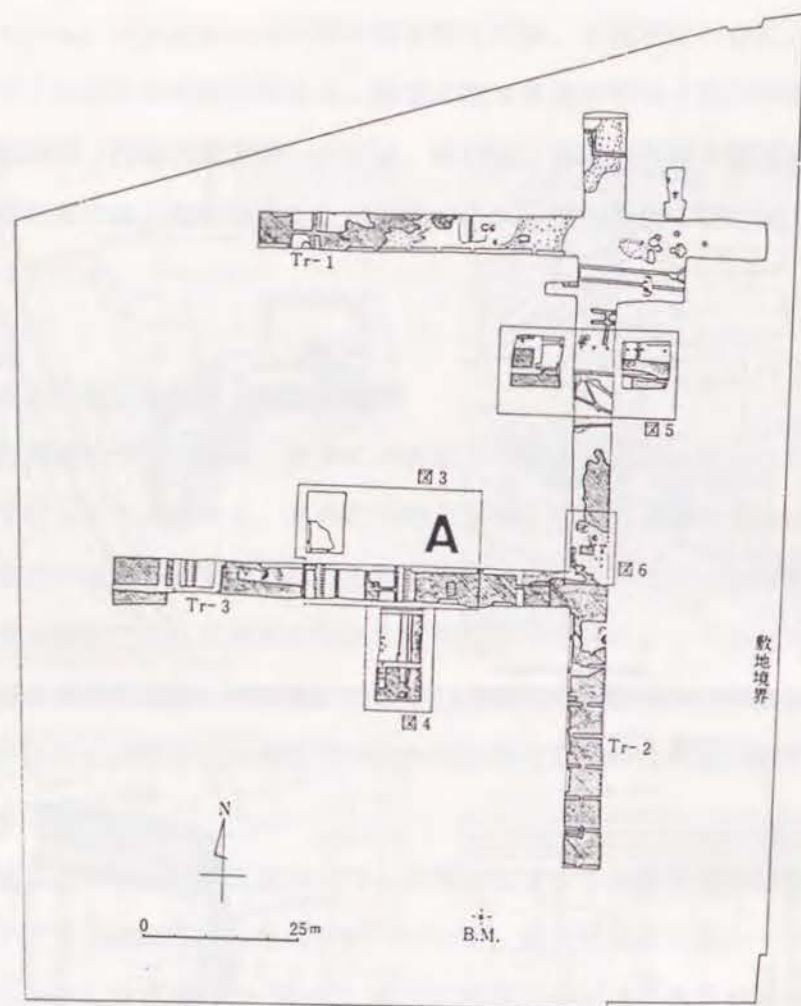


図13-3 第1次調査の主要遺構（〔岡田・浜崎85〕所収）

に現場作業を開始した。ところが、工事を開始すると、その日のうちに石列や土器片の出土をみるに至り、急遽工事を中断して関係者が再度協議した結果、施工主の好意的なご配慮を得て発掘調査を実施することになった。これが第二次調査である（図13-4）。当時、第一次調査の整理にあたっていた調査団の主要メンバーが、この第二次調査をも担当することになり、同年11月13日まで現場作業を行った。

なお、両調査の間にあたる1974年6月には、寺内町の遺構として地上に現存する。土居と環濠跡の測量調査を実施している。年を追って削平されたり埋められたりして形を失ってゆく遺構を、一刻もはや記録にとどめ、その保存を訴えるための資料を作成する必要があると考えたからであった。

第1次調査は鐘紡の工場跡地であり、攪乱が激しく、残存していた遺構は少なかった。図13-3-A地点で幅約19.5mの堀跡や、土塁の基底部と考えられる堅く締まった土層と、

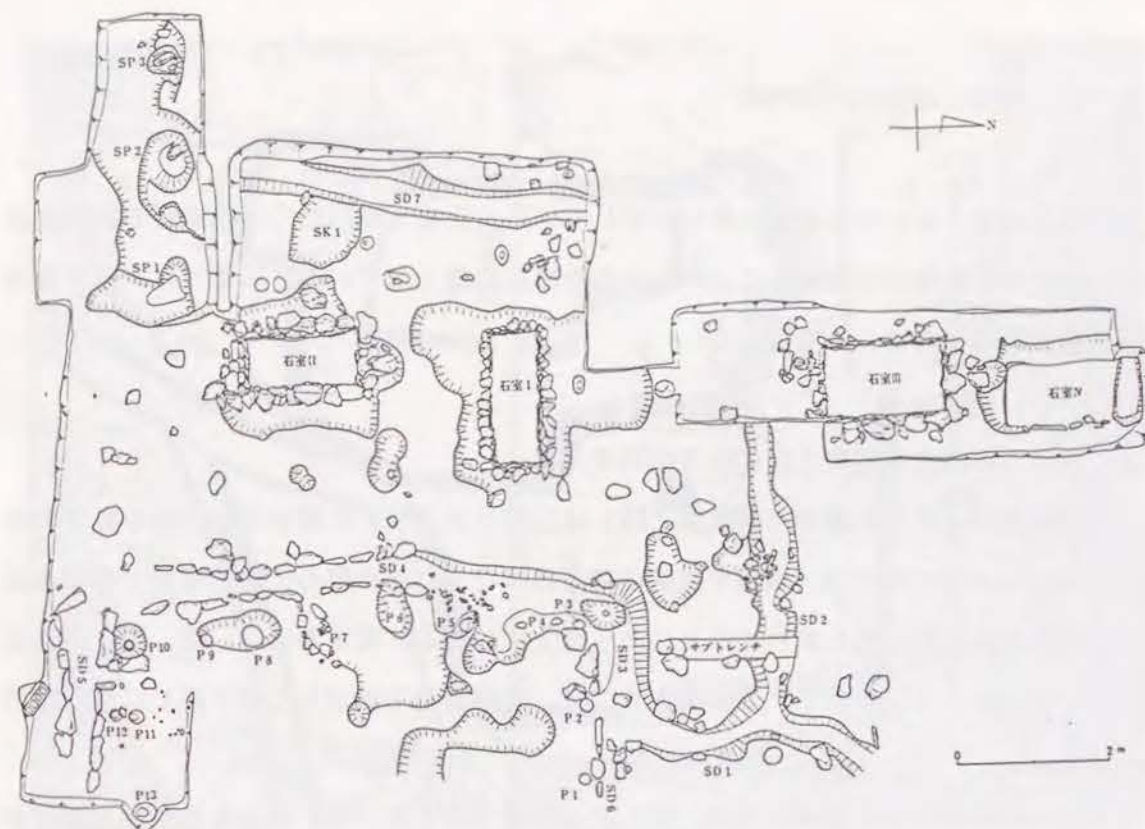


図13-4 第2次調査の主要遺構（〔岡田・浜崎85〕所収）

土塁の内側の排水溝を検出した。

第2次調査では、庭園状の遺構と小溝、および石室群を検出した（図13-4）。石室は幅が0.6～0.8m、長さ1.4～1.7m、深さは0.7～1.0mを測る。石室Ⅱだけは底部まで焼土が詰まる。検出した4基の石室からは、夥しい量の土師器が出土した。出土した土師器は検出状況から、天文元年（1532）の山科寺内町焼亡時のものと考えられる。時期の確定できるこれらの土師器は、山城地方の土師器の編年を行なう上で、貴重な基準資料となった。

3. 御本寺南辺の発掘調査

新幹線の南側で、幅0.8m、検出面からの深さ0.9mの石組の溝を11.3mにわたって検出した^{*2}。石の大半は抜き取られていたが、最下段には0.5～0.8mの大きさの石が組まれていた。また、北からこの溝に流れ込んでいた南北溝も検出している。調査担当者は東西溝の北側を敷地内とみなし、敷地の内側から外側への排水施設と考えているが、この溝は東西方向の土塁の内側の排水施設の可能性がある^{*3}。なお、出土遺物の時期は室町時代後期の様相を示す。光照寺本による復原を指示する材料である。

第3節 古図にみる山科寺内町

寺内町の旧地を描いた古図は何枚か存在していた。元文2年(1737)、西本願寺派の廣泉寺は山科寺内町旧地の古図を手に入れ、これを宗主に献上している。以下では、現存する古図の代表的なものについて述べる。

1. 野村本願寺古御屋敷之図にみる山科寺内町

光照寺所蔵の「野村本願寺古御屋敷之図」は元和3年(1617)に書き残されたものである(図13-5)。この図には、地籍や道路の描写は少なく、郭の形も比較的単純で作図の意図は、寺内町の往時の姿を表わすことにあったと思われる。御本寺には、東、西、南、東北の4ヶ所に出入り口がある。東の出入り口は、発掘調査で検出した切り通しにあたる可能性がある。

この図に描かれている御本寺(第1郭)と内寺内(第2郭)は、後述する古図と形態が異なり、南の郭が内寺内から独立している。内寺内には、「家中」や「仏光寺帰尊地 四十二坊トモニ」の記載がある。内寺内には一家一族や坊官が居住していたほか、文明14年(1482)に寺僧48坊の内42坊を引き連れて本願寺に帰依した仏光寺派の経豪らの坊舎である興正寺があった。この「仏光寺帰尊地」の一郭は、他図では御本寺の中にあたる。仏光寺派から帰尊したばかりの興正寺が御本寺の中におかれたとは考えにくいことから、この一郭が当初は内寺内であった可能性がある。永正年間のはじめごろ、普請がおこなわれた記録があり、寺内町の改造をうかがわせることとあわせて、この図に描かれているのは古い時期の山科寺内町である可能性を持つ。外寺内には蓮如の墓所である「蓮如上人御塚」がある。外寺内の東南の隅からは大塚村に至る大塚道が描かれている。

「山科近傍図」は「野村本願寺古御屋敷之図」と同じく「当寺跡覚」に収録されている図で、山科寺内町と蓮如の隠居所南殿を中心に、山科盆地の北半部を描いたものである(図13-6)。寺内町の形態は「野村本願寺古御屋敷之図」に似ているが、音羽川と四宮川が寺内町と南殿の北側を流れている点は異なっている。この図を見ると、三条街道、奈良街道、渋谷街道の交錯する山科盆地の中で、山科寺内町と南殿の占めている位置の重要性がよくわかる。また、南殿が寺内町の出城の役割を果たしていたこともわかる。南殿の南には実如上人の墓所がある。

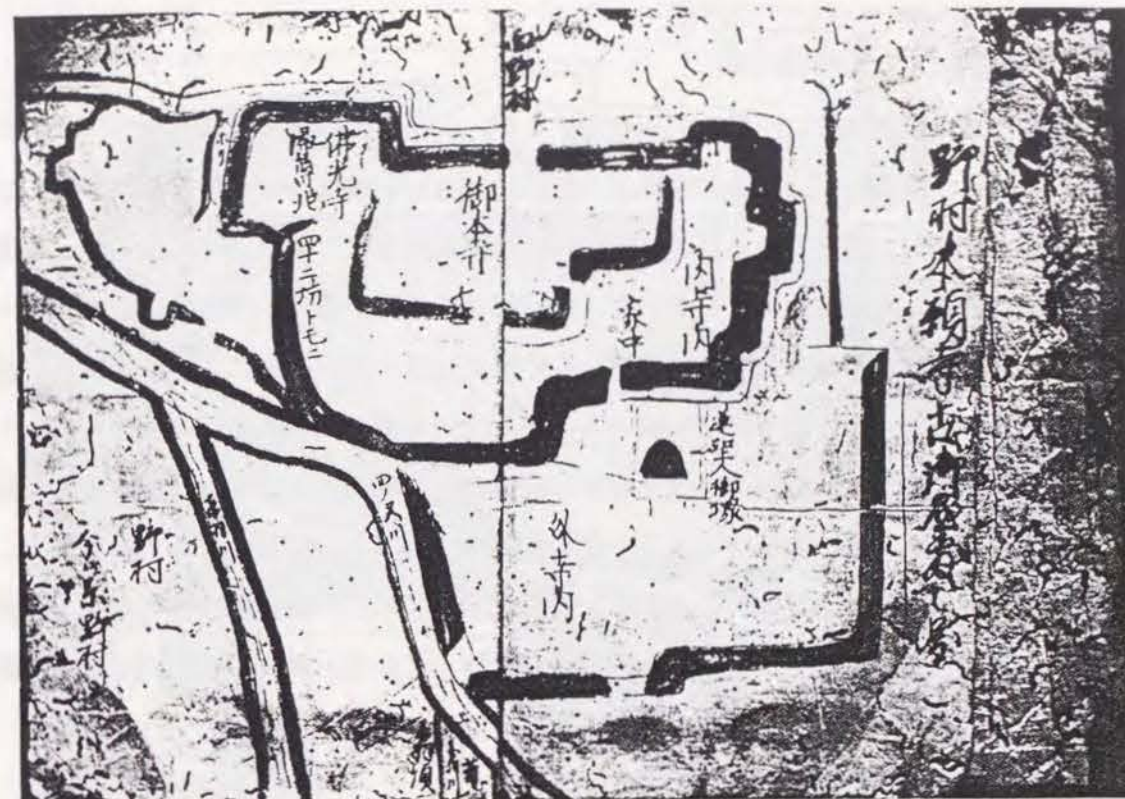


図13-5 野村本願寺古御屋敷之図(光照寺所蔵)

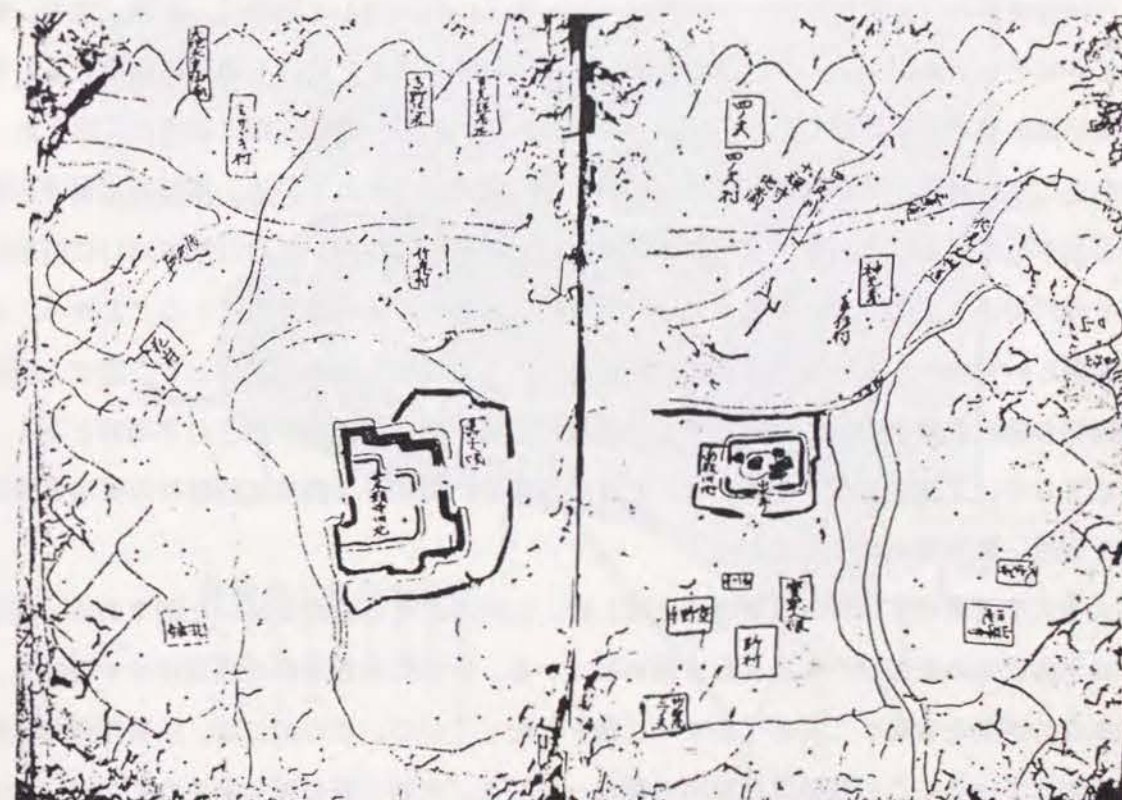


図13-6 山科近傍図(光照寺所蔵)

2. 山科古図にみる山科寺内町

洛東高校所蔵の山科古図は一部を欠失しているが、山科盆地の北東部を描いた図である(図13-7)。山科寺内町だけを描こうとした図ではない。縮尺は「凡以三厘為壹間」であり、正確さを期した図と考えられる。彩色された図で、道筋、土手、川・溝・堀、東西両本願寺の寺地などが塗り分けられている。寺内町は東半分が芝地、西半分は藪林となっている。この図の郭の縄張りは直線を基調として描かれている。土居による縄張りがここまで角張ったものになるかどうかは疑問であるが、土居や堀の輪郭は現在の字境界とよく一致している。この図には他図では見られない御本寺の中隔の土居が描かれている。「野村本願寺古御屋敷之図」の興正寺のある一郭の東側の土居に対応するものかもしれない。東西両本願寺の山科別院が描かれていることから、享保17年(1732)以降のものである。実如上人の墓所を取り囲む西本願寺の寺領がかなり広いことから、真光寺が仲介となって周囲の土地を買った天明元年(1781)以降の図である可能性がある。

3. 山科村古図にみる山科寺内町

西宗寺所蔵の「山科村古図」(図版13-8)は「山科古図」と同様に、道筋、土手、堀などが彩色された図であるが、描かれている範囲は寺内町とそのごく周辺に限られる。寺内町旧地の東半分は芝地であり、西半分は藪である。西野村領の田畑は淡橙色に彩られ、無彩色の東野村領、竹鼻村領、音羽村領などと明確に区別されている。東西両本願寺の別院が描かれていることから、享保17年(1732)以降のものである。文政11年(1828)に西宗寺がその門前より蓮如上人の墓所まで開いた新道と思われる道が描かれていることから、比較的新しいものである可能性がある。「山科古図」と同様に直線を基調とした図で、近世の縄張り図の影響を受けたものと考えられる。土居や堀の輪郭は、現在の字境界とよく一致しており、正確さを期した図であることが言える。御本寺の西側に西野村の集落と西宗寺を囲む一郭が描かれている。

大谷大学所蔵の「山科本願寺舊迹之図」は、山科寺内町と南殿を描いた図である。縄張りは全体に丸みを帯びたものとして描かれている。寺内町の西半部の表現はやや曖昧で、御本寺の西側を省略して描き「カマエノ藪」と記している。この図には、主要部分の間数が記されている。この間数は復原図と概ね一致した。土居と堀の幅も記されており、内寺内北側で各10間、御本寺の北側で各7間、御本寺の南側で各5間とあり、北東の土居や堀

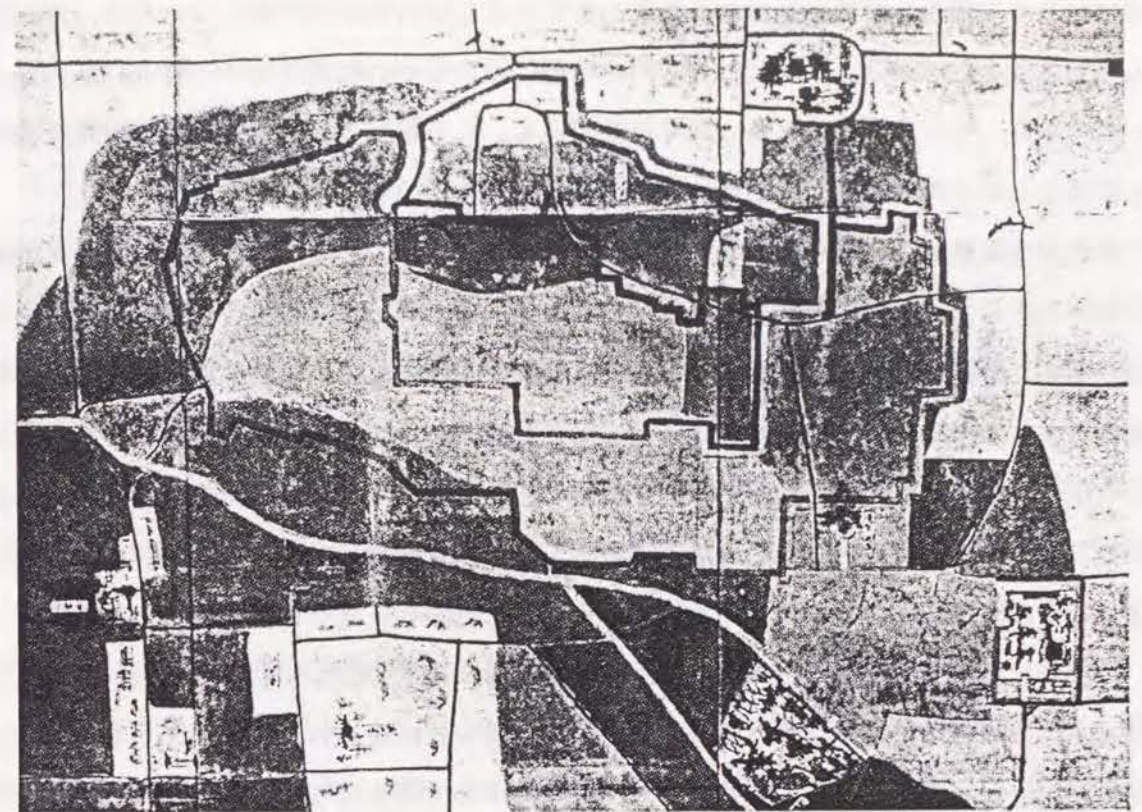


図13-7 山科古図(洛東高等学校所蔵, 部分)

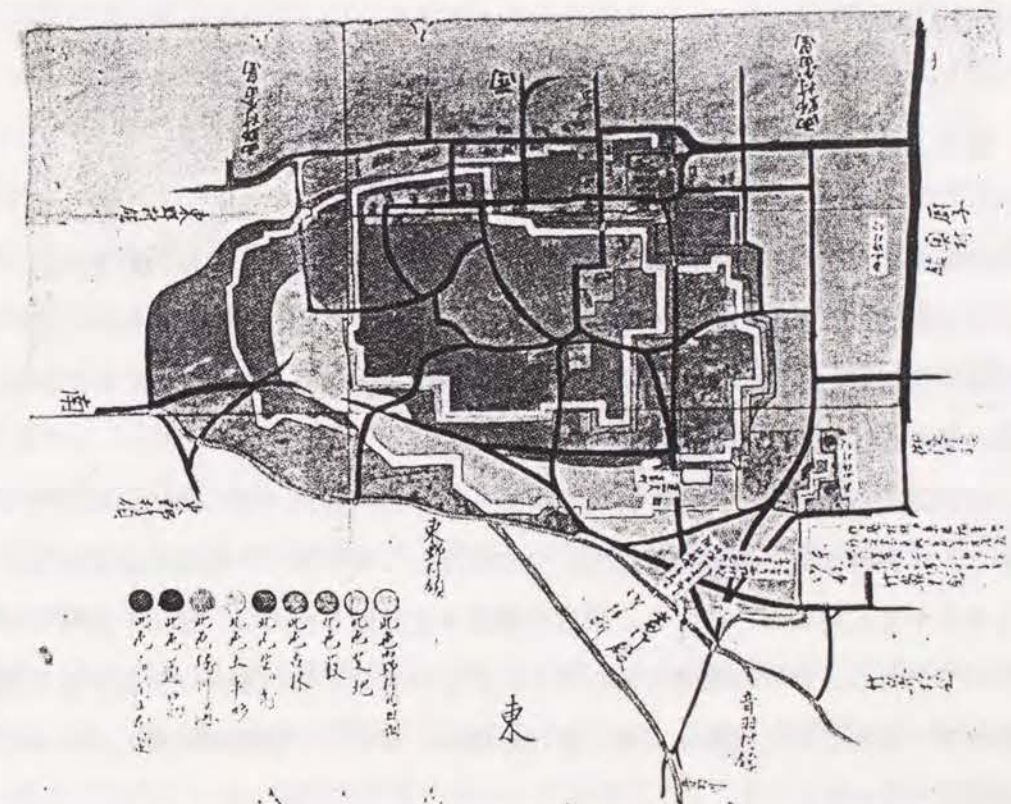


図13-8 山科村古図(西宗寺所蔵)

ほど大きく、南のものほど小さかったことがわかる。寺内町の南半部については、堀が埋もれたと記されている。しかし、寺内町の南側に堀の描かれた図はなく、音羽川を外堀として利用し、もともと堀はなかった可能性がある。この図は近江金森出身の光遠院恵空筆と伝えられるもので「宣如様御時之図」の注を持つ。

大谷大学所蔵の「山科附近・光照寺等書図（粟津家文書）」の12枚のうちの1枚（騰函二号ノ七）も、東西両本願寺が描かれていることから、享保17年(1732)以降のものである。郭の縄張りは曲線で表現されており、「野村本願寺古御屋敷之図」に雰囲気似る。東本願寺の坊官粟津家に伝わる図であり、西本願寺派の西宗寺を囲む土居は描かれていない。この図の寺内町旧地には「論地」の注記がある。寛文5年(1665)、西本願寺は幕府に訴えるに先立って、山科郷総役頭比留田喜兵衛らと絵図を作製している。この図も東西両本願寺の寺内町旧地をめぐる論争に際して、作成された図の系譜をひくものであろう。

京都府立資料館所蔵の「城州宇治郡山科郷東野村舞楽寺引移願場所見分絵図（中井家文書）」は、享保17年に建立された西本願寺山科別院が立地条件のよくないことから、移転を願い出たときの図である。この図は、山科本願寺の旧跡の描写を目的とした図ではないが、この時残存していた外寺内北側の土居と、内寺内北側の土居を結ぶ南北の「小土手」がの様子が描かれている。

4. 仮製二万分一地形図にみる山科寺内町

明治42年測図の二万分一地形図（大日本帝国陸地測量部発行）では、外寺内の土居と、内寺内の東南部の土居が失われているものの、それ以外の部分は明瞭に描かれている。山科寺内町の遺構は、近代の初めに至ってもその旧態をよく保っていたことがわかる。寺内町旧地の東半分は水田、西半分は藪となっている。

以上の古図から、山科寺内町が御本寺（第一郭）、内寺内（第二郭）、外寺内（第三郭）の三郭と、「野村本願寺古御屋敷之図」では独立して描かれている南の出丸からなっていたことがわかる。蓮如がこのような厳重な縄張りを計画したのは、堅田や吉崎での経験によるものであろう。野村の地形にあわせて、屏風のように折れ曲がる土居や堀で幾重にも取り囲まれ、要所ごとに出入隅や入隅を設けた様は、まさに「戦国の法城」とよぶにふさわしい構成をしていた。

第4節 山科寺内町の復原

前述したの3地点の土居と堀の実測図や、発掘調査で検出した遺構の実測図、前掲の古図、および都市計画図（山科、昭和57年2月修正、縮尺1/2500）をもとにして、山科寺内町の復原を試みたのが図13-9、10である。なお、古図は洛東高校所蔵のものと西宗寺所蔵のものを基礎資料とした。土居で構成された縄張りには、直線を基調として描かれており、近世の縄張り図の影響を受けたものと思われるが、郭の輪郭が地籍や字境界とよく一致し、その信頼度は高いと考えたからである。郭の出入り口については光照寺所蔵の図によった。近世後半の図には、新に切り開かれた出入り口がいくつもあるからである。

1. 山科寺内町の縄張りについて

御本寺（第一郭）は、御影堂、阿弥陀堂、寝殿などの主要施設のあった所である。本願寺が東山大谷にあったときと同様、御影堂を北に、阿弥陀堂を南にして南北に並んだ東向きの堂であった。阿弥陀堂は大谷のものと同じく三間四面堂であったが、御影堂は少なくとも七間堂にまで拡張されていたことが明らかにされている。井口尚輔は山科古図（図版2-2）に描かれている御本寺を二分する土居の東側を御影堂と阿弥陀堂の並ぶ中枢部分に比定している。

内寺内（第二郭）には、「野村本願寺古御屋敷之図」に「家中」や「仏光寺帰尊地、四十二坊トモニ」と記されていることから、一家一族や、坊官の屋敷、そして文明14年(1482)に四十二坊を引き連れて帰依した仏光寺派の経豪が建立した興正寺の坊舎などが建っていたと考えられる。この他、本願寺の諸種の業務にたずさわる者や、参詣者が休憩・宿泊する多屋もここにあった。発掘調査で鍛冶場の跡を検出したのもこの一郭である。なお、内寺内の東北の隅の土居は、入隅となっていたことが、古図でも実測図（図13-2-A地点）でもわかる。この入隅は防禦のためのものではなく、東北に対する鬼門よけの隅欠きと考えられる。

外寺内（第三郭）には町が形成され、「八町の町」とよばれていた。この八町の町には、絵師や餅、塩、酒、魚、などの売買にあたるものがいた。また、寺内町には風呂もあり、毎月一度たてられていた。臨時の来客のあるときも適宜たてられていた。豊かな都市生活が展開されていたようである。

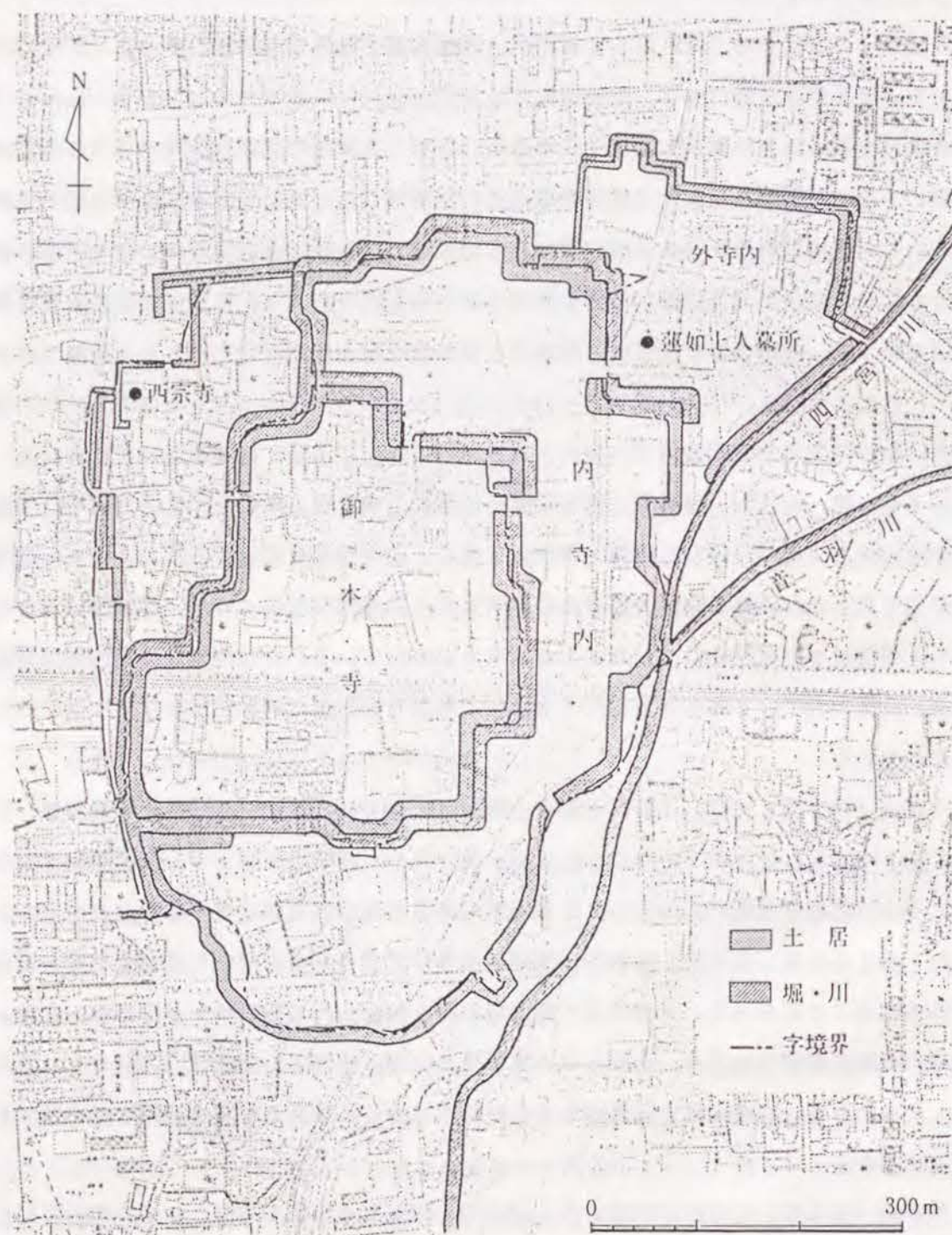


図13-9 山科寺内町復原図（洛東高校本，西宗寺本による）

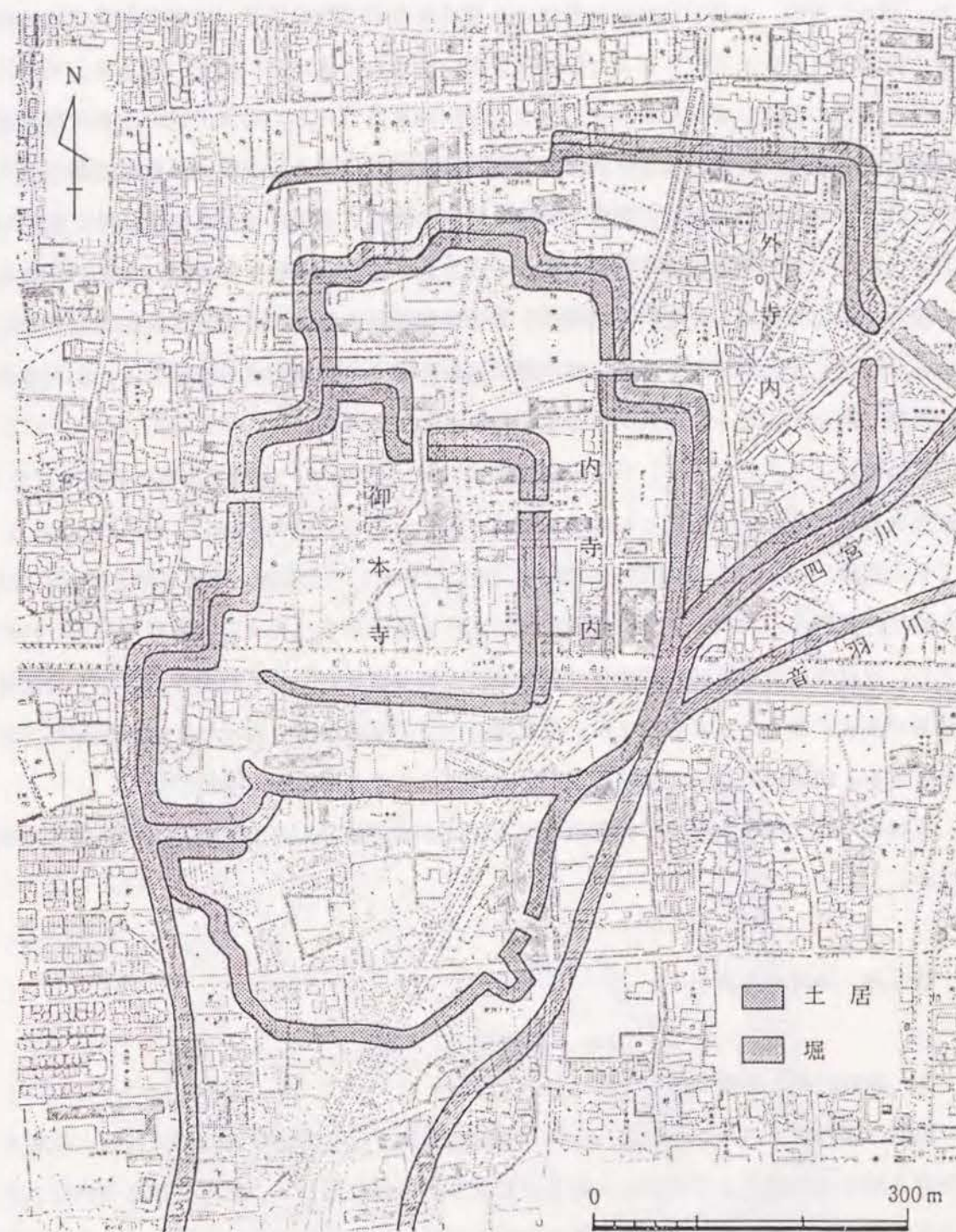


図13-10 山科寺内町復原図（光照寺本による）

山科寺内町の構を復原してみると以上ようになるが、この構の規模や縄張りの巧みさは、この時期のものとしては卓越したものである。横矢をかけやすくし防禦能力を増すため、随所に出隅、入隅が設けられている。御本寺や内寺内の東側の土居の窪んでいる部分は、相横矢（あいよこや）とよばれる両側から矢をかけるための縄張りである。内寺内の相横矢の南の張出しが斜めにひずむのは、相討ちを防ぐためのものであろうか。直線部分が長く続く所も、屏風のように折り曲げた折邪（おりひずみ）とよばれる屈曲線を呈している。この寺内町の縄張は、近世の平城と比して決して遜色のないものである。戦国の世の城の大半がまだ山上にあった時代に、やがてむかえる都市経営に有利な平城の時代をさきどりした形で出現した山科寺内町は、蓮如の都市建設者としての慧眼を如実に現わしている。なお、『天文日記』には松田三郎入道なる城づくりが何度か登場する。山科寺内町の構築の際にも、こうした人々の存在があったのであろう。

前川要は、〔中井均1987〕や〔千田嘉博1987a〕を引用し、山科寺内町の縄張りプランを慶長あるいは元和年間を遡るものではないとしている〔前川要 1991, pp. 118-119〕。

〔千田嘉博1987a〕は、戦国期の中頃から後半にかけて、北海道、沖縄を除く地域に出現する畝状空堀群の、北陸、中部、近畿地方における盛行期を、天文から永禄期(1532-1569)頃とし、永禄期以降の近畿の城造りは側射を狙う横矢掛けと、くるわ群を一体化する横堀の城郭が主流になったとする。また、近畿地方にこの横堀を広く導入したのは織田氏であったとする。山城の横堀は、曲輪の機能分化がはじまる永禄期まで出現しない。

平城の場合、城域を画するため曲輪を巡る堀は本来必須のものであり、特に横堀とは呼ばない。

第5節 南殿の遺構

1. 南殿の堀と庭園

蓮如の隠居所であった南殿は、山科寺内町の東約1kmの音羽伊勢宿町にある。南殿も寺内町と同じ天文元年8月24日に、焼き打ちをうけ灰燼に帰した。南殿旧地も寺内町と同じころ返還されたらしく、天文五年九月下旬に御隠居地山水亭旧地に泉水山光称寺が建てられている⁴⁾。これが現在の光照寺である。しかし、元亀元年(1510)～天正8年(1580)の10年余にわたる本願寺と信長の抗争の中で、信長による焼き打ちを受け、南殿旧地は再び灰燼に帰した。やむなく光照寺は南殿旧地の傍らに仮堂を建て、旧地の管理を行っていた

が、慶長から元和の頃、窮乏のため南殿旧地は人手にわたった。その後も人手を転々とし、その一部は削平され、藪地や屋敷地にされてしまった。光照寺が南殿旧地の北側の現在の位置に戻ってきたのは、近世も終わりの頃と考えられる。

2. 現存する南殿の遺構

昭和31年、森蘊氏を中心とした奈良国立文化財研究所遺跡庭園班が、光照寺南側の草地の詳細な実測調査を実施したところ、前掲の「御在世山水御亭図」と極めてよく一致することが判明した。図13-11は奈良国立文化財研究所の実測図の庭園部分を、現在の都市計画図の上に合成したものである。幅約4m、深さ約1.5mの堀が「L」字形に総延長約150mにわたって遺存している。堀の内側には、幅約4m、高い所で高さが約1.5mの土塁がのこっている。築山や園池もよく残り、水を導く遣水の跡もかすかに辿れる。築山の南に

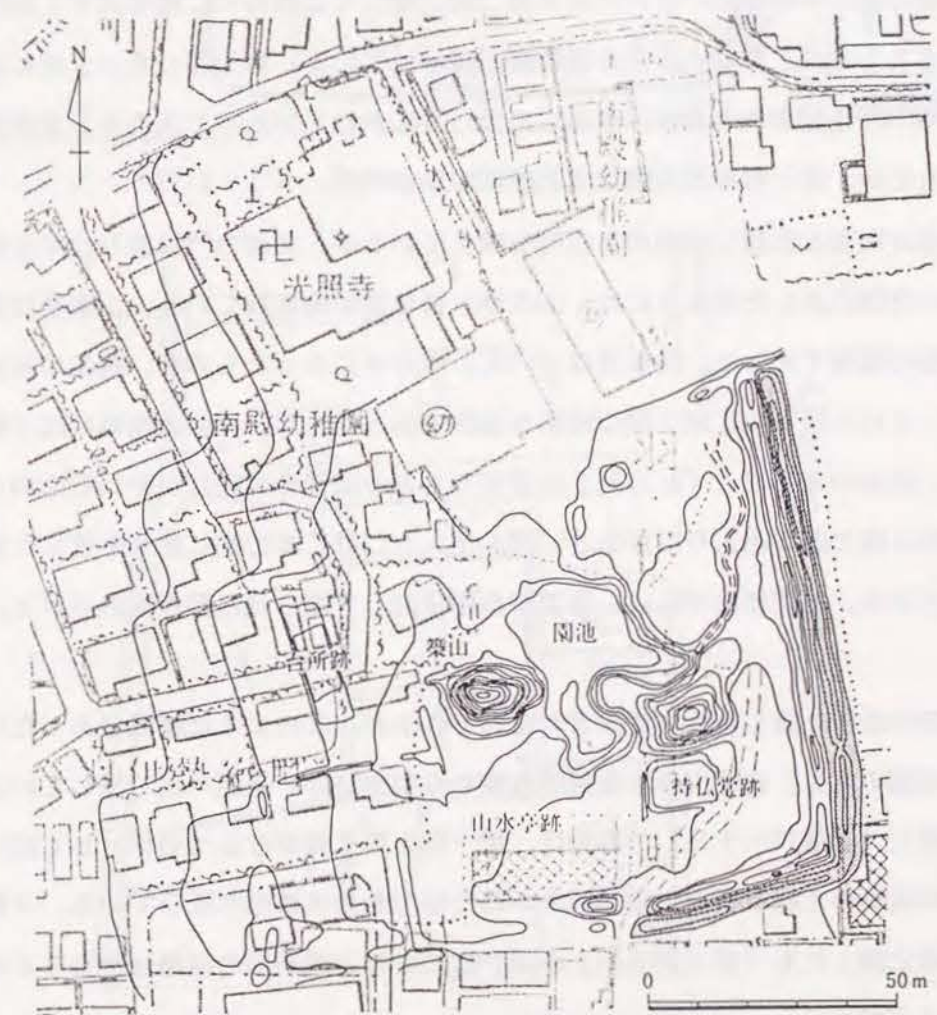


図13-11 南殿の遺構 縮尺1/1500

は持仏堂跡と思われる約8×4mの平坦地がある。昭和31年の実測調査の際には、この他に山水亭跡と台所跡、および第一郭と第二郭を画する土塁も確認されていたが、第二郭内の台所跡の部分は現在すでに宅地化され、また山水亭跡にも学生寮が建てられ、大きく変貌している。

第6節 古図にみる南殿

1. 御在世山水御亭図にみる南殿

光照寺には南殿の様子を記した古図「御在世山水御亭図」が残っている（図版13-12）。この図には、寺内町と同じように、周囲に土居と堀をめぐらし、三つの郭から構成されていた南殿の様子が、東を上にして描かれている。持仏堂・山水亭と園池のある第一郭と、その西側の台所や御指図の井戸のある第二郭、そしてこれらの二郭を大きく囲い込む第三郭からなる。中の二郭は土居の外側に堀が描かれている。第三郭の東の土居には、「水ヨケノ土手」と注記されており、音羽川の受け堤もかねていたのであろう。北東からの水をきらったのか、第三郭の出入口は南と西にしかない。

第一郭は南面と北面に屋根のある門を構えているが、北面の門は塗りつぶされている。第1郭の庭園に面した南よりには、山水亭と持仏堂が配されている。山水亭は隠居した蓮如の常居の場所であった。持仏堂は寺内町の御本寺にあったものを、蓮如の死後に移したもので、こけら葺きの二間三間の簡素な建物であった。第一郭の北東隅には「順光寺跡」とある。蓮如の末子で、「私心記」の著者でもある順興寺実従にかかわるものと思われる。

第二郭は南と西に出入り口がある。西の出入り口は二本の柱に横木を渡しただけの簡素なものである。第二郭の中には、蓮如が自ら指図して掘らせた御指図の井戸と、台所がある。

第三郭は折邪を施した土居で囲まれた郭であるが、どのような施設があったかは不明である。庭園の水は、音羽川の水を構の北東から引き込み、北西へ流し出している。「山科近傍図」（図版13-13）の南殿は、第一郭と第二郭がひとつの郭として描かれている。第三郭の北側の土居は音羽川の堤防をかねた形でそのまま西へ延びている。「野村本願寺古御屋敷之図」にも「昔ノ音羽川」が描かれており、音羽川の流路はかなり不安定であったと考えられる。

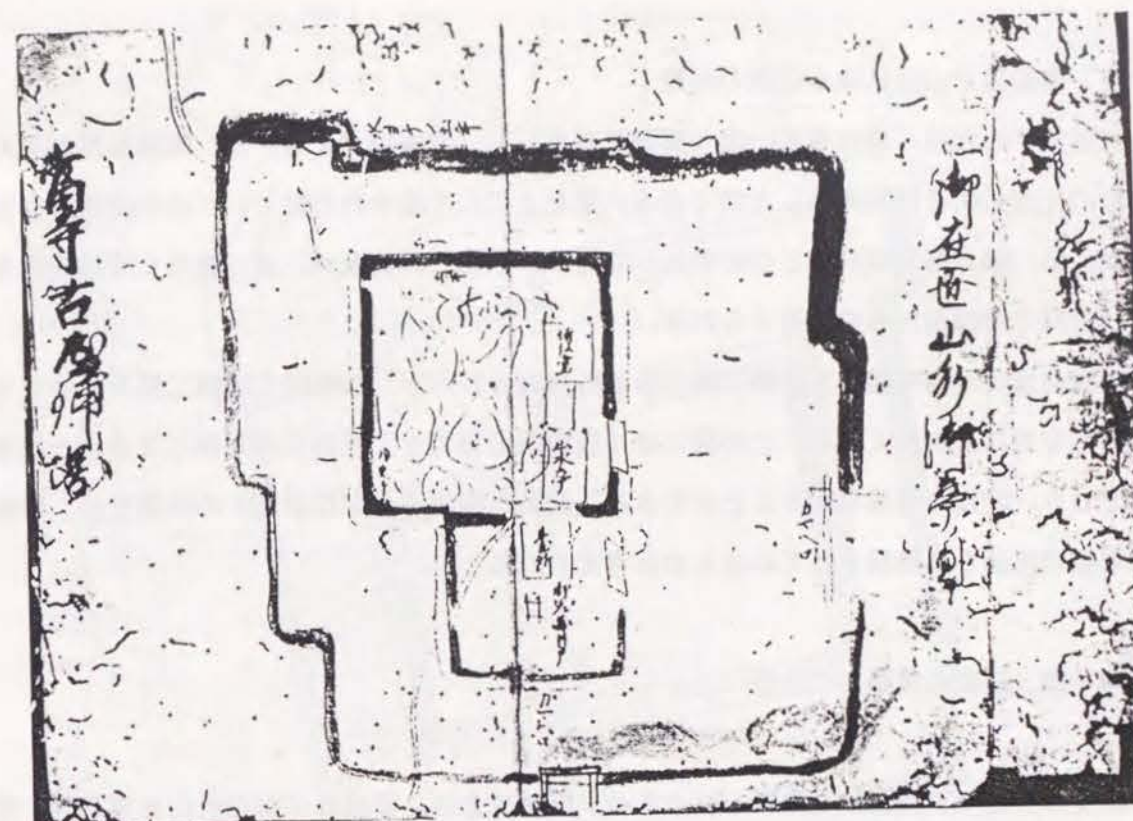


図13-12 御在世山水御亭図（光照寺所蔵）

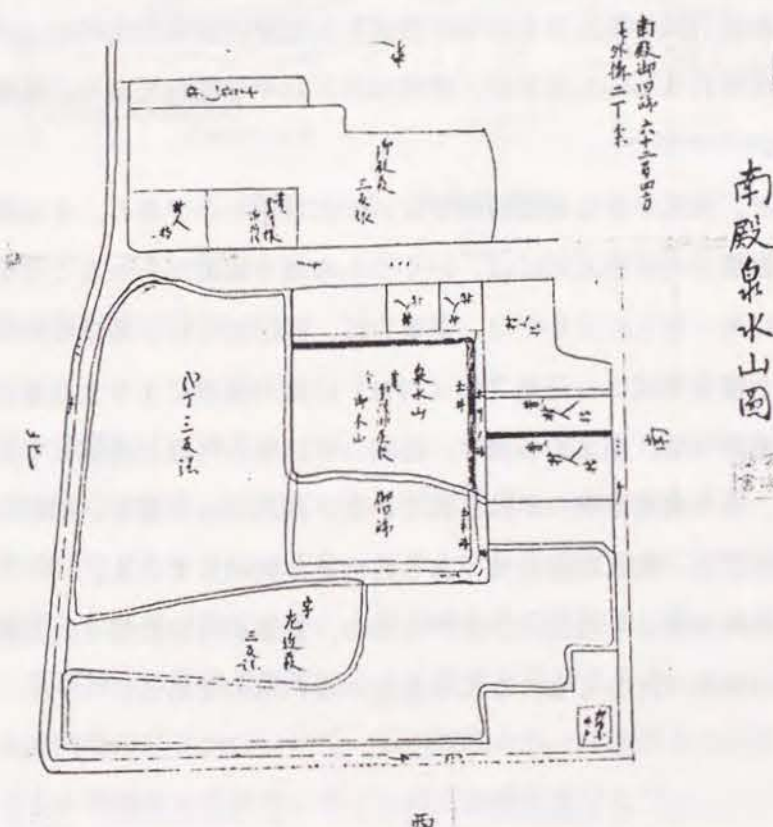


図13-13 南殿泉水山図（大谷大学所蔵）

2. 南殿泉水山図にみる近世の南殿

大谷大学所蔵の「南殿泉水山図（粟津家文書）」（図版13-13）は、南殿旧地とその周辺の土地の所有状況を示した図である。東を上にして描かれた図で、「山科近傍図」と同様に第一郭と第二郭がひとつの郭として描かれ、第三郭はない。第三郭の土居はかなり早い段階で消滅したものと考えられる。

「御在世山水御亭図」では第二郭にある御指図の井戸が、この図では第二郭からかなり離れた位置に描かれている。この図には「南殿御旧跡六十二間四方并外構二丁余」と記されており、南殿の規模を知ることができる。旧跡の西側の「字左近藪」の地割りは、新興住宅地の町割りに踏襲されているものと考えられる。

第7節 南殿の縄張りの復原

以上の古図や実測図から復原を試みたのが図4である。復原は「御在世山水御亭図」を中心に、実測図や「南殿泉水山図」の「六十二間四方并外構二丁余」を手掛かりとして行なった。現在、南殿旧地の所在する音羽伊勢宿町の西隣の音羽乙出町に、「蓮如上人御指図の井戸」と伝えられるものがあるが、南殿旧地とはやや離れており、復原にあたっては考慮していない。

復原図をみると、南殿が単なる隠居所でないことは明らかである。その縄張りは、立派な城である。中世後半の京都近郊には、いくつかの城や城館があったことが知られている。そのうち平坦地にあったものとしては、勝竜寺城、開田城などがあげられる。西岡地方の重要拠点であった勝竜寺城は、元亀2年（1571）に細川藤孝により大改修をうけているが、主郭の規模は東西約70間、南北約40間で、西南に半円形の外郭が附属していた。開田城は発掘調査により、その規模が明らかにされている。幅約10mの堀と、幅約5mの土居を巡らした東西が80m以上、南北80mの城であったことが判明している。

南殿は山科寺内町の構より規模は小さいものの、折邪が巧みに配された縄張りで、この時期の京都近郊の城館に比しても、なんら遜色のないものである。

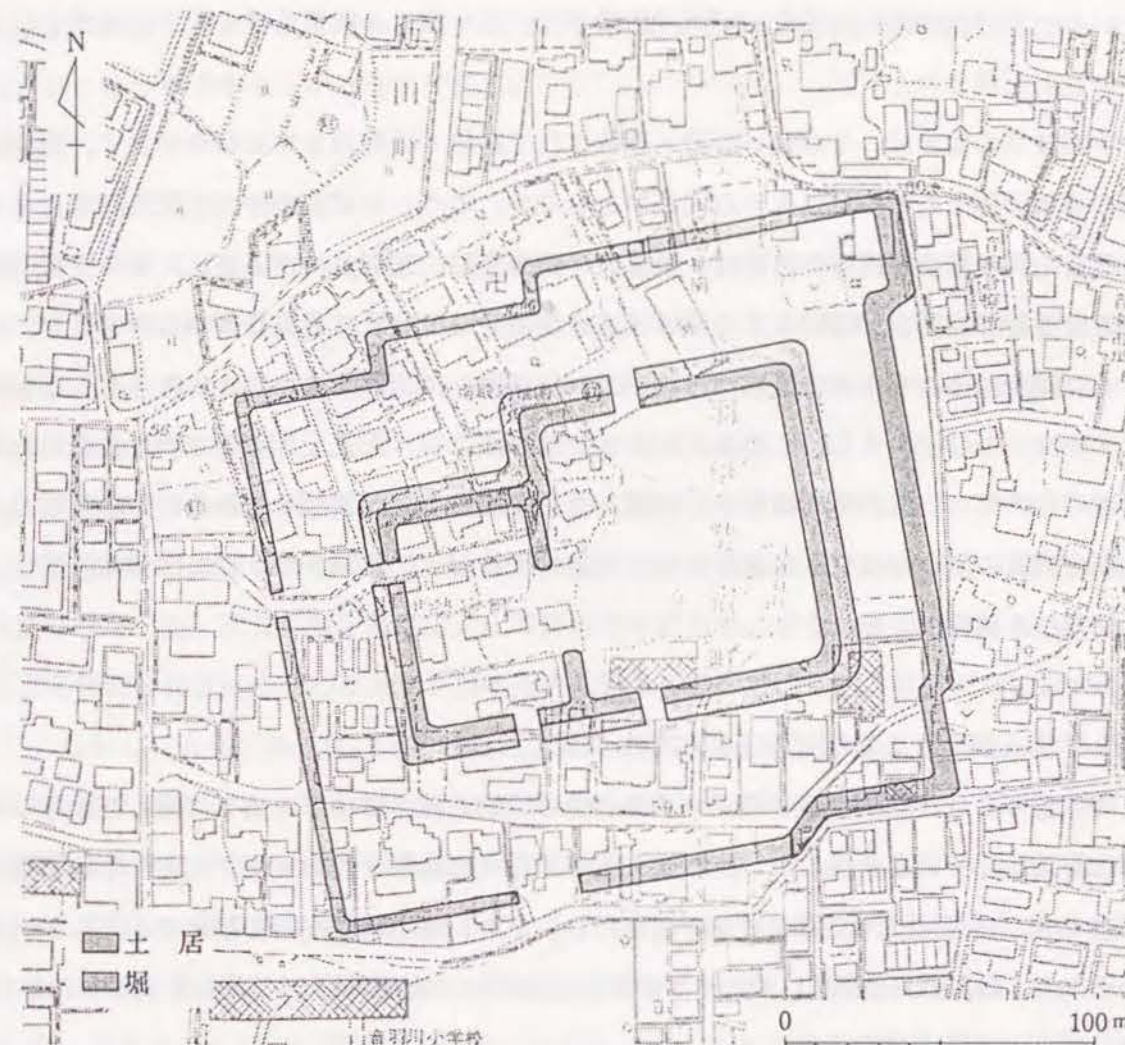


図13-14 南殿復原図

第8節 本願寺退転後の山科

1. 中世城郭の縄張りについて

山科本願寺寺内町の復原を、2次にわたる発掘調査や、現存する土塁・堀の実測調査、近世の古図、地籍図などをもとにおこなってきた^{*5}。寺内町の中には門徒の居住地区もあり、一般的な城郭とは性格が異なるが、山科盆地中央の平坦地に堀と土塁を巡らし環濠城塞化した姿は、築城技術の発達過程を知る上で貴重な資料である。

この復原した寺内町のプランについて、前川要氏から、「慶長あるいは元和年間を遡るものではないことが明確化してきている」とのご指摘を受けた^{*6}。

また、中井均氏も復原したプランを、「明らかに軍学で言う「輪郭式」あるいは「回字式」

といわれる近世城郭の縄張り」で、「縄張り、立地が実に1世紀も速く近世的要素を含んでいた」と評された^{*7}。

中世後半の城郭は、その後も改造・補修されて継続・再利用される場合が多く、築造技術の発展過程をたどるには大きな困難がともなう。こうした状況の中で、天文元年に放棄された山科本願寺寺内町の遺構は、輪郭式の縄張りや、横矢をかけるために堀・土塁を屈曲させる折邪(おりひずみ)などの築城技法の初現をたどる上で貴重な資料と考えていた。とくに横矢を生かすための折邪は、「中世から近世への城郭発達におけるもっとも重要なメルクマール」と考えられていることから^{*8}、本稿では、天文元年の焼き討ち以降の山科本願寺寺内町の旧地の所有関係や、織豊・徳川政権の本願寺対策や城わりについて言及し、山科寺内町の構えが改修、再利用された可能性を検討し、そのプランのもつ築城技術史上の資料性を再検討したい。

2. 法華衆徒による寺内町旧地の占有

天文元年8月24日に、細川晴元や法華宗徒らの焼き打ちにより、烏有に帰した山科寺内町の跡地は、その4日後には、山城国下五郡の郡代高畠与十郎の支配下におくとの通達がとどく^{*9}。9月には「山科本願寺の城をわる」ため、細川晴元配下の柳本衆がおしかけている^{*10}。『経厚法印日記』天文元年10月19日条には、室町幕府から東山十ヶ郷中にあてた16日付けの奉行人奉書がある。

山科本願寺買得地所之事、被押置訖、早令存知之、可拘置之由、

所被仰出之状如件、

とあることから、同年10月16日には、山科寺内町旧地とその付近の買得地は本願寺の手をはなれ、法華宗徒山村正次の支配下におかれた^{*11}。同年11月、山科に家領を持つ山科言継は朝廷より構の堀をいそぎ破却するよう命じられている^{*12}。しかし、摂津石山本願寺に拠点を移し、依然大きな勢力を持ち続けた一向一揆の対応におわれ、「城をわる」動きはあまり大規模なものとはならず、破壊されたのはその一部にとどまったようである。天文3年には法華衆徒が山科七郷をはじめ宇治十一ヶ郷、東山十郷の一円支配を申請したらしいが^{*13}、山科七郷郷民が禁裏御門警固役を担っていることを理由に法華宗徒の代官請けは拒否されている^{*14}。法華一揆が勢いづき諸要求をつのらせる状況下で、山科寺内町の旧地の再利用の動きがあったとは考えにくい。

なお、山科寺内町旧地返還以前の天文5年に、証如上人が山科において普請を申しつけ、

立柱をおこなったとの記事があるが^{*15}、法華一揆の影響下にあった寺内町旧地において普請をおこなったのかどうかは不明である。

3. 寺内町旧地の放棄

天文5年7月、法華宗の隆盛に危機感を抱いた山門や武家勢力が攻撃をしかけ、洛中法華二十一カ本山が炎上し、法華宗は京都から払拭された。この直後の8月には、將軍義晴が証如上人を赦免し^{*16}、9月には、山科の寺内町旧地が再び本願寺のもとに返された^{*17}。このような旧地の返還にともない、「山科番衆」や「山科在京衆」^{*18}の名があらわれてくる。尾張聖徳寺から上洛して番衆を勤めたものもいたようである^{*19}。

ところが、証如はいつの頃からか、山科の地に還住する意欲を失い、寺内町旧地の地子を滞らせていた。天文6年7月には、山科野村寺中には執心がないと申し放ったものの、海老名将監の進言によりとりあえず御本寺や八町まちの旧地の地子3貫文だけはおさめた^{*20}。しかし、天文7年には、「山科野村之屋敷は既不可令還住之由申上候間、草之一本も不引之候^{*21}」と、まったく山科還住の意志のないことを重ねて明らかにし、天文10年には「野村事再興なき上ハ、地子銭免許の御下知事申し上げ候」と山科本願寺の再興の意志はないと明言し、地子銭の免許まで求めている^{*22}。こうして本願寺が山科還住の意志を無くしたまま、天文17年には、山科七郷一円は公方御料所となり、幕府の支配するところとなる^{*23}。天正14年(1586)、秀吉は本願寺にわずか二十石であったが山科寺内町の旧領の一部を、寄進している^{*24}。この旧領は本願寺分として、家康、秀忠^{*25}などからも安堵され、幕末まで維持し続けられている。しかし、本願寺の本山は、摂津石山、紀伊鷺森、摂津天満を経て、天正19年には六条堀川の現在地に、本願寺の御堂が整えられ、山科寺内町の旧地は、芝地として荒れたまま放置された。

4. 公方御料所と禁裏御料所

天文17年に公方御料所となり、幕府の支配するところとなった山科七郷一円は、天正12年に以前のように、山科郷一円が禁裏御料となるとの噂が流れる^{*26}。このときの検地では三千石とある。天正18年には三千五百石が秀吉の直轄領となり^{*27}、慶長年間には、六千石の禁裏御料となるが、実際に禁裏御料となった時期は不明である^{*28}。そして山科郷一円はほぼ禁裏御料のまま近代を迎えるのである。山科郷一円が公方御料所、禁裏御料所であった中で、山科寺内町の旧地が城として再利用されようとしたとは考えにくい。今谷明氏

は、京郊の中世城郭について述べた中で、「宇治郡にほとんど城郭が現れないのは、当地が禁裏御料山科七郷や醍醐三宝院など、荘園領主権力が最後まで相対的に強かった事情との関連が考えられる。」としている^{*29}。

5. 織豊政権の本願寺対策と城わり

本願寺が山科の地を放棄し、公方御料所、禁裏御料所となり、寺内町の旧地を再利用する余地がないことを述べてきたが、つぎに織豊政権のとった本願寺に対する基本姿勢や、城わりの政策について考察する。

上洛をはたした織田信長と本願寺・一向一揆との対決は、石山本願寺合戦でその頂点を迎える。この合戦は、元亀元年から3度の和睦をはさみ、11年におよんだ。信長の基本政策は石山本願寺に与えられていた「大坂並」の寺内町特権を否定し、「宗門相統」のみを認めることであった^{*30}。豊臣秀吉もこうした政策を踏襲し、大坂天満に本山を移したときも、「寺内ニ如前々二者、不被仰付」と以前のような特権を認めていない^{*31}。こうした状況下で、本願寺は本山を六条堀川に定めており、山科寺内町の旧地にかかわる余裕はなかったと考えられる。

以上のような山科七郷における個別の状況のほか、当時の社会的状況についても検討する。永禄11年の上洛以後、信長が畿内およびその周辺で城わりをすすめたことが報告されている^{*32}。安土築城後の天正4年以降は、一向衆との対立の中で破城政策が進められ、和泉一國破城令(天正5年)、大和での破城(天正4～6年)、天正8年8月に石山本願寺を落城後の摂津、河内の破城が命ぜられ^{*33}、最終的には「畿内ニ有之諸城、大略令破却候」^{*34}という状況となった。山城も同じ様な状況であったと考えられている^{*35}。秀吉も破城政策をすすめ、要衝の城以外は破却するというのが原則であった。京の内外で拠点として、旧二条城(永禄12年着工、天正10年焼失)、聚楽第(天正14年着工、文禄4年破却)、御土居(天正19年)、伏見城(文禄3年城郭化、元和9年廃城)、二条城(慶長7年着工)の普請をおこない、また、不要になった城郭の破却をすすめた時期に、京郊の山科で本願寺の遺構に手を加えていたとは考えにくい。関ヶ原合戦に勝利をおさめた家康の全国支配の拠点となったのも、伏見城と二条城である。こうした体制は、元和の一国一城令を待つまでもなく、織豊期には完成しており、慶長、元和年間以降に山科寺内町の旧地に普請がおこなわれたとは考えにくい。

6. 東西両本願寺の確執

以上のような情勢のほか、山科寺内町旧地における普請、開墾等の動きを妨げたのは東西両本願寺および農民の3者の確執と、それを巧みに利用して両本願寺を牽制した幕府の対応であった。

慶長年間に至り、准如が山科寺内町旧地に坊舎を建てようとしたところ、旧地を芝地として利用していた農民がこれに反対し、坊舎の再建はならなかった。元和年間の末には寺内町の旧地をめぐり、東西両本願寺の相論がおこった。東本願寺から「天文以降無所属ノ地ナリ」として、寺内町旧地の内「古屋敷」の地を幕府に請求した。このため寺内町旧地は論地として、両本願寺が互いに牽制しあう所となった^{*36}。この訴訟に先立ち、西本願寺は慶安3年には家臣に領地の調査を命じ、寛文5年には山科郷総役頭比留田喜兵衛らと絵図を製作している。この種の図が何枚かあったようである。「山科村古図」(京都大学文学部国史研究室所蔵)には、寺内町旧地跡に「論地」の記述があり、この前後に描かれたものであろう。こうした確執は享保17年に、東西両本願寺がともに寺内町旧地の外側に坊舎を建てることで解決したが、このような農民および東西両本願寺の確執が幸いし、寺内町の遺構は破壊を受けることなく、芝地のままで放置された。

この相論の中で多数の文書が交わされるが、その中で寺内町の旧地は「本願寺古屋敷」(慶安3年)^{*37}、「御門跡様古屋敷」(宝暦2年)^{*38}、「古屋敷、或ハ寺内芝」(明治2年)^{*39}と称されており、この地一帯が本願寺寺内町の遺跡であるとの認識が継承されており、本願寺以外の勢力が寺内町旧地において城構えの普請をおこなった可能性は無いと考えられる。

山科本願寺の遺構に手を加え慶長・元和以降に城郭としての体裁を整えたとしても、本願寺側はすでに六条堀川に本山を構え、また、幕府側が禁裏御料となった山科に、しかも二条城、伏見城と言った拠点のある京都の近傍に、新たな拠点をつくるとは考えられず、文献も管見の限りでは見あたらない。

慶長年間に至り、准如が山科寺内町旧地に坊舎を建てようとしたところ、旧地を芝地として利用していた農民がこれに反対し、坊舎の再建はならなかった。慶安年間には寺内町の旧地をめぐり、東西両本願寺の相論がおこった。このため寺内町旧地は論地として、両本願寺が互いに牽制しあう所となった。享保年間にいたり、東西両本願寺がともに寺内町旧地の外側に坊舎を建てることで解決したが、このような農民および東西両本願寺の確執が幸いし、寺内町の遺構は破壊を受けることなく放置された。こうした状況は、後述する

近世の絵図や近代の地図に、克明に描かれた土居や堀の形態より明らかである。

以上のような経過から、寺内町の遺構は天文年間の縄張りがそのまま残ったものと考えられる。発掘調査で山科寺内町の存在した時期以降の遺物がほとんど出土しなかったことも、寺内町の改修などが行なわれなかったことを裏付ける。平坦地に築かれた中世の城や館の多くが、後世の改修や開墾により、その当時の縄張りを失っている中で、山科寺内町の遺構や古図は縄張りの発達過程を知る上で貴重な資料と言える。

今谷明氏は、京郊の中世城郭について、「15世紀に登場する城郭の多くは、南部の久世・乙訓両郡に集中しており、ついで16世紀前葉の建造にかかる城砦は乙訓郡北部から葛野郡に多く、小泉城以下の洛中洛南の諸城と愛宕郡の諸城は最も遅れ、16世紀半ばの天文20年前後に登場し、または改築されている。したがってこの地域では平城の築造が山城に先行して現れるという、他地域とは逆の立地変化をみせている。なお宇治郡にほとんど城郭が現れないのは、当地が禁裏御料山科七郷や醍醐三宝院など、荘園領主権力が最後まで相対的に強かった事情との関連が考えられる。」としている〔今谷80, P. 149〕。

第9節 山科寺内町をとりまく歴史的環境

1. 山科寺内町と上人御塚

山科には、寺内町にゆかりのある上人の墓所がある。山科寺内町の時代にこの地で示寂した蓮如、実如、円如と、退転後にあえて山科の地に葬られた証如の墓所である。いずれの墓所にも開発の波が押しよせているが、山科の歴史的環境を構成する要素であり、保全をすすめていく上で欠くことのできないものである。以下では各上人の墓所をとりまく現状を中心に述べてみたい(図13-15)。

〔蓮如の墓所〕 明応8年(1499)2月、死期を悟った蓮如は、急遽摂津石山より山科南殿に移り、3月25日に示寂した。翌26日に荼毘にふされ、その荼毘所の跡に墓所が構えられた。この墓所は山科西野大手先町にある。その地名が示す様に、寺内町の外寺内の大手先=正面に位置している。山科寺内町の建設に全霊をかたむけた蓮如にふさわしい場所である。天文元年の本願寺の山科退転後、蓮如の墓の管理は証如の命により、西宗寺の住職が代々行ってきた。

墓の主体部は丘状に盛り上がり、その上には樹木が繁っている。周囲には石柵が八角形にめぐらされている。その外側に「L」字形の石垣と、さらに石垣を取り囲む築地塀があ

る。ところが、大正15年の『京都府史蹟勝地調査報告第七』の写真には築地塀がなく、灯笼も現在とは違う位置にある。石垣の中にあった拝殿も今はない。昭和にはいって、改修があったようである。内寺内の東北隅の土居(図13-2-A地点)を脊に、鬱蒼とした森に囲まれた蓮如の墓所は、周囲の喧噪とは別の世界にあり、山科寺内町の建設者を偲ぶのに相応しい場所である。

〔実如・証如の墓所〕 本願寺第9世実如と第10世証如の墓所は、西本願寺山科別院から約500m、まっすぐ東南にのびる参道のつきあたりにある。この参道は西本願寺の寺地であったため、参道にそって字境界が細長く突き出す結果となった。現在でも西本願寺の東野方下り町の字境界が、南東の東野井上町に幅10m、長さ230mにわたって突き出している。しかし、この参道も国道バイパスと新幹線の開通により寸断されてその機能を失い、字境界にそのなごりを残すだけとなった。

実如と証如の墓は、同じ敷地の中に隣接している。北が実如の墓で、南のひとまわり大きいのが証如の墓である。証如が示寂したのは天文23年(1554)であり、本願寺の本所が石山に移って20年にもなっていたが、あえて山科がその墓所選ばれている。いずれの墓

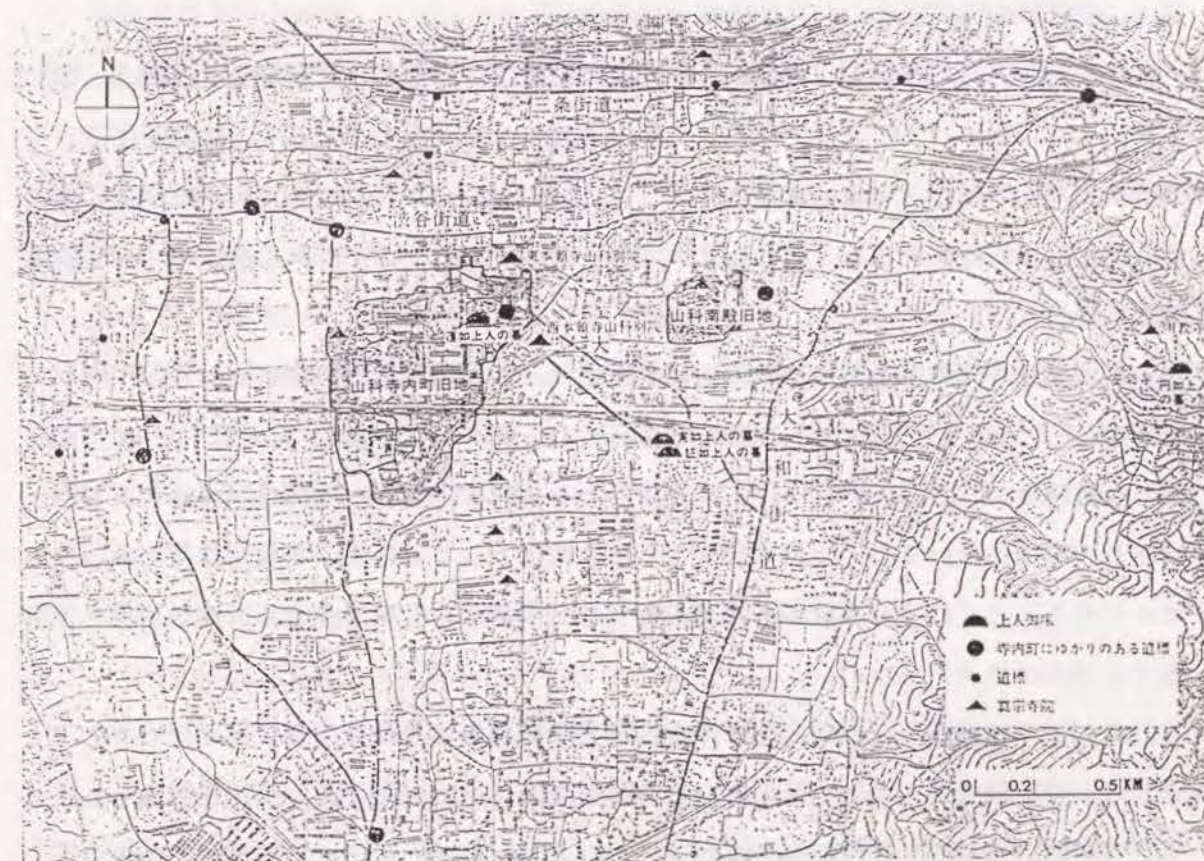


図13-15 上人御塚と道しるべ(〔西川・土屋・浜崎ほか83〕所収)

も石垣と石柵で六角形に囲われている。この墓も本願寺の山科退転後は西宗寺の管理下にあったが、いつのまにか村民の所有する所となった。安永年間に土橋某が西本願寺にこの地を寄贈したことにより、旧状に復し事なきをえた。天明元年(1781)には東野村の真光寺が仲介となって周囲の土地を購入し、墓所として整備し、今の形となったようである。現在両上人の墓所の周囲には民家がすきまなく並び、参道も寸断された今となつては、両上人の遺徳を偲ぶのも一苦勞である。

〔円如の墓所〕 実如の第3子で、証如の父である円如は、御文章を編纂した人として知られている。この円如の墓は、山科盆地の東端、音羽山の山麓にある。この墓所のおかれている状況も厳しい。民家がすぐそばまでせまり、参拝も民家の横の路地をぬけて行なうありさまである。

第10節 小 結

以上、山科寺内町の構と南殿について、その建設から退転、そして遺構の現状について述べ、発掘調査の成果と合わせて復原を試みた。

現存する寺内町の遺構や、発掘調査の成果、古絵図などをもとに実施した復原は、図13-9、10にかかげたとおりである。二重、三重に土塁と堀をめぐらせ、土塁を屈曲させた折邪や、入り口付近の洗練された縄張りは、城郭研究家から「縄張り、立地が実に1世紀も速く近世的要素を含んでいた」と評されたほどであり、洛中洛外の構の中でも圧倒的な迫力をもっていた。

山科本願寺寺内町の退転後の跡地の領有関係は、基本的には、法華衆徒の支配下にあった時期(天文元年～天文5年)、本願寺に返還された時期(天文5年～天文17年)、公方御料所となる時期(天文17年～天正頃)、禁裏御料となる時期(天正頃～幕末)にわけられるが、いずれの時期においても、山科本願寺の旧跡を城郭として再構築する状況にはなかったと考えられる。とくに、公方御料、禁裏御料となった時期に山科寺内町の旧地に城郭を再構築する理由が見あたらない。

以上のような経過から、寺内町の遺構は天文年間の縄張りがそのまま残ったものと考えられる。発掘調査で山科寺内町の存在した時期以降の遺物がほとんど出土しなかったことも、寺内町の改修などが行なわれなかったことを裏付ける。平坦地に築かれた中世の城や館の多くが、後世の改修や開墾により、その当時の縄張りを失っている中で、山科寺内町

の遺構や古図は縄張りの発達過程を知る上で貴重な資料と言える。

*1 岡田保良・浜崎一志 1985年「山科寺内町の遺跡調査とその復原」『国立歴史民俗博物館研究報告』第8集

*2 久世康博「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘立会調査概要』

*3 文明14年1月 四壁の内に排水用の小堀を南北に掘る。『帖外御文章』52～60

*4 「天文五年丙申九月下旬迄二當所御隠居地山水亭ノ舊地ハ證如上人ヨリ拝領、泉水山光稱寺ト寺號頂キ建立セリ」『当寺跡覚』(光照寺蔵)

*5 岡田保良・浜崎一志 1985年「山科寺内町の遺跡調査とその復原」『国立歴史民俗博物館研究報告』第8集

*6 前川要 1991年『都市考古学の研究 - 中世から近世への展開 -』pp. 118-119

*7 中井均 1987年「山科本願寺」『図説中世城郭事典』二

*8 村田修三「横矢」『日本城郭大系』別巻Ⅱ

*9 室町幕府奉行人奉書。なお、この間の状況は、今谷明『天文法華の乱』に詳しい。

*10 『経厚法印日記』天文元年9月3日の条

*11 『経厚法印日記』天文元年10月19日の条

*12 『言継卿記』天文元年11月12日の条に、「かまえのほりの事も、まへの御うけ申候ごとく、一はうのふんなりとも、いそきいそきうめ候へは、まつまつ無事にもなり候」とある。構の堀の一方の分だけでも急いで破却するようというのであるが、長沼賢海は、幕府と山科言継の関係から、この「かまえ」を山科寺内町の構のこととしている(「蓮如上人に就いて(第4回)」『史学雑誌』第24編第7号)。

*13 『言継卿記』天文3年3月15日条

*14 『言継卿記』天文3年3月18日条

*15 『証如上人日記』天文5年1月4日、1月9日、3月30日の条

*16 『天文日記』天文5年8月22・23日の条

*17 「山科郷内并洛中東山之山林田畠等悉被返付」『天文日記』天文5年9月20日の条

*18 「山科番衆」『天文日記』天文5年12月27日の条、「山科在京衆」『天文日記』天文6年1月1日の条、「山科にて長在京之衆」『天文日記』天文6年3月2日の条

*19 『天文日記』天文6年1月19日

- *20 『証如上人日記』天文6年7月12日の条
- *21 『証如上人日記』天文7年11月5日の条
- *22 「野村事、無再興上ハ地子銭免許之御下知事申上候」『証如上人日記』天文10年3月8日の条
- *23 「山科七郷一円公方御料所になさる。寺社本所悉く以て御勘落」『嚴助大僧正記』天文17年7月
- *24 『本願寺文書』天正14年12月10日の条
- *25 元和元年7月27日、元和3年7月21日（『山科別院濫觴並ニ歴世沿革記』）
- *26 『貝塚御座所日記』天正12年10月27日の条
- *27 『吉井家文書』天正18年5月（『史料 京都の歴史 山科区編』所収）
- *28 江戸中期の石高は約6273石である。山城石高8郡村名帳、享保14年 山科区p. 91
- *29 今谷明『言継卿記 公家社会と町衆文化の接点』（『日記・記録による日本歴史叢書 古代・中世編23』）1980年、P. 149
- *30 堀新 1990年「織田権力の寺内町政策」『古文書研究』第33号
- *31 藤木久 1975年「統一政権の成立」『岩波講座日本歴史』9
- *32 松尾良隆「織豊期の「城わり」について」『横田健一先生古希記念『文化史論叢』下』
- *33 『多聞院日記』天正8年8月4日条
- *34 「信長黒印書状」天正8年8月21日条『織田信長文書の研究』889号
- *35 1993年「信長・秀吉権力の城郭政策」『東北学院大学論集 歴史学・地理学』第25号
- *36 『山科別院濫觴並ニ歴世沿革記』（京都大学文学部史学科架蔵影写本を使用），『比留田家文書』慶安3年3月1日
- *37 『比留田家文書』慶安3年3月1日（『史料京都の歴史』第11巻所収）
- *38 『比留田家文書』宝暦2年7月（『史料京都の歴史』第11巻所収）
- *39 『西宗寺文書』明治2年5月（『史料京都の歴史』第11巻所収）
- *40 「実如の御時より、永正はしめつかたより、普請に付て早くさせられ候へハ、人夫も早く帰らぬ様候」『山科御坊事并其時代事』
- *41 村田修三「中世の城館」『講座・日本技術の社会史』第6巻、1984年
- *42 『比留田家文書』慶長17年5月13日

第14章 構の終焉

- 14-1 はじめに
- 14-2 上京の構と下京の構
- 14-3 秀吉のお土居と構の終焉
- 14-4 近世都市京都の展開
- 14-5 小 結

第14章 構の終焉

第1節 はじめに

律令制国家の王城としての平安京が解体した南北朝期あたりに発生した構は、洛中洛外に広まり、応仁の乱の前後にその全盛期を迎える。ここかしこに構が簇生し、やがて「京中三分二構」という状態となる。さらに、洛中の構は天文法華の乱後の自治意識の高まりを背景に、自治、自衛の気風をもち、運命共同体ともいえる町組となる。そして、自らの武装化はもとより、年貢・地子の免除を求め始めるようになる。この間、洛中の構は徐々に融合し、最終的には上京の構と下京のふたつの惣構になる。

こうした動きは信長による焼き討ちと、秀吉による巧みな統制と「お土居」による惣構の構築をもって、終焉を迎える。さらに、二条城を中心とした東西方向に都市軸を回転させ、また、短冊形の町割を採用したことにより、古代以来の平安京は、近世都市京都へと変貌を遂げていった。本章の目的は、構の終焉の過程を通して、中世から近世へと大きく変化する都市空間の変遷の解明にある。

第2節 上京の構と下京の構

簇生していた構がいつの頃から、上京の構や下京の構へと変化していったのであろうか。早稲田大学図書館蔵の『下京中出入之帳』^{*1}は、下京中の住人が織田信長に献上した金銭の出納帳である。元亀4(1573)年6月18日の肩書きをもち、町方から徴収した入銀の覚えである部分と、支出の覚え書きと、その他の3部に別れている。柴辻氏は、下京の町衆が信長に対する顕銀を自主的に決定した点から、その後の統一政権に町組が吸収再編成されていく起点となったと考えている〔柴辻73〕。形態的に構は今しばらく存続するが、応仁・文明の大乱を経て培われてきた町衆の統一政権への屈服と、近世封建制への再編・吸収を物語る。

入銀の部分は、町組から徴収を記した「五クミのより銀日記」と、下京の構の中にある寺院からの徴収分を記した「下京かまへの内寺銀之分」にわかれる。

「五クミのより銀日記」には、「中のくミ」が17町、「西のくミ」が11町、「たつミのくミ」が8町、「三町のくミ」が3町、「うしとらのくミ」が15町の5組54町からなっていたことがわかる。

徴収は各町に銀13枚が割り当てられ、総計703枚が献上されている。支出の覚え書きである「使申銀の日記」には、西の堀の掘り賃や、西四条口かまへの入目とあり、構の掘りや出入口の補強につとめたと考えられる。

この下京の範囲については、『京都旧記録』には、

抑、下京古町と申は、往昔足利尊氏將軍の末流ニ至り、武威次第ニ衰、合戦度々成かゆへに、京都の町人彼方こなたへ離散し、人家まばらに相残り、下京高倉より東ハ一面之川原にて人家もなく、南は五条通今の松原通なり。より下ハ田野川原なり、干し時天正年中に至り豊臣秀吉公の御治世と成て、大坂五奉行之内前田徳善院玄以法印 於因州五万石領之。京都諸司代ニ被仰付、寺社奉行兼帯し給ふ。此時ニ当て相残り有之町々を古町と申也。其後追々建シ町ヲ、新町と言。下京は町数も少く、寺社も町之中ニ入込有之によつて、町家繁昌のため、町中ニある寺社を町外ヘ引分ケ可申旨、秀吉公より所司代徳善院ヘ被仰付。

とあり、度重なる戦乱で京内の人々は離散し、東は高倉、南は松原であったことがわかる。このとき残っていた町を古町と称し、これ以降に興された町を新町と称する。このとき、秀吉は町屋繁盛の妨げとなるという理由で、寺院を町屋から分離するため、移転させたと『京都旧記録』の作者は考えている。

下京の町数と町組については、『京都旧記録』に、

下京下古町と申は、高倉より東ハ川原成ニよつて東洞院通をかきり、南は今の松原通をかきり、是より南ハ野也。北は二条通の南側を限り、此間に五十九町丁数残れり。是を古町といふ。則、方角を分、五組二分る。良組・中組・四条三町組・川西組・巽組とす。此川西と言は、西洞院河也。此、平安城葛野郡之谷川也。柳之水ともなづく。民家多く建川原なり。家々ニ井を堀かゆへに、此川の東西ともに涌も少くなり、要（悪力）水の川と成れり。

とある。下京の古町の範囲を東は東洞院通、南は松原通、北は二条通とし、ここに5組59町あり、良組・中組・四条三町組・川西組・巽組からなっていた。

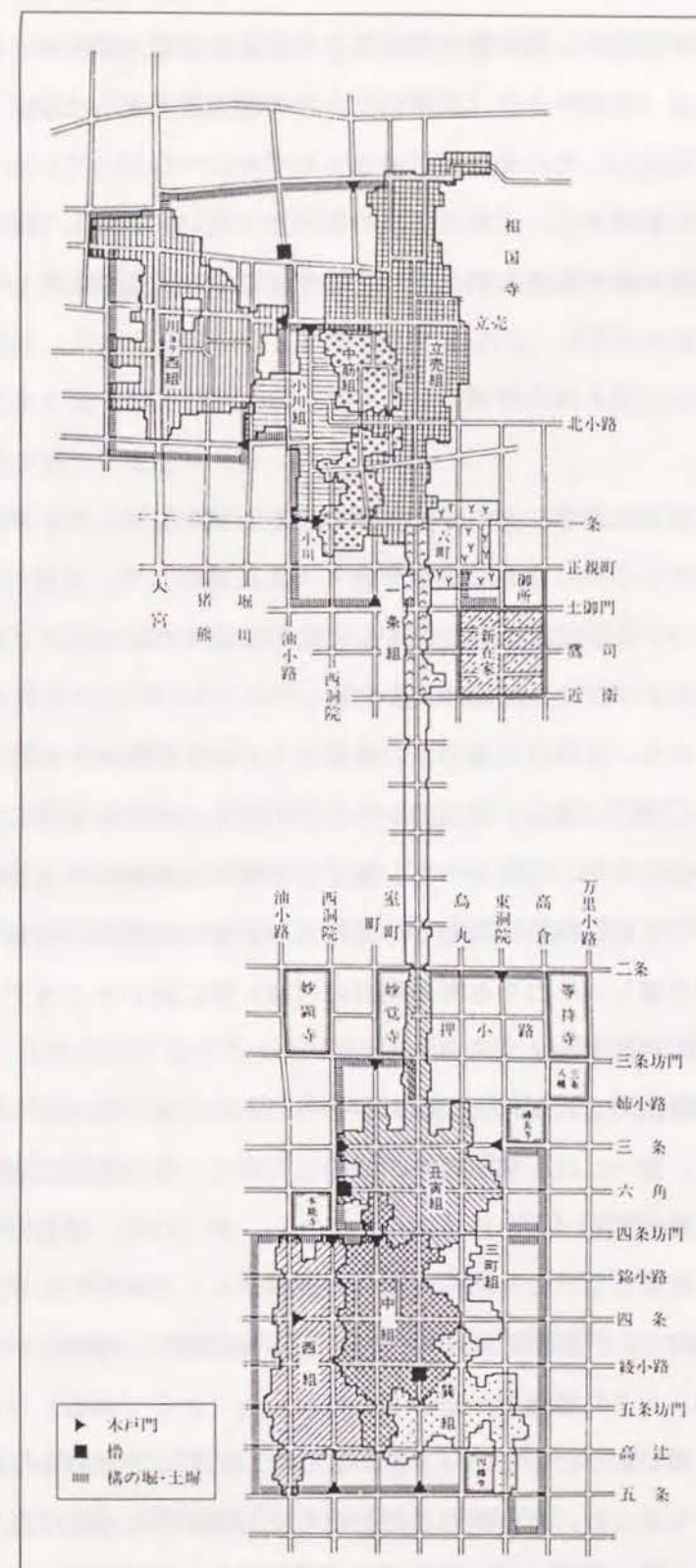


図14-1 戦国期京都都市図（〔高橋83〕所収）

とある。下京の古町の範囲を東は東洞院通、南は松原通、北は二条通とし、ここに5組59町あり、長組・中組・四条三町組・川西組・異組からなっていた。

この時期の京都の復原を、洛中洛外図などをもとにおこなったのが、高橋康夫氏の戦国期京都都市図である(図14-1)〔高橋83〕。この図を見ると、上京、下京の構が、北と南に各々独立して存在し、その間は室町通りでわずかにつながっていたことがわかる。高橋氏は洛中洛外図の観察から、土堀は下京の町同士も互いに隔絶していたこと、すなわち下京は空間的にいくつかの集落に別れていたのではないかと指摘している。

第3節 秀吉のお土居と構の終焉

天下人となった秀吉は洛中において、多数の土木工事を実施した。平安京の条坊地割を踏襲した方1町の町の中央に南北の道路を通す「天正地割」や、多数の寺院を移転させた「寺町」、「寺の内」の新街区の設定、そしてこうしたすべてを包む「御土居」によって、京都は近世を迎える。『フロイス日本史』には、

町には古くから、各地区に諸宗派の僧侶たちの約三百あまりの寺院と僧院があり、すでに関白(秀吉)は以前から彼らの収入の大半を没収していたのであるが、僧侶たちが、〈自分らは〉重圧と労苦から免除されたと吹聴することがないようにと、関白は町の中心部にあった彼らの寺院・屋敷・僧院をことごとく取り壊し、それらを町の周囲の(城)壁に近いところで、すべて順序よく新たに再建するように命令した。

通事たちの談話によれば、〈関白〉がそうしたのには、次のような二つの目的があった。第一には、都で戦争が勃発した時に、敵は最初に僧侶やその寺院と僧院に遭遇する(ように仕向けたこと)。第二には、僧侶たちはその門徒らと、〈居住している〉市内の街(の関係から)あまりにも緊密であり密接しているので、〈関白〉はその親密さを不快に思い、僧侶らの放埒(な日常生活)は、人々に悪影響があらうと見なした(からである)(1)。関白は、それらを改善しようとして、〈上記のような〉若干のささやかな試練を彼らに加えたのであった。だが哀れな僧侶たちは、あまりにも大仕掛けなその仕打ちを拒むことができず、多数の者は寺院や僧院を放棄して、別の生活手段を求めることを望んだ。だが、彼らにはそうすることが許されなかったばかり

りか、寺院を再建した後には、自らの負担によって、それらを要請されたとおりに飾り付けることを厳しく命ぜられた。

とある。フロイスらは寺町に移転を強制した理由を、戦時には寺院を盾に京都を守ろうとしたこと、僧侶が俗世の垢にまみれないようにしたと考えている。

1. 秀吉のお土居

天正19(1591)年、秀吉の京都改造計画の最大のものであるお土居の建設が始まった。平安京域を囲む土堀は、平安京遷都御はじめてのことである。『京都町家旧事記』には、

鴨川の西北より堤を築て皇城の構と成

とあり、京都全体の構と考えている。

このお土居築造に先立って方々から人夫が徴用された。『兼見卿記』の天正19年1月18日の条には、

毛利兵・橘・片桐主膳正・服部土佐守折紙使者三人来りて云く。山城の内堤の普請、東郷罷り出づべきの由申し来り訖んぬ。彼の使者に対面し盃を進め、当郷の義、理り申し訖んぬ。

とある。お土居に着工したのは、閏正月からであり、それに先立って人夫が集められていたことを示す。人夫は京の内外の寺社などから、徴用しているが、一部の社寺がお土居築造人夫提出の免除をうけている。『上賀茂神社文書』の天正19年閏1月11日の条には、

当所の儀、社家たるに依て先々寄宿御免除の上は、今度河並御普請衆も寄宿あるべからず候。押て何かと申し候事候わば、急度承るべく候なり。

(天正十九年)

民部卿法印

閏正月十一日

玄以(花押)

賀茂惣中

とあり、堤普請の人足達が上賀茂社に対して、寄宿などで迷惑をかけないことを保障している。

天正19年の2月も終わりごろには、既に部分的にお土居ができ始め、公家達が出来上ったお土居を見物している。『時慶卿記』の2月23日の条には、

大炊・五条・坊城同心ニテ高野奥崩シト云所へ行、枳穀(穀)ヲ堀

(堀)取候。(中略)糺森ニテ又酒アリ。及-日暮-帰宅。京廻ノ堤ヲ

始而見る。

とあり、公家たちがこの日はじめてお土居をみたことがわかる。

できあがったお土居の上には竹木が植えられていた。『三藐院記』の天正19年3月7日の条には、

天正十九年壬（閏）正月ヨリ、洛外二堀ヲホラセラル。竹ヲウヘラル、事モ一時也。二月ニ過半成就也。十ノ口アリト也。此事何タル興行ソト云ニ、悪徒出走ノ時ハヤ鐘ヲツカセ、ソレヲ相（合）図二十門ヲタテ、其内ヲ被（捲）為ト也。

とある。閏正月に始まったお土居の工事が、2月には半分以上ができあがっていたこと、京外への出入口は10ヶ所あり、有事の際にはこれを封鎖する予定であった。

『鹿苑日録』の天正19年3月12日のじょうには、

森民部太輔・同兵橘兩人より使者あり。折紙、今度洛下四方新堤の内、竹木の奉行兩員之を領すと云々。即ち、殿下より仰せ下さるるなり。自今以後、何方より申す族、之在らば、兩人奉行え其の謂れ申すべき由なりと。近来河原長右衛門尉、竹木奉行たると雖も、今日交代、即ち、此の旨洛中上戸を以て相触れるなり。寺中竹木一切堅く伐採の事停止の由なり。

とあり、お土居のために竹木の伐採が一切禁止されている。

天正19年、宣教師ルイス・フロイスは、秀吉にの命により、構築された京廻りのお土居をみて、

〈関白〉は、都の町の周囲をことごとく堡壘と濠を有する高い城壁で取り囲み、町の装飾となり美観を添えしめるために、その上に繁茂した樹木を植えさせた。この〈城〉壁の周囲は、〈日本人〉の里程で六里あるが、それは我らの里程にも該当するであろう(1)。

と、秀吉が景観に配慮を払っていたと考えている。

御土居完成後の洛中を知る好資料として、宮内庁書陵部蔵の『寛永十四年洛中絵図』と、京都大学蔵の『寛永後万治前 洛中絵図』がある。後者はその記載内容から寛永19(1642)年前後のものと考えられているが〔川上79〕、この両者に内容的な差はほとんどない。幕府京都御大工頭の中井家に代々伝わっていた図で、実測・作成にも中井家があたったものである。足利健亮氏は、京都大学蔵の『寛永後万治前 洛中絵図』をもとに、近世初期の京都の復原を試みている（図14-2）。洛中が御土居という惣構で囲郭され、族生していた構

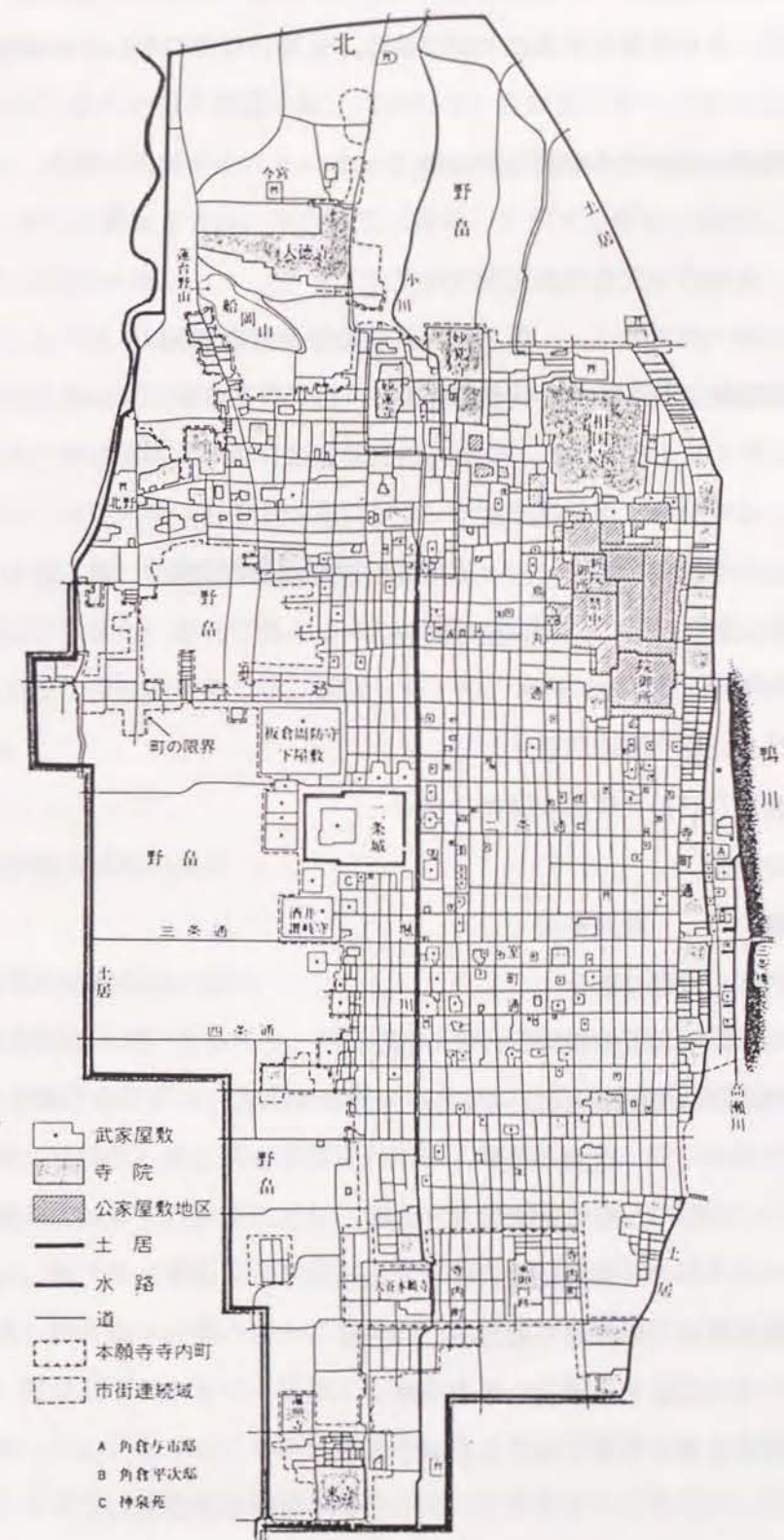


図14-2 近世初期の京都市下町（〔足利84〕所収）

が併呑された有り様がよくわかる。

さらに、お土居の完成から約1世紀を経てたあとにも、お土居の実測図が作られ、詳細な数値をもって、その規模を知ることができる。元禄15(1702)年11月の肩書きをもつ『御土居絵図』には、

惣曲輪御土居岸内外両側間数目録

内側

一、垣際長、合壹万千貳百貳拾三間貳尺貳寸

外千三拾六間九寸 所々道川并明地寺屋舗町屋共

貳拾五間五尺 大聖寺裏分

外側

一、垣際長、合壹万千三百六拾間貳寸

外千五拾七間壹尺四寸 所々道川并明地寺屋舗町屋共

貳拾五間五尺 大聖寺裏分

内外垣際長平均

壹万千貳百九拾壹間四尺壹寸

此町数、百八拾八町拾壹間四尺貳寸

所々道川明地寺屋舗

町屋并大聖寺裏 共長平均

千七拾貳間三尺壹寸五分

此町数、拾七町五拾貳間三尺壹寸五分

都合、長五里貳拾六町四間壹尺三寸五分

壹間六尺竿

但 壹町六拾間 之積

壹里三拾六町

右間数長壹間之所を三分に縮て絵図作之者也。

元禄十五年壬午年十一月

とあり、お土居の正確な規模を知ることができる。

2. 木戸門の撤去と構の終焉

お土居によってすべてを囲い込まれたことによって、洛中の構は自衛的空間という中世

的な存在意義を失った。さらに、秀吉により木戸門の撤去を命じられたことにより、洛中の構は名実ともに消滅し、近世京都の都市空間へと変貌した。ルイス・フロイスの日本史には、

日本のごく古くからの習慣では、〈市の各〉町の他の町と分けする二つの門は、夜間は閉鎖することになっているが、関白はそれらの門を一つ残らず、すべて撤去させた。こうして〈都の〉すべての町は、昼夜、開放されることになった。

とあり、昼夜ともに往来は自由になった。

しかし、洛外においては構の名称は用いられなくなるが、実質的な集落の外郭を限るものとして、堀や土塀は排水路や藪に形を変えて、遺存していったものと考えられる。『舜旧記』2元和2(1616)年3月8日の条には、

今日吉田構之堀、新度畠堀普請也

と、洛中の構の消滅後も、新たに畠をつぶして堀を構築している。近世の聖護院村の西を限ると考えられる江戸時代後期の溝(図10-8)も、洛外における近世集落を囲む溝の存在を裏付ける。

第4節 近世都市京都の展開

1. 秀吉の都市景観形成の試み

秀吉は都市景観の形成に対しても、強い意志を持っていた。秀吉が伏見から上洛する御成筋にあたる京極通の町家は、改造を余儀なくされている。『長刀鉾町文書』^{*3}には、

ある時、(前田)玄以法印京極通の在家人等を召れて、宣ひけるハ、勿論上下屋並取続きてハ見ゆれども、ひらや又は葛屋多く、きひ柱におほくハ大柵也。殿下様(豊臣秀吉)伏見より京え上りたもふ御成筋なれハ、見苦敷き覚しめさるゝ。奥ハいかにもあれ、まつ表ハ二階造にして角柱に作るへし。屋並高下のなきやふ仕候てしかるへし。若借錢などに及候は此方へ申来るへし。いかやふにも訴訟申て下行あるやふに相計へきよし被仰けれハ、人々承て、左様成る結構の屋作ハかつて覚御座なく候得共、御上意にて候得ハまつ承て罷帰候。随分才覚仕り候はんまゝ、万事御公儀御取なし奉仰よしにて各退散したりけり。其後上下京一同に富も貧もまけし劣しと

造立にけり。去程に、秀吉公程なく参内おハしましけるか、屋作の様体をいかにも静に御覧有て還御の後、徳善院（前田玄以）を召て、いつれも劣りまさりなく寄特に、作立こそ神妙なれ、いそき下行有へしと被_レ仰けれハ、玄以法印五奉行衆と談合しまして、一間口につきて米壺石宛下されけり。町中悦ていつれも御礼に登城申けり。これよりして京の町、次第に屋作あらたまりけり。

とある。良好な都市景観の基準が、2階建てで、柱は角柱、屋根の高さに上下がないようにというものであった。ルイス・フロイスもこのことに触れ、

暴君関白は、大仏の建立、その他寺院の再建を命ずることに余念がなく、万人に及んだ数限りない暴政をもって、ますます自己を誇示し、尊大に振舞った。彼は都の市に〈かつて〉見られなかったような建造物とか豪華な〈諸建築〉を〈次々に〉完成し、日々〈新たに〉造築していった。彼は市に平屋の家が一軒として存在することを許さず、すべての家屋が二階建とされるように命じた。

と記している。秀吉が脅迫観念的に町並み景観の統一を計ろうとし、二階建て家屋の建設を強要していたことがわかる。

2. 本願寺の帰洛と六条寺内

中世京都から近世京都へと展開していく中で、ひとつの核となったのが、天文元年以来、59年ぶりに、帰洛してきた本願寺とその寺内町である。これにより、六条以南の開発が大きくすすんだ。『本願寺文書』天正19年閏1月5日には、

今度、当時京都へ被_レ引越_レ付而、於_二六条_一屋敷傍示之事。南北二百八十間、東西三百六十間之内、本国寺屋敷南北五十六間、東西百二十七間相_二一除之_一、其外令_レ寄_二一附之_一畢。然上は、地子之儀如_二田畠年貢_一、全可_レ有_二寺納_一候也。

天正十九 (豊臣秀吉)

閏正月五日 (朱印)

本願寺殿

とあり、本国寺の南にその敷地を得ている。『京都旧記録』には、

一、六条寺内之事。西本願寺は天正十九年辛卯年秋、六条より七条迄之間に地を被_レ下候事。

然に、本願寺は其砌迄は南表之寺_二而、諸堂を建、南門より参詣致せしに、本願寺限り屋敷を本願寺_一下され候ゆへ、南表の門をふさかれ、今は東表より廻り、奥深き寺也。

西寺内町数五拾六町

一、東寺内ハ、西本願寺より拾壹年後、御当家より御取立_二而、慶長七壬寅年に寺屋敷を被_レ下候。其節之御奉行加藤喜左衛門殿、両度二被_レ相渡_一候。町数五拾九町。とあり、本願寺が南に敷地を占めたため、本国寺が困惑している。『フロイス日本史』には、

門徒たちから生ける阿弥陀と呼ばれ、無上に崇拜されている一向宗の頭で、先にも述べた大阪の僧侶〈本願寺法主顕如〉は、大坂に近いところ〈天満〉に、すでになかなりの大きさの町と多数の美しい寺院を造営し、そこを本拠としていた。関白は彼に対して都に住むように命令し、彼がすでに〈大坂で〉造ったのと同様の町を〈都でも〉造らせようと、その〈都〉において広大な地所を提供した。彼は、関白から与えられた若干の好意と、大部分が百姓と賤民から成るその宗派の〈信〉徒たちの援助によって、すでに町の移転を終了した。

関白がそのようにしたのには、もとより幾つかの理由があった。すなわち、まずこの仏僧〈顕如〉を拜もうとして、日本全国から蟻集して来る帰依者の激しい出入りによって、都の町がますます拡大し、人口を増し、豊かになるのを欲したこと。次には、信長の時代に幾年も継続したように、〈顕如〉が天下を攪乱することがないよう、将来におけるなんらかの不穏動きを抑制するために、自らの許に留め置くことを望んだからである。だが、

〈仏僧らが〉町の周囲に垣を設けたり、濠を造ることを許可しなかった。

とある。フロイスは秀吉の意図を看破しており、秀吉が本願寺を京内に呼び寄せたのは、その参拝者のもたらす経済的波及効果と、不穏動きを牽制するためであるとしている。このため、秀吉は垣や濠などを構えることを許さなかった。

また、本願寺を御土居に囲まれた京都の南端に配することにより、市街地の北端を限る寺之内、東端の寺町、二条城の南に連坦する寺院群とともに、市街地の周辺を取り囲む寺院街が形成されることになった。

第5節 小 結

以上、上京・下京の惣構えから近世京都への展開を追ってみた。

結論としては、構という中世的な都市空間にとどめを刺したのは天下人となった秀吉の都市改造であった。度重なる戦乱と治安の悪化で、町衆が離散し、上京・下京が縮小していた中で、平安京の条坊地割を踏襲した方1町の町の中央に南北の道路を通す「天正地割」や、多数の寺院を移転させた「寺町」、「寺の内」の新街区の設定、そしてこうしたすべてを包む「御土居」の構築といった大土木事業は、秀吉の「普請好き」ではすまないほどの影響力を持っていた。

町並みなどの都市景観の統一にとどまらず、木戸門の撤廃を命じるに至っては、運命共同体と考えていた町衆の町組に対する認識をかえるに十分なものがあつた。町衆から自治の気風が消滅していくのにさして時間はかからなかったであろう。

終 章

15-1 本論文の成果と課題

15-2 歴史的環境の保存と活用に向けて

*1 『宗長手記』大永7年2月12・13日の条（島津忠夫校注『宗長日記』）

*2 『続々群書類従』第16巻所収

*3 『長刀鉾町文書』京都屋造之初

終章

序章、第Ⅰ部、第Ⅱ部を通して、都市空間の変遷について、洛中洛外を対象に歴史的考察を進めてきた。本章では、その成果を総括し、今後の課題を呈示するとともに、現代の都市空間に遺存している遺構を、保存・活用する方途を模索し、また、海外における都市空間とその構成要素との比較を試み、終章としたい。

第1節 本論文の成果と課題

1. 白河の条坊地割について

第Ⅰ部では、発掘調査による考古学的成果や、古絵図、地籍図、都市計画図などをもとにした歴史地理学的成果と、地理情報システムなどを用いて、平安時代末期の白河の条坊地割の復原をおこなった。白河の条坊地割は、基本的には、南北の道は4町おきに、東西の道は2町おきに大路がある平安京の二条大路以北と、同じ型式をとっていたと考えられる。この条坊地割りの骨格ともいえる大路・小路の位置の復原を、発掘調査で検出した遺構をもとに実施した。発掘調査で検出した遺構は国土座標第Ⅵ座標系に則って、実測されるため、極めて高い精度で遺構の位置を把握することができ、条坊地割の方位や造営尺の算定の根拠となった。

また、大路・小路を行き来した御幸の記事を抽出し、条坊地割の中に禁忌の空間、すなわち二条大路末の尊勝寺と最勝寺の南門前は、御幸を憚る場所であったことを明らかになった。さらに、六勝寺や、白河南殿、白河北殿などの院の御所や、宝莊嚴院、得長寿院、福勝院などの院の御堂について、その寺域や領域を限る遺構を抽出し、その位置について考察した。また、文献資料から、その性格を明らかにした。

東光寺、栗田の宮、吉田若宮や、藤原北家勸修寺家流吉田氏の邸宅とその菩提寺浄蓮華院、および貴族の邸宅など、白河の条坊地割と直接関連はないがそこに散在するものについても、焼亡史料などの文献資料を中心に明らかにした。

ついで、白河の衰退過程を文献資料を中心に、六勝寺の衰退時期やその原因について考察した。白河の衰退については、寺院の存亡、遺構の盛衰などから、衰退の第1波は承久

の乱であり、第2波が南北朝の内乱、そして致命的な第3波が応仁の乱であることを明らかにした。また、吉田氏の菩提寺浄蓮華院の寺領が吉田社に押領されていく過程について詳述し、白河から退転していく過程を明らかにした。

条坊地割の範囲は、北が一条大路末まで、西は河原、東は北の2坊は吉田山西麓まで、大炊御門大路末以南は変則的に法勝寺を取り込む形で東に張り出す。南は三条大路末までは確実に条坊地割があったと考えられるが、三条大路末以南にどこまで条坊地割が施工されていたかは今後の課題である。

条坊地割の方位と造営尺は、いずれも発掘調査で検出した遺構の内、遠距離のものに信頼性を置いて算出した。この結果、方位は今朱雀の遺構をもとに、真北から東に0°40'偏ったものとし、造営尺は0.301mとした。

なお、冷泉小路末や法勝寺の南側の押小路末、法勝寺の東辺などにやや変則的な部分が生じたのは、条坊地割に先行して法勝寺の北辺、東辺、南辺が確定されていたためと考えられる。法勝寺西大路は、平安京の東京極大路からちょうど3坊の位置にあたる。法勝寺の西辺だけは条坊地割を意識して、その位置を調整したものであろう。

一方、白河の条坊地割のように、南北約2km、東西約1.4kmにおよぶ遺跡の復原を、縮尺1/2500の都市計画地図上でおこなってきたが、精度と作業に要する面積が膨大なものとなり、復原に支障をきたしていた。そこで、CADとデータベースを結合した地理情報システム(GIS)を用いて、遺跡の復原作業を試み、その有効性を確かめ、また、遺跡に関する空間インデックスを持ったデータベースとしてのあり方を模索した。

以上のような考察の結果、白河の条坊地割を概念的に復原したのが図15-1である。なお、この復原図は方角地割の基本型を示したもので、六勝寺や院の御所などの占地の細部については今後の課題としたい。

2. 自衛的都市空間「構」について

第II部では、種々雑多な構について、その構築主体を基準に分類し、そのあり方を考察してきた。しかし、洛中は現在も継続的に都市空間であり続けているため、良好な考古学的資料を得ることができず、洛中の構の詳細な復原は困難であった。このため、まず、洛外に点在する構のあり方について考察を進めた。

吉田構については、吉田社の神官吉田兼見の日記『兼見卿記』の記事をもとに、吉田構

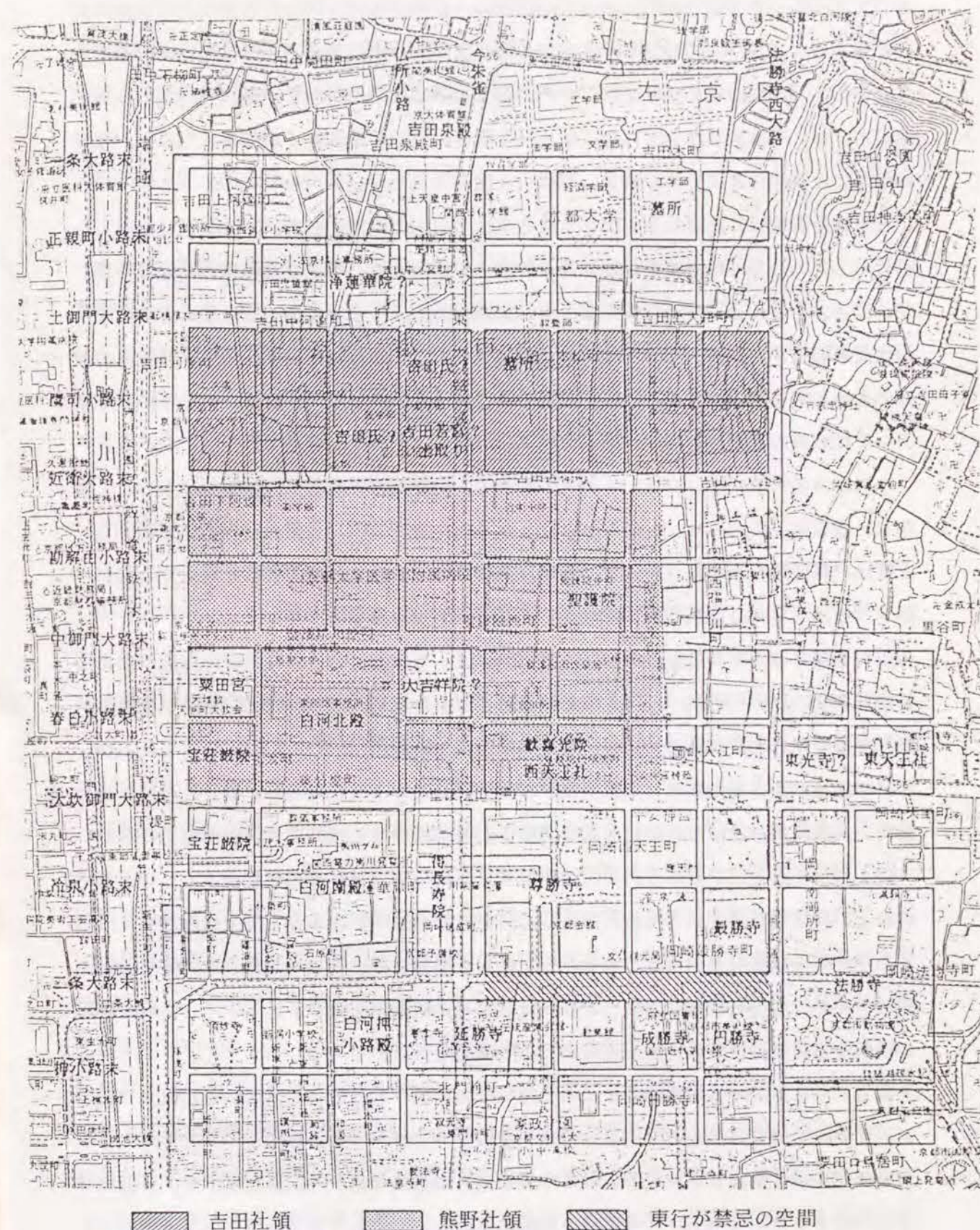


図15-1 白河の条坊地割の復原概念図

が「北之在所」と「南之在所」のふたつに別れ、北に約40戸、南に約30戸の在家のあったことを明らかにした(図11-5)。これらの在家を取り囲む構の出入口は北と南にあり、「北の構」、「南の構」と呼ばれていた。南北両構には惣門があり、南、西、北の3方に堀があった。町田家本洛中洛外図には1525年前後の吉田の構の様子が描かれている。惣門の両側には狭間付きの土塀が続き、有事への備えを見せていた。

吉田構の復原は、直接の手がかりとなる中世の状況を表す古図や、発掘調査で検出した遺構が少ないことから、まず、近世初頭の吉田村を復原し、中世の吉田構について考察した。近世の吉田の社家町については、その景観を復原し、中世後半から近世の吉田の集落の状況を明らかにした。なお、乱前の吉田については、所領の再編や、乱による資料の散逸のため不明な部分もある。乱前に吉田の地にあった勤修寺家、福勝院、吉田社の旧地については今後の課題としたい。

山科寺内町の構については、寺内町の遺構や、発掘調査の成果、古絵図などをもとに実施した復原は、図13-8、9にかかげたとおりである。二重、三重に土塁と堀をめぐらせた姿は、城郭研究家から「縄張り、立地が実に1世紀も速く近世的要素を含んでいた」と評されたほどであり、洛中洛外の構の中でも圧倒的な迫力をもっていた。

山科本願寺寺内町の退転後の跡地の領有関係は、基本的には、法華衆徒の支配下にあった時期(天文元年~天文5年)、本願寺に返還された時期(天文5年~天文17年)、公方御料所となる時期(天文17年~天正頃)、禁裏御料となる時期(天正頃~幕末)にわけられるが、山科本願寺の旧跡を城郭として再構築する状況にはなかったと考えられる。とくに、公方御料、禁裏御料となった時期に山科寺内町の旧地に城郭を再構築する理由が見あたらない。

以上のような経過から、寺内町の遺構は天文年間の縄張りがそのまま残ったものと考えられる。発掘調査で山科寺内町の存在した時期以降の遺物がほとんど出土しなかったことも、寺内町の改修などが行なわれなかったことを裏付ける。平坦地に築かれた中世の城や館の多くが、後世の改修や開墾により、その当時の縄張りを失っている中で、山科寺内町の遺構や古図は縄張りの発達過程を知る上で貴重な資料と言える。

構という中世的な都市空間にとどめを刺したのは天下人となった秀吉の都市改造であった。度重なる戦乱と治安の悪化で、町衆が離散し、上京・下京が縮小していた中で、平安京の条坊地割を踏襲した方1町の町の中央に南北の道路を通す「天正地割」や、多数の寺院を移転させた「寺町」、「寺の内」の新街区の設定、そしてこうしたすべてを包む「御土居」の構築といった大土木事業は、秀吉の「普請好き」ではすまないほどの影響力を持

っていた。町並みなどの都市景観の統一にとどまらず、木戸門の撤廃を命じるに至っては、運命共同体と考えていた町衆の町組に対する認識をかえるに十分なものがあった。町衆から自治の気風が消滅していくのにさして時間はかからなかったと考えられる。

第2節 歴史的環境の保存と活用に向けて

これまで考察してきた条坊地割にしても、構にしても、都市遺跡の宿命として、急激な都市開発にともない、現代の都市空間からは切り捨てられているのが現状である。本節では、こうした都市空間の変遷を体現している貴重な資料は学術的に意味があるだけでなく、その方法によっては都市空間に潤いやゆとりを与えるものとなりうる。ここでは、これらの遺構を現代の都市空間の中で保存・活用する方途を模索する。

1. 山科寺内町の保全と活用に向けて

蓮如という優れた都市建設者と、「仏国」を夢みた門徒によって出現した寺内町、中でも中央寺内町として一期を画した山科寺内町の持つ歴史的意義は大きい。また、山科寺内町の構が中世の築城技術の展開を知る上で、貴重な資料であることはすでに述べた。しかし、前述したように現在、山科寺内町と寺内町ゆかりの遺跡は、荒廃や破壊と直面している。ここでは、こうした遺構や遺跡の保全をとおして、山科の歴史的環境をより豊かにするだけでなく、生活環境の向上と生活空間の活性化をはかる方途を模索してみたい。

〔「山科・蓮如の道」構想〕 山科の歴史的環境の保全を行なうために、まず第1にしなければならないことは、無為な破壊に歯止めをかけ、現存する遺構や地下に埋もれている遺構を保存することである。山科寺内町より時代の下る秀吉の「お土居」は、9ヶ所が国の史跡に指定されている。福井県福井市にある同時代の「一乗谷朝倉氏遺跡」は特別史跡に指定され、計画的な発掘調査が実施されている。現在、山科寺内町は周知の遺跡として登録されているものの、史跡には指定されていない。法的な保護が急がれる所である。

第2には、山科寺内町の実態を解明するため、計画的な発掘調査を実施する必要がある。現存する遺構に限られ、文献調査にも限界がある。広島県福山市の草戸千軒町遺跡や、一乗谷朝倉氏遺跡などは、計画的な発掘調査により、中世の町並みや生活の実態を明らかにしている。寺内町の伽藍配置や町割りを知ることは、伽藍配置の変遷や門徒の生活の実態を知る上で是非とも必要なことである。

第3には、現存する遺構や、発掘調査で出土した遺構や遺物の展示設備を整えることである。ただ、個々の遺跡や遺物を博物館的に展示するのではなく、各遺跡の有機的なネットワークを構築し、歴史的環境全体を保全する必要がある。具体的には、寺内町の土居や堀、南殿山水亭跡を中心に、蓮如をはじめ四上人の墓所に保存策を施すとともに、各遺構を核として散策路で結び、寺内町をとりまく歴史的環境全体の保全を進めていくのである。こうした視点から計画したのが、「山科・蓮如の道」構想である(図15-2)。これらの散策路は、住民の生活環境を豊かにし、また寺内町旧跡を訪れる人々の、歴史を追体験する場として格好のものである。歩道の設置や車の通行規制を含め、こまやかな対策を講じ、快適な散策路とする必要がある。また、保全計画の実施には、新たに山科に移り住んできた人々の、山科の歴史的環境の保全に対する理解と協力を得ながら、新旧住民の交流をはかることも必要である。

つぎに、「蓮如の道」で結ばれた個々の遺構や遺跡の保存について述べる。

〔寺内町の構〕 土居は、A地点の土居が山科中央公園の中に取り込まれて保存されている他は、すべて私有地であり、破壊の危機に直面している。こうした土居や堀を地域文化財として登録し保存していくことは勿論であるが、破壊された土居も可能な部分は復原し、復原が不可能な部分も緑地帯などの形でプランだけでも復原し保全したい。大規模建造物群が立ち並び、バイパスと新幹線が南と北に二分するこの町に必要なものは町としての一体感と潤いである。散策路でつながれた緑地帯は、この町に欠くことのできないものとなるであろう。土居と並行して残る堀は、周辺の下水道を整備し、汚水の滞留を防ぎ、清水を再現するか、空堀として保存する。駐車場や道路として埋め立てられた部分も、可能な限り復原し整備したい。この他、随所に遺構の説明板を設置し、遺跡の理解を促したい。

寺内町の旧地内の計画的な発掘調査により出土した遺物を展示する施設を設置し、検出した遺構も覆屋をかけて展示したり、復原した遺構を公開し、歴史の追体験をおこなえる史跡公園として整備していくことも必要である。

こうして復原・整備された空間は、防災にも非常に有効である。史跡公園の緑地帯が緊急時に避難公園となるだけでなく、清水をたたえた堀や、高い土居は防火帯としての機能ももつ。大規模開発とミニ開発が隣あわせで急速に進行した山科にふさわしい防災方法である。

〔南殿山水亭跡〕 昭和31年の実測図と現状図を比較すると、周辺の開発が大きく進んでいることがわかる。南殿旧地全域の保存は、周囲が宅地化しており現実的には困難であ

「山科蓮如の道」
散策路構想

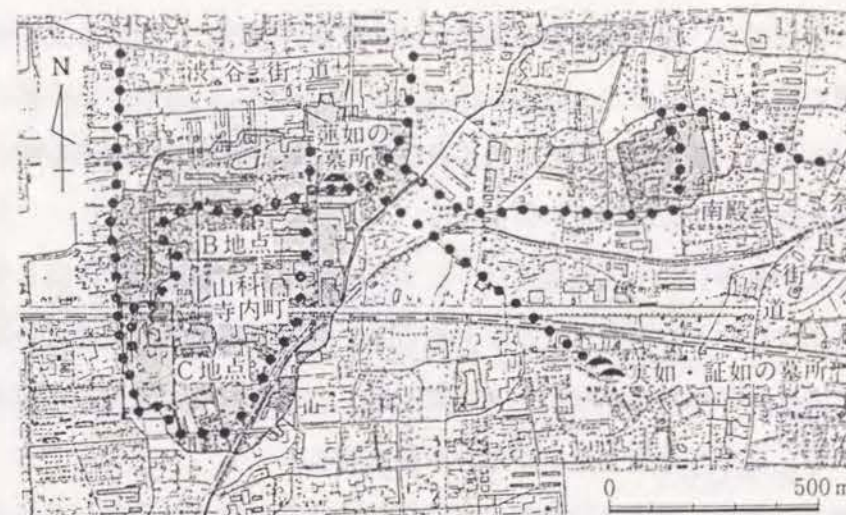


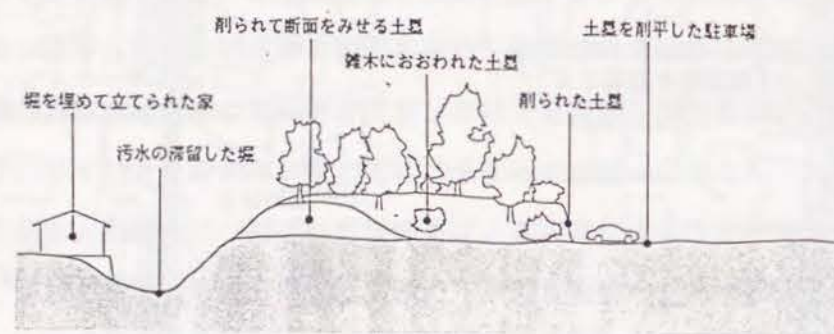
図15-1 「山科・蓮如の道」構想

る。幸いにも、第一郭内の庭園部分は光照寺が管理し、整備も光照寺の壇家の手により定期的に行なわれており、破壊の恐れはない。しかし、西隣の第三郭の一部は空き地として残っており、開発の進む可能性のある所である。第三郭の性格を明らかにするためにも、保存と計画的な発掘調査が望まれる。

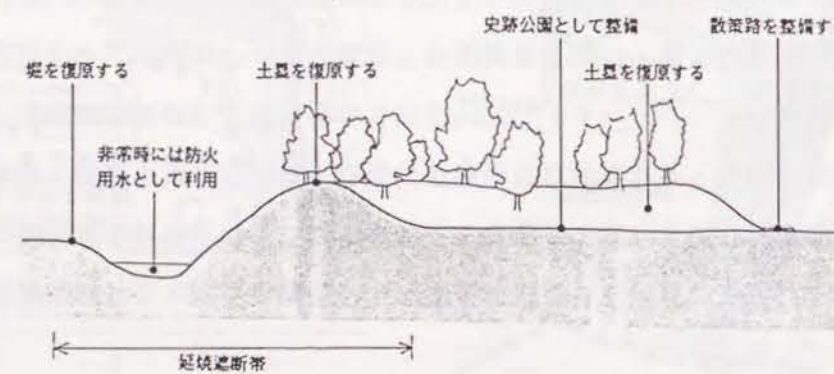
〔上人の墓所〕 上人の墓所は、いずれも東西両本願寺派の寺院に管理されており、破壊の危惧はない。しかし、そのすぐ傍らまで開発の波がおしよせているのは、前述したとおりである。寺内町ゆかりの上人の墓所は、山科寺内町の歴史的環境を構成する主要な要素であり、墓所の周囲を含めた保全が望まれる。

蓮如の墓所の整備は比較的すすめられており、現状の維持が望まれる。ただ、古図には蓮如の墓所を囲い込む幅の狭い堀があり、こうした遺構の確認のための調査も将来的には実施する必要があるだろう。

実如・証如の墓所は、まず参道の復原が望まれる。西本願寺山科別院の裏門から、実如・証如の墓所までを緑地帯として復原したい。緑地帯の幅も、地籍や前述した字境界の幅



B地区の現状断面

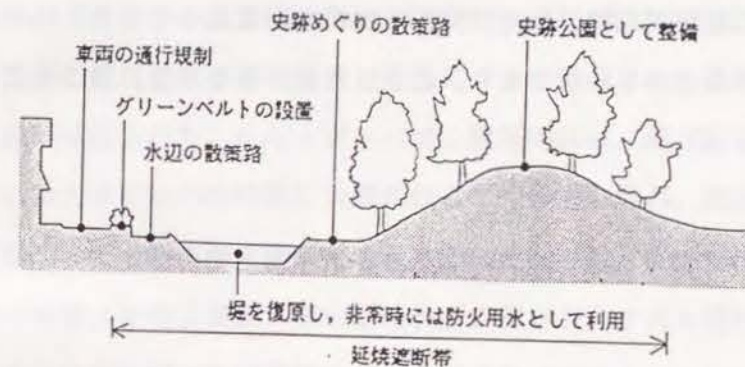


B地区の計画断面

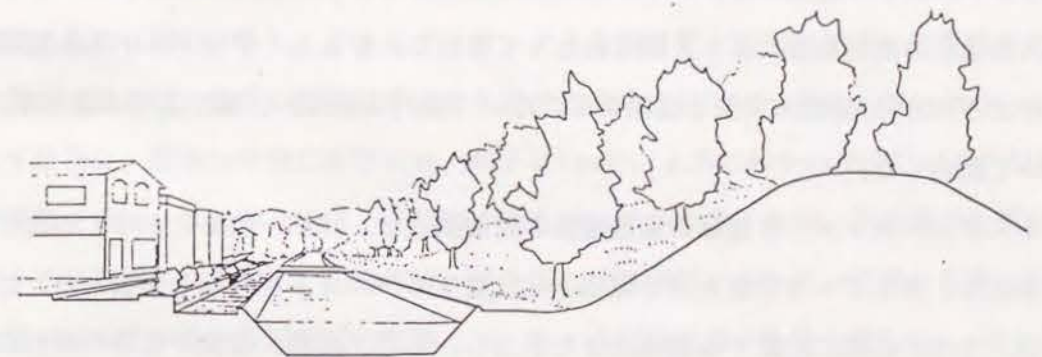
図15-3 B地区の現状と修景計画



C地区の現状断面



C地区の計画断面



C地区の風景パース

図15-4 C地区の現状と修景計画

から10m前後とし、防災帯としても有効なものとしたい。墓所やその参道には重点的に植樹を行ない、上人の墓所にふさわしい環境を演出してみたい。蓮如の墓所に比して知名度が低く、訪れる人も少ない。説明板などの設置が必要である。

さらに、復原した土塁や堀、現存する土塁や堀、そして堀や土塁を緑地帯や空き地の形で表現したものを、ネットワークで結びつけ整備すると、史跡公園として有効だけでなく、ミニ開発による密集地の多い山科に延焼遮断帯を設置したのと同じ効果がある。寺内町の土塁や堀を保存・復原していくことが、歴史的環境の保存につながるだけでなく、水と緑のある空間をふやすことは、平常時においては生活環境の快適性を高め、災害時には防災帯として生活環境の安全性を高めることにもなる。

以上、山科寺内町および南殿について、文献や古図、遺構などにもとづいて復原した山科寺内町を含む歴史的環境の保全に関する提言をおこなってきた。山科は新興住宅地として特に開発のテンポの早い所であり、こうした保存策を早急に講じることが今後の課題である。

第3節 海外における都市遺跡の調査と都市考古学的考察

次に、海外で参加した発掘調査から、都市空間の比較を試みたい。これまでに、筆者はイラク共和国ハムリン盆地において紀元前3000年紀の円形建物を、パキスタン共和国西北辺境州ブネール県においては山上の仏教寺院を、シリア・アラブ共和国では隊商都市パルミラの調査に参加してきた。

イラク・ハムリン盆地では、ティグリス川の支流ディヤラ川流域にあるテル・グッパと呼ばれる遺丘の発掘調査に5ヶ月間にわたって参加し、ジェム・デッド・ナスル期(紀元前3000年ごろ)の円形建物の実測と復原をおこない〔堀内ほか82〕、都市文明の誕生期の状況について調査した。

パキスタン・ガンダーラ地域の仏教遺跡の発掘調査は、1986～92年にかけて5次にわたって参加し、ガンダーラ平原を望む尾根上に位置するラニガト寺院址を発掘した。この調査では、主塔の西南に位置する西南地区を担当し、仏塔、祠堂、僧院や仏塔の基台に設けられたせり出しアーチ型の通路を発掘した〔京都大学学術調査隊88〕。このラニガト寺院址は山上に約2km²にわたってひろがる寺院というよりは都市に近い構成を呈している。

そして、1991年には、シリア砂漠の隊商都市パルミラの調査に参加した。当時のパルミ

ラの都市生活者の死生観を具現化した墓に注目し、周辺に分布する地下墓を重点的に調査した。この調査では、地中レーダー探査で捉えた地下墓を発掘し、光波測距機とコンピュータを連結したCG平板を用いて、地下墓の3次元形状を実測し、パースを作成するなど、新しい調査法を試みながら、都市遺跡の調査方法を模索した。

以上のような調査をふまえ、自然環境、政治、経済、軍事、風俗、慣習の大きく異なる地域の都市空間の特徴について比較・考察してみる。これらの遺跡に共通するものとしては、日本の中世の都市空間に通じる「まもりのかたち」があげられる。以下では、各々の遺跡の「まもりのかたち」について考察する。

1. メソポタミアの円形神殿テル・グッパの都市考古学的考察

テル・グッパは、バグダードの北東約140km北東のハムリン盆地に位置する。ティグリス川の支流ディヤラ川の流域に広がるハムリン盆地にダムが計画され、遺跡が水没することになり、緊急調査が実施された。テル・グッパは、直径約80m、高さ約8mの円形の遺丘である。層位的には大きく4つの時期に大別される7つの層に別れ、地山に到達するまでに2年半の調査期間を要した。第Ⅰ層はイスラム期に属し、第Ⅱ層はアケメネス朝ペルシアの時期、第Ⅲ～Ⅵ層は初期王朝期、第Ⅶ層はジェムデッド・ナスル期にあたる。ここでは、ジェムデッド・ナスル期の円形建物について述べる。

(1) テル・グッパ第Ⅶ層の円形建物について

第Ⅶ層の円形建物は、周囲よりやや高いがほとんど水平な丘の上に建てられている。この水平に削平されたと考えられる地形の上に、28×14×7の日乾レンガを用いて、同心円上に建てられ(図15-5)、ジェムデッド・ナスル期(紀元前3000年頃)の遺物をともなう。詳細に見ると、遺構の構築は中心から徐々に進められていったことがわかる。

まず最初に、建物の中央に直径5m、高さ3.5mで、上方に向かいやや広がる円柱状の基壇が構築された。この中心には、径80cm、深さ80cmの炉が設けられ、炉の廻りを幅50～80cmの小さい回廊が取りまく。回廊の床と炉の底とはほぼ同レベルで、回廊の外側に手すり状の壁が立ち上がる。円形基壇の下部には、ちょうど炉の真下を通る幅0.9m、高さ1.5m、奥行3.5mの坑道が設けられている。坑道は南側に入口をもち、天井は持送穹窿で、炉の底とは連結していない。坑道の入口部は本来閉塞され、さらに1m奥にも第2の障壁があったようである。しかし、発掘時にはどちらも半ば破壊された状態にあり、内部からは、土

器片以外なにもみいだせなかった。この坑道の性格は不明である。

この円形基壇を中心に、五重に円形を描く壁がとりまき（CW3, CW4, CW5, CW7）、その間を五つの回廊（C2～C6）がめぐる。この外側には周濠が掘られており、さらにその外側にも最外郭の周壁（CW8）がある。このようにして、建物の中心部から南側の壁端まで約40m、復原すれば径約80m範囲の円形プラン、厳密に言えば、やや南北に長い楕円形プランの建造物があったと考えられる（図15-5）。

円形基壇の外壁にあたるCW2とCW3とは、上方で互いに張りだし、床上4.5mばかりの高さで合到し、持送式穹窿をつくっていたらしい。同様な天井架構はCW3とCW4、さらにCW5も加えて直径約21mほどの上部構造がつくられていたらしい。

周壁CW2とCW3との間にある回廊C2には、北より上階へ通じる階段が、逆時計まわりにしつらえられていた。階段の下は回廊状の狭い部屋になる。また、回廊C2の西側には二ヵ所に入口があり、回廊C3と連結している。

周壁CW4は基部で壁厚1.3m、上部で1.6mを測る。壁の外周径は12.5mの正円に近いプランであるが、北側に馬蹄形の突出部をつけ、その中を部屋として利用している。部屋には外側に通じる入口（東側）と内部回廊C3へ通じる入口（南側）とがある。回廊C3自体も、そのほか外部に通じる入口を西側と東南側の二ヵ所にもっている。周壁CW4の残存は比較的良好、残高は3.5～4mに及ぶ。なお、壁の東側には回廊C3から上階へ通じる階段がある。北側の突出部を経由する屈折した入り方と、坑道正面からの直線的な入り方は対照的であり、この中心部分の性格を象徴的に表している。

周壁CW4の外側には厚さ2～3cmの泥土の上塗りが施されており、一度は外壁面を成していたと考えられる。ところがその上壁を直接おおって、厚さ50～70cmの日乾レンガ積の壁がつけ足された。それをCW4'とよぶが、このCW4'は上部にいくに従ってやや張り出している。これに相対するCW5も同様であり、両壁は上部で合致し、持送式穹窿を成していたと考えられる。従って周壁CW4'とCW5の増築は第Ⅱ期になされたことが判る。周壁CW5は壁厚2mで、外周径21mを測る。北側では前述のCW4のプランに沿って楕円形状（卵形）を呈し、先端に円形の突出部をつくる。突出部の小部屋には径約1mの井戸が掘られていた。周壁CW4'とCW5にはさまれた回廊C4は幅約2mを有し、前述の狭い回廊（C2, C3）に比べ広々としている。外部に通じる入口を3ヵ所にもち、屋上に通じる階段も3ヵ所に検出された。階段の位置は入口に近く、それぞれ入口の左手にあり、時計まわりに登る。周壁CW5の内側には他の壁と異なり一定の間隔で突

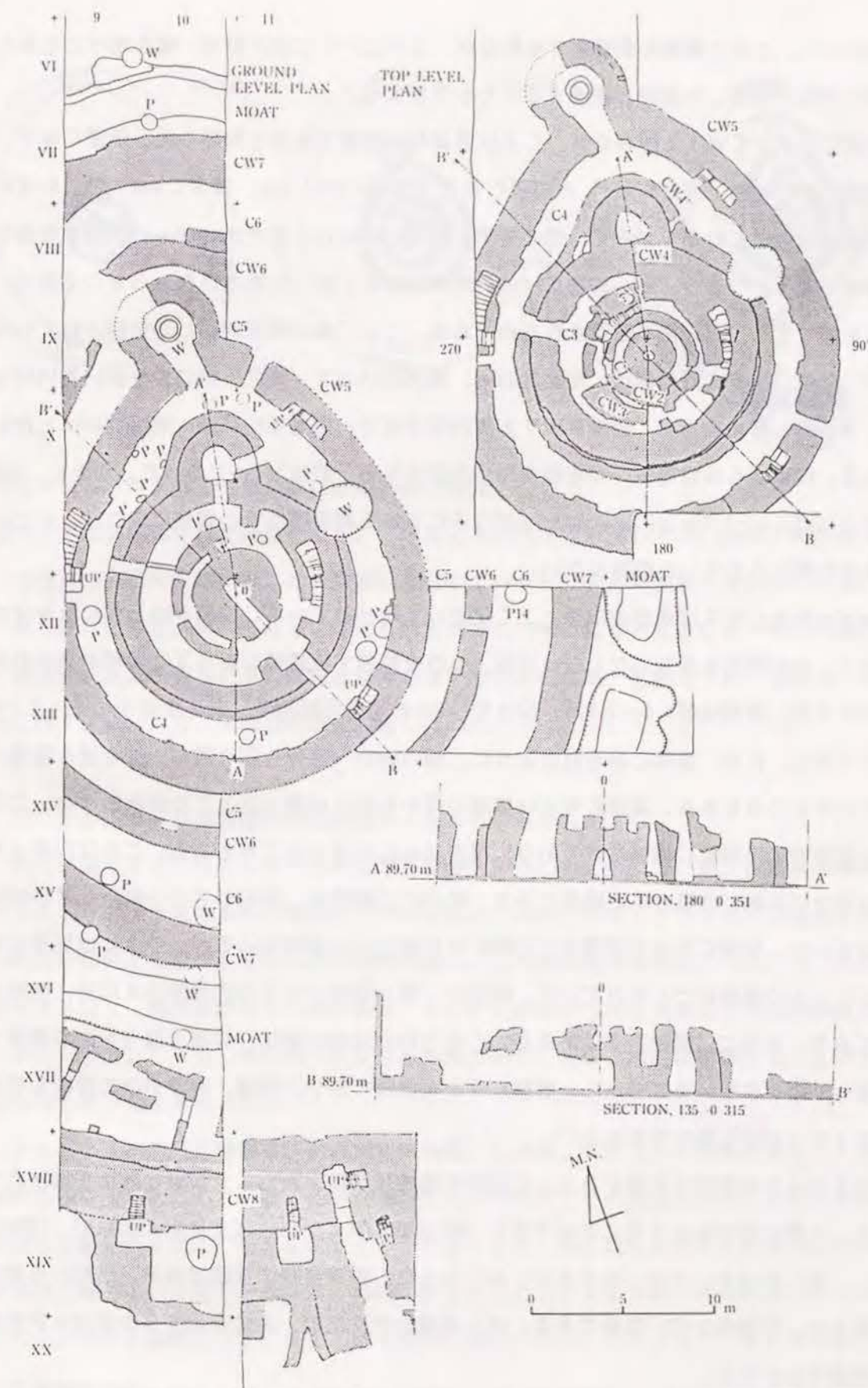


図15-5 テル・グッパ第Ⅶ層の遺構（〔国士館大学イラク古代文化研究所82〕所収）

出部がつく。これは壁面の装飾化でもあるが、上方にいくに従い厚さ、幅を増すことから、天井の架構に関係した施設と推測することもできよう。

周壁CW6、CW7と回廊C5、C6は第Ⅲ期の構築であると判明した。周壁CW6（壁厚1.5～1.6m、残高1.0m）と周壁CW7（壁厚2.0～2.5m、高さ1.0m）は、いずれも直接地山の上ののっておらず、壁の基部と地山の間には、厚さ20～30cmの土器片を含む堆積層がある。つまり、中心建物だけの利用がしばらく続いたあと、なんらかの必要で、それを取りまく二重の壁が築造されたのである。この二壁は部分的にしか発掘されていないが、周壁CW6の外周径は、南北約33m、東西約28mで、南北方向にやや長い楕円形を呈していたと考えられる。周壁CW7も楕円形平面で、南北径約48m、東西約40mと推定される。回廊C5は日乾レンガを敷きつめた床をもち、幅は1.5mであった。しかし、回廊C6ははば3.0～3.5mと広い。なお回廊C6における調査時点での観察に依れば、ここには天井が架けられていた痕跡がない。

前述の周壁CW7は周濠の内縁にごく接近して築かれている。周濠が時と共になかば埋もれて、その機能を果たさなくなった時、それを補強する意味もあってこの壁が築かれたのだろうか。周濠は幅3.5～4.0m、深さ約2.0mの逆台形断面で、テル全体をめぐるようである。ただ、東側にみられるように、幅の狭い一部分を掘り残し、濠を渡る陸橋にしていたところもある。周壁CW8は周濠の端から約6m隔ったところから始まる。この壁は最終的には四重に構築されており、厚さ10mにも及ぶところもある。これは内側より、壁が徐々に外側に増築された結果であり、壁内には階段や、階段付きの小部屋などが施設されていた。周濠CW8と周濠までの間には比較的広い空間があるが、そこには周濠を利用した大小の部屋がつくられていた。部屋の一部と周壁CW8の内側部分は同時に構築されており、さらに、局部的ではあるが、この方形の部屋の壁は、周濠上面をおおう埋積土に載って築かれていることから、周壁CW8も周壁CW7と同様、周濠がひの機能を果たさなくなった頃に築かれたらしい。

以上のような状況を整理すると、この円形建物は2度にわたる大規模な増築を施されており、3期に時期区分することができる〔国士舘大学イラク古代文化研究所82b〕（図15-6）。第1期は中心からCW4までしかなかった、創建当時の状態である。当初から周濠に囲まれ、防御色の強い建物である。中心基壇の炉や坑道、北に突出する小部屋も同時期に構築されている。

第2期はCW5とそれに相対して持送りの天井部をうけるCW4'が構築され、この回

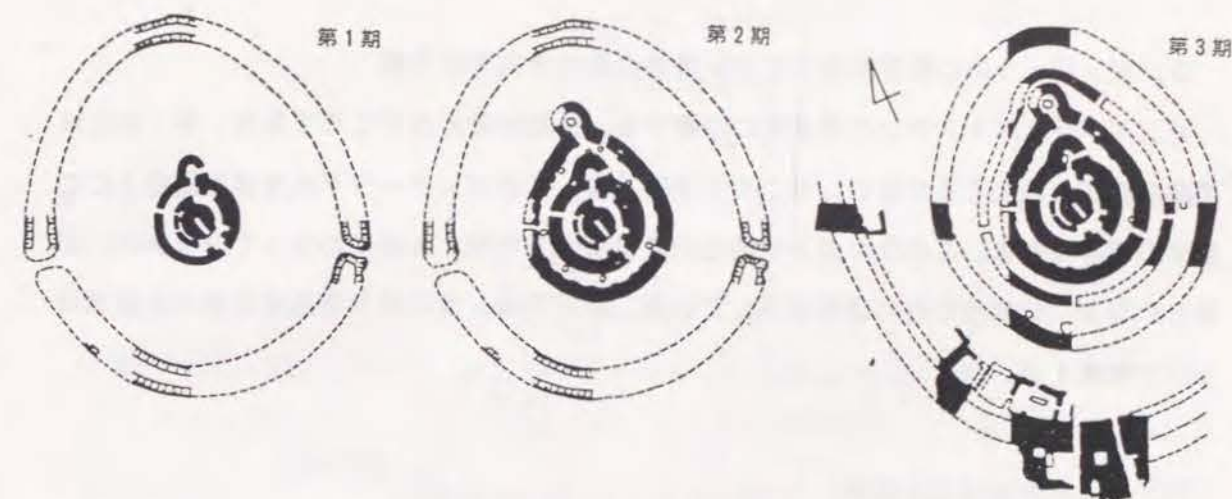


図15-6 テル・グッパ第Ⅶ層の建築平面の変遷

廊の天井部が構築された時期である。CW4の突出部を包み込むため、全体が卵形の平面形となった。CW5の内側には、荷重対策としてバットレスが等間隔に配されている。

第3期には周濠が埋められる。埋められた周濠の内側にはCW6とCW7が、外側にはCW8が新たに構築される。CW8はその後3度以上の増築・拡張を受け、最終的には10mを越す大壁となり、周濠の機能を代替している。

(2) テル・グッパ第Ⅶ層の円形建物の「まもりのかたち」

都市が誕生するのはシュメールの初期王朝時代からと考えられている。初期王朝時代はジェムデッド・ナスル期から発展していったものであり、テル・グッパの円形建物は初期の都市の核のような存在であった可能性が高い。この円形建物の用途については、円形神殿とする説と、穀物倉庫とする説がある。そのいずれかについては断定する根拠を持たないが、いずれにしても、都市の中核となる建物であり、有事の際には避難することができる施設であったと考えられる。

テル・グッパの円形建物は、創建当初から幅3.5～4m、深さ2mの周濠を構え、その防御的性格をあらわにしている。さらに増築するにつれて、その出入口を少しずつずらし、見通しを避けると共に、侵入しにくくしている。また、第2期には井戸も建物内に内包し、非常時に備えていた様子がわかる。都市が誕生したとされる紀元前3000年前後の都市のあり方を示唆する遺構として、また、都市施設の発生について知るうえで、様々な示唆に富んだ遺跡である。

2. ガンダーラの仏教寺院址ラニガト遺跡の都市考古学的考察

ガンダーラはパキスタンの西北部に位置する。仏教の栄えたところであり、多くの仏教遺跡が点在するところである。ラニガト寺院址は、このガンダーラ平原を望む尾根上に位置する遺跡である。このラニガト寺院址の遺構は山上に約2 km²にわたってひろがり、寺院というよりは都市に近い様相を呈している。以下では、ラニガト寺院址の都市的要素について考察する。

(1) ラニガト寺院址の遺構

ラニガト寺院址の遺構は、丘陵の景観を特徴づける巨石ラニガトの南に東西約1キロメートル、南北約2キロメートルにわたって分布している。この付近の標高は600～650m、麓のノウグラム村からの比高は約200mを測る。世俗に近からず、遠からずという絶妙の位置にある。

ラニガト寺院址の遺構は、仏塔、僧房、祠堂に大別される。もっとも多いのは僧房で1962年度の調査ではその数150群を数えている。これらの遺構群は石積みのものが多く、インドやアフガニスタンで見られる石窟寺院はここガンダーラには存在しない。わずかに自然の石窟を利用したカシュミル・スマストにみるだけである。ラニガトでは巨石をほりこみ住居とした僧房が、分布している。

調査をおこなったラニガト寺院址の中核部は、遺跡全体からみると南の端にあたる台地状の地形に立地する。この台地は南北約200m、東西約100mで、西・南・東の3方の側面には花崗岩る切り石による長大な石壁が築かれていて、カニンガムのように要塞を思わせる景観である。中核部は大きく4つの地区に分けることができる。主塔地区、西丘地区、西南地区、南地区がこれにあたる。主塔地区にはこの寺院の主塔と思われる大塔と、奉獻小塔群、およびこれらを取りまく祠堂列からなる。西丘地区は主塔正面の小高い丘の上に小塔群を集めた地区である。

西南地区はラニガト寺院の最終期に切石を用いて造営された一連の建造物群で、西南塔、西南祠堂、西南僧房からなる。西南塔の基台は高さ7mにおよび、その下をせり持ちアーチのトンネルが貫通するという特異な構造をしている。西南僧房は中央に広場をもち、三方を僧房が囲む三面僧房である。南地区は大きくふたつの室群に分かれるが、この室群が僧房なのか、従者の居住地区なのかは不明である。



図15-7 ラニガト寺院址中核部
遺構配置図 縮尺1/1000

西面する主塔の西には、石積みの壁が南北に長くのび、中核部の正面入口である北ゲートへと続く。

(2) ラニガト遺跡の「まもりのかたち」

ラニガト遺跡は切り立った崖の上に位置し、防御施設は出入口が主体となる。北のゲートには厚さ約1mの壁に3ヶ所の開口部があり、花崗岩を削りだした框と戸当たりがある。類似する出入口で遺存状況のよいものに、西南僧房の出入口の遺構がある(図15-8)。この出入口は花崗岩を丁寧に積み上げたもので、内開きであり、縦縁は内転びの台形状を呈する。戸当たりの内側には戸の枠を止めたであろう小さな窪みと、門穴と考えられる大きな方形の穴がある。堅固な石造の壁に相応な扉が据え付けられていたであろう。

この開口部の特徴は縦縁が内転びとなっている点にある。『ウィトルウィウスの建築書』第四書第六章には、開口部の高さに応じて内転びの割合が定められている。開口部が低いほどその傾斜は強くするよう記されている。仏像の彫刻技法においては、仏像がヘレニズムの影響を強く受けていることが指摘されている。ガンダーラの寺院建築がその細部において、ローマもしくはヘレニズムの影響を受け、その影響を継承していた可能性は高い。さらに、北ゲート周辺の調査を進めたところ、北ゲートから主塔正面、西南塔正面に進む中央の南北路において、列柱の礎石を検出した。管見にして、寺院の伽藍における類例をしないが、列柱道路はローマ都市の都市構成要素であり、ギリシア、ローマのガンダーラにおよぼした影響を知るうえで、注目に値する資料である。

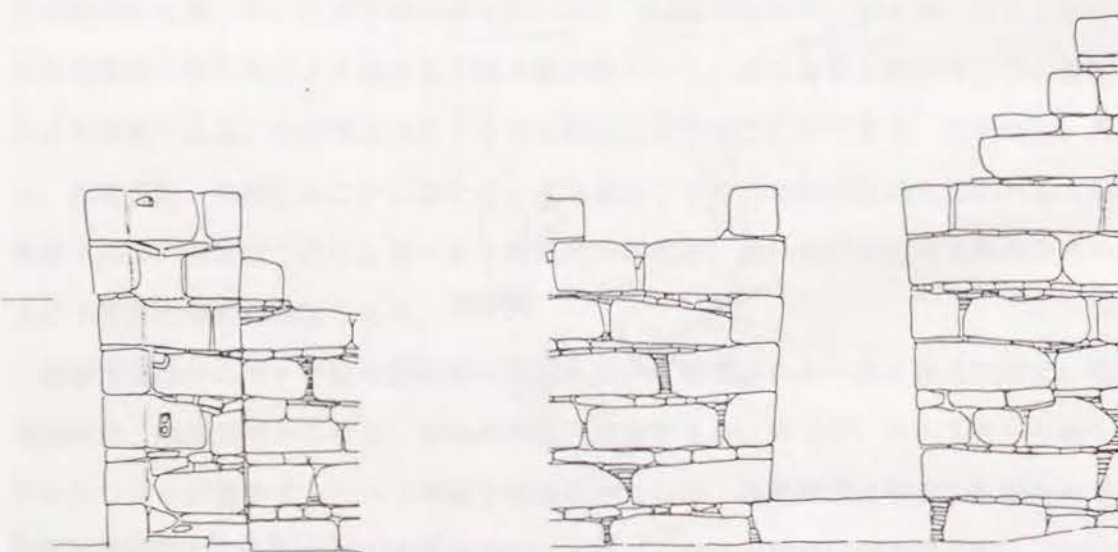


図15-8 西南僧房の出入口

3. シリア砂漠の隊商都市パルミラの都市考古学的考察

パルミラは、シリア・アラブ共和国のほぼ中央部に位置する。シリア砂漠のオアシスに形成された都市で、メソポタミアの肥沃な三日月地帯の描く円弧の中心にあたる。アッシリア時代以前から、メソポタミアと地中海東岸地域とを結ぶ最短の交易路の中継地として発展した。この交易路は、中国とヨーロッパを結ぶシルクロード^{*)}の一部にあたり、中国の絹をはじめ、各地の文物がパルミラを経由して、行き来した。パルミラの墓地からも中国の絹織物が出土している。本節では、パルミラの都市空間を構成する要素からその都市的展開を考察する

(1) 隊商都市パルミラ

一般に、オアシス都市とは居住地区が周壁で囲まれ、居住地区には神殿、王宮、取引場があり、行政、軍事、徴税制度の整ったものを指していることが多い。さらに、これらのオアシス都市のうち、主要な交易路の中継地として繁栄したものが隊商都市といわれる。隊商都市にはオアシス都市に見られる神殿、王宮、取引場などのほかに、隊商宿舎、歓楽施設などがあり、さらに、隊商警備隊などを保持していた。

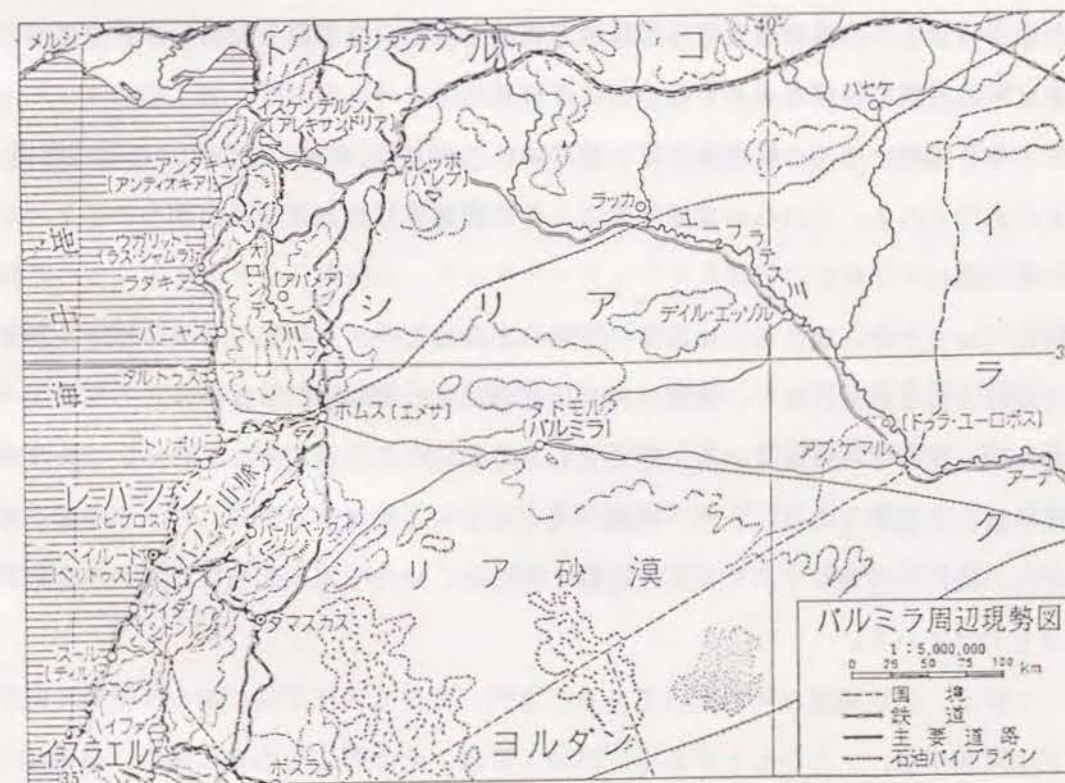


図15-9 パルミラ周辺現勢図 ([小玉80] 所収)

現在、パルミラにはシリアをはじめ、ポーランド、ドイツ、スイス、フランスなどの各国の調査隊が、シリア政府の許可のもと調査に従事している。日本は樋口隆康榎原考古学研究所長率いる調査団が、1990年からパルミラの都市遺跡の東南に位置する東南墓地の調査を開始し、筆者もこれに参加した。しかし、パルミラの都市遺跡は600万平方メートルを超える巨大な遺跡である。その大部分は発掘調査もおこなわれていない。このため、その市街地についてはほとんど何も判明していない。

紀元前64年には、ローマの支援のもと自治独立した隊商都市として成立し、以後、ローマ帝国とパルティア（アルサケス朝ペルシア）の緩衝帯の役割を果たしつつ、交易をおこない、都市として成長を続けてきた。3世紀後半、女王ゼノビアを擁立するパルミラは、小アジア、エジプトをもその支配下においたが、273年ローマ皇帝アウレリウスによって撃退される。パルミラの都市の大部分が破壊されるに至り、交易路も変動し、隊商都市パルミラとしての役割に終焉を向かえることになった。

Ⅰ群はパルミラの心臓ともいわれているベール神殿とナボー神殿である。ベール神殿とその周壁は方位を磁北に取り、周壁の外形は東西210m、南北205mのほぼ正方形を呈する。ベール神殿の建築年代は碑文から、紀元後32年であったことが判明している。パルミラに現存する最古の建築である。ナボー神殿の建立時期は不明である。ただ、ナボー神殿は大列柱道路の周辺の建物がすべて大列柱道路に開口し、主たる出入口を設けているのに対し、その背を向けている。

パルミラの都市計画については、ベール神殿を都市計画の中心と考える説がある。確かに、ギリシアの都市がアゴラを中心として形成されているのに対して、西アジアの都市は神殿を中心とすることが多い。最終期のパルミラも、大列柱道路の東端の延長線上にベール神殿を配しているが、列柱道路はベール神殿の周壁の西北隅にあたり、最終期の列柱道路がベール神殿とは別な観点から、都市計画を定めたと考えられる。ナボー神殿も大列柱道路に背を向けており、初期のパルミラの都市軸は真東西を指し、ベールからエフカの泉にまっすぐのビル軸線があったと可能性がある。

第4節 おわりに

以上、本章では第Ⅰ部、第Ⅱ部の総括と、歴史的環境の保存・活用への提言、海外の都

市遺跡との比較をおこなった。

第Ⅰ部については、白河の条坊地割りの復原を総括した。なお、第Ⅰ部第8章で述べたCADとデータベースをリンクした地理情報システム(GIS)を用いた、研究者以外の人々にも、理解しやすいデータベースの構築は今後の課題である。

第Ⅱ部については構に関する考察を総括した。ついで、都市空間の中に遺存している歴史的環境の様々な構成要素の保存・活用のあり方を模索し、山科寺内町の遺構の保存・活用にむけての提言をおこなった。寺内町の土塁や堀を保存・復原していくことが、歴史的環境の保存につながるだけでなく、水と緑のある空間をふやすことは、平常時には生活環境の快適性を高め、災害時には防災帯として生活環境の安全性を高めることにもなる。とくに、山科は新興住宅地として特に開発のテンポの早い所であり、こうした保存策を早急に講じることが今後の課題である。

イラク・ハムリン盆地のテル・グッバにおける発掘調査では、都市の誕生前後のジェムデッド・ナスル期の大規模な円形建物のあり方について考察した。

パキスタン・ガンダーラのラニガト寺院址の調査では、その伽藍構成とギリシア・ローマの影響について述べた。

シリア・パルミラ遺跡の調査では、パルミラにおける都市空間の変遷について考察した。パルミラの都市遺跡にはまだまだ未解明な部分が多いが、「掘っていない部分をどう考えるか」という都市考古学的な発想と、様々な学問分野の方法論を取り込んだ考察は、海外においても有効であった。

あ と が き

私が初めて発掘調査に参加したのは、1973年5月のことであった。建築学教室の製図室で開かれた新入生の歓迎会の席上で、西川幸治教授から発掘調査に興味のあるものはいないかと言われたのがそのきっかけであった。とくに何を考えるでもなく参加した調査が、本論分の第12章で発表している山科寺内町の第1次調査であった。そのまま、山科寺内町第2次調査と、遺構の現状の実測調査にも顔を出し、大学構内においては京都大学構内遺跡調査会にも顔を出し、とくに考古学に興味があったわけではないが、暇があれば発掘現場でアルバイトをしていた。

ところが、大学院修士課程のときに、イラク・ハムリン盆地でおこなわれた発掘調査に参加し、初期王朝時代の円形建物を調査したあたりから、建築史と考古学の狭間にのめり込んでいった。奇しくも、建築学教室の助手を拝命すると同時に、埋蔵文化財研究センターの助手を兼任(実態は専任に近いものがあつた)するようになり、その後12年間にわたって京都大学構内における調査に携わった。その経験が遺構から都市を探る方法として身に染み付き、第Ⅰ部の白河の条坊地割の復原につながった。

そこから、さらに鴨東に散在する吉田、聖護院、田中の構へと興味が広がり、山科寺内町の構を含めた構の研究へと広がり、それをまとめたのが第Ⅱ部である。

条坊地割や構に関して、いままでに書き散らかした論文や雑文に、大幅な加筆・修正を加えてまとめあげたのが本稿である。以下に、各章の関係文献を示す。

序 章 書き下ろし

第1章 書き下ろし

第2章 「白河の条坊地割」『京都大学埋蔵文化財調査報告』Ⅳ、1991年
「埋蔵文化財と地中レーダー探査」『京都大学埋蔵文化財研究ニュース』1、
1991年

第3章 「白河の条坊地割」『京都大学埋蔵文化財調査報告』Ⅳ、1991年

- 第4章 「白河の条坊地割」『京都大学埋蔵文化財調査報告』Ⅳ，1991年
「京都大学医学部構内A L 20区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究
年報』1987年度，1990年
- 第5章 「粟田宮の旧地について」『日本建築学会大会学術講演梗概集』昭和62年度，
1987年
「浄蓮華院と吉田構 — 応仁の乱後の吉田の復元的考察 — 」『京都大学
構内遺跡調査研究年報 昭和56年度』，1982年
- 第6章 「浄蓮華院と吉田構 — 応仁の乱後の吉田の復元的考察 — 」『京都大学
構内遺跡調査研究年報 昭和56年度』，1982年
- 第7章 「白河の条坊地割」『京都大学埋蔵文化財調査報告』Ⅳ，1991年
- 第8章 「地理情報システムを用いた遺跡データベースの試験的研究」『京都大学
構内遺跡調査研究年報』1989～1991年度，1993年
- 第9章 書き下ろし
- 第10章 書き下ろし
- 第11章 「浄蓮華院と吉田構 — 応仁の乱後の吉田の復元的考察 — 」『京都大学
構内遺跡調査研究年報 昭和56年度』，1982年
- 第12章 「山科寺内町」（「蓮如の道」『環境文化』第58号，1983年）
「山科寺内町の復原と遺跡の保存」（「山科寺内町の遺跡調査と復原」
『国立歴史民俗博物館研究報告 第8集』1985年
- 第13章 書き下ろし
- 第14章 書き下ろし
- 終章 「山科寺内町の復原と遺跡の保存」（「山科寺内町の遺跡調査と復原」
『国立歴史民俗博物館研究報告 第8集』1985年

以上のような調査と研究をなしえてこれたのは，多くの方々の暖かいご指導とご理解に
よるものである。なによりも，京都大学の新入生の時から発掘現場に導き，この研究の指
針を示していただいた西川幸治教授に負うところは大きい。そして，岡田保良氏（現国
士館大学イラク古代文化研究所助教授）には，測量，発掘技術をはじめ実践的な知識と技

術を，懇切丁寧にご指導いただいた。京都大学埋蔵文化財研究センターに勤務してからは，
文学部史学科考古学教室の小野山節教授，山中一郎助教授には，考古学に限らず様々なご
指導・ご鞭撻をいただいた。埋蔵文化財研究センターの清水芳裕助教授はじめ，五十川伸
矢助手，千葉豊助手には，日常的にさまざまな示唆をうけた。また，地域生活空間計画講
座や保存修景計画研究会の皆様からも多くのご教示をいただいた。京都市埋蔵文化財研究
センターの梶川敏夫氏や京都市埋蔵文化財研究所の堀内明博氏には，遺跡に関するさまざ
まな情報をご教示いただいた。以上の方々をはじめとする京都大学埋蔵文化財研究センタ
ー，西川研究室の関係者に深く感謝いたします。

濱崎 一志

参 考 文 献

参 考 文 献

あ

赤松俊秀

1937年 「最勝寺址の古瓦」『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告書』第17冊

足立 康

1941年 「尊勝寺の伽藍配置」『建築史』第3巻第3号

家崎孝治 他

1985年 『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和59年度 (財)京都市埋蔵文化財研究所

石田修一

1947年 「法勝寺瓦に就いて」『日本史研究』4

泉 拓良

1980年 「北白川上層土器の細分 - 京都大学教養部構内A O 24区出土の縄文土器を中心に -」

『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和54年度

1983年 「京都大学教養部構内A O 21区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和56年度

泉 拓良・宇野隆夫・吉野治男 他

1977年 「農学部遺跡B E 33の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和51年度

泉 拓良・岡田保良・宇野隆夫 他

1981年 「白河北殿北辺の調査」『京都大学埋蔵文化財調査報告』II

泉 拓良・吉野治雄

1979年 「京大医学部遺跡A O 18区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和53年度

五十川伸矢

1981年 「京都大学本部構内A T 27区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和55年度

1982年 「京都大学教養学部構内A P 22区の梵鐘鑄造遺構」『京都府埋蔵文化財情報』5,

(財)京都府埋蔵文化財研究センター

1983年 「京都大学本部構内A X 28区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和56年度

1986年 「京都大学医学部構内A N 20区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和58年度

1988年 「鴨東白河の鑄物工房 - 京都大学構内の鑄造に関する遺跡 -」『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和60年度,

五十川伸矢・飛野博文

1984年 「京都大学教養部構内A P 22区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和57年度

五十川伸矢・浜崎一志ほか

1989年 「京都大学病院遺跡A J 18・A J 19区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報』1986年度

伊藤正敏

1993年 「紀州惣国と在地領主」『史学雑誌』

井上和人

1984年 「古代都城制地割再考」『研究論集VII』（『奈良国立文化財研究所学報』第41冊）

井上満郎

1989年 「院政期における新都市の開発」『中世日本の諸相 上』

井上光貞

1978年 『日本思想大系 3 律令』

伊野近富

1991年 「平安京（左京近衛・西洞院辻）発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第33冊

今谷 明

1989年 『天文法華の乱』平凡社

1980年 『言継卿記 公家社会と町衆文化の接点』（『日記・記録による日本歴史叢書 古代・中世編23』）

ウィトルウィウス著・森田慶一訳

『ウィトルウィウスの建築書』

ウェストランド編

1987年 『パソコン・マッピング入門ー地図の図形処理ー』

上原真人

1978年 「古代末期における瓦生産体制の変革」『古代研究』第13・14号

上村和直

1981年 「六勝寺跡A・B調査区」『六勝寺跡発掘調査概要』昭和55年度

1983年 「白河北殿跡」『京都市埋蔵文化財調査概要』昭和56年度

1991年a 「岡崎遺跡・法勝寺隣接地」『京都市埋蔵文化財調査概要』昭和62年度

1991年b 「尊勝寺跡」『京都市埋蔵文化財調査概要』昭和62年度

上村和直・鈴木廣司・平方幸雄

1983年 「白河街区跡」『昭和56年度京都市埋蔵文化財調査概要』（発掘調査編），円勝寺発掘調査団

碓井照子

1991年 「地理的空間の分析と地理情報システム」『人文地理』第43巻第5号

宇野隆夫

1979年 「鴨東の開発 ー平安京と京近郊ー」『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和53年度

宇野隆夫・岡田保良

1979年 「京都大学吉田キャンパスの試掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和53年度

円勝寺発掘調査団

1971年 「円勝寺の発掘調査」（上）『仏教芸術』第82号

1972年 「円勝寺の発掘調査」（下）『仏教芸術』第83号

大沢敬之

1902年 「法勝寺八角九重大塔並に六勝寺の事蹟」『京都市美術協会雑誌』6

岡田茂弘

1964年 「京都市尊勝寺跡」『日本考古学報』12

1974年 「尊勝寺跡遺跡出土の土器」『土師式土器集成 本編』4

岡田保良

1978年 「鴨東古代末期の都市展開について（近年の遺跡調査から）」『昭和53年度秋季大会（北海道）学術講演梗概集』日本建築学会

1979年 「京都大学構内遺跡と京・白河」『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和53年度

1980年 「平安時代鴨東白河の景観復原」『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和54年度

岡田保良・上原真人

1977年 「病院内遺跡A E15の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和51年度

岡田保良・宇野隆夫

1978年 「京大病院遺跡A F14区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和52年度

岡田保良・浜崎一志

1985年 「山科寺内町の遺跡調査とその復原」『国立歴史民俗博物館研究報告』第8集

岡田保良・吉野治雄

1980年 「京都大学構内AW28区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和54年度

小川金三

1938年 「最勝寺址発掘の古瓦」『史迹と美術』第98号

鬼塚久美子

1992年 「8世紀太宰府の計画地割について」『人文地理』第44巻第2号

か

梶川敏夫

1976年 「法勝寺金堂跡第Ⅱ次発掘調査概報」『京都市埋蔵文化財年次報告』1975

1977年a 「得長寿院跡推定地発掘調査概要」『京都市埋蔵文化財年次報告』1976ーⅡ

1977年b 「尊勝寺推定地第Ⅲ次発掘調査概要」『京都市埋蔵文化財年次報告』1976ーⅡ

1977年c 「法勝寺跡」『佛教芸術』115号 毎日新聞社

1987年 「白河街区」『京都市埋蔵文化財調査概要』昭和59年度

1992年 「成勝寺跡」『京都市内遺跡試掘調査概報』平成3年度

梶川敏夫 他

1977年 『六勝寺跡ー六盛西店新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告ー』京都市文化観光局文化財保護課

1977年 「六勝寺跡」『京都市埋蔵文化財年次報告』1976ーⅡ（財）京都市埋蔵文化財研究所

1978年 『六勝寺跡発掘調査概報』

- 1978年 『六勝寺跡発掘調査概報』1977, (財)京都市埋蔵文化財研究所
 1979年 「六勝寺跡」現地説明会資料, (財)京都市埋蔵文化財研究所
 1979年 『六勝寺跡発掘調査概報』1978, (『京都市埋蔵文化財研究所概要集』)
 1980年 『白河南殿跡』
 1980年 『京都市遺跡地区』
 1980年 『白河南殿 文化庁国庫補助事業による六勝寺関係遺跡の発掘調査概要』1979年度
 1980年 『尊勝寺跡 京都国立近代美術館建設予定地の発掘調査』1979年度
 1981年 『白河南殿跡六勝寺跡発掘調査概要』
 1982年 「白河街区跡」現地説明会資料, (財)京都市埋蔵文化財研究所

川上 貢

- 1979年 『洛中絵図 寛永後万治前』

川上貢・泉拓良

- 1977年 「京都大学構内遺跡と調査の概略」『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和51年度

木村捷三郎・畑三樹徳・上原真人

- 1975年 「京都市動物園爬虫類館建設工事に伴う法勝寺跡発掘調査報告」『京都市埋蔵文化財年次報告』1974-II

京都市文化観光局文化財保護課

- 1979年 『京都市遺跡発掘調査基準点 成果表・点の記』

京都大学学術調査隊

- 1988年 『GANDHARA』2 (『ガンダーラ仏教遺跡の総合調査概報』)

京都大学構内遺跡調査会

- 1979年 「工学部イオン工学実験施設新営予定地の発掘調査」現地説明会資料
 1982年 「京都大学教養学部構内の遺跡(A P22区)」現地説明会資料
 1982年 「白河北殿北辺第3次調査(A P15区)」現地説明会資料
 1983年 「京都大学医学部構内の遺跡(A N20区)」現地説明会資料
 1984年 「京都大学医学部附属病院構内の遺跡(A F19区)」現地説明会資料
 1988年 「京都大学医学部附属病院構内の遺跡 - A H19区発掘調査現地説明会資料 -」

京都大学農学部構内遺跡調査会

- 1977年 『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和51年度

京都大学文学部

- 1960年 『京都大学文学部博物館考古学資料目録 第1部 日本先史時代』
 1968年 『京都大学文学部博物館考古学資料目録 第2部 日本歴史時代』

京都大学埋蔵文化財研究センター(京大埋文研)

- 1978年 『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和52年度
 1979年 『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和53年度
 1992年 『京都大学構内遺跡調査研究年報』1988年度

京都府教育委員会

- 1964*年 『埋蔵文化財発掘調査概報』1964
 1972年 『京都府遺跡地区-史跡・名勝・天然記念物および埋蔵文化財包蔵地所在地-』第4分冊
 1978年 「吉田近衛町遺跡発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』1978

金田章裕

- 1989年 「太宰府条坊プランについて」『人文地理』第41巻第5号
 1993年 『中世村落と微地形』

工楽善通・藤村泉

- 1973年 『尊勝寺跡発掘調査概報』

クリーブ・オルトン著, 小沢一雄・及川昭文訳

- 1987年 『数理考古学入門』

国士舘大学イラク古代文化研究所

- 1982年a 「イラク・ハムリン発掘調査概報」『ラーフィダーン』第2巻
 1982年b 『イラク, テル・グッパ第VII層発掘の建築遺構復原に関する研究』(『昭和56年度科学研究費補助金特定研究(1)研究成果報告書』)

児玉幸多

- 1937年 「賀茂別雷神社の往来田制度」『社会経済史学』
 「賀茂別雷神社の集会制度」『社会経済史学』

小玉新次郎

- 1980年 『バルミラ -隊商都市-』

さ

狭川真一

- 1990年 「太宰府条坊の復原 -発掘調査成果からの試案-」『条理研究』6

柴辻俊六

- 1983年 「本館所蔵古文書摘録(三) -下京中出入之帳」『早稲田大学図書館紀要』14

清水 擴

- 1985年 「六勝寺の伽藍とその性格」『建築史学』第5号 建築史学会
 1988年 「白河・鳥羽を中心とした院政期寺院の構成と性格」『建築史論叢』(『稲垣先生還暦記念論集』)
 1992年 「六勝寺伽藍の構成と性格」『平安時代仏教建築史の研究 -浄土教建築を中心に』

清水三男

- 「山城国上賀茂社境内六郷」『日本中世の村落』第二部

清水芳裕

- 1991年 「遺跡の形成と地形の変化」『京都大学埋蔵文化財調査報告』IV

清水芳裕・吉野治雄

1981年 「京都大学医学部構内A P19区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和55年度
末永雅雄

1959年 「京都市陵墓参考地鶴塚・秘塚の調査」『日本考古学年報』8
杉山信三

1955年 「最勝金剛院について」『日本建築学会研究報告』30
1956年 「後鳥羽上皇の白河殿と鳥羽殿について」『日本建築学会研究報告』 36
1962年 『院の御所と御堂 ―院家建築の研究―』（『奈良国立文化財研究所学報』第11冊）
1964年 「平安京の造営尺について」『史迹と美術』第342号
1977年 「平安京を発掘する」（3）『史迹と美術』第474号
1992年 「岡崎グランドで発掘調査で出土した平安遷都以前の古瓦 ―平安京外京が存在していた―」（パンフレット）

杉山信三、岡田茂弘

1961年 「尊勝寺跡発掘調査報告」『奈良国立文化財研究所学報』第10冊

杉山信三・梶川敏夫

1975年 「法勝寺金堂跡発掘調査概報」『京都市埋蔵文化財年次報告 1974-II』

杉山信三、梶川敏夫、辻裕司、上村和直、堀内明博、梅川光隆、本弥八郎

1991年 『六勝寺と白河御所』

菅田 薫

1984年 「法勝寺跡(2)」『京都市埋蔵文化財調査概要』昭和57年度

菅田 薫・吉川義彦

1984年 「成勝寺」『京都市埋蔵文化財調査概要』昭和57年度

須磨千穎

1972年 「賀茂別雷神社境内諸郷田地の復元的研究 ―岡本郷の場合―」『日本社会経済史研究 中世編』
1974年 「賀茂別雷神社境内諸郷田地の復元的研究 ―中村郷の場合―」『アカデミア』第100集

千田嘉博

1987年a 「織豊系城郭の構造 ―虎口プランによる縄張編年の試み」『史林』70-2

た

高 正龍

1990年 『植物園北遺跡発掘調査概報』

高橋康夫

1979年 「戦国期京都の町組『六町』の結成時期」『日本建築学会論文報告集』282
1983年 『京都中世都市史研究』

竹原一彦

1987年 「尊勝寺跡」『京都府埋蔵文化財情報』第23号

1993年 「植物園北遺跡第11次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第54冊

竹原一彦・水谷寿克・土橋誠

1987年 「尊勝寺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第23冊

谷 直樹

1978年 「上賀茂の歴史」『上賀茂 町なみ調査報告』

玉村登志夫

1985年 「中世の京都 ―室町時代の京都―」『講座 考古地理学』3

辻 純一

1988年 「平安京の条坊復原」『京都府埋蔵文化財情報』第27号

辻 裕司・上村和直

1987年 『法勝寺跡発掘調査概報 昭和61年度』

辻 裕司・丸川義広

1984年 「尊勝寺跡」『京都市埋蔵文化財調査概要』昭和57年度

辻 裕司・平方幸雄

1984年 「法勝寺跡(1)」『京都市埋蔵文化財調査概要』昭和57年度

津田菊太郎

1979年 『平安京、都城域 起源と二元割域の研究』

飛野博文

1983年 「山城の弥生後期の土器―京都市左京区南御所町採取の土器について―」『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和56年度

豊田 武

1935年 「大和の諸座 続篇」『歴史地理』第66巻第2号

な

中井均

1987年a 「山科本願寺」（『図説中世城郭事典』2）
1987年b 「中世城館の発生と展開 ―西日本の発掘調査例を中心として―」『物質文化』48

中尾正治 他

1976年 「京都紀年銘古瓦銘文集」『京都考古』第23号

永田信一

1988年 「都城の爛熟と衰退」『季刊 考古学』第22号

中谷雅治

1971年 「平安時代後期の瓦当文様」『平安博物館研究紀要』第2輯

中村徹也

1974年 『京都大学理学部ノートバイオロン実験装置室新営工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要』

中村直勝

1941年 「勸修寺家領について」『紀元二千六百年記念史学論文集』
浪貝 毅
1971年 「延勝寺跡、証菩提院跡」『日本考古学年報』24
奈文研（奈良国立文化財研究所）
1961年 「尊勝寺跡発掘調査報告京都会館建設地の調査」『平城宮発掘調査報告』I
1982年 『平常京市跡 - 右京八条二坊十二坪の発掘調査 -』
1985年 『木器集成図録』近畿古代篇
西岡虎之助
1976年 『日本荘園絵図集成 上』pp. 233-235,
西川幸治, 土屋敦夫, 浜崎一志ほか
1983年 「蓮如の道 - 寺内町の形成と展開」『環境文化』第58号
西田直二郎
1924年 「法勝寺遺址」『京都府史蹟勝地調査会報告』第6冊（1925？）
日本考古学協会
1978年 「最勝寺」『日本考古学年報』31
瀬宜田佳男
1990年 「環濠集落と環濠の規模」『季刊 考古学』第31号
野上道男・杉浦芳夫
1986年 『パソコンによる数理地理学演習』

は
畑美樹徳・上原真人
1975年 「京都市動物園爬虫類館建設工事に伴う“法勝寺跡”発掘調査概要」『京都市埋蔵文化財年次報告』1974-II
浜崎一志
1983年b 「浄蓮華院と吉田構-応仁の乱後の吉田の復元的考察-」『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和56年度
1984年 「京都大学病院西構内A F 15区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和57年度
1990年 「京都大学医学部構内A L 20区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報』1987年度
1991年 「白河の条坊地割」『京都大学埋蔵文化財調査報告』IV
1991年 「埋蔵文化財と地中レーダー探査」『京都大学埋蔵文化財ニュース』1
1993年 「地理情報システムを用いた遺跡データベースの試験的研究」『京都大学構内遺跡調査研究年報』1989~1991年度
浜崎一志・千葉豊
1992年 「京都大学理学部構内B A 28区の発掘調査 - 現地説明会資料 -」
浜崎一志・千葉豊・森下章司

1993年 「京都大学病院西構内A H 19区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報』1989~1991年度
浜崎一志・宮本一夫
1987年 「京都大学病院構内A F 19区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和59年度
林屋辰三郎
1960年 「法勝寺の創建」『歴史における芸術と社会』後『古典文化の創造』1964年に所収
坂東善平
1967年 「円成寺遺跡」『古代学研究』第47号
1968年 「周縁に唐草文様をもつ軒丸瓦について」『古代学研究』第52号
平岡定海
1980年 「六勝寺の性格について」『日本歴史』第383号 日本歴史学会
福山敏男
1943年 「六勝寺の位置について」(上)(下)『美術史学』81, 82
1957年 「寺院」『新訂建築学大系』4-I 日本建築史
1975年 「白河院と法勝寺の歴史」『京都市埋蔵文化財年次報告 1974-II』
1977年 「中世の神社建築」『日本の美術』No. 129
1983年 『寺院建築の研究』(下)『福山敏男著作集』第3巻 中央公論美術出版
1975年 「白河院と法勝寺の歴史」『京都市埋蔵文化財年次報告』1974-II
1978年 「九体阿弥陀堂について」『大和古寺大観』第7巻
福山敏男 他
1975年 「法勝寺金堂跡発掘調査概報」『京都市埋蔵文化財年次報告』1974-II
藤田元春
1930年 「都市研究 平安京変遷史」
布野修司
1993年 「都市の透視図 I 都市計画のいくつかの起源とその終焉」『C E L』Vol. 24. June
堀内清治・桐敷真次郎・西川幸治・小林文治・黒川直樹・岡田保良・星和彦・吉沢政己・浜崎一志
1982年 「テル・グッパ円形建造物の復原」『日本建築学会関東支部研究報告集』昭和57年度
堀内明博
1981年 「白河南殿C調査区」『六勝寺跡発掘調査概要』昭和55年度

ま
前川要
1991年 『都市考古学の研究 - 中世から近世への展開 -』
南博史・定森秀夫・植山茂・野口実
1989年 『吉田近衛町遺跡』(『京都文化博物館調査研究報告第4集』)
宮本一夫

1988年 「京都大学北部構内B J31区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和60年度

村井康彦

1971年 「六勝寺と鳥羽殿」『京都の歴史 2』pp. 118-143

百瀬正恒

1984年 「白河街区・京都大学構内遺跡」(財)京都市埋蔵文化財研究所

森島康雄

1993年 「平安京跡・旧二条城跡」『京都府埋蔵文化財調査研究センター中間報告資料』No. 93-05

森田恭二

1982年 「中世京都法華「寺内」の存在 -六条本国寺を中心として-」『ヒストリア』第96号

や

藪田嘉一郎

1952年 「六勝寺建立の意義」上 下『史迹と美術』第221・222号

横尾義貫・川上貢・谷直樹

1977年 「京都河川変遷史論(序説)」『日本建築学会大会学術講演梗概集(中国)』

ら

六勝寺研究会

1959年 「尊勝寺址の調査」『古代文化』第3巻第2号

1959年 「尊勝寺跡第一次調査」『古代文化』第3巻第3号

1972年 『延勝寺跡の発掘調査』

1973年 『尊勝寺発掘調査概報』

1973年 『延勝寺跡』

1974年 『延勝寺跡隣接地(勸業館構内中間報告)』

1975年 「京都市動物園爬虫類館建設工事に伴う”法勝寺跡”発掘調査報告」『法勝寺跡』(『京都市埋蔵文化財年次報告 1974-Ⅱ』)

1976年 『得長寿院跡発掘調査概要報告』

わ

渡辺一雄

1990年 「濠をめぐらす高地性集落」『季刊 考古学』第31号